



清學の士

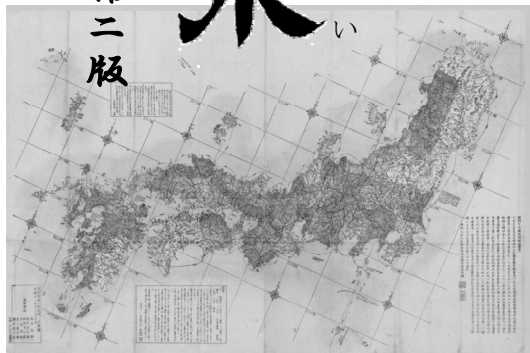
ながく ぼせきすい 長久保赤水

増補二版

横山

洗
淙

こう
そう



目次

第一章 録磨

一	赤水誕生	一〇四
二	学問との出会い	一〇三
三	新天地	二
四	新しい母	三一
五	立志	五〇
六	新たななる師	六三
七	夢への第一歩	

第二章

一	松岡七友	七四
二	玄淳の秘策	七八
三	研学の場	八五
四	初講義	八八
五	旅人の死	九四
六	おみなどの別れ	九八
七	誉れ	〇二
八	地図作りを支える人々	一一
九	検証の旅	一一
	忍び寄る影	三八

第三章 長崎への旅

- 一 西海の交友
- 二 道中日記
- 三 帰郷

第四章 立命

- 一 農村の窮状
- 二 京坂遊学
- 三 侍講
- 四 『農民疾苦』
- 五 日本から世界へ
- 六 玄淳の死
- 七 最後の大業
- 八 春雨の宴
- 九 息子達への手紙
- 十 赤水の名声
- 十一 神童の封事
- 十二 赤水の願い

あとがき (初版)

.....	一四七
.....	一五一
.....	二〇七
.....	二一五
.....	二二七
.....	二四一
.....	二五〇
.....	二六五
.....	二七一
.....	二七八
.....	二八三
.....	二八七
.....	三〇〇
.....	三〇九
.....	三一
.....	三三七

題字 横山 瑞祥 (本名 榮壽、書聖会会友)

第一章 鍊磨
一 赤水誕生

「男子にござります！」

屋根を突き抜けるほどの甲高い声が響くと、父親の善次衛門（ぜんじえもん）が勢いよく駆け寄り、力まかせに障子を開ける。

「でかしたぞ！ お繁（しげ）」

あまりの声の大きさに、赤子を産湯に落としそうになる産婆。

「旦那様、そんなに大きな声を張り上げたら、赤ン坊がお腹に戻っちゃうよ」

「すまねえ……」

我が子との初対面を果たした善次衛門。

腫れ物にでも触るかのように、恐る恐る抱き上げるのだが、泣き声の大きくなる赤子をどうすることもできず、そそくさと妻のお繁に預けてしまった。

一方のお繁。夫とは対照的に、赤子を手際良く胸に抱き、優しく頬を撫でる。赤子は安心しきった様子で、スヤスヤと眠りにつく。

お繁は誰の目から見ても、もう立派な母親の顔つきになっていた。

しばらくすると、今度は奥の方から、そろりそろりと足音が聞こえてくる。

障子に近づく人影。静かに戸が開けば、そこには満面の笑みを浮べる祖父、太左衛門（たざえもん）の姿があった。

常陸国松岡郷赤浜村（ひたちのくに・まつおかごう・あかばまむら）の長久保家は、庄屋役を勤める家柄であり、家長の太左衛門夫婦、長男の武兵衛（ぶへえ）夫婦、次男の善次衛門夫婦の三世帯が同居をしていた。

享保二年（一七二七）のこの年は、長男夫婦の第一子、春善（はるよし）を亡くしており、太左衛門は孫を失った悲しみと、家系が途絶えてしまう憂いに苛（さいな）まれていた。

長久保家にとつて忌まわしいこの年が、一日も早く過ぎて欲しいと願っていた最中の十一月六日。次男夫婦に待望の男の子が生まれたのである。

一転して吉兆がもたらされたことを、太左衛門は大いに喜んだ。そして、立派な跡継ぎに育ってくれることを祈り、祖父の名をとつて伝五兵衛（でんごべえ）と命名。後にこの赤子は源五兵衛（げんごべい）と名乗り、号を赤水（せきすい）と称するのであった。

季節は過ぎ、家中の愛情を一手に受け、すくすくと育つ赤水。

おぼろげながら足腰も立つようになると、粥の上澄みや母が柔らかく噛んだ穀類も食べられるようになったのだが、離乳食が多くなる程、赤水の食は細くなり、熱を出すことも多くなっていた。

お繁は農作業の合間に何度も家に戻ってくるのだが、どうしてやることもできず、見守るしかない。その悲しげな後姿に、ひしひしと太左衛門の心は痛む。

(何としても孫を丈夫に育て、御家のために残り短い余生を捧げる。それが家長としての最後の務めじゃ…)

強い意志を胸に秘めた太左衛門は、うなぎやなまずを獲った。薪を集めに森に分け入っては胡桃を拾い、時には斜面に群生する山芋を掘ることさえいとわない。その献身的な姿は、自分の命を削っているかのようにもあつた。

こうした努力の甲斐もあり、同年代の子と比べると小柄ではあつたものの、赤水は大病を患うこともなく、成長していったのである。

太平洋からの海風が、新緑の稲穂を揺らす。

その音を守唄代わりに、籠の中で眠る赤水。穏やかに流れる時間。

寝顔を見ているだけで、太左衛門の苦労は吹き飛んだ。

赤水が独り歩きするようになると、今度は太平洋が赤水の遊び場となった。

波と戯れ、砂浜で寝転ぶ姿は子犬のようでもあり、水しぶきを浴びた笑顔が、きらきらと美しい輝きを放つ。

遊び疲れた赤水を背中におぶえば、寝息と共に温かいぬくもりが伝わり、祖先の血を新しい世代へと引き継ぐ安堵感に包まれる。

そして、太左衛門は決まって、こうつぶやくのであった。

「海は命の源じゃ。潮風で遊ぶ赤水は、きつと丈夫になるぞ…」

かつて長久保家の祖先は、駿河国で長久保城という小さな城を擁していたのだが、北条氏綱（ほうじょう・うじつな）に攻め落されてしまう。

城を奪還すべく、再起の時を狙うも、北条氏に戦を仕掛けるだけの兵力を集めることができず、流浪の旅を続けるうちに「勿来の関」の手前にある「平潟港」へと流れ着いた。その後、豪族の久保田十郎の下に身を寄せ、野武士に落ちてしまったのだが、領主の車氏（くるまし）に仕官を果たすと、伊達輝宗（だて・てるむね）の軍勢を相手に功を上げる。

しかし、佐竹氏との戦で深手を負い、それが元で戦場を離れると、赤浜村に移り住み、半土半農の日々を送るようになっていたのである。

それから、長久保貞仲（ながくぼ・さだなか）の代になって、刀を鉞に持ち替える決意をし、はや百二十年もの歳月が過ぎようとしていた。

— ドドーン —

突然、大きな入道雲が空を覆い、天空を引き裂くほどの稲妻が響き渡る。

太左衛門の至福の時を奪うかのように呼応し、強さを増す太平洋の荒波。

大きく岩肌にぶつかる音。まるで長久保家の運命を象徴するかのように、荒れ狂う空と海。言い知れぬ不安を覚えた太左衛門は、自分に言い聞かせるようにつぶやいた。

「大丈夫じゃ。赤水。わしがついておる。大丈夫じゃぞ。赤水……」

享保五年（一七二〇）八月二十九日。

もうじき三歳になろうとしていた赤水。いつものように海に出かけるべく、太左衛門の身体を大きく揺すった。

「じさま。海へ行こう」

今日の太左衛門は、縁側に横たわったまま動かない。

微笑んでいるのかと見紛うほどの穏やかな寝顔。

赤水は不思議そうに見つめるのだが、一向に起きる気配のない太左衛門。

とうとう赤水も、太左衛門の側で寝てしまった。

どれほど時が経ったのだろうか。赤水は母に抱き上げられ、目を覚ますと、先程まで静寂に包まれていたはずの縁側には、忙しなく歩き回る村人。

その状況が飲み込めないまま、ふと思ひ出したかのように尋ねる。

「じさまは？」

「……」

何も答えず、ただ黙っているお繁の頬に、一筋の涙が流れる。

喧騒の中に輝く、母の透き通った涙。

いつもと違う雰囲気を察し、再び母の背中で眠りについてしまった。

そして赤水は、何度も笑みを浮かべる。

まるで太左衛門と遊ぶ夢を見ているかのように……。

その寝顔を見た善次衛門。ぽつりとつぶやく。

「赤水の笑顔が、何よりの供養じゃのう……」

翌年の享保六年（一七二二）十二月十七日。太左衛門の後を追うように祖母が亡くなると、再び忌々しい空気が、長久保家を覆いはじめるのであった。

二 学問との出会い

赤水が五歳になる頃。弟の「勇次（ゆうじ）」が誕生した。

弟ができたことを喜ぶ赤水ではあったが、母の気持ちも弟へと移っていくことに、戸惑いも隠せなかった。

さらに、数えで六歳ともなれば、子守や留守番、風呂焚き、馬小屋の掃除など、様々な仕事を与えられる。貧農であろうが、庄屋役であろうが、一家揃って働くことは百姓の本分なのだ。

小さな身体に弟を背負い、畑に出かける両親を見送る。それが、赤水の一日のはじまりでもある。だが、まだ上手に背負うことの出来ない赤水は、何度も転びそうになる。それでも両親に心配をかけまいと、精一杯の笑顔で送り出す。

「赤水、勇次を頼んだよ」

「はい」

何度も後ろを振り返りながら、赤水の寂しげな瞳が遠くなるほど、お繁の足取りは重くなつてゆくのであった。

ある日の晩。弟が寝静まると、お繁は赤水を囲炉裏の傍らに座らせた。そして、火箸を手に取り、ゆっくりと動かしはじめた。

その手は真直ぐに進み出したかと思うと、突然、左右に曲がり出す。

赤水は釘付けとなった。

火箸につられて目が動く様が滑稽に映るらしく、お繁の顔もほころぶ。

「これはね、お前の好きな海という文字だよ」

「これが、うみ……。これがあかばまのうみ？ まるで、みみずみみたいだね」

母の発した言葉が生き物のように、様々な形に姿を変える。

その不規則で滑らかな動き。赤水は瞬く間に、心を奪われてしまった。

「なぜ、もじというものがあるの」

お繁はしばらく考え込み、やさしく答えた。

「お前が小さかった頃、お爺様が話してくれたこと、覚えているかい？」

「おぼえていないよ」

「そうだろうね。誰でも昔のことは忘れてしまうものだよ。でも、言葉が文字として形に残

っているれば、どれだけ月日が経っても、すぐに思い出せるだろ」

「もじは、むかしのひとと、おはなしするためにあるの？」

「そうとも。昔の人だけでなく、会うことのできないような、偉い人のお話もきけるのだよ」

お繁は助川村下宿の水戸藩郷士、「長山家」の娘であつた。長山家の祖先には徳川光圀の乳母となつた者などもおり、助川村を代表する名家でもある。

小さな頃から読み書き、算術を習い、いつしか我が子にも教えてあげたいと夢見ていたお繁は、囲炉裏の灰、庭の土、砂浜など、至る所に赤水が書き残した文字の跡を見つけたら、ろうそくの灯火のような暖かい気持ちになる。

火箸で文字を教える時。赤水の手をやさしく包みながら、火箸を動かす。

砂の上に文字を書く時。指をそつと添えれば、軽やかに滑り出す。

文字や言葉を教わる時。それは母の愛を独り占めできる、唯一の時間。

やがて、赤水がひら仮名を覚えてしまうと、お繁は嫁入りの際に持参した草子を読み聞かせてみた。

はじめのうちは解釈を必要としたのだが、赤水は難しい言葉を覚えてしまうのも早く、自ら進んで草子を読み、繰り返し文章をそらんじた。そして、おぼろげながら大意も理解できるようにになると、ますます草子が面白くなってゆく。

子供たちが外で遊んでいる時も、ひたすら読みふけた。

草子に没頭しすぎて、庭に干してある穀物を雨に濡らしたり、弟を馬小屋に置き忘れて、叱られることもあつた。

しかし、赤水が書物にのめり込むようになったのは、一日も早く、母の才に近づきたいと

いう、一心からだけではなかった。書物のやさしい感触に触れ、墨の香りを匂いでいると、孤独に苛まれそうな心を、母の愛で満たすことができるからなのだ。

三 新天地

長兄の武兵衛夫婦は、第一子を亡くしてからというものの、子のある善次衛門夫婦よりも地位の低い扱いを受けていた。

母（赤水の祖母）の葬儀の際も、善次衛門が喪主となっており、世間の目は、子のある弟の善次衛門を跡取りとして見ていたのである。

温和な武兵衛も、居た堪れなくなる時があったのだが、それでも、ひたすら耐え忍んだ。そして、第一子を亡くしてから、六年の歳月が過ぎようとしていた享保八年（一七二三）。武兵衛に待望の第二子が誕生すると、互いの立場は逆転し、ようやく武兵衛は、家長の座に帰りつくことができたのだ。

赤水にしてみれば、従兄弟（いとこ）ができたことで家中がにぎやかになり、それが嬉し

くてたまらない。だが、父と母からは笑顔が消え、武兵衛夫婦の晴やかさとは対照的に、物悲しげな表情が目立つようになっていた。

享保九年（一七二四）。春彼岸を過ぎた頃、善次衛門一家は分家をする。

赤水の祖母の三回忌を終えた頃から、荒地を切り開き、農閑期を利用して家を建てていたのである。村人の手を借り、短期間に仕上げたとはいえ、作男の勘兵衛（かんべえ）夫婦を伴うなど、庄屋役の子息にふさわしい分家でもあった。

善次衛門は新居の北屋敷の前に立ち、前途洋々とした表情で赤水を抱きかかえる。

「赤水、今日からここが、お前の家だぞ」

新居での生活に赤水も心を弾ませていたのだが、その淡い期待は、すぐに打ち崩された。苗代に種粃を蒔き、苗を育てる。田起こし、荒代掻き、中代掻き、畔塗り。身体を酷使する重労働は、絶え間なく押し寄せる。

それでも馬を持つことのできる長久保家は、まだ恵まれていた。しかし、善次衛門の拓いた田んぼには、ぬかるみが多く、馬の入れない所もあった。

ようやく田植えを終えたかと思えば、今度は草取り…。

野良仕事に際限はなく、新生活を楽しむ余裕さえなかったのである。

青々とした田に、肌を刺すような暑い日差しが照りつける頃。

三日程前から高熱を出していた弟が、突然息を引き取った。

赤水と手をつなぎ、やっと一緒に、あぜ道を歩けるまでに成長し、赤水の良き話し相手となりつつあった勇次。

ほんの数日前まで、共に笑いあっていた弟が冷たくなったまま動かない。

「起きとくれよ、勇次。さあ、兄（あん）ちゃんと遊ぼう」

太左衛門の時と同じように、何度も身体を揺すつてみたが、決して目を開けようとはしない。お餅のようにやわらかかった頬も、青黒く硬い。

当たり前のように存在した弟がいなくなってしまう。

日常にあふれている死が、とてつもなく恐ろしいものを感じられた。

しかし、父と母は生きることには精一杯で、もはや泣く気力さえなかった。

沈痛な面持ちで肩を落とす善次衛門。

「爺様のように、滋養のつくものを食べさせていればのう……」

生活環境の変化と重労働。弟の死。

それでも一家には、悲しみに暮れている暇などない

田の草は取っても、取っても、伸び続けるのだ。

父の後悔の言葉だけが耳に残る。

さらに数ヶ月後。

弟を生んでから身体が弱っていたお繁は、本家との人間関係による心労や分家に伴う普請疲れ、勇次の死などが重なり、寝込むことが多くなっていた。

赤水は農作業を終えると、病床に臥せる母の元へ走り寄り、真っ先に容態を確認する。それが毎日の日課となっていた。

中々、病状がよくなるらないことに加え、文字を教えてもらえない歯がゆさも相まって、複雑な思いで母を見つめる。だが、どうすることもできない。

一方のお繁。家へと戻る時間が、日に日に遅くなる赤水の身を案じながら、赤く染まる縁側を見つめ、今日も帰りを待っていると、不意に無邪気な笑顔をのぞかせる。

お繁は布団から枯れ枝のような手を差し出し、真っ赤な手を精一杯、撫でてやる。

「お前には、色々と苦勞をかけるね…」

「平気だよ」

「体に毒だからと言って、満足に書物も読み聞かせてやれず、すまないね」

「お母様（おつかさま）が丈夫になれば、また一緒に読める。それまでの辛抱さ」

まだ七歳の赤水は、今すぐにも母の腕の中に飛び込み、幼い頃のように優しく頭を撫でてもらいたかった。しかし、わがままを言っ母を困らせてはいけない。甘えたい気持ちも懸命に抑え、再び、母と田畑に立てる日が来ることを心から信じ、笑顔を絶やすことはな

った。

幼い赤水を残して逝く……。お繁は、そのことを考える度、不憫な我が子に、かける言葉すら見つからず、ただ涙で枕を濡らすばかり。

そして、懸命に働く赤水をあざ笑うかのように、病魔はお繁の身体を確実に蝕んでいったのである。

享保十年（一七二五）。

春の足音近づく二月八日。伯父の武兵衛が三十五歳で亡くなった。

さらに季節は過ぎ、山々が赤く色づいた十月。

赤水は夜も明けぬうちから、馬の餌となる草を刈り、陽が昇りはじめる頃、籠をいっぱいにして戻ってきた。

寝込む母を起こしてしまわぬよう、そっと近づいてみる。

だが、いつもとは違う顔色。不気味なほどの蒼白さ。

「お母様……」

背中に激しい寒気が走った瞬間、赤水は家を飛び出していった。

目の前の景色はゆったりと流れ、激しい鼓動だけが耳の中に響く。

あぜ道を死にももの狂いで駆け抜け、ようやく見つけた父の顔。堪えていた涙が、一気にあふれ出てくる。

どうやってここまでたどり着いたのか、思い出すこともできない。

「おっ母様……おっ母様……が……」

泣きじゃくり、言葉の続かない赤水を見た善次衛門。

すぐに状況を察し、大声を張り上げた。

「お繁っ——！」

鍬を投げ捨て、家へと走り出す。懸命になって後を追う赤水。

父の背中が、どんどん遠くなっていく。

善次衛門は家に駆け込むと、わらじを履いたまま、お繁の布団に駆け寄った。既に血の気は失せ、青く冷たい。

自分の体温で暖めようと、必死に頬を押し付け、力いっぱい背中を擦る。

「お繁、起きろ、お繁っ！」

厚い氷に覆われてしまったかのような、お繁の身体。

あまりの冷たさに、思わず放り出しそうになる。

「これはお繁じゃない！ お繁はもっと暖かいはずじゃ——」

肩を落とし、その場に座り込む。

たくさんの死に際し、取り乱すこともなく、冷静に振舞ってきた善次衛門ではあったが、さすがに今日ばかりは、泣き崩れてしまった。

きつと母の目を覚ましてくれると信じて疑わなかった赤水も、初めて見る父の取り乱した様子に、ようやく目の前で起こっていることが理解できた。

「お母様っー」

赤水も大きな声で泣き叫びながら、母の体に飛びつき、冷たくなった手を何度も擦る。

農作業で真っ黒に汚れた爪。

農作業で曲がってしまった指。

苦労を重ねた皮膚の色。

どんなに醜い手であっても、赤水にとつては文字を教えてくれた、この世で一番愛しい手。

「もう一度、文字を教えておくれよ！ 書物を読んでおくれよ！」

母の手が再び暖かくなることを祈りながら、赤水は何度も叫んだ。

しかし、二度と目を開けることはなかったのである。

数日後。失意にくれる中、母の葬儀も終わろうとしていた。

ねずみ色に覆われた空は重く、枯葉が舞う寒空。

母を見送るかのようにはススキは揺れ、参列者の長い列が続く。

村人に担がれた母の遺体は、今まさに土葬されようとしている。

最後に母の顔をしっかりと目に焼き付けようと、赤水はぐつと涙を堪えるのだが、泣いてはいけないと思うほど、涙は止まらなくなる。

父の手を握り締め、母の側まで近づいてみても、涙がにじんで輪郭さえおぼつかない。両手で拭えぬほど、とめどなくあふれる涙。

無情にも別れの時は、すぐに訪れた。

読経が流れ、参列者が手を合わせる中、喪主から順に土をかけはじめ。

赤水も小さな手のひらで、そつと土を盛ると、作男たちが淡々と土を投げ入れ、母の姿はあつけなく消えてしまった。

親戚や近所の手伝いの人たちが去った家。

やけに静かで、とても広く感じられる。

つい数日前まで、母が寝ていた布団。傍に横たわる書物。それらが視界に入るだけで、母の温もりと息づかいを感じ、笑顔が脳裏に浮かぶ。

薄暗い空間の中、独りたらずんでいると、言い知れぬ不安が体中にまとわりつき、胸は重く、呼吸も苦しくなる。だが不思議なことに涙は流れない。

少し落ち着いたかと思えば、今度は口から腸（はらわた）が出てしまうほどの吐き気に襲われ、倦怠感が波のように押し寄せる。

とにかく独りになることが、たまらなく怖い。誰でもいいから側に人がいないと、自分が崩れ落ちそうになってしまう。無意識のうちに目頭は熱くなり、自然と涙が落ちてくる。

本当の喪失感を知った赤水。

母の幻想から逃れたいという一心から、書物を遠ざけるようになってしまった。その姿を見た善次衛門も、赤水が学問を諦めたと思い、すっかり安堵しきっていた。

朝を迎えれば、仏壇に手を合わせ、二人揃って畑へと出かける。

母の死以来、赤水の心の中では、時の流れが止まっていたはずなのに、いつもと変わらぬ日常が繰り返される度、全てが単調な日々へと戻ってゆく。

ただひとつだけ異なる風景。

それは、どこにも母の姿がない。ということだけであった。

四 新しい母

お繁が亡くなつてから、間もなく一年が過ぎようとしていた。

作男の勘兵衛夫婦が、身の回りの世話をしてくれたお陰で、不自由さを感じることもなかつたのだが、やはり長久保家には女手が必要だった。

さらに、親戚たちの強い説得もあり、善次衛門は、山を二つばかり越えた神岡村から、二十七歳の「おみな」を後妻として、迎えることにしたのである。

(善次衛門三十三歳、赤水九歳)

新たな生活が始まると、殺風景だった家の中は、可憐な一輪の花によって明るい雰囲気に包まれ、甲斐甲斐しく働くおみなのは、長久保家に生きる勇気を与えてくれた。たとえ本当の母ではないにしても、女性という大きな存在によって、赤水の閉ざされた心も暖かくなつてゆく。

だが、全く不満がないわけでもなかった。ただひとつの不満。それは、おみなが文字を読めないことである。母の死以来、書物を手に取ることをやめた赤水は、何かを忘れるように農作業に打ち込んでいた。それでも心の片隅では、新しい母に書物を読み聞かせてもらえるかもしれない。そんな淡い期待を抱いていたのだが、どうやら、それも叶いそうにない。

百姓にとって学問は毒であると思っていた善次衛門も、赤水がけなげに働く姿を見るにつ

け、複雑な気持ちに苛まれるようになっていた。

本当は好きなのだ、学問をさせてあげたい。

才能を伸ばすことが親の役目であることも、十分承知している。

しかし、百姓に生まれた以上、どうすることもできない。

赤水の境遇を不憫に思いながらも、生きてゆくためには学問を諦めるしかない。学問を諦めることが、ひいては自分のためになる。それに早く気づいて欲しい。そう願うしかなかったのだ。

享保十二年（一七二七）。今年も田植えの時季を迎えた。

おみなも加わり、人手が増えたとはいえ、朝から晩まで農作業に追われることには変わりがなかった。代掻き、畔塗り、厩肥（きゅうひ。家畜の糞尿）の散布。田植えが終わるまで、戦のような忙しさが続く。

一年の中で、最も重労働を強いられる、田植えと収穫の秋。

今ようやく、その大きな山をひとつ越え、次の田の草取りに向けて、気持ちを切り替えようとしていた矢先、今度は善次衛門が倒れた。

田植えの真つ最中であれば、風邪をひいたくらいでは休めない。だが、田植えが落ち着く時期になると、張りつめていた緊張の糸が、ぷつりと切れたかのように、寝込む者もいた。

そのせい、しばらく養生すれば、善次衛門も再び青田に立つことができる。誰もがそう思っていたのだが、病状は一向に良くならない。

心配になった赤水は、父に精をつけさせるため、かつて祖父がしてくれたように、なまずを獲って食べさせてみた。しかし、食は細くなるばかり。

胸騒ぎを覚えたおみなは、意を決し、松岡郷で名医の誉れ高き「鈴木玄淳（すすき・げんじゅん）」に往診を頼んだ。

眼科医の父を持つ鈴木玄淳は、友部村で私塾を開いていた佐川三順（さがわ・さんじゅん）の下、医学や儒学を学ぶと、下手綱村（しもてずなむら）に移り、医者となった。また、漢詩や儒学にも精通していた玄淳は、私塾を開き、郷土の人材育成にも力を入れていたのである。

玄淳は長久保家に到着すると、すぐに善次衛門の診察を始めた。

症状を丹念に尋ねながら、身体に至る所を触り、痛みの有無を確かめる。

初めて間近に見る、医者 of 診察方法に興味を持った赤水は、一挙一動を食い入るようにつめる。

（なぜ、触るだけで病がわかるのだろうか…）

真横から注がれる赤水の真剣な眼差しに気づいた玄淳は、古びた木箱を赤水に開けさせてみた。

中にはたくさんの薬草。その独特な香りに、赤水は顔をゆがめる。

「どうじゃ。よく効きそうな香りだろう。この薬草は願成寺（がんじょうじ）の裏の方にも生えておる。それを摘み、煎じて飲ませるがよい」

玄淳は善次衛門の憔悴しきった顔を一目見て、金をかけても治せる病かどうか、すぐに察しがついた。

医者の子でありながら、家計を助けるために自ら染物屋を営んでいたこともある玄淳。だからこそ、農民たちの診療には人一倍気を配り、どこにでも自生している野草を選んだのだ。診察を終えた玄淳。陽が傾きかけた道をのんびりと歩いていると、背後から小さな足音が近づく。振り返れば、息を切らしながら駆け寄る赤水。

「先生、これをお忘れになっておりました」

「わざわざ届けてくれたのか。それはすまなかつたな」

愛らしい笑顔で、元来た道に戻ろうとする赤水を玄淳が呼び止める。

「君の家には書物があったが、あれは善次衛門さんのものかい」

「いえ。亡くなった母のものです。でも、今は私の大切な書物です」

「ほう、君は文字が読めるのか」

赤水は恥ずかしそうに、うなづく。

「なぜ、書物を読みたいと思うのかね」

「私の知らないことを教えてくれるからです」

「それなら私の所に遊びに来なさい。書物もたくさんあるぞ」

満面の笑みを浮かべる赤水。玄淳は彼の伶俐さに感心すると共に、短い言葉の端々に、天賦の才の片鱗を感じ取っていた。

そして、余命いくばくもない一家の主を案じながら、小走りに去ってゆく赤水の姿を、じつと見送るのであった。

若々しい青稻が風に揺れ、夜ごと蛙の声が大きくなる頃。

善次衛門の病状は、悪化の一途をたどっていた。

徐々に失われていく体力。まだ意識のあるうちに、話しておかなければならないことがある。善次衛門は意を決したかのように、おみなと赤水を枕元へ呼び寄せ、二人の力を借りながら、ゆつくりと身体を起こす。

「もう、私も長くはあるまい……」

「何を気弱なことを。必ずよくなりますよ」

「おみなには嫁いで早々、迷惑をかけることになってしまった……。どうか私と赤水のことは案ぜず、神岡村に戻るがよい」

今際（いまわ）に近いことを悟った善次衛門の、せめてもの気遣いであった。

だが、おみなは首を大きく横に振り、その申し出を拒んだ。

「いいえ。私には戻る家など、ございませぬ」

大粒の涙を落としながらも、気丈に振舞おうとするおみな。

善次衛門は赤水の目をぐっと見つめ、家長としての思いを託す。

「長久保家の主として、一日も早く立派な百姓となり、おみなを助けなさい」

「はい」

「家業に余裕が出れば、書物を好きにだけ読んでもかまわない。だが今は、まだその時ではない。くれぐれも分別をわきまえるのだぞ」

「母上を助け、立派に田畑を耕します」

「そうか、そうか……」

おみなが赤水を育ててくれる。赤水は長久保家の跡取りとしての自覚を持ってくれた。二人の言葉を聴き、ようやく胸をなで下ろす善次衛門。

「少し疲れたから、横にさせておくれ」

ゆっくりと身体を倒す善次衛門を赤水が両手で支えようとした時、ふわりと軽くなった背中に愕然とする。大地を耕し、一家を支えてきた、あのたくましい父が、折れそうなくらい

にやつれている。思わず目をそらしたくなる現実。

もはや、近づく死の足音を止める術はなかった。

親戚の力を借り、どうにか善次衛門の葬儀を終えた赤水とおみな。

四十九日の法要を過ぎてもお、善次衛門の死を受け入れることができずにいた。死が日常茶飯事であるとはいえ、肉親を失い、天涯孤独の身となつてしまつた赤水。どんなに利発な少年であつたとしても、自分の境遇を冷静に受け止められるだけの度量はなかつた。

やがて、忌々しい空気から逃れるように、赤水は幼い日の記憶が残る本家へと、顔を出すようになつていた。本家には従兄弟の憲昌もおり、伯母たちと一緒に布団を並べていると、幸せだった頃に戻れるような気がしたのだ。

一方のおみなは、赤水の行動をとがめることもできず、複雑な気持ちのまま見送るしかない。だが、どうしても、一人きりの寂しさに耐え切れなくなると、おみなの足は決まつて、善次衛門の墓へと向かう。

墓の前に立ち、手を合わせれば、堪えていた感情が一気に湧き上がり、嗚咽と共に泣き崩れる。

人前では気丈に振舞つていても、孤独と先の見えない不安の中で家を切り盛りし、女手一つで赤水を育てていかなければならない重圧。

赤水が、このまま心を閉ざしてしまうことへの恐れ。

何を頼りに生きればいいのか、皆目見当もつかない。

「私は、これからどうすればいいのですか」
途方にくれ、呆然と墓を見つめる。
問いかけてみても、思いつきり墓を叩いてみても、善次衛門は何も答えてはくれない。

上弦の月が薄く輝く、ある日の晩のこと。

絶望感に打ちひしがれながらも、人目を避けるように、墓から戻って来たおみなは、急に意識を失い、布団の上に倒れ込んでしまった。

どれくらい時間がたったのだろう。遠くで名前を呼ぶ声。

「おみな… おみな…」

声のする方向に歩いて行くと、善次衛門が大きな門扉を造っている。

「お前様、何をしているのですか」

振り返った善次衛門は、とても若々しく、うるわしい姿。

驚きのあまり、何度も名前を呼んでみるのだが、微笑むばかり。

やがて、完成した門扉を善次衛門がゆっくり押し開けると、まばゆい光が辺り一面を包み込む。

懸命に目を凝らし、光の奥を見つめれば、その先には書物を手にした少年。
(もしや、赤水……)

あまりにも楽しそうな表情で書物を読んでいる姿に、声をかけることさえ忘れてしまった。しかし、その姿を遠くから眺めているだけで、この上ない心地良さと暖かさに包まれる。この至福の時が、いつまでも続いて欲しい。

そう願った瞬間、夢から覚めた。

そして、真つ先に脳裏を過ぎつたのは、父に隠れながら、線香の灯りで懸命に書物を読む赤水の姿。

(この子の忍耐力と才能を埋もれさせてはいけない。才ある赤水を世に出すこと。それが私の天命。実母のように文字は教えられぬが、わが身をもって、生きることの素晴らしさ、人を愛することの崇高さを教えることはできる)

布団から飛び起き、戸を開ければ、すっかり陽も高くなっていた。

絶望という深い闇に陥った時、人はそこから逃れようと、もがき苦しむ。

そして、逃げようと必死になるほど、蟻地獄のような深い闇へと落ちてゆく。

しかし、おみなどは違った。

逃げるのではなく現実を直視し、ありのままを受け入れ、生きる意味を繰り返し問い続けた。そうすることで、絶望から生きる望みを教えられ、漆黒の闇から抜け出すことができたのである。

五 立志

善次衛門が生きていた頃のような明るさを取り戻した、おみな。

赤水も、その明るさに引き込まれるように、本家へと足を運ぶ回数を減らしていたのだが、それでも夜空を眺めることだけは、やめようとしなかった。

なぜなら、北の空の真ん中に輝く星は、季節が変わっても同じ場所にある。その不変さが自分を見守る善次衛門とお繁のように思えてならなかったからだ。そして、ひしゃくのような形をした星が寄り添う姿は、亡き父母、亡き勇次のように見えていたのである。

その後も夜空を仰ぎ続けた赤水は、やがて星々が規則的に動き、季節ごとに姿を変えていくことに気づく。

(春になると馬のような形の星。夏にはムカデや蟹のような形の星。秋になって鳥や蛇のような形をした星が現れると、稲刈りの時期を迎える。この規則的な動きを覚えていけば、米の育ち具合を測る目安になるかもしれない……)

星を眺めている時でさえも、常に米作りのことが頭を離れないのは、幼い頃から苦悶する百姓たちの姿を目の当たりにしてきたからである。

赤浜村では収穫の時期になると、検見役人(けみやくにん)が作柄を調べにやって来て、年貢高が決まる。このため、検見が終わらないと収穫はできない。

しかも、年貢高は役人の胸三寸で決められてしまったため、少しでも年貢を軽くしようと、百姓たちは役人を接待したり、賄賂を贈るなどしていたのだ。

もつとたくさんの米が取れるようになれば、こうした役人たちの悪行から村人を救える。その強い思いが、赤水の中に眠っていた大いなる探究心を目覚めさせ、森羅万象から米作りの手がかりを学び取るうという姿勢を生み出していたのである。

百姓にとつて、最も嬉しく、最も忙しい収穫の秋。

長久保家では、お繁の三回忌と善次衛門の百か日法要が執り行われた。

そして、法事客が帰ると、叔父の貞近（さだちか）が残り、長久保家の行く末、おみなの今後の身の振り方について、話し合いが続けられていた。

貞近は善次衛門の弟であり、母の実家であった助川村の郷士「長山家」へ養子に入っていたのだが、長久保家の兄が二人とも早くに亡くなってからというもの、何かと実家のことを気にかけていた。

「おみなさん一人で赤水を育てるのは、やはり荷が重過ぎる。赤水は私が引き取るから、実家に戻りなさい」

実家から離縁と再婚を迫られていた、おみな。

「いえ。戻りませぬ。赤水を立派に育てると、あの人に約束しましたから」

「聞けば、借銭もあるというではないか。それだけでも大変なのに、血のつながっていない

子の面倒まで見るなど、人が良過ぎるにも程がある。悪いことは言わないから、早く実家に戻りなさい」

おみなは口を真一文字に結び、全く動じない。

「どうしても赤水を一人前に育てるといふのなら、いつそのこと馬や田畑を売ったらどうだ。一度に借財を減らせるではないか」

「大切な田畑を売ってしまったては、お家を再興することも、ままなりませぬ。むしろ借銭があるくらいの方が、働き甲斐もあります」

呆れ顔の貞近。

「そこまで言うのなら、先ずは、あの書物を処分して、生活の足しにでもすればいい。百姓にとって学問など無用じゃ」

赤水が声を出そうとした瞬間、おみなが大きな目で貞近をにらみつけた。

「いいえ。これだけは何かあっても売りません」

おみなの気迫に圧倒された貞近。思わず言葉詰まらせる。

「おっ、おみなさんが、そこまで言うのなら……。とにかく私も、できるだけのはさせてもらおうよ」

「ありがとうございます」

親戚の中で苦言を呈するのは、貞近だけであったのだが、同時に最も心を砕いてくれる存在でもあった。だからこそ、どんなに厳しいことを言われても、おみなど赤水は、いつも感

謝の念を忘れなかつたのであり、長久保家の再興を願う気持ちだが、三人の心を強く結び付けていたのである。

貞近が帰ると、赤水はおみなに向つて、深々と頭を下げた。

「私の大切な書物をお守り下さり、本当にありがとうございます」

「赤水にとつて書物が生き甲斐であるように、私の生き甲斐は、赤水。お前だよ。だから書物を守るのは、赤水を守ることと同じなの。お前には、できる限り学問をさせたいと思っている。どうか、もう少しだけ辛抱しておくれ」

初めておみなの思いを知つた赤水。目頭が熱くなる。

亡き父と母の思い出が詰まつた、この家に住み続けることができる。自分のことを必死になつて守つてくれる、心強い存在に気づけたこと。全てが希望の光に見えた。

それから三年。赤水とおみなのは懸命に働いた。

作男の勘兵衛一家も身を粉にして働き、借銭の返済にも目途が立ちはじめ、長久保家は明るい希望に包まれようとしていた。

だが、村は凶作に襲われ、財政難に喘いでいた水戸藩が年貢を上げたことで、百姓たちの生活は、日々苦しくなるばかり。

丹精込めて作った作物は、役人や商人たちに搾取され、天災に襲われれば、食う米もない。

固定化された身分から抜け出せず、もはや自分の力ではどうすることもできない百姓たちは、神仏に祈るしかなかった。

それでも未来を見出せない者は、辛い現実から逃れるように、博打にのめり込み、酒に溺れ、田畑だけでなく、大切な家族まで失っていた。

周りを見渡せば、路傍に横たわる絶望的な境遇の百姓。

その姿を、しっかりと目に焼き付けながら、赤水は大きく鋤を振り上げ、ぶつけどころのない怒りを、大地に向って叩きつけるのであった。

享保十七年（一七三二）十一月。

おみなと赤水は、仏壇の前に座り、赤水の元服を報告していた時のこと。

突如、おみなが驚くことを口にした。

「今日まで、よく辛抱したね。これからは玄淳先生のとこで、学問を身に付けておいで。

もちろん、農作業の合間にしか、行かせてやれないがね」

赤水は天にも昇るほどの嬉しさから、小躍りしたいくらいの気持ちになる。

しかし、大切な労働力が一人欠ければ、どれほど大きな負担をかけてしまうことか。

その辛さを誰よりも知っていた赤水は、素直に喜ぶことができなかった。

「母上、学問をする余裕のないことくらい、承知しております」

「立派な木を育てようと願っても、種を蒔かなければ、絶対に木は育たない。学問も同じじゃないのかね。お前の気持ちがどれほど強くても、それを行動に移さなければ、いつまでたっても、前には進まないだろう」

おみなの言葉は、とても有り難かった。しかし、どうしても素直に受け入れることのできぬ赤水。

その思いを察したおみなは、軽く微笑んだ。

「玄淳先生には、とうの昔に入塾の許可を頂いているよ」

「えっ……」

耳を疑うような一言。返す言葉すら見つからず、赤水は頭を下げ続ける。

そして、大粒の涙が膝の上に落ちる度、おみなは赤水の頬を優しく拭ってやるのであった。

初めて玄淳の塾を訪ねる日。

憧れ続けていた学問を本格的に学ぶことができる嬉しさから、つい気持ちも逸り、赤水の足は無意識のうちに駆け出す。

玄淳宅の玄関には、たくさん草履。玄淳の声が家の奥から、かすかに聞こえる。どうやら、講義は既に始まっている様子。

赤水は緊張した声色で呼びかけてみた。

「赤水でございます…」

何も反応はない。

「赤浜村の赤水です」

しばらくして奥の方から、バタバタと足音が近づく。

「さあ、上がりなさい」

笑顔で出迎えた玄淳は、小走りで塾生の待つ部屋に向かうと、新たな仲間が増えたことを大きな声で告げた。

「彼は、今日から共に学ぶことになった、赤水だ」

塾生たちが揃って会釈をすると、玄淳は一人ずつ紹介をはじめた。

「右から、医者の大塚玄説（おおつか・げんせつ。十五歳）、

庄屋の柴田平蔵（しばた・へいぞう。十七歳）、

修験者の朝日多宝院（あさひ・たほういん。十九歳）、

修験者の大塚重々院（おおつか・じゅうじゅういん。三十歳）、

医者 of 福地清兵衛（ふくち・せいべえ。三十五歳）、

以上の五人だ。身分は違えども、皆、高い志を持っている」

赤水が何より驚いたのは、二十九歳の玄淳に対し、年長者が教えを請う姿である。身分や年齢を問わず、学問を修めようとする真摯な姿。

これほどまでに人を変えてしまふ学問とは、いったいどのようなものなのか。
ますます好奇心は膨らむ。

塾生の紹介を終えた玄淳。一冊の薄汚れた書物を赤水に手渡した。
それは漢詩の入門書として広く用いられている『唐詩選』。手垢で汚れているものの、赤水にとつては、初めて手にする貴重な書物。高鳴る胸を抑えながら、ゆっくり頁を開いてみれば、規則的に並ぶ難解な漢字。何度も尻込みしそうになる。
だが、玄淳は戸惑う赤水を横目に、淡々と詩の朗読をはじめめる。

下馬飲君酒

馬より下りて君に酒を飲ましむ

問君何所之

君に問う 何れに之く所ぞと

君言不得意

君は言う 意を得ず

婦臥南山陲

南山の陲に婦臥せんと

但去莫復問

但去れ 復た問うこと莫らん

白雲無盡時

白雲は尽くる時無し

抑揚をつけながら詩を読む玄淳。

必死になって、その意味を理解しようとする赤水。

しばしの沈黙の後、余韻を楽しむかのように、玄淳が詩の意味を語る。

「これから何処へ行き、何をするのか。別れゆく友人に尋ねた。思い通りにならないことが多すぎるから、南山のほとりに行き、世間から離れて仙人のようにひっそりと暮らす。友人がそう答えたので、私は次のように言った。君の考えはよくわかった。もう何も聞くことはない。君は理想郷に向かうがよい。と……」

赤水に贈った言葉でありながら、今の自分たちに問うているかのような言葉。

塾生たちは、身の引き締まる思いで、その意味を噛み締めた。

一方の赤水。ようやく玄淳の意が酌めたことで、全身を激しい感動が包む。

(尽くる時の無い白雲とは、この世の矛盾や挫折を示している。しかし、この世に生きている限り、そこから逃れることはできない。思い通りにならないからといって投げやりになるのではなく、挫折を繰り返しながら修めていくもの。それが学問。強い意志をもって困難な状況に立ち向かうだけの覚悟のない者は、ここから去るがよい。きっと先生はこうおっしゃっているのだ……)

短い詩の中に、時空を超えた先人たちの叡智。無限に広がる宇宙のように、学問とは何と奥深きものであるか。赤水は大きく心を打たれた。

一方、玄淳が赤水入塾の日に、この詩を贈った理由。

それは、学問に憧れを抱く赤水に対し、何のために学ぶのかを問いたかったからである。同時に、学問を修めるには、数多くの試練が待ち受けている。そのことも伝えたかったのだ。

時間はあつという間に過ぎ、赤水にとつては物足りないくらいのものであった。それでも、玄淳の尊い教えによつて、知識欲が満たされた赤水。

壮快な表情で塾を後にしようとしていると、一人の塾生が声をかけてきた。

「君もどうかね」

懐から餅を取り出し、赤水の前に差し出す塾生。それは柴田平蔵だった。

「随分と熱心に講義を聞いていたようだ、腹も減っただろう」

「ありがとうございます。遠慮なく頂戴します」

笑顔で受け取ると、大きく口を開き、ひと口で頬張る。

平蔵は水戸藩屈指の豪農、柴田家の子息であり、隣村の木皿（きさら）に住んでいた。かつて、徳川光圀が柴田家の噂を聞きつけ、視察に訪れた時のことである。

広大な田畑や蔵屋敷を見た光圀は、これだけの財力を有している柴田家のこと、さぞや珍しい家宝があるに違いないと思い、平太夫（平蔵の祖先）に尋ねた。

「先祖伝来の器物を見たい」

一瞬、戸惑いの表情を見せる平太夫。

少し考え込んだ後、一行を大きな黒塗りの蔵へと案内した。

平太夫は頑丈そうな鍵を手際良く外すと、大きな扉を作男たちが押し出す。

ぎいぎいと音を立て、ゆつくりと扉が動きはじめれば、暗闇に包まれていた蔵の中は、白金色に変わってゆく。固唾を吞んで見つめる従者たち。

「これが、我が家の家宝にござります」

怪訝そうな表情の光圀。

従者に促され、改めて目を凝らして見ると、数百はあろうかと思われる鍬鎌。

整然と並び、美しい輝きを放っている。

「槍の光と見紛う程、磨き上げた農具。実に見事である。豪農の秘訣、ここに見たり。本分を全うし、ひたすら農に勤しむ柴田家こそ、農民の手本である」

こうして、深く感銘を受けた光圀の言葉は、村々を駆け巡り、柴田家の名声は、ますます水戸藩内に轟くようになった。

それから時は過ぎ、学問好きな父の影響を受けた平蔵は、玄淳の下で学問を学ぶようになっていたのである。

「ところで、君は玄淳先生の武勇伝を聞いたことがあるか？」

「いえ」

「それじゃ教えてやろう。玄淳先生のお噂を耳にした水戸藩家老、山野辺図書（やまのべ・ずしよ）様が訪ねていらつしゃったときのことだ……」

家の者は山野辺の家来に対し、『あいにく玄淳は病に臥せておりますので、お目通りはかないません』と言って、面会を断ってしまった。

学問の道に貧富の差や貴賤の別などない。ましてや教えを請いたいと願っているのに、馬上から呼びつける。その非礼さに、玄淳は憤りを覚えたのだ。

今は一介の医者に過ぎぬ身ではあったが、祖先は佐竹家の家臣「山直家」の家老でもあり、礼を尊ぶ教育を受けていた玄淳は、どんなに才能があっても、礼を欠くような者であれば、身に付けた知識を鼻に掛け、ますます驕るようになると考え、早々に山野辺を追い返すことにしたのである。

「もし仮病がばれてしまえば、命さえ危ういというのに……。それでも礼を重んじた。私はその真つ直ぐな生き方に、心服してしまったのだよ」

平蔵はそう言って、軽く背中を叩くと、笑顔で去ってしまった。

やがて平蔵と親しく話せるようになった赤水。ある時、木皿の近くに出かける用事があり、日暮れまでもまだ時間があったため、平蔵の家に立ち寄ってみることにした。

しばらく田畑の続く風景を歩いてゆくと、霧の中から出現したかのように、突如、大きな長屋門と茅葺屋根が目に飛び込んできた。

(噂以上のお屋敷…)

驚きを隠せないまま、使用人に声をかける赤水。

「赤浜の長久保と申します。平蔵さんにお会いしたいのですが…」

使用人は怪訝そうな顔をしながら、屋敷の中へと入って行ったのだが、平蔵の知り合いだとわかると、声の調子をがらりと変え、手招きをする。

「お入りなさい」

胸の高鳴りを抑えながら母屋へと進むと、縁側には平蔵が座っていた。

「突然、お邪魔して申し訳ございません」

「そろそろ来る頃じゃないかと、待っていたところだ」

平蔵は赤水を笑顔で迎えると、おもむろに立ち上がり、一冊の書物を差し出す。

「これを読め」

赤水が手にしたものの。それは『徂徠集』だった。

平蔵に言われた通り、声に出して読もうと、表紙をめくってみる。

だが、句読点がひとつも打たれておらず、全てが漢文で埋め尽くされていた。

一行も読むことのできない赤水は、無言のまま顔を赤らめる。

「この本を読めないようでは、本を読めたとは言えない」

普段の平蔵からは想像もつかない強い口調に、目を丸くする赤水。

「漢文の書を滞りなく声に出して読み、私に教えられるくらい、しっかりと中身を理解しなさい。そこまで習得できたのなら、どのような書物でも買い揃え、貸してやろう」
少し間を置くと、いつもの笑顔に戻る平蔵。

「万巻の書を手当たり次第に読むよりも、一冊の本を熟読する方が、よっぽど役に立つ。まして赤水は仕事の合間に読むのだから、本を借りるにしても、時間を費やすだけの価値があるのか、よくよく熟慮して、本を選びなさい」

貪欲な知識欲から、ありとあらゆる書物を読みたいと思い、平蔵の元を訪ねていた赤水。全てを見透かしたかのような言葉に軽くうなずくと、押し黙ったまま平蔵宅を後にした。

それから数ヶ月後。

赤水が玄淳の塾に通い出したという噂を耳にした、貞近。

その真偽のほどを確かめるべく、長久保家を訪れていた。

「おみなさん。赤水が玄淳先生のところに通っているというのは本当かね」

「はい。でも、仕事の合間にですよ」

おみなの平然とした態度に、呆れ顔の貞近。

「書物を読みながら、道を歩いたり、馬の鼻取りをしているらしいじゃないか。おみなが継母であることをいいことに、赤水は学問に熱を上げている。長久保家も長くはあるまい。そんな噂まで飛び交っているのだぞ」

「とかく世間様は、人の悪口が大好きなものです。そのような噂など放っておけばよいのです」

「学問は百姓にとつて、田畑に寄生する病害虫のようなものだ。懸命になるべきは学問ではなく、農作業の方ではないのか。家の中で密かに楽しむだけだと思い、今まで黙っておったが、もはや見過すわけにもいかぬ」

「朝寝夕寝の米食い虫。酒浸りになる者。暇があれば博打などの悪い遊びに興じる者。世の中には色んな輩がおりますが、赤水は農業をおろそかにせず、余暇を使って学問に励んでいるのです。決して、世間様から後ろ指をさされるようなことはしておりません」

「そんな甘いことを言っていると、学問の方が楽しくなり、仕舞には田畑にも立たなくなるものだ。おみなさんは赤水を学者にでもする気か。どうせ学者になったところで、飯を食うことなどできぬ。野垂れ死にするのが関の山だ」

頑として聞き入れようとしない、おみな。
仕方なく、その矛先を変える貞近。

「赤水、お前は父との約束を忘れたのか」

「いいえ。約束は必ず果たします。でも再興のためには学問が必要なのです」

「なぜじゃ」

「人として正しく生きる道を学ぶためです。再興の念願が叶い、どれほど豊かになったとしても、心貧しければ、村人の心は離れてしまいます。きつと、黄泉の父と母も同じ考えだと思います。むしろ私にとつての再興とは、財を成すことではなく、子々孫々の代まで受け継がれるような、心の礎を作ることなのです。もし許されるのなら、さらに学問を修め、お役人様に良い政（まつりごと）を行つてもらえるように助言をする。それも庄屋役を預る者としての務めだと思つております」

学問を本格的に学びはじめ、浮世離れするようになった赤水を案じ、貞近は声を荒げた。「奇麗事を申すでない！百姓が政に口を出せば、即刻はりつけじゃ！」

亡霊のように付きまとう身分。土地に縛られ、役人に搾取され続ける人生。

この理不尽な世界から逃れるには、僧侶か遊民にでもなるしかないのだが、赤水は学問に生きる望みを見出したのだ。まるでこの日が訪れることを知っていたかのように、玄淳の初講で学んだ王維の『送別』の詩が何度も頭を巡る。

さらに、この世の矛盾や様々な困難に直面しても、それに負けない強い精神力を持ち、先人の智慧によって自分自身を成長させ、人の役に立つ。そのためにはどうしても学問が必要なのであり、決して立身出世のために学問を志したわけではなかったのである。

「そこまで言うのなら仕方あるまい。好きにするが良い。ただし今後一切、助けに応じるこ

とはできぬ。それだけの覚悟はあるのだろうか」

「はい。元より承知しております…」

おみなと赤水の意思を確認すると、貞近は、そそくさと長久保家を後にした。

それからというもの、赤水は貞近と約束した言葉の重さに、何度も押しつぶされそうになる。だが、必死に自らを鼓舞し続け、ふつつつと湧き上がる思いを原動力に鍬を振り上げ続けた。

(いつか必ず、村人を見返してやる…)

まるで人が変わったかのように、畑に立つ赤水を見かね、おみなが問うた。

「何かに取り憑かれちゃったのかい？ あれじゃ、体がもたないよ」

「世間様を見返すには、これでも足りないくらいです」

村人から後ろ指をさされながらも、愚痴ひとつこぼすわけでもなく、平静さを装っているおみな。その心中を思うと、赤水の胸は張り裂けそうだった。

「村人の中には、お前の才能を快く思っていない者もいるだろう。だからといって、妬みや怒りを力づくで押さえ込もうとするのは、間違っているよ」

おみなの意図がつかめぬ様子の赤水。

「無理に抑え込もうなどは、考えておりません。私は弱気になりそうな自分に打ち克つこ

とだけを考えているのです」

「お前の心の中には、まだ怒りが残っているよ」

押し黙る赤水に向かつて、おみなが続ける。

「お前は何のために学んでいるんだい？ 自分の知識欲を満たすためだけなら、それは本当の学問とは言えないよ。他人様には春風のような優しい態度で接し、自分に対しては秋の霜のように、己を厳しく律し、慎む。それを学ぶのが学問ではないのかね」

力ずくで見返そうとすれば、その反動で村人の反感は何倍にも膨らむ。憎悪は負の力しか生まないが、観音様のような慈悲深さがあれば、固く閉ざされた人の心も、たやすく開くことができる。おみなは学問によつて、先ずは自分を磨き上げることの大切さを伝えたかったのだ。

自分の浅はかさだけでなく、これまで考えたこともなかった「学ぶことの意味」についても、気づかされた赤水。

この日以来、村人の姿を見つけると、書物を読むのをやめ、元気に挨拶をした。さらに、ケガや病気で苦しむ村人がいると聞けば、玄淳から学んだ薬草の知識を教え、文字を学びたいという者には文字を教えた。そして、自分を愛する以上に、村人を愛おしみ続けたことで、赤水に対する陰口もいつしか鳴りを潜めてしまったのである。

入塾から七年目。

赤水は、玄淳や塾生から借りた書物を読破した。決して農業を疎かにすることなく、寸暇を惜しまずに努力を重ね、ようやく学び得た知識。

だが、働き手の揃っている家ですら、生きることに必死な時代。広大な田畑を耕し、学問を続けるためには、どうしても人手が足りない。

勿論、その思いは貞近も同じであり、いつものように頭を悩ませながら、親戚の長久保治部衛門（ながくぼ・じぶえもん。善次衛門の従兄弟）の家に立ち寄っていた時のこと。

一人の娘が、ふと貞近の目に留まる。

「時に治部衛門。あの娘は？」

「何だ、気がつかなかったのけえ？ 多礼（たれ）だよ」

「多礼？ はっ。随分と大きくなつたのう」

多礼は赤水の再従兄弟（はとこ）であり、互いに面識もあつたのだが、わずかに挨拶を交す程度の付き合いでしかなかった。

多礼の働く姿を、じっと見つめる貞近。ある思いが、頭の中を過ぎる。

「治部衛門。実は多礼のことなのだが……」

六 新たな師

玄淳と六人の塾生。身分や年齢の違いにとらわれることなく、互いに切磋琢磨し合う姿。もはや師弟の垣根を越え、同志としての絆を強めていたのだが、同時に大きな壁にも阻まれていた。それは、朱子学を本格的に学んだ者が、誰一人としていないということであった。武士・学者に限らず、朱子学は必須の教養であり、朱子学を学んでいなければ出世は望めない。また、水戸藩では光圀以来、独特の学風が醸成されるほど、儒学を尊ぶ土地柄でもあったのだ。

そのような折、玄淳の耳に名越南溪（なごや・なんけい）の噂が届く。

南溪は儒学者であり、後に彰考館（しょうこうかん。『大日本史』編纂のための役所）の総裁となる人物であるが、周囲からは十蔵（じゅうぞう）と呼ばれていた。

風体など気にせず、粗衣を身にまとうことから、いつしか親しみを込めて『ボロ十蔵』とまで呼ばれるようになっていたのだが、豪胆な性格だけでなく、大酒飲みとしても、その名を轟かせていたのである。

「南溪先生は、自分が先生と呼ばれることを嫌っているので、門下生がその理由を問うてみた。すると、『私は孔子の教えや立派な先生から学んだことを、そのまま伝えていただけだ。私のように徳のない者が、先生などと呼ばれるのは、甚だおこがましい』そう答えたそうだ」

「他にもまだあるぞ。水戸藩の財政難から、彰考館の役人を減らそうとした時のことだ。南溪先生は『私のように才能もなく、酒をあまり、肉を食らっている者が、高い給料をもらっているのはおかしい。どうか私の給料を減らし、才ある役人の解雇は、即刻やめてくれ。優秀な人材を失うことは、水戸藩にとって大きな損失だ』とおっしゃったそうだ」
感嘆の声を上げる塾生に向かって、玄淳が得意げに続ける。

「口では立派なことを言いながら、徳のない儒学者も数多くいる。ところが、南溪先生は孔子の教えを忠実に守っていらつしやる。私は南溪先生こそ、真の儒学者だと思う。そこで皆に提案したいのだが、南溪先生の下で学ぶというのはどうだろう」
部屋の中が、一瞬静まりかえる。その直後、平蔵が立ち上がった。

「玄淳先生。是非、私もお供に加えて下さい」

他の塾生たちも、次々と平蔵に同調する。しかし、一人浮かぬ顔の赤水。

「お前は どうする？」

「家業が忙しく、母を残して水戸に行くことはできません。今でも随分とわがままを言って、学問をさせてもらっている身ですから」

「左様か……。仕方あるまい」

平蔵は、しょんぼりとする赤水の肩を優しく叩いた。

「我々が学んだことをお前に伝えれば、水戸に行かずとも済むではないか。その分、しっかりと家業に励め」

助け合いながら、共に学びあつてきた同志。自分の知識欲だけを満たすという低い次元の者は、誰一人としていない。そのことを玄淳は嬉しく思った。

しかし、才ある赤水を世に出すためには、どうしても本格的に儒学を学ばせる必要がある。基礎となる大切な学問だからこそ、独学ではなく、高名な学者から直接学んで欲しい。そして何よりも、書物からは決して得られない、師の叡智に触れて欲しかったのだ。

一方の平蔵。赤水の学費を援助してもよいと思っていた。だが、彼の性格からして、申し出を断ることは明白であった。むしろ、目の前の困難を自ら乗り越え、学び取った学問こそ、何よりも尊い。きつと赤水も同じことを考えているに違いないと確信した平蔵。援助の話を口にするとはなかった。

(必ず南溪先生の下で学べる日が来る。それまでの辛抱だ…)

元文四年(一七三九)。玄淳たちが、水戸へ発つ日。

立春の南風が吹きすさぶ中、赤水は岩城街道の筋まで見送った。

「道中、お気を付けて」

「お前の分まで、しっかりと学んでくるからな」

平蔵が明るく応え、水戸へ向かつて足を進めようとした時、赤水は玄淳を呼び止め、一通の手紙を差し出した。

「これを南溪先生に…」

玄淳は赤水の思いを受け止めるように、手紙を懐にしまい込むと、数多くの識者がいる憧れの地を目指し、ゆつくりと旅立って行った。

何度も振り返り、大きく手を振り続ける平蔵。

やがて、その姿も見えなくなると、赤水の心の中には、鈍く冷たい鉛のような寂しさだけが残されるのであった。

数日後。長久保家を訪れた貞近は、赤水がいないことを確認すると、おみなに向って小声でささやいた。

「相変わらず、赤水は玄淳先生のところへ通っているのか」

「ええ。でも家の事は、しっかりとやってくれていますよ」

「実は、その赤水のことなのだが…」

「また何か悪い噂でも、お聞きになったのですか」

怪訝そうな顔のおみな。

「いやいや、そうじゃない。実はそろそろ赤水に嫁をどうかと思つてね…」

意表を突く貞近の言葉に、おみな of 険しい表情もほころぶ。

「それはありがたい話です。でも、肝心の相手がいないことには」

「そこで相談なのだが…。多礼はどうかね」

「お多礼ちゃん！」

思わず手を叩きながら、身を乗り出す。

「この前、久しぶりに会ったのだが、明るくて、よく働く娘だ。嫁いで来た頃のおみなさんのようだったよ」

多礼は長久保家の状況をよく知っている上に、赤水が学問をすることにも理解を示している。おみなは貞近の申し出を、快く受け入れることにした。

百姓に専念させることをあきらめる代りに、嫁をとらせ、一刻も早く跡継ぎを育てようと考えていた貞近にとっても、多礼は好都合だったのである。

五月雨降りそそぐ中。蓑笠姿で、深く腰をかがめながら、田の草取りに追われる日々を送っていた赤水。腰の痛みを和らげようと、時折、背筋を伸ばしながら、遠くの景色に目をやる。

すると、はるか遠くに見覚えのある一団。

あぜ道まで急いで駆け上がり、大きく手を振る。

「平蔵さーん、お帰りなさーい」

手を振り返しながらか、こちらに向かって走り出す平蔵。

息を切らしながら駆け寄った二人は手を取り、再会を喜ぶ。

「赤水、戻ったぞ」

「ご無事で何よりです」

「留守中、何か変わったことは？」

「平穩無事でございました」

いつものように戯れ合いたい気持ちを抑え、赤水は玄淳の到着を待つ。

「先生、お久しぶりです」

「息災そうで、何より」

そわそわする赤水を見た玄淳。もったいぶるように懐から包みを取り出す。

「南溪先生からの預り物だ」

「えっ……」

玄淳の口からでも構わない。南溪の言葉を聞ければ、それだけでもありがたいと考えていた赤水にとって、まさに青天の霹靂であった。

「私も驚いたぞ。一介の百姓のために、返事を書いてくれたのだからな。それにしても、いったいどのような手紙を書いたのだ？」

「学問を修めるには、どのような分野を学ぶべきか。それをお尋ねしたのです」

「ほう。それは面白い質問だ。是非、私にも見せてはくれぬか」

「でも、お疲れでは……」

「案ずるな。南溪先生の手紙が、何よりの妙薬じゃ」

大声で笑いあう玄淳たち。

「大切な手紙を濡らしてしまわぬよう、私が預っておく。仕事の手が空いたときにでも、取りに来るがよい」

玄淳はそう言い残すと、足早に去って行った。

一刻も早く手紙を読みたいという衝動が、草を引き抜く手の動きを早める。しかし、生い茂る草に手間取る赤水。手紙のことが、やけに気になる。

それから数日後。雨の激しい日を選び、玄淳宅を訪ねることにした。

稲にとつて、雨は天からの恵みであり、百姓たちにとつては休息の時。だが、赤水にとつては書物を読み、新たな精気を養う、貴重な寸暇なのである。

「お邪魔するのが遅くなりました。田の草取りに、随分と手間取りまして……」

「取っても、取っても伸びてくる。まるで、お前の向学心のようなだな」

玄淳は笑顔を浮かべながら、風呂敷の包みを開き、丁寧に手紙を取り出す。そして、赤水の前へと差し出した。

「これが南溪先生からの手紙だ」

「ありがとうございます」

赤水は深く頭を下げると、逸る気持ちを抑えながら手紙を開く。

静寂の中に、雨音だけが響き渡る。
雨に濡れた深緑の草々の香り。縁側から、ほのかに漂う。
時はゆっくりと流れてゆく。

赤水殿

あなたのような若者が、古くから伝わる学問を志されていることは、とても素晴らし
いことだと思います。また、徳川光圀公の遺志を重んじられていることにも深く心動か
されました。

不思議なご縁で頂きましたご質問ですので、率直に私の考えを述べます。

学問とは非常に奥が深いものでございます。その学問を修めるといふことは、大海に
舟を進めるようなものですから、まずはしっかりとした目標が必要です。目標を持たぬ
ということは、航路を定めずに広い海へ出てしまふのと同じことです。そうなれば漂流
してしまふでしょう。だからといって、学問を浅くかじろうとするならば、それは岸辺
の波間で、舟遊びに興じるようなものであり、非常に愚かなことです。

先ず初めに学んで頂きたい分野は、経学、文学、史学の三つでございます。

経学とは人の道の根本を示すものであり、人倫の根幹を成すものです。

これを最初に身に付けないといふことは、モノサシや墨壺を持たないで仕事をする大

工のようなものでございます。

経学は大変、奥深き学問でございますので、先ずは四書五経で物事の道理を、ひと通り学んで下さい。

史学は二十一史を学ぶことになりましたが、こちらでも学問の幅が広いため、身近なところから史記、前後漢書、温公通鑑（おんこうつがん）などをしっかりと学んで下さい。歴史の流れを知ることができただけでなく、文章を書く時のお手本にもなります。その次は文学ですが、『春秋左氏伝（しゅんじゅうさしでん）』『莊子（そうじ）』『韓文（かんぶん。韓愈（かんゆ）の文章）』『柳文（りゅうぶん。柳宗元の文章）』などを学んで下さい。

私が申し上げた通りに学ぼうとすれば、人生の半分を費やすことになります。驚かれるかもしれませんが、基礎を固めるには、それほど時間がかかるものなのです。ところが忍耐のない者に限って、少し学問をかじりはじめると、物事の本質がわかったと勘違いして、目新しい学問や世間から注目を浴びている学問に手を出したがります。しかし、その姿は笑止千万であり、まるで雲にでも飛び乗るような愚行でございます。そうならないためにも、せめて『四書五経』を一通り学び、少しでも物事の善し悪しを理解できるようになって下さい。

かつて、荻生徂徠（おぎゅうそらい）という者がおり、数十年しっかりと基礎を学び、見識を深めたはずなのに、古文辞学に傾注してしまったのは、とても残念なことです。

何度も申し上げます通り、とにかく基礎が大事です。基礎が出来ていなくては、どんな

に素晴らしい教科書を持っていても、宝の持ち腐れになってしまいます。ましてや、自分の学力不足を棚に上げ、勝手な解釈をしてしまうようでは、舟遊びに興じると同じことであり、目標を達成することなど出来ません。

また、自己満足のためだけに学問をする者は、学問を深く追求し、研鑽を積もうという姿勢に欠けます。たとえ真剣に学ぶ必要がないにしても、私の申し上げた趣意を理解しておかなければ、自己満足すら得られませんし、中途半端な知識を身に付けても、有識者の嘲笑を買うだけです。

長々と思いつくまま筆を執りましたが、手紙だけでは、私の申し上げたいことの半分も書けませんので、機会があれば、お会いしてお話したいものです。

南溪より

赤水から手渡され、一読した玄淳。腕を組みながら、しばらく押し黙る。そして、ゆっくりと目を開いた。

「身分や年の差で分け隔てることなく、赤水の意思を尊重しながら、わかりやすい丁寧な回答。しかも、ここに書かれてあることを、自ら実践されている。まさに言行一致の先生だ」
赤水は、南溪の手紙に感動しつつも、どこか得心がいかぬ様子。

「何か腑に落ちないところもあるのか」

「南溪先生は、なぜ荻生徂徠や古文辞学を批判されているのでしょうか」

「南溪先生が批判されるくらいなのだから、何か問題があるのだらう……」

徂徠を敵視する南溪に、多少の不安を覚える赤水ではあったが、有益な指南を頂いたことに変わりはなく、改めて玄淳に礼を述べると、顔をほころばせながら、帰宅の途につくのであった。

周りからは灯りがもれ、家へと着く頃には、すっかり日も落ちていた。

息を切らしながら玄関の戸を開ければ、夕食の支度を終え、赤水の帰りを待つ、おみなな姿。

「遅くなりました」

座敷へと駆け上がり、囲炉裏の前に座った途端、腹の虫が鳴る。

「さあ、早くお食べなさい」

おみなは笑みを浮かべながら、茶碗いっぱいによそったご飯を差し出すと、赤水は勢いよく、かきこむ。

「今日は、何か良いことでもあったのかい」

「どうしてわかったのですか？」

「お前の笑顔を見るのは、久しぶりだからね」

赤水は照れくさそうに、手紙のことを話した。

「へっー。百姓のために返事を書いてくれたのかい。大した先生だね。それで手紙には何と？」

「学問を修めるには、基礎をしつかり学ばなければならず、それだけでも人生の半分を費やしてしまうそうです」

「半生もかかるのかい。今から懸命に学んでも、基礎が出来上がった頃には、あの世行きになってしまうじゃないか」

「そうかもしれないねえ」

軽く冗談を受け流す赤水。

それとは反対に、真剣な眼差しへと変わってゆく、おみな。

「赤水。水戸に行きなさい」

「母上。また、ご冗談を……」

「冗談ではない。それが、私の本心だよ」

「我が家には人手が足りぬというのに、何ヶ月も家を空けることはできません」

「それは百も承知だよ。その代り……。という訳でもないのだが、そろそろ嫁をもらってはどうかと思つてね」

「それはありがたいことです。良い縁談でもあれば、是非、進めて下さい」
すんなりと結婚の話を受け入れたことで、拍子抜けするおみな。

しかし、赤水は結婚について、前々から真剣に考えるようになっていた。結婚をすれば人手も増え、血筋を絶やす憂いもなくなる。

南溪の下で学ぶためには、もはやこれ以外に方法はないと。

「それなら話は早い。既に良い話があつてね。相手は誰だと思う？」

「皆目見当もつきません」

「お前も知っている娘（こ）だよ」

「私知知っている娘……」

「お多礼ちゃんだよ」

その名前を聞いた途端、赤水は顔を紅く染め、うつむいてしまった。

多礼とは数年に一度会うくらいで、面識はあまりなかったのだが、端正な顔立ちが、やけに印象に残っていたからだ。

「母上と叔父がお決めになったのですから、反対する理由もございません」

南溪の下で学ぶことができる喜びと、結婚という人生の一大事が、同時に訪れようとして
いる今。

赤水は努めて冷静さを装いつつも、胸の中では激しい鼓動が鳴り続けるのであった。

七 夢への第一歩

黄金色の頭を垂れる稲穂に、村中が沸く季節。

長久保家では米の収穫を終え、多礼の嫁入りの日を迎えた。

住み慣れた家から一步足を踏み出せば、多礼の目の前には緩やかな坂道。

青々とした松林の向こう側には赤水の屋敷。

その先には白波立つ赤浜の海岸線も一望できる。

小川を渡り、平坦になった道をゆつくりと進めば、田畑仕事の手を止め、美しい花嫁姿に
思わずため息を漏らす村人たち。

右手に広がる鬱蒼（うつそう）とした松林の傍らには馬頭観音。その陰では、花嫁を祝福
するかのようには浜菊がひっそりと咲いている。

多礼は、ためらいがちに後ろを振り返れば、弓形の道に沿って続く人々。
まるで生家への道を覆い隠すかのように、どこまでも続く人の波に見えた。

やがて、「根上がりの松」を過ぎた花嫁行列は、かすかに聞こえる波音と共に粛々と赤水
の屋敷へと入って行く。

婚礼の儀が始まれば、高砂の掛軸の前で三々九度の杯を交わし、厳かな雰囲気もほどなくして、にぎやかな空気に包まれる。

暖かい祝福を受けながら、晴れて夫婦となった二人。そのうるわしき姿に、誰もが長久保家の繁栄を重ね、宴客は夜深くまで杯を酌み交わし続けた。

そして、数日後。

嫁いだ先で名前を変える風習に従い、多礼は、名前を「お順（じゅん）」に改められた。

寛保元年（一七四二）睦月。

農閑期に入り、人手も増えたことで、農作業にも多少の余裕が出はじめると、おみなは兼ねてからの約束通り、赤水の遊学を許した。

夢にまで見た水戸へ、玄淳と共に旅立つ日。

心躍らせる赤水とは対照的に、不安げな表情を隠しきれない、おみなとお順。

「案ずるな。赤水も一人前の男ではないか」

笑顔で答える玄淳を見て、ようやく二人も安堵する。

そして、別れが近づくにつれ、赤水は身重のお順をしきりに気遣う。

「お順、母上のこと頼んだぞ。お腹の子のためにも無理はするな」

「はい。あなたも道中、お気をつけて……」

お順は瞳を潤ませながら、心の中で無事を祈った。

寒風吹きすさむ中、凜とした姿で第一歩を踏み出せば、吐く息は白く、霜柱を踏みしめる音だけが辺りを賑わす。

振り返りたい気持ちは何度もこらえながら、足を進める。

憧れの遊学であるはずなのに、いざ離れるとなると、去来する一抹の寂しさ。晴れ晴れとしない心を引きずり、歩き続ける赤水。

しばらくして、東連津（とうれつ）川にさしかかると、突然、目の前に美しい浜辺が飛び込んできた。

翡翠色（ひすいいろ）の海。白く砕け散る波。切り立った崖に、しがみつく深緑の松。

これまでの憂鬱な気分を吹き飛ばすかのように、変化に富んだ風景が、次々と目の前に現れ、非日常的な時間の流れに、身を置く心地良さを教えてくれる。

まさに、旅が赤水の心を魅了した瞬間でもあった。

その後も、移りゆく景色を楽しみながら歩を進め、西の空が夕日に染まり出す頃、本日の宿となる森山宿に到着した。

赤水は部屋へ入るなり、堰を切ったかのように筆を執りはじめる。

「何を書いているのだ？」

「はい。一人でも水戸に行けるよう、ここまでの道のりや特徴のある景色などを書き留めておきます」

玄淳は、赤水の書いた絵をのぞきこむ。

「ほう。これは実にわかりやすい地図だ。これなら迷わずに済むな」

「このようなものを地図と呼ぶのですか？」

「左様。道や地形などを記したものを地図と申すのだ。水戸に行けば目にする機会もあるだろう」

翌朝。まだ陽も昇りきらぬうちに、宿を出た二人。

夕方には水戸へと入り、遊学中の仮住まいとなる知人宅に立ち寄る。

そして、水戸城下で買い物しながら、南溪の屋敷を目指して歩いていると、黒堀の続く路地へとさしかかる。その時、玄淳が不意に歩みを止めた。

「ここが南溪先生のお屋敷じゃ」

赤水は何度も辺りを見回してみるのだが、高名な学者にしては質素な造り。

噂にたがわず、南溪の生き様を示すかのような佇（たたず）まいに、共感を覚えながら、二人は玄関へと足を踏み入れる。

「鈴木玄淳でございます」

その声を聞きつけ、一人の書生が小走りでやって来た。

「お待ち申し上げておりました。どうぞ、お上がり下さい」

二人はわらじを脱ぎ、足の汚れをきれいに落とすと、ぎしぎしと床を鳴らしながら廊下を進み、案内された小部屋の前で立ち止まる。

「玄淳様がお見えになりました」

「入られよ」

書生がゆっくりと障子を開けると、玄淳は真っ先に手土産を差し出す。

「美味しそうな鮪（まぐろ）を見つけたのですが、お口に合うかどうか……」

「おお。これは見事な鮪じや」

なめるように鮪を食す南溪の姿が脳裏に焼きついていた玄淳は、水戸城下で上等な鮪を買い求めていたのである。

「私の隣におりますのは、以前、先生に手紙を書いた赤水にござります」

「その節は、身に余る御教示を賜り、有り難うございました」

軽くなずいた南溪は、ボロ十蔵のあだ名通り、質素な身なり。だが、想像していたよりも若々しく、柔和な中にも鋭い眼差しが、とても印象的であった。

赤水には、尋ねてみたいことがたくさんあったのだが、南溪はすぐに講義へと出かけてしまい、僅かに言葉を交わすのが精一杯。

それでも、念願通り、南溪の下で学ぶことを正式に許され、大好きな学問に囲まれながら、一日を過ごすという、夢のような生活がはじまったのである。

数日後。南溪の講義が終わると、一人の若者が声をかけてきた。

「君が赤水君だね。私に付いてきて下さい」

案内された薄暗い部屋には、整然と並ぶ書物。

その若者は手馴れた様子で数冊の書物を取り出し、赤水へと手渡す。

「これは…」

「君が見たいと願っていたものだよ」

赤水が手にしたのは、色鮮やかな地図であった。

初めて見る地図に、すっかり心奪われる赤水。

「よっぽど、地図が気に入ったらしいな」

その声に振り向くと、南溪が後に立っていた。

「こんなに早く地図を手にするとは…。まるで夢のようです」

「君が地図を手に行けるのも、太平の世の証だ。他国に地図が渡ってしまえば、国を奪われ兼ねない時代もあったのだからなあ。もし、そのような時代に生まれていれば、地図を手にすることもできなかったはずだ」

「はい。私は果報者です」

三人の笑い声は、うら寂しい部屋を一変させたのだが、赤水にとって残念に思うことがひとつだけあった。

それは、日本人が美しい国に生まれながら、この国がどのような形をし、自分の住む村がどこにあるのか、それすら知らないということである。

しかし、何度も地図を食い入るように眺めていた時、誰もが地図を手にする光景が、はたと頭の中に浮かんだのである。そのあまりにも鮮明な映像に、我が目を疑ってしまったのだが、赤水はすぐに確信した。

必ずこの国に、地図が広く行き渡るということを。

「紹介が遅れたが、君に地図を渡したのは、立原蘭溪（たちはら・らんけい）君だ。彰考館で働いておる。諸藩の地図にも詳しいから、色々と教えてもらおうといい」

地図をきっかけに知り合うことの出来た、赤水と蘭溪。

二人は時を移さず、竹馬の友のように親しくなり、交友を深めていった。

また蘭溪は、多くの仲間や識者を紹介してくれたのだが、そのお陰で、自分の知識がいかに断片的なものであるかを思い知らされた赤水は、ますます知識欲を駆り立てられた。

そして、乾いた土に水が吸い込まれるように、新たな知識を吸収した赤水は、辺境の地で芽吹いた才を、天に向かって大きく伸ばし始めるのであった。

水戸での二ヶ月の遊学は、瞬く間に終わり、玄淳と赤水は帰路の途についた。本音を言えば、もつともつと学びたかった。

だが、家族に犠牲を強いていることを考えれば、これ以上の贅沢は言えない。改めておみなとお順に感謝をしながら、二人の待つ赤浜へと戻ってきた赤水。

「ただいま戻りました」

不意に現れた赤水の姿に、目を丸くするお順。

「留守の間に、随分と大きくなつたなあ」

赤水は嬉しそうに、お順のお腹を撫でる。

「お腹の子も、あなたの帰りを待っていましたよ」

どことなく、凜々しい顔つきの赤水。

その姿を見て安堵したお順は、いつもの笑顔を取り戻す。

三人揃つての夕食。

久しぶりに囲炉裏の火を囲みながら、土産話にも花が咲く。

しばらくすると、赤水は思い出したかのように、一枚の紙を持ち出してきた。

「赤浜から水戸までの道のりを描いてみたのですが、このようなものを地図と呼ぶそうです」

おみなとお順は感心しながら、赤水の地図を眺めた。

「お前は絵が上手だね。これなら私でも、迷わず水戸まで行けそうだよ」

赤水は手製の地図を見せながら、水戸までの美しい風景や城下町のにぎやかな様子などを話し聞かせた。

初めて聞く城下の様子に、お順は目を輝かせる。

「もっと水戸の話聞かせてください」

「身体に障るといけないから、また明日にしよう」

赤水が長年の夢を実現できた。それを我が事のように喜ぶお順。

しかし、時折、赤水がのぞかせる陰を、おみなは見逃さなかった。

まるで、祭りが終わった後のような物悲しい瞳。やけに心に引つかかるのであった。

赤水は明日からの仕事に備え、早めに布団へと入ったのだが、眠気は感じられない。これから永遠に続く農作業のことを考えると、ますます目は冴え、思うように学問を続けられない厳しい現実が、眠気を遠ざける。

寝返りを打つ度、遊学中の楽しかった出来事が頭の中を巡る。

うつらうつらしながら、やつと浅い眠りにつけるかと思つた頃、静寂に包まれた村一面に鶏の鳴き声が響き渡る。

仕方なく、赤水は眠るのを諦め、ずっと気になっていた田んぼを見に行くことにした。

薄暗い道を一人歩いていると、辺りが朝陽に照らされてゆく。

だが、我が家の田んぼの前に立てば、田植えの準備が遅々として進まぬ荒田。

目の前に広がる虚しい光景に、愕然とする赤水。

急ぎ、自宅から農具を持ち出し、再び田んぼに立つ。

そして、お天道様に手を合わせる、力強く鋤(すき)を振り続けた。

(これでは叔父さんに顔向けもできない……。学問に夢中になり、怠けていると思われては、これまでの努力も水の泡となってしまう。何としても遅れを取り戻さねば……)

それから季節は過ぎ、秋を迎える頃には赤水の努力の甲斐もあり、例年通りの収穫を得ることができた。

さらに、長男の藤八郎(とうはちろう)が誕生したことで、長久保家は明るい雰囲気にかまっていた。

しかし、赤水の心には、複雑な思いが渦巻く。

大黒柱として、責任が重くなっていくことへの不安。

新しい知識を得ようにも、書物を買う金すら無い。

学びたくても、思うように学ぶことのできぬ環境。

基礎を固めるだけでも半生はかかるというのに、一步も前に進むことができない日々。

もどかしさと焦り。

働いても、働いても、学問からはますます遠ざかる。

百姓という身分と貧困に縛られ、そこから逃れられない運命。

せつかく先人の智恵を学んでいるというのに、心定まらず、悶々とする日々を送る赤水であつた。

第二章 松岡七友
一 玄淳の秘策

一家の主として、家族を守らなければならぬ赤水。だが、その才能を埋もれさせるわけにもいかない。

毎日のように赤浜の海岸を歩きながら、玄淳は頭を悩ませていた。そんなある日のこと。

玄淳は波打ち際に、紅葉の葉っぱのような生き物を見つけた。

「ヒトデか……。んっ？ 足が七本あるヒトデ……珍しいのう……」
独り言をつぶやきながら手に取り、ぼんやりと眺める。

「七本足……基礎を固めるのに半生……」
一瞬、頭の中を閃光が走る。

「七人で手分けをし、各々が師を務める。さすれば、半生も時はいらぬ！」
これなら時間の取れない赤水でも、効率良く学べる。

とっさのひらめきに、玄淳は歓喜の声を上げた。
だが、立ち所に、苦々しい顔つきへと戻ってしまった。

「南溪先生が申された通りの書物を揃えるとなると、百両以上の銭が必要になる。この大金を、どうやって工面しろというのじゃ……」

空を見上げ、あれこれと思案に暮れていると、向こうから一人の男が近づいてきた。

「先生、探していましたよ。どこにいらつしやったのですか？」

「それはすまなかつたな。平蔵……」

（平蔵！）

突然、玄淳の目が輝き出す。

（平蔵なら、百両という大金も難なく用意できるはず。幸いにも平蔵の父は、学問に対する理解もある。もしや、平蔵なら引き受けてくれるやもしれぬ……）

心の内を告げることはせず、淡々とした表情のまま別れた玄淳。

自宅に戻ると、独り静かに縁側へと座り、空を見上げる。

「今日の月は、いつになく大きいのう……」

目を閉じ、何度も自問を繰り返す。

（心曇れば、学問も曇る。私心なきか。平蔵を利用しようとする邪心は、ありやしないか……）

翌日。玄淳は平蔵に自分の考えを伝えた。

清らかな眼差しを見た瞬間、私利私欲から書物を無心しに来たのではないことがわかった。何より、互いに師を務め、効率良く学問を修めるといふ構想に、深い共鳴を受けた平蔵。迷うことなく、玄淳の申し出を受け入れることにした。

「ところで、どのような書物を揃えればよろしいでしょうか？」

玄淳は、細かな文字でびっしりと書かれた目録を手渡す。

「懸命に絞ってみたのだが、それでもまだこれだけある……」

「体系的に学問を学ぶには、少なく見積もっても、これほどの書物が必要なのですか……。半生どころか、一生かけても難しそうな量ですね」

「左様。だが我らには、七つの頭脳があるではないか」

素晴らしい仲間たちとの出会いに、改めて感謝をしながら、二人は書物の選定作業に取り掛かった。

数ヶ月後。

荷物を高く積み上げた三台の大八車が、平蔵の家の前に止まると、荷物の中身が気になって仕方のない村人たちが、一斉に車を取り囲む。

身動きが取れぬほどの勢いに、人夫たちは圧倒されそうになる。

だが、浮き足立つこともなく、黙々と縄を解き、大きな布を威勢よく取り外せば、人々の間から歓声がどつと沸き上がる。

「オラ、こんな数の書物を見たのは初めてだ」

「平蔵さんの学問好きは知っていたが、随分と難しそうなものばかりじゃ」
目を丸くする村人の前を書物が通り過ぎ、次々と家の中に運ばれてゆく。

使いの者から、書物が届いたという知らせを聞いた、玄淳と赤水。急ぎ平蔵宅へと向かう。そして、二人が到着する頃には、うず高く積まれ、所狭しと並んでいた。

書物の山に駆け寄った赤水は、一冊一冊を手に取り、じっくりと眺める。

南溪が薦めた書物の数々。一生かかっても、全てを手にすることなどできぬと思っていた赤水にとって、目の前で無造作に積まれている光景は、夢の中のような出来事であった。

さらに、赤水を驚かせたのは、地理に関する書物が混じっていたことである。

(私が地図に興味を持っていることを、平蔵さんは知っていたのか…)

改めて平蔵の心遣いに感謝しながら、愛しむように書物をめくっていると、ある著者の名が目に留まった。

「平蔵さん。これは……」

「ああ。それは江戸で話題になっている書物だ」

赤水が手にした書物。それは、南溪が敵視していた古文辞学の祖、荻生徂徠の著書であった。水戸滞在中、江戸で流行していた古文辞学に興味を持った玄淳と平蔵が、『政談』『弁道』

『弁名』『論語徴』などを注文していたのである。

(南溪先生が古文辞学を批判していることは、平蔵さんも知っているはずでは…)

赤水は、そのことを平蔵に問い質そうとしたのだが、瞬時に知識欲が頭をもたげる。

(南溪先生が批判するほどの思想とは、いったいどのようなものなのか…)

結局、高まる好奇心を抑えられず、赤水は徂徠の書物を借り受けると、黙したまま家路を急ぐのであった。

二 研学の場

どの書物から学び始めるか。

七人は議論を重ねつつも、大勢は徂徠の古文辞学に傾きつつあった。

基礎をしっかりと固める前に、独創的な思想に触れることは、誤った先入観を植え付けてしまう危険性を伴うのだが、それを揺り戻してくれる仲間がいれば、客観的な思考力を保てる。また、自分の頭で考えようと勤めなければ、簡単に著者の思想に染まってしまうと考えていた玄淳は、各々が師になることで、古文辞学に対して、どのような考えを持ち、仲間をどのように説得するのか。その力量も確かめてみたいと思っていたのだ。

こうして、最初の論題が古文辞学に決すると、七人は割り当てられた書物を必死になって読みはじめた。

日々深まりゆく知識に喜びを感じながら、充実した時間を過ごす。

しかし、次男が誕生し、以前にも増して、家長としての責任が双肩に重くのしかかっていた赤水だけは、書物を読み進めずにいた。

もはや、睡眠を削って時間を作るしかないのだが、身体が元手の百姓にとって、肉体を再生する時間を削ることは、命を削るに等しい行為でもある。

それでも、今の赤水にとつて疲れを癒すものは、茶碗いっぱい飯でも、睡眠でもない。書物だけが、本当の自分を取り戻してくれるのだ。

夢中になるあまり、薄明の空を迎えることになってしまったとしても。

二ヶ月後。互いの成果を発表し合う、初めての勉強会の日を迎えた。

玄淳の目論見の真価が試される時であり、各々の成果を七人の頭脳で検証する時でもある。ほどよい緊張感に包まれながらも、これまでの知識と経験が加わったことで、いっばしの論客のような表情を見せる七人。

場の雰囲気が最高潮に達した時、玄淳が口火を切った。

「万民が徳を高め、聖人に近づけるよう、修練を重ねることで国家安泰を実現する。我々はそのように学んできたのだが、徂徠先生の解釈には誤りがある。だから、南溪先生がお怒りになっていたのだ。また、士族は何も生産することのない職業であるかのような主張が見受けられる点にも、問題がある。しかし、その一方で、国を治める側が、率先して道徳心を高めるべきであるとも言っている。確かに、庶民の道徳心を高めても、役人が不正を

働いたり、不公平な年貢の取り方をしていたのでは、国は乱れる。だからこそ、庶民の道徳心にばかり依存するのではなく、不正ができない仕組みも必要だという主張は、理にかなっている。この点において、私は徂徠先生に賛同する」

最年長者でありながら、控えめな福地清兵衛。玄淳に促され、重々しい口調で語り始めた。『学則』によると、物事の善悪を判断するには、昔からの古い価値観に縛られることなく、その時代の価値観に即して決め、臨機応変な対応も必要であると述べられている。だが、私は反対だ。徳という不変の価値観が、中心に備わっているからこそ、時代に即して変化することもできるのであり、徳のない者が価値観を決めれば、世の中は乱れる。歴史を振り返ってみれば、時の権力者が己の欲を優先させ、都合のいいように価値観を変えてきた。その結果、戦乱が繰り返され、民衆は苦しめられてきたのだ。また、徂徠先生の弟子たちが、吉原に入り浸っているのを、江戸の民は面白がっていると聞くが、これも自分たちの愚行を正当化するために、価値観を悪用している好例だ」

武術に長けた祖父に養育された修験者の大塚重々院。威風堂々とした態度で異論を述べる。「多くの弟子がいれば、中には道を外してしまう者もおるでしょう。ですが、そうした小事に目を奪われることなく、徂徠先生の考えに目を向けるべきです。先生は『弁名』の中で『道』について、次のようなことを述べられております。武道や茶道には、たくさんの流

派がある。これらは『術』、つまり一種の『型』であり、その型通りに修練を積めば、自ずと『道』に達する。また、道はどのような職業にも存在するのであり、民衆は『職分』を追求していくことが大切であると……」

大塚玄説は医業に多忙をきわめていたのだが、徂徠の研究方法にまで言及した。

「中国の書物を日本語に置き換えて読んでいただけでは、真意を読み解くことはできない。そこで自ら中国語で読破し、中国語を研究することで真理に近づこうとした。この徂徠先生の真摯な態度は、尊敬に値すべきことだと思います」

荒行を重ねてきた修験者らしく、論破することが得意な朝日多宝院は、大塚の意見に潜む問題を指摘した。

「いや、その研究方法には危険性がある。聞くところによると、徂徠先生は議論を持ちかけても、それを避けるところがあつたと聞く。これでは考えが偏る可能性もあり、学問としては、客観性に欠けるのではないだろうか」

再び玄淳が意見を述べた。

「そもそも、新しい儒学である朱子学を否定し、原点回帰を目指すのが古文辞学であるのだが、必ずしも古いものや原文が真理だとは限らない。むしろ、改良を加えていくからこそ

文化や思想も、今日まで発達してきたのではないか」

数多くの書物を持つ平蔵は、一つの逸話を語りはじめた。

「八水随筆によれば、町奉行の大岡忠相（おおおか・ただすけ）が徂徠先生の下で学びたいと申し出たとき、先生はこうおっしゃったそうです。あなたは民衆の立場に立ち、『仁』を重視された立派なお裁きをなされております。しかし、学問を志したことでかえって頭が固くなり、『仁』よりも『智』が先に立ち、杓子定規な、お裁きになってしまふ恐れがあります。また、学問を始めるのに遅すぎるということはありません。人にはそれぞれ学ぶのにふさわしい時機というものがございます。何も慌てることはございません。むしろ、今のお役目をしっかりと果たし、人生経験を踏まれてから学問をはじめた方が、深みも出るというものです……と」

各人が思い思いに、意見を出し合っていたのだが、議論は膠着状態へと陥っていた。じつと意見を聞き、黙して語らぬ赤水。

書物を読む暇がない分、耳学問で必死に追い付こうとしているに違いない。誰もがそう察していた。だが玄淳だけは、ある確信を持ちながら尋ねた。

「赤水、お前はどう思う？」

一呼吸おき、赤水が口を開く。

「はい。皆様のご意見をお聞きしまして、感じたことを率直に申し上げさせて頂きます。多

種多様な物事のとらえ方や考え方を知ることができ、大変勉強になります。しかし、誰もが納得できる完璧な学問など、そう多くないと思います。残念なことに、皆様の議論が終盤になると、徂徠先生思想が正しいか、正しくないかをつきりさせるための感情論に終始していたような気がします。人間は良い面と、悪い面を必ず持ち合わせているように、学問にも学ぶべきものと、そうでないものがあると思うのです。さらには現在の自分の力量や環境によっても、得られる気づきは異なってくると思います。この勉強会はたくさん書物から、効率良く学びを得るために行うものなので、先ずは客観的な事実を積み上げることが、何より重要だと思います。その後、自身の解釈を述べ、最終的に各々が必要とする部分だけを受け入れる。それが最も望ましいと思います」

「学問の一長一短を論じるのではなく、先ずは客観的な目で『型』を知る。それがこの勉強会の目的であると、私は考える。その後（のち）は、各自の力量に応じて『型』を破るもよし、離れるもよし。それが正しい学問の究め方であると思うのだが、いかがかな」

勉強会の目的を再認識できたことで、全員が晴々とした表情となり、議論は再開された。先程までとは打って変わり、全体像を把握することに徹したことで、断片的であった情報がつながり、徂徠の考え方を取捨選択しやすくなった。

そして最後に、自分がどのように結論付けたかを述べ合い、第一回目の勉強会は終わった。

今、全員の胸に去来するもの。それは講師を努めることの有用性であった。

先ずは自らが、書物の内容をしっかりと理解していなければ、正しく伝えることはできない。質問を受けても、答えることすらできない。他人に教えることを前提に書物を読むのと、自分の知識を増やすために読むのでは、大きな違いがあることを知った。

さらに、七人の論法には、それぞれの個性が出ており、物事をわかりやすく伝えるためには、話をどのように展開すべきか。あるいは、身振り、手振りの仕草に至るまで、全てが格好の鍛錬の場となっていたのである。

その後も、毎月のように勉強会は開かれた。

単に知識の幅を広げるだけでなく、各人が歩んできた様々な人生経験が加わることで、知識が智慧へと昇華し、学問の質を高めることにも、大いに役立っていた。

学問は、どうしても独りよがりになりやすいためであるが、気心の知れた七人の忌憚のない意見や考えが、思考の柔軟性を高めてくれたのだ。

また、赤水自身、実際に古文辞学を学んだことで、南溪が徂徠を敵視する理由が分かっただけでなく、たとえ自分の考えと相容れないものであったとしても、必ず何らかの新たな学びにつながる。何よりも、世の中には様々な解釈をする人間がいる。そのことに気づけただけでも、大いに得るものがあつた。

こうして、玄淳の目論みは見事に成功し、七人の知的水準と価値観は、多様性を持ちながら成長を遂げてゆくのであつた。

三 初講義

日々、切磋琢磨する七友。

既に彰考館の総裁となっていた南溪の下で学び、才能を開花させた七人の噂は、村から村へと広がり、いつしか、竹林の七賢になぞらえ、『松岡の七賢人』と呼ばれるようになっていた。

ある時、赤水の手許に一通の手紙が届く。

差出人は、小名浜の舟問屋の若主人、米川玄章（よねかわ・げんしょう）。

学問に興味のある網元や庄屋の子息たちが集い、研学に励んでいるのだが、皆、書物でかじった程度の知識しかなく、次々と沸き起こる疑問に翻弄されている。是非とも赤水の力でこの困頓とした状況を解決して欲しい。そのような内容の手紙であった。

当惑する赤水。とりあえず、玄淳に相談をもちかけた。

「私には、まだ分不相応な話でございますので、断ろうと思うのですが、どのように伝えればよろしいでしょうか」

「断るのなら、何とでも理由はつくだろう。だが、その前に何か一つ。大切なことを忘れてはいやしないか」

押し黙る赤水。

「米川殿の境遇。誰かに似ているとは思わぬか」

（師を持って、書物の解釈もできず、学びたいという純粋な気持ちが打ち砕かれている…）
赤水は、はつと気づく。

「私と同じ境遇です…」

「その通り」

「書物を購入するお金がなく、学ぶことも許されなかった私が、師や友、理解ある家族のお陰で、今は学問を続けることができております」

「数多くの支えがあつてこそ、成就できる。それが学問であり、決して自分一人の力で続けられるものではない。赤水が読んでいる書物の一文字、一文字には、家族の苦勞が詰まっている。決して、そのことを忘れてはならぬぞ」

自分よりも恵まれない環境下で、学ぼうとする者が大勢いること。そして、自分がいかに恵まれた環境にあるのか。それを気づかせてくれた米川たちに、改めて感謝するとともに、同じ学問を志す者として、快く講師を引き受けることにした。

後日。赤水は小名浜の観日亭（かんにちてい）に招かれ、「論語古訓」の講義を行った。

真剣な眼差しで、赤水の一言一言に聞き入る米川たち。

まるで数年前の自分の姿を見ているようでもあり、講義にも自然と力が入る。

やがて講義を終えると、赤水は米川に尋ねた。

「なぜ、私を講師に選んだのですか」

「以前、玄淳先生が観日亭にお立ち寄りになった際、漢詩を賜りました。その詩に深い感銘を受け、是非とも教えを請いたいとお願ひしたところ、赤水先生の名を申されたのです」
「えっ。玄淳先生が……」

相談を持ちかけた時にも、知らぬ素振りをしていた玄淳。

その玄淳が、赤水のことを推挙していたのである。

自らが教える側に立つことで、学問の質を高める。そのことに関しては、既に経験を積むことが出来ていた。しかし、勉強会は知的水準の高い六人を相手にしたものであり、難解な言葉を使っても、理解させることができてしまう。いわば、ぬるま湯の環境でもあったのだ。

ところが、初学者を相手にする場合、本旨を理解させることは格段に難しくなるため、言葉一つ一つに対する重みが、全く異なってくる。それを赤水に経験させるため、あえて価値観の異なる環境に身を置かせ、鍛え上げようと画策していたのだ。

こうして赤水は、三十三歳という遅咲きながらも、六人の師と仲間、新たな門弟によって磨かれ、その才能を伸ばしていったのである。

そして、赤水が世間から認められるようになったことを、我が事のように喜ぶおみな。美しい月が輝く夜になると、いつとはなしに、先に逝ってしまった善次衛門へ語りかける

のであった。

「早いものですね。赤水は、あなたが亡くなった時と同じ歳になりました。近頃じゃ、他人様に学問を教えるまでになったのです。苦労したあの頃には、想像もできませんでした。今、私は本当に幸せですよ……」

四 旅人の死

宝暦元年（一七五二）三月。

観日亭では昨年引き続き、赤水が『春秋左氏伝』について講義を行った。

米川たちは中国の古典を学ぶことに対して、当初、難解すぎるという不安を抱いていた。ところが、講義が進むにつれ、日本の歴史にも登場するような話がいくつも出てきたことで、日本を理解する近道が中国の古典にあることを知り、その奥深さに惹かれていったのである。

一方の赤水。常にわかりやすい講義を心がけ、長時間の講義も難なくこなすなど、師としての資質を着々と開花させていた。

いつものように観日亭を後にした赤水。街道を抜け、自宅へと近づく。見慣れた風景であるはずなのに、妙な違和感……。

何気なく並木の方に目をやると、道端の木陰でうづくまる一人の若い男。急ぎ駆け寄り、声をかけてみる。

「どこか具合でも悪いのですか」

呼びかけに對して、返事はない。男は額から脂汗を流し、うめき声をもらしている。「すぐに戻って参ります。しばしの辛抱ですぞ」

赤水は自宅へ駆け戻り、作男の金次郎と一緒に、その男を家の中へと運び込む。そして、お順に、急ぎ玄淳を呼びに行かせた。

玄淳が到着すると、すぐに触診が始まる。

病巣を探り当てようと、玄淳の指は所々方々を小刻みに動く。

やがて、その手が下腹部を押した瞬間、旅人は顔を大きくゆがめ、吐血した。

「先生、病は重いのでしょうか」

「疝氣（せんき）だな……。吐血しているととなると、もう長くはあるまい」

もはや手の施しようがないと見た玄淳。

旅人の荷を解き、中身を調べてみる。すると、往來手形が出てきた。

「手形によれば、この旅人は近江の日野商人、名は弥助（やすけ）。行き倒れになった時は、近くの寺に葬り、遺品は最寄の outlet に送って欲しい。そう書いてある」
「わかりました。万が一のことも考え、遺言通りに準備は整えておきます」

三日後。看病の甲斐もなく、弥助は息絶えた。
赤水は往來手形の文言通り、手厚く葬ると、荷物の整理をすることにした。

大きな包みを開け、最初に出てきたのは、街道名や宿場町が記された道中案内図。
実際に旅人が使っている地図を手にした赤水。

瞬く間に、ひとつの疑問が頭の中を過ぎる。
（土地勘のある場所には便利だが、初めて訪れる場所では情報が少なすぎる…）

「日記がありましたよ」

荷物の整理を手伝っていたお順が見つけた道中日記。そこには、初めての長旅での苦勞、
村々の風景、珍しい風俗などが書かれてある。

まるで、御伽草子のような内容に、心奪われる二人。

「この日記を読んでいると、弥助さんの人柄が偲ばれるな」

お順は目を潤ませながら、つぶやく。

「故郷で待つ家族にも聞かせてやりたかったでしょうに……」

日記には、地図が当てにならず、道に迷ったこと。険しい山道に時間を取られ、山賊に怯えながら暗い夜道を命がけて踏破したことなども書かれており、旅が常に死と隣り合わせであるという現実を、思い知らされたのである。

（詳しい地図があれば、安心して旅ができる。そうなれば、人や物だけでなく、情報も日本の隅々にまで行き渡り、人々の暮らしの質を高めることもできるはず……）

赤水は強い思いを胸に抱きながら、弥助の最後の様子を詳しく手紙に記すと、遺品と共に出店である水戸の問屋へと送った。

それから数日後。いつものように勉強会を行う七人。

弥助の一件を思い出した平蔵は、赤水に尋ねた。

「そういえば、あの旅人はどうした？」

「弥助さんは、先日、息を引き取られました」

「そうか……。それは残念だったな」

弥助を救うことが出来なかったことを悔やむかのように、うつむいたままの玄淳。その姿を見た赤水。意を決し、気迫に満ちた表情で立ち上がった。

「私は、正確な日本地図を作ろうと思うのです」

地図を作る術など知らぬ素人の赤水が、突然、正確な日本地図を作ると言い出した。だが、あまりにも壮大すぎる計画に、誰も取り合おうとはしない。

「私は人の役に立ちたいと思い、学問を学んでおりますが、どのような形でそれを実現できるのか、ずっと考えあぐねておりました。でも、今回の弥助さんの死に遭遇し、やっとその答えを見つけることができましたのです」

「お前の崇高な思いはわかる。だが、熱意だけで作れるような代物ではないぞ」
呆れ顔の清兵衛に対し、平蔵は赤水の意見を支持した。

「正確な地図を持つことは、旅人の安全性を高めるだけでなく、国防上も必要不可欠なものとなる。無理だと申すのは簡単だが、赤水がこんなに強く主張するくらいなのだから、きっと妙案があるに違いない。是非、聞かせてくれ」

「妙案というほどのものではありませんが、まず道中案内図や諸国の地図を集め、その一枚一枚を検証して、正確な地図を作ります。その後、それらをつなぎ合わせれば、自ずと日本地図が出来上がります」

「だが、二百六十余藩の地図を、どうやって集めるといふのだ。それだけでも大変なのに、検証まで行うとは……。まさか歩いて検証するわけにもいくまい」

「書物を調べたり、旅人や修行僧などに尋ねながら、検証を重ねます」

「書物には不正確なものも多いだろうが、旅人の伝聞となれば、もっとひどいのではないか」
「できるだけ多くの人に尋ね、多方面から検証することで、精度を上げようと思います」

赤水は星の数ほどある地名や山河を地図に記し、それを検証しようというのだ。気の遠くなるような構想に、最初は誰もが耳を疑っていたのだが、赤水の熱意は、徐々に仲間の心を動かしていった。

「実に赤水らしい発想ではないか。赤水の申す通り、我々が学ぶ目的は、人の役に立つためにある。どうだ、ひとつ皆で応援しようではないか」
玄淳の言葉で、七友の心は決まった。

早速、玄淳は南溪に対し、手紙を送り、地図作りへの支援を要請した。

赤水の大望に賛同した南溪。正確な地図作りには天文の知識も必要になるだろうと、水戸藩の天文学者であり、儒学者でもあった小池友賢（こいけ・ゆうけん）を引き合わせてくれた。

小池友賢は、渋川春海（しぶかわ・はるみ）、中根元珪（なかね・げんけい）などの、当代切つての天文学者の門人となり、後に彰考館総裁となる水戸藩第一級の学者であった。

さらに小池亡き後も、弟子の大場景明（おおば・かげあき）に師事し、天文暦学を学び続けた赤水は、時代の先端を行く知識を吸収しながら、地図作りへと活かしていくのである。

五 おみなとの別れ

おみなは、ここ数日間、高熱を出し、臥せていた。

ただ風邪をこじらせただけ。本人もそう思っていたのだが、これまで蓄積された過労もたたり、なかなか病状は良くならない。

玄淳の診たてでは、善次衛門の時と同じ症状であり、憔悴しきった顔からすると、手の施しようがないとのことであった。

だが、赤水はあきらめることなく、玄淳から教わった通りに薬湯を作ると、おみなが臥せる部屋へと運び込む。

「母上、風邪に効く薬を持って参りましたよ」

「後で飲むから、そこに置いていて…おくれ」

「だめですよ。今、お飲みください」

「どうも私は薬湯が苦手ですね…」

「私が煎じたものですから、大丈夫ですよ。さあ、これを飲んで、早く治してください」
赤水の優しい眼差しに背中を押されるように、ゆっくりと飲み干す。

「よかった。これで食欲も出てくるでしょう」

おみなは微笑みながら、軽くうなずくと、夕べ見た夢の話をはじめめる。

「昨日、夢の中で、善次衛門さんが笑ってた。隣には女性がいて、その人も笑ってた。橋の向こう側で幾度も幾度も、ご苦労さんって言うから、私は答えたんだ。赤水は立派に家業を継ぎ、孫にも恵まれ、今では松岡の七賢人と呼ばれるほどになりましたって。これで善次衛門さんとの約束も果たせましたので、そちらに行ってもいいですかって尋ねてみたら、微笑ンでた。お前の本当のお母さんを見たことはないが、きつとあの方がそうなんだろうね。もう私は、いつでも冥土に旅立つことができそうだよ」

「父は、風邪が治るのを知らせに来てくれたのです。亡くなつた母も、感謝の言葉を申し上げたかったのでしょう……。それより、私の夢を聞いて下さいますか」

「お前は、どんな夢を見たんだい」

「その夢ではなく、私がこれからやろうとしていることですよ」

「学問以外にも、まだやりたいことがあるのかい」

「実は、日本の地図を作りはじめたのです」

「日本の…地図…?」

「赤浜村を越え、水戸の先、江戸の先、そのはるか先までも、畳くらいの大きさに縮めてしまふのです。この地図があれば、どこへでも迷わずに行けます」

「へえ。日本をそんなに小さくしてしまうのかい。私には想像もつかないことだね。でも、それが人様のお役に立つことなら、頑張っておやりなさい。地図ができれば、亡くなつた弥助さんも、きつと喜ぶよ。できることなら私も…。ひと目見てみたいね」

「もちろんです。どうか、それまで長生きしてください」

「私のことより、お前の身体の方が心配だよ。健康でなければ、立派な地図だって作れやしない。病を患って地図が作れなかつたりしたら、それこそ、お前の両親や弥助さんに、何とお詫びをしてよいやら。いいかい。あまり根を詰めすぎてはいけないよ」

黙ってうなづく赤水。頬を伝う涙。

「何を泣いているのだい。おかしな子だね……。人様の前で、立派に講義をする先生とは思えない、ひどい顔だよ。もつとしっかりとかりなさい。私はもう、お前を守ってやることができなんだよ。どうか笑顔で送っておくれ」

赤水は固く手を握りながら、これが、おみなの最後の言葉と、心に刻みつける。

「母上……。もうお休みください。体に障るといけませんから、明日、お話ししましょう」

咳き込むおみなの背中をさすりながら、身体をそつと横に倒し、しわくちやの手を両手で優しく包み込んだ。

しばらくして、お順が部屋をのぞいてみると、おみなの側で、うたた寝をする赤水。

本当の親子のような姿に、遠い昔の日の光景を見ているような気分になるのであった。

宝暦元年（一七五二）九月二十七日。

おみなは家族に見守られながら、眠るように息を引き取った。

二十七歳で長久保家に嫁いだから、四半世紀が過ぎ、おみなは五十二歳、赤水は三十四歳

となっていた。

細く小さな、おみなの身体に触れながら、心の中で感謝の言葉を唱え続ける赤水。

（今の私があるのも、学問を続けることができるのも、あなたのお陰です。強く生きることがを教えてくれたのも、あなたでした。本当にありがとうございます。この大恩は一生忘れません。これからは、どうか心置きなく、ゆっくりとお眠り下さい…）

唇に紅をさし、化粧を終えた穏やかな、おみなの顔。

何かをやり遂げたような、清々しささえ感じられた。

しかし、おみなの人生を考えた時、どうしようもないほどの矛盾が頭の中を渦巻く。

（この人は、いったい何のために生まれてきたのだろうか。苦勞するためだけに生まれてきたのだろうか。私以上に苦勞を背負いながら、愚痴ひとつ漏らすこともなく、長久保家に捧げた人生。もしかすると、私を支えるために生まれてきた。いや、一人の人間を支えるためだけの人生など、存在してよいはずがない…）

その一方で、自分の才能を活かし、育ててくれたことへの感謝の念。

目を閉じ、浮んでくるのは、献身的に働く姿。

おみなは、学問こそ教えてはくれなかったが、もっと大切なことを教えてくれた。信念を貫くことの大切さ。耐えることの美しさ。人間の本当の強さ。

言葉ではなく、自らの生き様で教えてくれた。

書物からは決して学ぶことのできない、大きな英知。

まさに、おみなの人生そのものが、赤水にとつては偉大な師であったのだ。

おみなの手を握り、赤水は最後の別れを告げた。

(母上のお陰で、私は一人になっても強く生きてゆけそうです。ありがとうございます…)

六 誉れ

宝暦二年（一七五二）の春。

松岡郷の郡代 大場弥右衛門（おおは・やえもん）は、平蔵の屋敷で山海の珍味に舌鼓を打っていた。郡内の視察に訪れた郡奉行や郡代は、必ず平蔵宅に宿泊する慣例となっており、大場も平蔵の歓待を受けていたのである。

酒もすすみ、機嫌の良くなった大場は、平蔵を近くに呼び寄せると、軽く耳打ちをした。

「七賢人の噂は郡内にとどまらず、藩の内外にまで広まっておるのう」

「我らは浅学非才の身。その器にあらざと承知しております」

「其（そ）の方らの詩は卓越していると聞く。近いうちに手代を遣わすゆえ、七人が一篇ず

つ詩を詠み、それを水戸まで届けよ」

大場の次男 大次郎は、大変詩を好んでいた。そのため、以前から七人の詩を息子の手本にしたいと考えていた大場。是が非でも、この機会に手に入れようとしていたのだ。

「我らには分不相応な御声掛り。拝辞いたしとう存じます」

「其の方らの詩は大次郎が参考にするだけではないぞ。来春、江戸表へ上った際には、藩公のご高覧に供するつもりだ」

「藩公のご高覧とは、甚だ恐れ多いことにござります。何卒、お許しを…」

「七人に詩作を申し付ける。よいな。これは我が命（めい）じゃぞ」

もはや拒むことができぬと察した平蔵。大場の下命を拝することにした。

翌日。平蔵は大場の命を重々院に知らせた。そこから、玄説、玄淳、赤水の順に詩作の件が伝わり、最後は赤水から清兵衛と多宝院に伝えられた。

七人は急ぎ、「郡守行春」と題する詩を詠むと、大場へ献上され、宝暦三年（一七五三）四月には五代水戸藩主 徳川宗翰（とくがわ・むねもと）の上覧に供されたのである。

五月八日。重々院と多宝院は寺社奉行に召し出されていた。一方、玄淳・平蔵・赤水・清兵衛・玄説の五人は郡奉行 小野崎佐介（おのぎさき・さすけ）に召し出されており、到着するやいなや、奉行所の座敷へと上げられた。

そして、羽織袴姿の小野崎が姿を現すと、賞詞を丁寧に読み始めたのである。

「下手綱村郷医、玄淳。右の者は常々学問に精進しており、高い評判を得ている。医者が学問に勤しむのは当然であるが、その言行や心がけが大変勝れている。よって、褒美として御金（ごきん）を与える。今後とも医学と学問に励むよう、申し渡す」

「恐悦至極に存知奉ります」

さらに、一人ずつ賞詞が読み上げられ、最後に赤水の番が巡ってきた。

「赤浜村、赤水。右の者は常々学問に精進しており、高い評判を得ている。百姓でありながら、学問に勤しむその心がけは大変立派である。よって、褒美として御金を与える。今後とも家業と学問に励み、百姓たちの手本となるよう、申し渡す」

「光栄の至りに存じます」

「一同、大儀であった」

賞詞と金子を賜った七人は、深々と頭を垂れながらお礼を申し上げると、夢心地のまま奉行所を後にし、村へと戻って行ったのであった。

長い緊張感から解放され、次第に堅い表情も笑顔へと変わり、童のように目を輝かせながら、戯れながら、玄淳の家を目指す。

「七賢人の御成り〜」

七人の到着をはやし立てる村人の波をかきわけ、照れくさそうに玄淳たちが座敷へと上が

れば、すぐに祝いの宴がはじまる。

杯には次々と酒が注がれ、誰もがハレのひとときを精一杯、楽しみ、喜びを分かち合う。

やがて夜も更け、村人が一人、また一人と、千鳥足で去って行く。

気づけば、いつもの七人だけが残った。

酔い醒ましにと縁側に並んで座り、夜風に当たれば、様々な出来事が思い出される。

「平蔵が揃えてくれた書物を学ぶようになって、はや十二年……。長いようで、あつという間の十二年であつたなあ」

「もう、そんなに過ぎてしまったか」

「一生という時間は、学問を志す我々にとって、あまりにも短すぎる」

「そうだな」

「だが、我らは果報者じゃ。七人の仲間がいたからこそ、ここまでこれたのだ」

「七友の誰か一人でも欠けていれば、この誉れにあずかることもできなかつた」

「我ら七人は、あの北斗七星のようなものですね」

北の空に浮かぶ星々を眺めながら、同じ時代に生まれ、同じ時に出会い、互いに学びあえる奇跡を噛み締めながら、七人は空が白むまで語り合うのであつた。

そして、この一件により、松岡七賢人の名はさらに広まり、学問を尊ぶ水戸藩の気風を示す美談として、多くの村々で語られるようになったのである。

七 地図作りを支える人々

日本地図作成という大仕事を思い立った赤水。

各地の地図を集め、それらをつなぎ合わせるという構想は固まっていたものの、肝心の地図を手に入れる術はなく、一人思い悩む日々を重ねていた。

今日も腕組みをしながら部屋の中を歩き回り、思案にくれていると、平蔵がひよいと姿を現した。

「今日は、お前にいい物を持ってきたぞ」

「何か珍しい物でも？」

「いいから風呂敷をあけてみる。見て驚くなよ」

うっすらと笑みを浮かべる平蔵。

「あっ…」

風呂敷の中には、三枚の地図。

「どうやって、手に入れたのですか」

「昨日、尋ねてきた三条の金物商人に、道中案内図のことを尋ねてみたら、これを譲ってくれたんだ」

急いで、三枚の地図をつなげてみる。

越州から常陸までの道が繋がった。所々、文字がかすれて見えない部分もあるのだが、

これで地図作りの第一歩を踏み出せる。

赤水は平蔵の手を強く握り締め、何度も礼を述べた。

「ちと手が痛いぞ…。赤水」

早速、手に入れた地図を検証するため、紀行文などの書物で調べ始める。

ところが、検証に役立つような記述は少なく、作業も遅々として進まない。

気乗りがしないまま、家の前を通る旅人に声をかけてみても、いぶかしがられるだけ。

やっと話が聞けるようになったかと思えば、今度は必要とする情報が集まらない。

再び黙考の日々を送っていると、突然、一人の商人がやって来た。

そして、地図を広げるなり、地名や道のりを一方的にまくしたて、赤水の目を白黒させる。

この商人は、水戸藩屈指の豪農、柴田家と取引ができるという噂を聞きつけ、尋ねてきたのだが、その噂の出所は、何を隠そう、平蔵本人であった。

赤水は改めて、平蔵の温かい心配りに感謝しながら、これまで溜め込んだ歯がゆさを一気に解消すべく、検証作業の手を早めていったのである。

数日後。今日もまた一人、商人が訪ねて来た。

「あなた様が、赤水先生ですか」

「はい。そうですが……」

「以前、手前どもの弥助が、大変、お世話になりながら、お礼に伺うこともできず、本当に申し訳ございませんでした」

深々とお辞儀をするこの男。弥助が奉公人として勤めていた、山中家の番頭、清衛門（せいゑもん）であった。

「そうでしたか……。でも、私は庄屋役として、当然のことをしたままです」

赤水は、とても謙虚な語り口であり、受け取った手紙の文面から、清衛門が想像していた通りの雰囲気であった。

「ところで、先生は地図をお作りになっているそうですね」

「よく、ご存知で」

「本日は、このようなものを持って参ったのですが、お役に立ちますかどうか」

清衛門が差し出した地図。それは『日本分形図』と『日本海山潮陸図（にはんかいさんちよくりくず）』であった。日本の形が、いびつではあるものの、全体像のわかる貴重な資料であり、城、街道、航路、寺社、名所旧跡なども細かく記されていた。

「先代が大坂で手に入れたものですから、ずいぶんと傷んでおりますが……」

「貴重な地図を手に入れるだけでも、大変有り難い。何とお礼を申し上げてよいやら」

「それにしても、日本の地図を作るとは。実に壮大な計画ですな」

「途方もない夢を前に、心が揺らぐこともあります。そのような時、決まって弥助さんが夢

に現れて、私を励ましてくれるのです」

「そう言つて頂けると、弥助も、私共も、心が浮かばれます」

「清衛門さん。わがままついでに、しばらく我が家にご逗留頂けないでしょうか。諸国の地理について、教えて頂きたいのです」

「お安い御用です。私でよろしければ、喜んでお力になりましょう」

「それは有り難い。早速、場所を移しましょう。さあ、こちらへどうぞ」

しばらく薄暗い廊下を進み、一番奥まったところにある部屋の障子戸をそつと開ける。

「おお…」

壁一面に貼り出された地図に、目を丸くする清衛門。

「これが、今取り掛かっている日本地図です。つぎはぎだらけですが…」

清衛門は、ゆつくりと地図に近づき、目を凝らす。

そこには細かな文字で、びっしりと地名や山河が書き込まれていた。

「旅をしたこともないのに、ここまで仕上げられたのですか？」

「ええ」

「地図のあちらこちらに和紙が貼られておりますが、これは？」

「修正をした跡です。旅人から話を聞き、地図に間違いを見つけると、和紙を貼り、新しい情報に書き換える。暇を見つけては、このようなことを繰り返しております。気づけば、つぎはぎだらけの地図になってしまいました」

緻密な作業の痕跡。気の遠くなるような忍耐力。

苦笑しながら、事も無げに地図作りの様子を語る赤水に、清衛門は目を見張った。

「狂気の沙汰としか思えませんよ……。どんなにお金を積まれても、私なら断りますね」

「それは困りましたな」

目を合わせ、大きな声で笑いあうと、二人の会話は旧友のように弾み出す。

「旅人の中には、記憶のあいまいな方もいらっしやるのでは？」

「地名以上に苦心しているのが、距離の検証です。実際の距離と地図の尺度を合わせれば、旅をするにも便利ですし、日本の形も自ずと正確になると考えたのですが、距離に対する感覚は十人十色で、正確な距離を定めるのに難儀しております」

清衛門が持参した地図。日本の形が不正確なのは、尺度を定めずに縮小している点にあることを、赤水はひと目で見抜いていた。しかし、それらを伝聞によって正すためには、天文学的な量の検証作業が必要となる。

「先生は同じ作業を繰り返すことが、煩わしいとは思いませんか？」

「幸いにも私は百姓ですから、まったく苦になりません」

へりくだって、穏やかな表情を見せる赤水。だが清衛門は、地図を見つめる赤水の瞳の奥に、燃えたぎるような深い熱情を感じ取っていたのである。

「そういえば……。幕府が各藩の国絵図を集め、赤水先生と同じような方法で、日本地図を作ったという話を耳にしたことがあります」

「ほう。そのようなものがあるのですか」

「ただ、門外不出の地図ですので、目にすることは難しいでしょうな……」

既に幕府は、正保日本図（一六四四年）、元禄日本図（一七〇二年）、享保日本図（一七三三年）などを作っていたのだが、勿論、今の赤水には目にするすることも、手にすることもできない。

しかし、伝聞であったとしても、多くの人々の情報を結集すれば、幕府の地図にも劣らない精密な地図になるという信念。そして、庶民の手に地図を行き渡らせるという使命感が、赤水を困難な作業へと立ち向かわせていたのである。

「清衛門さん、この辺りの情報が欠けているのですが。ご存知ですか？」

「ええ。ここが由良。ここは内宮。ここが天津。近くには三岳山がありますよ」

赤水が尋ねると、その場所を見ているかのように、清衛門は即座に答える。

一枚の地図が、二人の心の中にいくつもの風景を浮かび上がらせ、二次元の世界を無限の空間へと広げる。そして、夜が更けるまで、二人は地図の中を鳥のように、どこまでも自由に飛び続けるのであった。

翌日、清衛門が赤水宅を後にしようとした時、一人の旅人が近づいてきた。

その男は、ゆっくりと笠を取り、柔らかな物腰で道を尋ねる。

「介川（すけがわ）村に行きたいのですが、どの道を行けばよろしいでしょうか」

「あの辻を右に曲がり、松並木に沿って進めば、昼過ぎには到着できますよ」

赤水は簡潔に説明すると、旅人は深々と頭を下げ、足早に立ち去ったのだが、すぐさま別の旅人が、また二人の前に近づいてきた。

「湯本はどちらの道を行けばよいのか」

この男は笠も取らず、無礼な物言いで尋ねてきたので、隣にいた清衛門は眉をひそめた。ところが赤水は、男を辻まで案内し、事細かに道順を説明してやると、姿が小さくなるまで見送るのであった。

やがて小走りに戻ってきた赤水に、清衛門が問い質す。

「あのような横柄な男に、そこまで親切にする必要がありますか」
息を切らしながら答える赤水。

「礼ある者は、簡単な説明でも理解できましようが、礼をわきまえない者には、幼な子と話すように丹念に教えてやらねば、道に迷ってしまうからです」

時代の先端をゆく学問を究め、精密な地図作りに没頭する赤水を見て、人の機微には疎い人物であると思ひ込んでいたのだが、改めて上辺だけで人を見てはいけないと自省する清衛門。同時に赤水の人間性に感服しつつ、地図が世の人々の役に立つ時代が必ず来るといふ思いを抱きながら、赤浜を後にするのであった。

赤水はその後も、旅人に食事や休憩場所を提供しながら、地名、距離、地形の高低など聞

き出し、修正作業を重ねていた。

さらに、「一寸十里」という縮尺（地図上の3cmは40kmに相当）を採用し、地図上に正確な距離を再現すべく、試行錯誤を繰り返していたのだが、かえってそれが編集作業を複雑なものにしていた。

まさに、一進一退の日々。決して地図作りに恵まれているとは言えない環境。

それでも妥協することなく、高い目標に向かって前進する赤水。

地図作りは、大地を切り開き、田畑を耕すことにも似ていた。

しかし、最大の違いは、疲労感が達成感へと変わっていくことであり、その達成感が苦難を跳ね飛ばす源泉となっていることであった。

片や、娯楽の少ない家族にとつて、旅人から聞く話は御伽草子のようにでもあり、大きな楽しみの一つとなっていた。美しい風景や不思議な風習。時には、真顔で鬼や化け物の話をする者もおり、お順や子供たちが怖がる様子は、赤水にとつて地図作りの箸休めとなっていた。まるで大きな力にでも導かれるように、地図が取り成す不思議な縁。

街道のようにつながり、地図を作り上げてゆく。

もし、弥助が赤水の前で倒れていなければ、清衛門に出会うこともなく、貴重な地図を手に入れることもできなかった。

おみな、玄淳、平蔵……。自分を支えてくれる人々に感謝をしながら、地図作りに取り

かかる。いつしかそれが、密やかな作法となっていたのである。

長山家（お繁の実家）からの紹介により、赤水宅へ立ち寄る旅人や学僧なども増え出し、順調に作業を進めているという噂を聞きつけた玄淳。

久しぶりに赤水宅を訪ねてみた。

ところが地図を見るなり、眉間にしわを寄せ、黙り込む。

「……。地図のあちらこちらに線が引かれておるが、これは何を意味しているのだ？」

「東西南北の方角を示す線です。磁針器と地図で現在の位置が分かれば、正確に目的地へと、たどり着くことができるのです。南蛮人は、このようにして大海原を渡り、日本へとやってくるそうです」

「南蛮では、航海技術も医学も発達しておると聞く。これからは中国だけでなく、もっと南蛮の学問にも目を向けなくてはならぬなあ」

「国のわけ隔てなく、役立つものは、積極的に取り入れるべきだと思います。ただ、どれだけ南蛮の学問を取り入れようと、儒学は我々にとつて、北極星であり続けるでしょう」

「北極星のように、ぶれることのない信念がなければ、最新の学問や技術を取り入れても、かえって害の方が多くなってしまうものだ」

「世間では、様々な学派が優劣を争っていますが、私には滑稽に思えてなりません」

「北極星の如く、清らかな光を放ち続けるためにも、自らを律し、不断の努力を怠ってはならぬということじゃ」

赤浜村という片田舎では、正しい情報や最新の情報を手に入れることが難しい。

それ故、より多くの師や書物から学び続け、真理を見通す眼を持つ必要があった。

また、現状に満足すれば、必ず眼は曇ってしまうと信じていた七人だからこそ、切磋琢磨し合うことを、片時も忘れなかったのである。

八 検証の旅

地図作成から八年。赤水は四十三歳になろうとしていた。

農作業の合間を利用しての地図作りは、亀の歩みの如く、一向に前進しないもどかしさとの闘いでもあった。

だが、地図は着実に細かな文字で埋まっていく。

その様を嬉しそうに眺める平蔵。

「奥州（東北）方面は、かなり出来上がってきたな」

「奥州を行き来する商人、修行僧などが多かったですから……」
何かを打ち明けようとして、口ごもる赤水。

その心の内をすぐに察した平蔵。そつと、赤水の肩に手をかける。

「水臭いぞ。俺たちは兄弟も同然じゃないか。遠慮せず申してみろ」

「実は、太重（たじゅう）と旅に出たいのです」

太重は平蔵の息子であり、赤水の弟子でもあった。

「いったい、どこへ行くというのだ？」

「この地図で奥州を目指し、本当に赤浜村まで戻ることができるのか、それを確かめたいのです。勿論、名所旧跡を訪ねることも、目的の一つではありますが、旅人の命を預かる大切な地図。先ずは我が身をもって確かめねばなりません」

かねてより赤水は、太重と共に旅費を蓄え、東奥地方（福島く宮城）の名所旧跡を巡る機会をうかがっていたのである。

「太重と赤水だけで行かせるのは、不安じゃのう……」

「心配には及びません。地図の仕上り具合には自信がありますし、馬で行けば、ひと月の間にも戻れるでしょう」

「……。少し、考えさせてくれ」

平蔵はそう言い残すと、堅い表情のまま、赤水宅を後にした。

宝曆十年（一七六〇）七月五日。

まだ夜も明けきらぬ早朝。八年間の苦勞の結果が、ついに試される時が来た。

海岸沿いに仙台を目指し、「奥の細道」の足跡にならない、新潟から郡山を経由して、赤浜へと戻る旅が、今まさに始まろうとしている。

お順、長男の藤八郎（十九歳）、次男の四郎次（十七歳）、三男の文衛門（十五歳）、長女のたけ（五歳）。そして、隣人たちと共に、矢指村の塩釜神社で旅の安全を祈願。

赤水はさっそうと馬にまたがり、長男に向かって声をかける。

「藤八郎、私が留守の間、家のことは頼んだぞ」

「父上。道中、何卒ご無事で…」

赤水は軽く手を上げ、軽快に馬を進めた。

そして、しばらく経ってから振り返ってみると、鳥居の前には名残を惜しんで見送る人々。大きく手を振るその姿に、後ろ髪を引かれる思いで奥州へと旅立つ。

やがて磯原を過ぎれば、紅色の霞をまとった天妃山（てんびさん）が見えてくる。

これまでの心細さを、どこかへと吹き飛ばしてしまうほどの美しさ。これから目の前に繰り広げられるであろう、数々の壮美な風景を想像すると、次第に心も軽くなっていく。

すつかり陽も高くなつた頃、赤水は神岡村へ入り、おみなの実家である佐藤家を訪ねた。おみなが亡くなつて、間もなく九年。主人は赤水を暖かく迎え入れると、酒を振舞いながら、しばし昔話に花を咲かせる。

ちようど話題にも事欠いた時、遠くの方から、にぎやかな声と共に六人の若者が姿を現した。赤水と太重だけでは心もとないと思つた平蔵が、いとこの重蔵（じゆうぞう）に加え、屈強な茂重（もじゅう）、半兵衛（はんべえ）、善兵衛（ぜんべえ）、幸兵衛（こうべえ）の四人用心棒として、同行させることにしたのだ。

赤水は、先頭を歩く太重をにらみつけると、大声で叫んだ。

「小僧ども、私を待たせるとは何事だ」

戯言だと気づいた太重。腕組みをしながら、言葉返す。

「それは、大変失礼致しました。ところで、お尋ね致しますが、我々はいつの間に赤水先生の家来となつたのでしょうか？」

しらじらしい師弟の会話に、その場にいた誰もが大笑いをし、旅の門出に花を添えた。

総勢七人となつた一行。神岡を後にすると、馬を並べながら勿来の関（なこそせき）へと近づく。緩やかに見えた坂道は思つたより勾配がきつく、山を貫く切通しは、まるで洞穴のよう。頭上の隙間は一尺ほどしかない。

互いに声を掛けながら、今にも崩れ落ちそうな岩壁に注意を払い、慎重に馬を進めている

と、突然、馬を叱る赤水の聲が、辺り一面に響き渡った。

「命を大切にするなら、岩壁に近づくでない。躊躇せず進め！」

「どうやら先生の有り難い御言葉も、馬には通じないようですね」

大声で笑いあう太重たち。

「そんなに大声を出すでない。岩壁が崩れてきたらどうする」

「そう言う先生の声こそ、一番大きいですよ」

この一言に、赤水も思わず大声で笑ってしまった。

されど、暗い切通しの中を進んで行くには、笑い合いながら、震える心を奮い立たせることも必要なのである。

やっとの思いで切通しを抜けると、眼前には曲がりくねった桜並木。

清々しい潮風と共に、明るく七人を出迎えた。

関田浦を経て、昼過ぎには大島村へと入り、一行は木陰で弁当を食べる。

赤浜村からは、六里ほど進んだことになるのだが、予定よりも、やや遅れていた。

先を急ぐべく、木陰から足を一步踏み出してみると、真夏の日差しが、炎のように肌を刺してくる。思わず後ずさりする赤水。炎天下の中、馬を進めたのでは体力を奪われてしまう
と判断。しばらく涼むことにした。

その後、鮫川を渡り、植田宿を過ぎた所で、酒屋を見つけた赤水たち。吸い込まれるように店の中へと入り、水を一気に飲み干すと、隣の客が声をかけてきた。

「この家の主人はとても馬が好きで、良い馬を何匹も飼っている。土産話に見えていけ」
客人の言葉を信じ、太重たちは馬小屋へと押しかけて行く。

ところが、すぐに大騒ぎをしながら戻ってきてしまった。

「あれは、名馬なんかじゃありませんよ。馬に近づいたら、ハエやアブが雨のように降ってきて、振り払うだけでも大変でした」

笑い転げる客を横目に、赤水は血気盛んな六人を諭した。

「この挑発のつてはならぬ。喧嘩にでもなつたら、どのような輩が出てくるかわからん。今回はハエだけで済んだが、旅先で他人の話を真に受けると、危険な目に遭うのだぞ」

それから一行は、湯本に到着。時刻は午後四時を過ぎていたので、本日の宿となる岩城平（いわきたいら）を目指し、足早に歩いていると、平城（たいらじょう）が近づいてくる。

黄昏色に輝く天守閣。その美しい姿を目に焼き付けながら、夕暮れの道をさらに急いだ。

はしやぎすぎ、疲れきっていた若者たちは宿に到着すると、慌しく風呂と食事を済ませ、一斉に眠ってしまった。

ところが、重蔵だけは、赤水の作業を不思議そうに眺めている。

「時折、馬を止め、磁針器を見つめていたのは、地図を検証するためだったのですか。地図作りとは、ずいぶん骨の折れる仕事ですね…」

「誤った地図が正しい姿に変わってゆくのは、とても清々しく、楽しいものだよ」

しばらく興味深げに、赤水の手の動きを見つめていた重蔵も、首をこくりとさせながら、いつの間にか寝息を立てはじめた。赤水はそっと布団をかけ、再び地図に向かうと、部屋の中には筆音だけが、静かに響くのであった。

七月六日。早朝に出発。

昼に久の浜を過ぎ、そのまま広野へ馬を進めていると、眼前には水平線のように続く砂浜。ここは長浜と呼ばれ、渚が十五里も続く。

その雄大な景色を見て、太重が大声で叫ぶ。

「——先生、私と重蔵の三人で競争しませんか——」

「——それは面白い。受けて立とう！——」

赤水が手を振り上げ、その合図で一斉に馬を走らせると、水しぶきを全身で受けながら、海岸線を疾風の如く駆け抜け、風と一体になる。

太重が頭ひとつ抜け出したかと思うと、重蔵が馬をおもいつきり叩き、抜き去る。

一進一退の三人ではあったが、最初に渚を走り終えたのは、赤水の馬。

すぐ後を走っていた太重が、悔しそうに声を張り上げる。

「——先生の馬に乗っていたら、私が勝ちましたよ——」

「——何を申す。わしの手綱さばきが良かったからだ——」

馬を全速力で走らせ、しばし真夏の日差しを忘れた赤水たち。木戸宿で馬を下り、徒歩で次の宿場を目指そうとした途端、にわかには黒い雲が広がり、雨が降り出してきた。

「先生、雨で足場が悪くなっておりますので、雨宿りをしましょう」

「構わぬ。歩いて参ろう。炎天下の中を進むことを考えれば、肉体的な負担は少ない」

雨の中、街道を歩き続けた赤水たちは、山道へとさしかかる。

ごつごつとした岩の上には、枝や幹が曲がりくねった松。どつしりと根を張り、葉を青々とさせている。太重は思わず立ち止まり、見事な枝ぶりを見上げる。

「このような場所で、見事な松にお目にかかれるとは……」

「荒地に自生する木には、美しいものが多い。人間も逆境によつて才能が磨かれるという点では、同じだな」

人生経験が凝縮された赤水の言葉に、誰もが共感した。

そして、再び松を見上げれば、すっかり雨もあがり、東の空には虹がかかっていた。

一行は富岡宿に到着。宿の風呂にどっぷりとつかり、一日の疲れを癒す。

宿の主人の名は、文二（ぶんじ）。歳の頃は三十位に見える。

赤水たちが水戸領内から来たことを知ると、文二は魚をさばく手を止めた。

「豪農で学問を好み、たくさんの書物を持つている木皿の柴田。博学で漢詩作りの名人、赤浜の長久保など、水戸藩には七人の賢人がいらつしやるそうですな。私の住む奥州五十四郡には、そのような者はおりません。光圀公以来、水戸藩では学問が盛んで、子供や召し使いまで文字を習っているとお聞きしますが、あなた方は木皿や赤浜という場所をご存知ですか？」

用心棒役の半兵衛が答える。

「地名くらいは聞いたことがあるが、私たちは木皿や赤浜から随分と離れた場所に住んでいるので、そのような人は知りませぬなあ」

「それはもったいない。せつかく水戸藩に住んでいるのだから、機会があれば、一度お目にかかった方がいいですよ」

今、目の前には赤水本人と平蔵の息子がいる。だが、そのようなことを知る由もない文二は、自慢げに語り続ける。その姿を見て、笑いをこらえるのに必死な太重たち。

赤水も悪ふざけが過ぎたと思っただが、旅先での無用な揉め事を避けるためにも、軽々しく故郷の自慢話をしない。それが、この当時の旅人の心得だったのである。

「噂とは誠に恐ろしいものだ。これほど遠くにまで、我々の名前が広まっているとは…。いったい誰の仕業かのう」

赤水が小声でささやくと、半兵衛たちは神妙な顔つきへと変わり、黙り込む。

そして、食事を終えると、皆、早々に床へと就いてしまった。部屋の外からは、激しくなった雨音だけが聞こえる。

七月七日。

昨晩の雨も上がり、一足先に宿を出た太重は、次の長塚宿で馱馬を雇い、赤水たちの到着を待っていた。

「先生、お待ち致しておりました。ここからは馬にお乗り下さい」

「心配には及ばぬ」

「でも、あまり無理をなさらぬ方が……」

「いや。私は歩いて行く」

太重は仕方なく馬に乗ったのだが、この馬は言うことをきかず、一向に進もうとしない。鞭で何度も叩き、ようやく動き出した頃には、馬上の太重も汗まみれとなっていた。

やっと順調に馬が歩き出したかと思えば、今度は心地良い揺れに、居眠りをはじめた。

そして、馬から何度も落ちそうになる太重の姿を見て、赤水は笑いながら言った。

「やせ我慢をして、馬に乗らなかつたわけではない。一目見て、ダメな馬だとわかつたから、乗らなかつたのだ」

その後、原町宿を経て、仙台藩の国境である「駒峯の関所」を過ぎ、七月十日には仙台北城

下へと入った。

一行は恋路山の茶店で休憩を取ると、愛宕山の頂上へと登り、街を見下ろした。初めて見る仙台の街の大きさに、誰もが固唾を呑む。

赤水の磁針器の先には、緑の木々に囲まれた街並み。幾万もの家々から、かまどの煙がそこかしこと立ち上っており、大都市に息づく人々の生命力で溢れかえっていた。

さらに山を下り、瑞鳳寺（ずいほうじ）を訪れ、伊達政宗の霊を祀る祠（ほこら）を拝む。日光東照宮を彷彿とさせる荘厳さ。これを見ただけでも、仙台藩の財力の豊かさ、大國ぶりが伝わってくる。

次に瑞鳳寺から武家屋敷を抜け、芭蕉大路へ入ると、先程までの静寂さは一変。たくさんの人々が行き交い、活気に満ちた店々が並ぶ。まさに江戸の街のような賑わいである。今日の宿は、国分街にある小幡屋。

ひとまず宿の風呂に入り、涼んだ後、再び城下町の散策へと出かけることにした。

大崎八幡宮、伊達家の氏神である亀岡八幡宮を参詣。

その帰り、近道を行こうとする赤水に、太重がそつと耳打ちをする。

「先生、他国の者が城門前を通ることは、禁じられております。道を引き返しましょう」「案ずるな。地元の民を装って、抜ければよいのだ」

太重の心配をよそに、武家屋敷の前を堂々と進んで行く赤水。

慌てて追いかける六人は、他国の者と気づかれぬよう、内心びくびくしながら歩いたのだが、番人に呼び止められることもなく、無事、通り抜けることができた。

気を良くした赤水たち。

軽快な足取りで、今度は坂道を登りはじめたのだが、勾配はすぐにきつくなり、脚は鉛のように重くなる。

息を切らしながら、ふと上を見上げると、眼前には大きな城。

「青葉城……」

その雄姿に感嘆の声が上がる。

「南北をいくつもの山が守り、深い谷を水が流れる天然の要害。これほど堅牢な城では、万人が攻め入っても落すことはできません」

断崖絶壁の上に立つ城は、岩壁を削ったような鋭い石垣の上であり、下から仰ぎ見れば、難攻不落の城であることがよくわかる。何人たりとも寄せ付けぬ青葉城。その力を誇示するかのように、蟬の声は大きく、深く響き渡るのであった。

十一日は雨。宮城野を経て、塩釜神社を参拝。

町を散策していると、赤水は小さな祠の傍らにある古釜を見つけた。

足を止め、不思議そうに眺めていると、一人の老人が声をかけてきた。

「昔、この釜で神様が塩を煮たそうじゃ。釜の中の水は早魃（かんばつ）になっても涸れることがなく、眼病にも効くということで、皆、眼を洗っていかれる」

「眼が良い人は、その効果をどうやって試せばいいのでしょうか？」
赤水が尋ねると、老人は苦笑しながら、立ち去ってしまった。

「先生、眼病予防になるかどうか、試されてみてはいかがですか？」

「それは面白い。では洗ってみるか」

太重たちも一緒になって眼を洗い、祠に手を合わせ、先を急いだ。

寺崎の港に到着。舟を雇い、一路松島を目指す。

舟頭が竿を押し出すと、櫂（かい）が青い波をつむぎ出し、舟はゆっくりと進みはじめる。左右には緑の山々。弓なりに曲がった海岸線。

千賀の浦（塩釜湾）の景色は、まさに大河である。

「左に見える屏風のように大きいのが籬（まがき）島、右は裸島、小さい落帽のように見えるのが帽子島、甲（かぶと）、冑（よろい）、伊勢、小町、布袋、弁天、毘沙門、大黒、夷（えびす）……」

舟頭が指差しながら、島々の名前を教えてくれる。それを聞いた赤水が、太重にささやく。

「島の形を、そのまま名前にしてしまうと、優雅さに欠けてしまうな」

「私も同感です。もう少し趣のある名前が、他にもありませんでしょうか」

やがて大塚島に向け、舟頭が大きく舵をきると、いつべんに視界が広がり、夕陽が波間を照らす。

舟頭は清風が後ろから吹いてきたのを確認すると、にっこり笑い、帆をかけた。次の瞬間、舟は急に傾き出し、風の力を受けて勢いよく走り出す。

まるで水鳥のように海面を滑り、今にも飛んで行ってしまいそうな速さ。

「お客さん、海に落っこちねえように、しっかりと掴まっておくんなさいよ」慌てて舟の縁を握り締める七人。

大きな水しぶきに何度も襲われ、景色を楽しむ余裕さえなかったのである。

舟は洲崎に到着。日が落ちるまでには時間もあるので、地元の老人を雇い、瑞巖寺（ずいがんじ）を散策することに。

参道は、異次元にでも迷い込んだかのような、鬱蒼とした杉木立の中にあり、鋭く張りつめた雰囲気は、故郷の八幡宮を彷彿とさせる。

歴史の流れの重厚さを全身に浴びながら、苔むした洞窟や石像を巡り、本堂へと向かう。その道すがら、出会った老僧が境内を案内してくれると言うので、後を付いて行くと、狩野左京の筆による「松に孔雀」の襖絵など、壮麗な本堂をくまなく見学させてくれた。

瑞巖寺を後にした一行は、近くの円通院（えんつういん）、陽徳院（ようとくいん）にまで足

を伸ばしたのだが、まだ空も明るかったので、最後に五大堂島を見てから戻ることにした。

海中に突き刺さったような鋭さのある島には、橋がかけてある。

海面からの高さは、二丈（約六メートル）程度。足を乗せる板は小さく、隙間は広い。まるで、はしごのような橋。下をのぞけば、青い海面が見える。

渡ろうか、渡るまいか、悩んでいる太重たちを見て、赤水が笑いながら言った。

「心が定まっている者は、小さく滑りやすい石橋であっても、堂々と渡って行く。ましてや、この橋には足が着けるだけの板が、ちゃんと張ってある。隙間が大きいからといって、怖れることはない。さあ進め！」

赤水の言葉に挑発された太重は、身震いしながらも、どうにか渡りきる。

それを見た他の者たちも、後に続く。

だが、高所恐怖症の半兵衛だけは、どうしても渡ることができなかった。

宿に戻り、夕食を終えた赤水たち。二階の部屋へと上がり、窓の外をのぞけば、岸边の宿らしく、静かな波音だけが響く。手すりにもたれかかる者、ぼんやりと外を眺める者。思い思いにくつろいでいる。松は風に揺れ、雲ひとつない夜空には、白金のような月が浮かぶ。

月明かりに照らされた水面は金色に揺れ、五大堂の橋は虹のような美しさ。

赤水は座っていたかと思うと、立ち上がり、遠くを眺めては、また座る。故郷で見慣れているはずの太平洋なのに、全く違って見える海原。様々な角度から、幾度も景色を楽しむ。

かの松尾芭蕉は、「奥の細道」の序文で、松島の月が気になって仕方がないと記しているのだが、同じ景色を眺め、ようやく芭蕉の気持ちも理解できたのである。そして、赤水の目に映る景色は、次々に美しい言葉へと置き換わってゆく。

松島多奇絶

(松島奇絶多し)

登楼月下看ル

(楼に登りて月下に看む)

夜深猶未寝

(夜は深うしてなお未だ寝ざるに)

遮莫海風ノ寒

(さもあらばあれ海風寒し)

夜も更けると、疲れきっていた太重たちは、雷のようないびきをかきながら、あちらこちらで重なり合うように眠り始める。だが、橋を渡れなかった半兵衛だけは、この美しい風景に心奪われたらしく、赤水と同じように黙って外を眺めていた。

「私も朝まで眺めていたが、明日は早い。そろそろ休むとするか」

心地良い風月を惜しみながら、二人もまた波音を枕に、深い眠りへと落ちてゆくのであった。

翌朝。宿の主人が、富山（とみやま）に立ち寄りなければ、松島の勝景を見たことにならないと言うので、急遽、富山を目指すこととなった。

路行く人に尋ねながら、曲がりくねった山道を登り下りし、進むこと五里。

次第に木々は高くなり、辺りを深い緑が覆う。響き渡るのは、聞き慣れぬ鳥の鳴き声。路は狭く、坂も険しいため、歩く速度は、みるみる遅くなる。

頭上からは灼熱の太陽が照りつけ、蒸すような暑さがまとわりつく。

赤水の背中が汗で濡れていることに気づいた茂重は、ひよいと風呂敷を奪い取ると、若武者が飛び跳ねるように追い抜いて行った。

無口な茂重らしい気遣いに感謝しながら、やつとの思いで頂上付近にたどり着くと、そこにはお寺があり、門札には「富山」と掲げてある。

さらに、寺の裏山に通じる石段を登ると、山頂には千手観音を祀ったお堂があり、中には坂上田村麻呂の騎馬像も見える。

しかし、松島湾を望めるような場所は、どこにもない。

仕方なく、重くなった足を引きずるようにして、今来た石段を下り、再び寺の前まで戻って来ると、一人の行者を見つけた。

「富山に来れば、松島の絶景が見られるとお聞きしたのですが、どこにも見当たりません」「ここに来られたのは、初めてですか」

「はい」

「その門の前で待っていて下さい。松島の景色は庭の中に縮めてありますよ」

行者は目元を緩めながら、大仰寺と書かれた小さな門の前に一行を立たせると、内側から扉を開けた。

赤水は深々と一礼して、腰をかがめながらゆっくりと門をくぐる。

「おお」

赤水の声に、太重たちの心も逸る。

「早く俺にも見せてくれ！」

「危ないから押すな！」

大騒ぎする太重たち。小さな門から数珠つなぎとなつて、次々と押し出される。

目の前には大きく広がる松島湾。

あまりの美しさに言葉を失い、立ちすくんでしまった。

大きな島、小さな島、円い島、崩れている島、尖った島、緑豊かな島、狭い島、曲がった島、平べったい島、人が立ったような島、獣が走っているような島、竜がとぐるを巻いたような島、虎がうづくまっているような島、亀の甲羅のような島、鯨のような島。倒れ込むように、傾くように、仰ぐように、伏せるように、千状万態の島々が銀緑の海に散りばめられている。

水辺では水鳥たちが飛び回り、いくつもの帆掛舟が往来している。

昨日、舟から見ることでできなかった景色も、今は赤水の目の中に納まっている。

西の方角には青山緑樹。東の方角には、霞が立ちこめる蒼々とした大海。太重たちは手を叩きながら感嘆の声をあげる。
「まさに、天下の奇観だ：」

かつて芭蕉は、『造化の天工、いづれの人か筆をふるひ、詞を尽くさむ』（絵や詩がどれほど上手な人でも、神の作った自然の美しさを、忠実に表現することはできない）と言い、句を読むことができなかった。

「誰か才能のある人が、この眺望を詩に詠んでいてくれればなあ：」

目の前の絶景に心酔し、茫然自失となっていた赤水は、余りの美しさに溜息を漏らす。それを聞いた太重は、袂を引きながら促した。
「先生、詩を詠んでみてはいかがですか」

千里襟を披く 東海の隈

清風霧を払いて 画図開く

十洲三島 眼前に尽く

誰か是れ高きに登りて 賦を作るの才を

水平線の遥か彼方まで襟を披いたように、

松島は東海の水を集め、折れ曲がり、入りこんでいる

爽やかな風は霧を払い、美しい絵を開いて見せてくれた

仙人の住む十洲三島は、目の前にことごとく揃っている

誰か才能のある人が高いところに登って、この絶景を詠んでみて欲しい

その後、一行は石巻、古川、鳴子を経て、出羽三山に入ると、険しい山道に悪戦苦闘しながら、出羽神社、月山神社、湯殿山神社を参詣した。

この当時、お伊勢参りと並び、出羽三山参りも、民衆の信仰を集めており、門前町と宿場町は、大変な賑わいをみせていた。また、出羽三山の出湯は赤水たちの身体を癒し、新たな活力を与えてくれるのであった。

二十二日。一行は鶴岡から庄内を抜け、二十五日には村上で宿を取る。

ここ最近、赤水たちの話題は『北越七奇(越後の七不思議)』のことで持ちきりとなっており、宿に到着するや否や、太重は主人に尋ねてみた。

「越後には、七つの不思議なものがあると、お聞きしましたが、場所をご存知ですか？」

「はい。一つ目の臭生水(くそうず。石油)は黒川村と柄目木村(がらめきむら)、

二つ目の火井(ともしび、かせい。天然ガス)も柄目木村、

三つ目の八房梅(やつふさのうめ。めしべが八本あり、八つの実がなる梅の木)は小島村、

四つ目の三度栗(さんどぐり。一年に三度花をつける栗)は安田村、

五つ目の逆竹(さかさだけ。枝が下向きに生える竹)は鳥屋野村(とやのむら)、

六つ目の即身仏(そくしんぶつ。弘智法印のミイラ)は野積村(のずみむら)の西生寺、

七つ目の燃土(もゆるつち。石炭)は柿崎村にあります」

翌二十六日。赤水たちは、臭生水が湧出する黒川村へとやって来た。

そして、数軒の民家を訪ね歩き、ようやく臭生水を見せてくれるという家を見つけた。

「これが臭生水ですよ」

その家の主人が差し出した桶をのぞき込むと、中には黒くドロドロとした液体が入っており、よだれのような粘り気もある。興味を持った茂重が、真っ先に臭いを嗅ぐ。

「うわぁ、これは臭い！」

鼻をつまみながら叫ぶ茂重。赤水も鼻を突くような臭いに、思わず顔をしかめる。

「国史によると、天智天皇の頃、越後国では燃土と燃水を献上していたのだが、燃水は悪臭があるために、この地域では『臭水』と呼ぶようになったらしい。それにしても本当に臭いなあ……」

赤水も臭生水の存在は知っていたのだが、さすがに、その臭いまでは想像できなかつた。さらに好奇心をそそられた赤水は、臭生水が実際に湧き出ているところも見たいと言いつたので、太重が近くにいた子供を雇い、採取現場まで案内してもらおうことにした。

村から東の方向に一里ほど歩くと、小さな泉があり、その上を菅（すげ）や茅（かや）で編んだ屋根が覆っている。

近づいて見ると、油は水のようにゆっくりと湧き出し、溝にそって下へと流れる作りになっている。小屋から八尺（約二・四m）ほど離れた下流には柵を立て、その間に草を結び、臭

生水をせき止めている。まるで魚油が煮汁の上に浮いているような感じであり、これをすくって臭生水を採取している。

辺りには、同じような小屋が数十箇所ほど点在しており、この一帯が自噴する場所となっているようである。

幸兵衛が試しに杖で油をすくい、顔に近づけてみると、悪臭が鼻を突く。

水ですすげば、水面には油が浮き、青い雲のような形に広がる。

三々四度、水で洗ってみたが、油気は消えない。

その臭いに堪えながら、しばらく杖を使っていた幸兵衛も、とうとう悪臭に耐え切れなくなり、捨ててしまった。

その後、一行は新発田（しばた）へと入り、城下町の茶屋で休憩を取ることにした。喉の渇きを潤し、ひと息ついた赤水は、店の主人を呼び止める。

「新発田藩では、養老の政治が行われているとお聞きしましたが、本当でしょうか？」

「ええ。本当ですよ。領民は七十歳になると、毎年、新発田藩から一年分の米が支給されます。どんなに愚かな子供でも、親が長生きするよう、孝行に励むため、目上の人を大切に
する心も自然と厚くなるのです」

養老の仁政を疑っていた赤水に対し、主人は新発田藩の善政を語り続ける。

「新発田城が完成したのは、三代目藩主 溝口宣直（みぞぐち・のぶなお）公の時分で、着工か

ら五十年もの歳月がかかってしまいました。これは藩主が領民を心配し、農閑期を利用して城の工事を進めたからです」

「溝口公の政治こそ、誠の仁政。こういう政治を日本中に広めたいものだ。それに引きかえ、わが水戸藩はどうか……」

赤水は思わずため息をもらした。

新発田を後にした一行。

海運業が発達し、魚や塩などが多く取引される北越の大都会、新潟へと入った。

二十七日。火井を見物するため、新潟から舟で亀田へ行き、そこから柄目木に向かった。地元の人に火井の場所を尋ねたところ、道端にある茅ぶきの小屋を指差したので、のぞいてみると、小屋の中には草のむしろが敷かれ、四方には粗末な壁が立っている。

主人は留守にしているらしく、中には老女とやせた子供がいたので、火井を見せてくれるよう老女に頼みこむと、実際に燃えている火を見せてくれた。

さらに、囲炉裏端にある穴へ竹筒を差し込み、火をつけた木の薄片を筒の上に近づけると、一瞬にして炎が起こった。どよめく赤水たち。

「おお、竹筒に火がついたぞ」

筒の先で燃え上がる炎は、大きな蠟燭（ろうそく）のように明るく揺らめいている。

炎の長さは三寸（約九〇）程。筒から約五分（約一・五〇）までは青く、その上は黄赤の炎となつてゐる。また、黄赤の部分は普通の火と変わりがなく、物を焼くこともできる。

「実に不思議だ……。いつまでたつても竹筒の先が焦げない」

じつと炎を見つめていた赤水は、竹筒の先に指を近づけてみる。

「竹筒も、青い炎も、熱くない！」

思いっきり息を吹きかけると、炎は消える。さらに筒をつないで横にしてみたり、斜めに傾けても炎は燃え続けており、遠くへも火を移すことができる。

何か風のようなものが吹いているのかと思ひ、竹筒の先を指でふさいでみるのだが、何も感じられず、油や硫黄のような臭いもない。

所作の一部始終を見ていた太重が、赤水に尋ねる。

「先生、この火井とは、どのようなものだとお考えですか」

「浅間山などの噴炎は、地中から湧き出す火である。だが火井の場合、地中の火が伝つて燃えているわけではない。おそらく、この火を受ける気のようなものが地中から噴出して、それに火がついているのだろう。私はこの火井を『自然燭（自然の蠟燭）』と名づける」

遊び心をくすぐられた赤水は、火井に新たな名前まで付けてしまった。

「言葉が単純すぎて、その真意が伝わらないかもしれませぬ。もつと威厳のある、難しい言葉で表現すべきですよ」

「いや。単純な方がよいのだ。堅苦しい名前ではなく、見たことのない人でも色々想像ができる。その方が、かえって向学心を高めるものなのだ。やがて学問が発達した時、きつと後世の人は、我々の心の内を察してくれるだろう。長い時間をかけて真理を追究する。それも学問の醍醐味ではないか」

たとえ、今世の人々が解けないような問題であつても、自分たちが得た知識を後世に伝えることで、いつかは解決できる。

まさに子や孫に、豊かな大地を引き継いでいくようなもの。

それが学問であり、百年の計で取り組むべきものであると、赤水は考えていたのだ。

二十八日。

一行は、八房梅、逆竹、三度栗を見て回った。

そして、疲れた表情で宿に戻ると、重蔵たちは赤水に向つて愚痴をこぼしはじめた。

「どうやら徒労に終わったようですな。奇とと言う程のものでもありませんでした」

「八房梅は花鏡にも記されている『品字梅』の類であろう。三度栗は三度收穫できるといふが、他国にもこのような栗はある。逆竹もしかり。結局、僧侶たちが、親鸞聖人の威厳を高めるため、様々なこじつけをしているに過ぎない。偉業を正しく伝えようとせず、いたずらに神聖化して万民を惑わしているのは、とても残念なことだ」

地図を作るため、赤水は常に正確な情報を求め続けていたのだが、旅人や僧侶から聞き出

した情報の中には誇張されたものも多く、何度も地図を書き直す苦勞をしていた。だからこそ、不正確な情報を耳にすると、どうしても自分の目で確かめずにはいられないのだ。

「修業僧が名山旧跡を歴遊するのは、金儲けの意味も含まれているのではないでしょうか。いやしくも不思議なものがあれば、都合のいいように話を作り上げては誇張し、愚かな民の財布から、お金をとろうとしている。ただ、北越七奇のうち、柄目木の火井だけは、本当でした。日本六十余州の中でも、火井は北越にしかありません。書物にも詳しく述べたものはなく、外国でもあまり見られないようです。何よりも幸いだったのは、この火井が僧侶の金儲けに利用されていないことです。火井のある家の主人は、実に清廉潔白であり、見学させても、お金を取るようなことはしませんでした。火井の清光は、長く寒村の家屋を照らし続けることでしょう。北越には不思議なものが七つあると言いますが、本当に不思議なものは、火井だけだと思います」

太重の言葉を聞いた赤水は、笑いながら言った。

「私にはもっと不思議なものがある。それは新発田藩の養老の仁政だ。中国では周の時代と同じようなことも行われたが、それは身分の高い老人だけであった。また、漢の時代には文帝（孝文皇帝）が身分の差なく、老人を大切にすることを政治を行った。それでも、税金を半分にするくらいのものであった。だが、新発田藩では、毎年七十歳以上の民すべてに米を与えている。このような温情味のある政治が、中国やここ以外の日本の地で行われたとい

うことを、私は未だかつて聞いたことがない。世の中で奇と言われるものはたくさんあるが、養老の仁政に勝るものはない。ところが、世間の人はこのような素晴らしい政治を褒め称えることもせず、七奇のような話ばかりに注目している。まさに孔子の言葉通り、仁を好む者が少ない証拠である。生きる意味を知ろうともせず、いたずらに人生を浪費している者が、いかに多いことか！」

赤水の言葉を聞き、皆静まり返ってしまった。

なぜなら、今の自分たちこそが、最も世間の風潮に毒されている張本人であったからだ。

その後、会津、郡山、白河、大子を経て、八月九日に赤浜へと戻った赤水たち。

細かな文字で埋まった地図。

距離や地形などが詳細に記された日記。

赤水は、たくさんの貴重な資料を持ち帰ることができた満足感に包まれる。

だが、それ以上に赤水の胸を熱くしていたのは、六人の若者が長く危険な旅を、楽しいものへと変えてくれたことへの感謝の気持ちであった。

一方、地図の精度の高さを実際に体感した太重大士。

赤水の大事業の成功を強く確信しただけでなく、学者らしからぬ機知に富んだ話しっぷり、芸術的感性、情愛の深さなど、誰もが赤水の人間性に心酔しきっていたのである。

九 忍び寄る影

宝暦十一年（二七六一）。日本地図作成という大きな目標を達成するため、以前にも増して、貪欲に情報収集を行っていた赤水の元に、一通の手紙が届いた。

差出人は水戸遊学中の恩人、立原蘭溪。現在は彰考館総裁、名越南溪の秘書でもあった。赤水は胸を躍らせながら、手紙の封を開ける。

だが、最初の数行を見た途端、顔色が曇り出した。

そして、ひと通り読み終える頃には、手紙を持つ手がかすかに震えていた。

（いったい誰が、このような噂を…）

長久保 赤水 殿

今、水戸では、江戸から来た古文辞学派の田中江南（たなか こうなん）という学者が、荻生徂徠の教えを広め始めたことで、朱子学を軽んじる気運が高まってしまった。

この状況を憂慮した南溪先生は、古文辞学の弊害を説いて回ったものの、子弟たちの意識を変えることは難しく、大変苦慮されている。

さらに私の息子、甚五郎（じんごろう。後に翠軒（すいけん）と号する）までが、田中江南の下に入塾してしまった。

この噂を耳にした南溪先生は憤られ、私に詰め寄ってきたので「息子の師である谷田部東

塾（やたべ・とうがく）が入門したため、仕方なく一緒に付いて行っただけです。息子は古文辞学に全く興味がありません」と説得し、どうにか難を逃れた。

ところが、これだけでは収まらず、話は貴殿のことにまで及んだ。

赤浜村の赤水は、木皿の平蔵に荻生徂徠の書物を購入させ、古文辞学に没頭し、徂徠の教えを近隣の村々にまで広めている。そうおっしゃったのだ。

南溪先生が貴殿に疑念を抱いていることを、私は大変危惧しており、その害が及ぶ前に知らせておかねばと思い、急ぎ筆を取った次第である。

蘭溪より

赤水は七賢人として名を馳せ、藩侯から褒美を賜っていた。そして、奥州の旅では地図作りに自信を深めるなど、傍から見ても順風満帆な人生そのものであった。

しかし、順調すぎることに、多少の胸騒ぎも覚えていた。

その矢先に蘭溪からの知らせ…。

この一連の中傷は、赤水を快く思わない学者たちが流したものであった。家柄の良い自分たちよりも、百姓の赤水ばかりが注目されている。だが、赤水の才能には、どうやっても太刀打ちできぬ。その妬みを晴らすべく、あらぬ噂を南溪に吹聴していたのだ。

さらには彰考館総裁の権力を使い、赤水から学問を取り上げようと画策していたのである。赤水にとつてみれば、長年の苦勞を経て、ようやく続けられるようになった学問。

それを奪い取られてしまつては、命を取られたに等しい。何としても、南溪の誤解を解かねばならぬ。

赤水の足は無意識のうちに、玄淳の元へと向いていた。

手紙を読み終えた玄淳。腕を組み、苦虫を潰したような顔で天井を見つめる。

「南溪先生は、赤水一人を槍玉に挙げてゐるが、我々七人に対する警告とも読める。七賢人という世間の評価や賜金によつて、慢心が芽生えていたのかもしれない。照らす光が大きくなれば、自ずと影も大きくなるものじゃ…」

「南溪先生の誤解を解く、何か良い手立てはないものでしょうか…」

「水戸に行つても会つてはくれぬだろう…。ならば、手紙を書くしかあるまい」
「分かりました。南溪先生に手紙を書きます」

「いや。それでは逆効果だ。このような場合、蘭溪殿にお口添えを頼むのが賢明だろう…。とにかく南溪先生の怒りを解く。そのことだけを考へて書くことが肝要じゃ」

赤水は玄淳の指示に従い、恥も外聞も、かなぐり捨てることにした。

最も優先すべきは学問を続けることであり、そのためには自尊心を捨てることさえも、いとわぬ。是が非でも大好きな学問を続ける。その一念が筆を突き動かしたのだ。

立原 蘭溪 様

私は皆様よりも劣った人間であり、他人様から信用されなればかりか、根拠のない噂まで流されております。それが原因で異学者（江戸幕府は朱子学以外の学問を学ぶ者を排斥）であるとの非難を受けております。このため、私はいつも気分が優れず、仕事にも、学問にも、手がつかないような状態です。

しかし、私が南溪先生に直接弁明をすれば、かえって事態を悪化させてしまうかもしれません。だからといって私が黙っていたのでは、皆様にまで疑われてしまうでしょう。

色々と前置きが長くなってしまいました。このままでは事態を解決できそうもないので、やむを得ず、自分の気持ちを正直に述べさせて頂きます。

私は片田舎の百姓の子倅（こせがれ）であり、フンコロガシのような人間に過ぎません。

そのような私が幸運なことに、南溪先生の弟子として、学問を学ぶ機会を得ました。

そして、多少の勉強もしましたが、私の住んでいる所は田舎で、書物もなく、あちらこちらから書物を借りて読むことが精一杯でした。しかも、その借りた書物には、まともなものがなく、いつも残念に思っておりました。

江戸では荻生徂徠や弟子たちの書物が出版され、彼らの名声も、あちらこちらに広がっています。

今やその波は、この片田舎の金持ち、流行に敏感な新し物好きの者たちにまで広がり、意

味もわからないまま、徂徠一派の書物を買ひあさっています。彼らは知識人ぶって議論などをしていきますが、豆と麦の違いもわからないような連中であり、書物を読んでも理解などできません。そのような訳で、わからないことがあると、南溪先生の所で教えを受けた私の所に来ては、色々と質問をします。

私は田舎の単なる学問好きに過ぎませんが、南溪先生の下で学んだ以上、先生の名を汚すわけにも参りませんので、仕方なく彼らの疑問に答えています。

ところが、その者たちに徂徠の学問の善し悪しを教えても、まだ理解ができないのです。ただ私の心中と致しましては、徂徠も孔子の教えを学ぼうとしていた一人です。時代は違えども、目指すところは同じであります。片田舎の無学の者たちもまた、徂徠の教えを学ぼうとしています。たとえ学派は違えども、学問を学びたいという純粋な気持ちは、大事にしてやりたいと思っています。

このような私の姿を見て、徂徠の学問に傾倒していると考える人もいるようですが、それは考えすぎです。私が思うに、徂徠の学問は言葉ばかりに重きを置いていますし、陽明学は実践することに重きを置いています。これではあまりにも偏りすぎていると思います。

一方、朱子学は、經典の語句の解釈にのみとらわれず、人間の本性や宇宙万物の本源を哲学的に研究することに重きを置いております。

それぞれの学問に、正しいところが一つはあるように、物事には必ず長所と短所があるものです。極論すれば、長所や役に立つことを得ることが学問の目的ならば、どの学派の本を

読んでもいいのではないのでしょうか。

以前、南溪先生も、我が国には立派な人物が多く、林羅山は博識、伊藤仁斎の経書、新井白石の詩律、徂徠の文章は素晴らしいとおっしゃっていましたが、これなどはまさに長所を得ようとする姿勢だと思えます。ですから、「古文辞学派」などが台頭してきたとしても、聖人の説いた学問に、どれだけの影響がございませうでしょうか。

ただ、古文辞学派は、自分たちの思想を目立たせようと、儒学を排除し、孟子をさげすみ、先人の儒者に対して、ひどい悪口を言っていることは大きな問題であり、その罪は重いと思えます。

そもそも、徂徠の「経義経済の論」では、物事の道理を通そうとすると、時代に合わないということを主張していますが、浅はかな私でも、この考えが間違っていることはわかります。また伊藤仁斎は、論語と孟子は重要であると言っておきながら、大学や孝経を軽んじています。このようなところから、古文辞学が異学と言われる所以だと思えます。

しかし、異学だからといって、全ての学問を禁止してしまえば、有用な教えを得ることができず、学問の進歩はなくなってしまうでしょう。

正直申しまして、私はあまり書物を持っていないため、徂徠の書物を手にしてしまつた時もありました。でも、これは詩や文章を学ぶためであり、徂徠の思想に賛同しているわけではありません。

私は愚か者で、私の作る文章などは、読むに堪えられないほど、ひどいものです。まして、

農作業で一日中忙しく働いている身ですので、古文辞学を学ぶ暇などありません。

「また、私は遠く田舎に住んでおり、皆様と交流を持ち、心の底から打ち解けることもできません。こうしたことから、悪口を言われてしまうのでしょうか。」

「流丸（りゅうがん）は甌臬（おうじやう）に止（とど）まり、流言は知者に止まる」と、荀子の言葉にもあります通り、根拠のない噂は愚人の間で広まっても、知者が聞けば、そこで噂は止まるものでございます。

私の願いは、この根拠のない噂を南溪先生のところまで止めて頂きたい。それだけです。細々と見苦しい様を述べて参りましたが、南溪先生に、この心の内を述べようと思っております。しかし、私の口から直接、南溪先生に申し上げるのは、大変失礼なことだと存じますので、先ずは蘭溪様から、お口添え頂ければ幸いです。

くれぐれも、この私の気持ちをお察し下さいますよう、重ねてお願い申し上げます。

赤水より

学問を続けるため、恭順の姿勢を示す文面ではあったが、誤りがあれば潔く認め、これを正す。それが上に立つ者の心構えであると考えていた赤水は、南溪に一矢報いることも忘れなかった。

一ヶ月後。

南溪の誤解が解けたとの知らせが届く。

赤水の手紙を一読した蘭溪は、赤水の潔白を明らかにできると確信し、すぐさま南溪へと手紙を渡していたのだ。そして、当の南溪も手紙を読み終えると、これ以降、赤水の噂話を口にすることはなかった。

赤水は、これからも学問が続けられることを大いに喜びながらも、『好事魔多し』の言葉を深く胸に刻み、再び地図作りに邁進するのであった。

宝暦十二年（一七六二年）一月。

赤水と長久保中行（ながくぼ・ちゆうこう。従兄弟・憲昌の息子）。そして、平蔵の三人は、京都へと向かって旅立った。

息子の太重から旅の話の話を聞く度、一度でいいから長旅をしてみたいと思っていた平蔵は、赤水と共に、京都への旅を計画していたのである。

そして、京都に到着した三人は、慌しく神社仏閣を巡り、歴史ある都の街並みを楽しみながら、数多くの書物や貴重な地図を手に入れ、故郷へと戻ってきたのであった。

初 日

東山、建仁寺、方広寺、三十三間堂、清水寺他、十九箇所その他、大石内蔵助が遊んだとされる揚屋（あげや。上級遊女を呼んで遊ぶ店）などを見物。

二日目

知恩院、銀閣寺他、十一箇所。

三〇五日目

大徳寺、上賀茂・下賀茂神社、相国寺、天竜寺、広隆寺他、三十三箇所

六日目

東本願寺、西本願寺、本圀寺他、十箇所

七〇八日目

京都旅行の土産話にと、「忠臣蔵」などの芝居見物に興じる

九〇十一日目

買い物や東山散策を行う

十二日目

早朝、栗田口から追分・大津等の名所旧跡を訪れながら、帰路に着く

一 第三章 長崎への旅
西海の交友

明和四年（一七六七）。

赤水は間もなく、五十歳になろうとしていた。

既に人生を終えていたとしても、不思議ではない年齢。

しかし、肝心の地図は京都以西の情報が入りず、本地図と呼ぶには程遠い状態だった。旅に出て、情報収集と検証を行えば、作業も格段に進む。だが、それだけの旅費を用意することもできない。否、たとえ用意できたとしても、旅の許可を得られないかもしれない。思いだけは募る。

色々と方策を考えめぐねては、苦悩の日々を重ねていたある日。

玄淳にしては珍しく、会心の笑みを漏らしながら訪ねて来た。

「赤水、磯原村の船員の話を知っているか？」

「いえ」

「一昨年、船頭の左平太が銚子まで米を届けた帰り、暴風に遭った話だ」

「その話なら聞いたことがあります。まだ働き盛りだというのに……」

「早合点するな。左平太は生きておる」

「生きていたのですか！ それは良かった」

「彼らは清国（中国）の商船に助けられ、長崎まで送り届けてもらったそうだ。近々、左平太たちを引き取るため、庄屋の野口家が水戸藩の役人に付き従い、長崎まで行くことになるらしいぞ……」

まさに千載一遇の好機。二人の認識は一致した。

しかし、この件に全く関係のない赤水が、どうやって同行の許しを得るのか。頭を悩ませながらも、その目を輝かせる玄淳と赤水。

「藩の取り決めに覆すには、権力の後ろ盾が必要じゃな」

「取り急ぎ、南溪先生と蘭溪殿に手紙を書いてみます」

赤水から手紙を受け取った南溪と蘭溪。

この機会を逃してはならぬと、必死になって重臣たちの説得に当たった。

赤水は儒学を学び、漢詩にも長けている。

さらには、藩主から褒美を賜ったという実績もある。

もはや重臣たちにとって、反対する理由など何もなかった。

明和四年（一七六七）九月二十八日。待望の長崎へと出発する日。

昨年誕生した初孫を腕に抱きながら、別れを惜しむ赤水。二十六歳となった藤八郎に家長

としての役目を任せ、地図作りに専念できることが、目じりの皺をいっそう深くさせていた。一方、長旅の帰りを待つ身のお順。今回の旅は役人と一緒であり、盗賊や追いはぎに襲われる心配をしなくても済む。それだけでも心は軽くなっていたのだが、残る気掛かりは、道中の健康管理だけであった。

「くれぐれも生水を飲んではいけませんよ。できるだけ早く風呂に入るようにして下さい。そうしないと、汚れた風呂に入ることになってしまいますからね……」
「わかっておる」

まるで子供にでも言い聞かせるような話しぶりに、同行する者たちの表情もほころぶ。今回の同行者は長久保中行、磯原村の船庄屋野口又市（のぐち・またいち）。

中行は赤水と同じく、好学の青年であり、文才にも秀でていた。また、書の才もあったことから、何かと目をかけており、今回も助手として同行させることにしたのだ。

こうして赤水と中行は、憧れの地「長崎」を目指し、意気揚々と旅立って行ったのである。

閏九月一日。（閏年は月が一つ多く、九月↓閏九月↓十月となる）

赤水たちは二人の郡吏（ぐんり。役人）、小林半兵衛（こばやし・はんべえ）、堅田武兵衛（かただ・ぶへえ）と水戸で合流。

三日の午後には、江戸・小石川の水戸藩邸へと到着。

赤水たち三人は、春日町の大黒屋長右衛門の旅館で、御目附役の鳥羽理左衛門（とばり

ざえもん、坂部伊介（さかべ・いすけ）の準備が整うのを待つこととなった。

閏九月五日。午前四時。

御目附役の屋敷では乗物二つ、槍二本、挟箱（はさみばこ）二本、乗荷（のりに）二駄、小荷駄（こにだ）二匹、総勢二十一人の行列が整えられ、いよいよ長崎に向けて動き出した。大名行列に比べれば、随分と小さな規模ではあるが、街道の端々では、大勢の人々が平伏している。

その様子を見た又市は、自分が偉くなったかのような錯覚を覚え、無意識のうちに大手を振って歩き出す。

赤水も、初めて味わう優越感に、まんざら悪い気もしなかったのだが、やがて優越感は違和感へと変わってゆく。

（人間の慢心に巢食うもの。それが権力の本質……。自らを律する強い意思がなければ、権力という甘い毒に害されてしまう。だから人の上に立つ者には、儒学が必要なのか……）

権力者には徳がなければならぬ。頭では理解できていても、実際に行列の中に身を置くことがなければ、権力者の本当の心を理解することはできなかった。

もし、彼らの心理を知らずに儒学を講じていけば、机上の空論をかざしていたかもしれない。こうしてみると、自己修練の場は至る所にあるものであり、どれだけ歳を重ねようとも、それに気づけるだけの感性を持つことが重要なのである。

二 道中日記

初日は戸塚に宿泊。

翌六日。まだ日も昇らぬうちに出發。

やがて藤沢へと入り、清浄光寺（しょうじょうこうじ）を過ぎる。

この寺は時宗（じしゅう）の総本山であり、一遍上人を宗祖と仰いでいる。歴代の上人は念仏の教えを広めるため、全国を巡る遊行（旅をしながら教えを説くこと）をしていたことから、遊行寺（ゆぎょうじ）と呼ばれるようになった。

大磯宿の美しい松並木を抜け、酒匂川（さかわがわ）を歩いて渡ると、本日の宿泊の地、小田原宿へ到着。ここは江戸を発つてから最初の城下町であり、かつては北条氏の居城があったところでもある。

豊臣秀吉が北条征伐の際、一夜城を築いた石垣山が城の向こう側に見える。

閏九月七日。湯本村に入り、早雲寺を参詣。北条五代の墓はとても小さく、大国を治めた一族のものとは思えない。それとも、昔はあらゆることが粗略だったのだろうか。

峠道を上り、茶屋で休憩を取る。木片を寄せ合わせた細工の土産品も売られていた。

険しい山道を登り、坂を下ると、芦の海（あしのこ）に到着。湖水の右にある箱根金剛院東福寺を参詣する。

箱根の関所は小田原城から役人が来て、交代で勤務をしている。女人と武器を持つ者は往來手形がないと、通ることはできないのだが、水戸藩の行列はすんなりと通ることができた。また、関東諸国の守りの要でもある箱根の関所は、重なる山々が石壁のように立ちはだかつている。たとえ孟嘗君（もうしようくん）の家来のように、鳥の鳴き真似が上手であったとしても、この関所を脱することはできないだろう。

関所から半里ほど坂道を登ると、箱根峠に到着。昼食を取る。

ここは伊豆と相模の国境でもあり、視界が大きく開けているため、美しい三島の山並みも見渡せる。

その後、三島宿に入り、三島明神を参詣。社中の池にはたくさんのおりがおり、町中を清らかな富士の伏流水が流れている。

伊豆と駿河の国境である千貫樋（せんがんどい）を過ぎると、黄瀬川（きせがわ）があり、上流には長久保という古城跡がある。

ここは私の祖先が城を構えていた所でもあり、歴史が変わっていれば、私もこの近辺に住んでいたのかもしれない。そうと思うと、この目で長久保城の跡地を確かめてみたい気持ちに駆られる。だが、公務である以上、それも叶わず、川の先にある山々を感慨深く眺めながら、この日は沼津に宿る。

閏九月八日。田子の浦を渡り、江尻まで舟で向かう。

岸を離れて間もなく、右手に千本松原と沼津城が見える。

舟中から見る富士山は、五年前（宝暦十二年）に平蔵たちと陸路で旅した時とは、違った趣がある。霊峰という言葉にふさわしい姿を見るにつけ、古くから富士山が信仰されていることにも納得がいく。

一説によると、第七代 孝霊天皇の頃に、富士山が一夜にして湧き出たとされるが、それは単なる作り話である。天地が誕生してから、この山があることも、万葉集の歌を見れば明らかである。

また、神仙（しんせん。仙人）の洞天（すみか）である富士山は「不死の山」とも呼ばれ、空海や円珍などが登ってからは、富士禪定と称して凡人までが登山をしている。

長崎から海上を百里ほど西へ進めば、富士山がかすかに見えるという。

まさに日本一の名山。敬意を表する意味も込めて、私は一篇の詩を詠んだ。

望嶽 ぼうがく

東海の芙蓉は万嶽の魁 ひょうかい

伝え言ふこの地 古へより蓬萊なりと ほうらい

峰頭雪満ちて常に月を懸く ほうとう

山足の雲興りて忽ち雷を聴く くもおこ

秦客かつて靈薬を求めて去る しんきやく

天孫は時に羽衣を颺つて来る てんそん

千秋尽きず神仙の府 せんしゅうつ

何ぞ崑崙十二台に滅ぜんや こんろん

原宿には浮島が原という小沼があり、鰻のかば焼きを売っている店が多い。

次の吉原宿には、昔、富士沼という大きな沼があり、平家の兵士たちが水鳥の羽音に驚いたのは、この辺りである。以前、吉原宿は海岸沿いにあったのだが、津波の被害を受けてか

東海の富士山は、日本の山々の頭領であり、太古より仙人の住む不老不死の地「蓬萊山」であるとも言い伝えられている。

山頂は雪で覆われ、夜はいつも月をかかげる。山すそには雲が湧き出て、雷鳴も聴こえる。

昔、秦の始皇帝の命令で、徐福が不老不死の靈薬を探し求めに来ては去って行った。

天(あま)つ神の子孫も羽衣を身にまといて来たという。

どれほど歳月が経っても 仙人たちの集い続ける富士山が、(仙人が住むとされる)中国の崑崙十二台にどうして見劣りすることがあるうか。

ら、内陸部に移り、それまで右手に見えていた富士山が左手に見えるようになったことから、「左富士」と呼ばれている。

しばらくすると富士川に到着。日本一流れの早い、急流でもある。

蒲原宿（かんばらじゅく）、油井宿（ゆいじゅく）を望みながら、舟は過ぎて行く。

興津宿（おきつじゅく）では、山の中腹に清見寺（せいけんじ）があり、座敷の襖絵は雪舟の作であるという。五重塔も今はなく、礎石のみが残っている。また、寺の前に広がる海岸を清見潟（きよみがた）と呼んでおり、美しい景色を望むことができる。

舟を下りることも、この目で確かめることも叶わないが、山頂が薄っすらと雪化粧した富士山、田子の浦を眺めているだけでも、清見の名の通り、美しい眺めを堪能できる。

蒲原宿から興津、清見潟、三保の入江あたりまでを田子浦と呼んでいるが、実に見事な眺望である。本日は江尻に宿泊。

今回の旅は公務であり、朝はまだ暗いうちに出発し、宿に着くのも遅い。このため、思うように筆を執ることができず、地図作りのための記録を残すのがやっとである。

道中の仔細を書き記せないのは、とても残念である。

閏九月九日。草薙神社（くさなぎじんじや）を過ぎ、府中宿に入る。駿府城の西には浅間神社（せんげんじんじや）があり、荘厳な佇まいを見せている。

安部川は橋をかけることも、舟で渡ることも許されておらず、川越人足や馬で渡るしかな

い。このため、私たちは裸足で渡ることにした。

安倍川の近辺では、名物の「かみこと餅」が五文で売られていた。

鞠子宿（まりこじゅく）、岡部宿、藤枝宿、島田宿と過ぎると、大堰川（おおいがわ）がある。ここは駿河と遠州の境でもあり、東海道の難所のひとつでもある。

幸いにも、この日の水位は低く、越し賃五十銭で渡ることができた。

江戸側には島田宿、京都側には金谷宿（かなやじゅく）があり、川が増水すると、両宿は足止めとなった旅人で大変なにぎわいとなる。本日は金谷にて宿泊。

閏九月十日。金谷宿から日坂宿（につかさしゅく）までは険しい山道が続くことから、遠州の箱根とも呼ばれている。石畳の金谷坂を上ると、菊川坂の上り下りが続き、名物の飴餅が売られている。

日坂宿方面に坂を下ると、小夜（さよ）の中山があり、「夜啼石（よなきいし）」と呼ばれる円い石が道の真ん中にある。石には「南無阿弥陀仏」の文字が彫られており、行き交う旅人は、皆立ち止まり、不思議そうに眺めている。

言い伝えによると、殺された妊婦の魂がこの石に乗り移り、夜になると女の泣き声が聞こえてきたことから、夜啼石と名付けられた。その後、石の傍に生み落とされた赤子は、立派に成人し、親の仇を討ち果たすと、出家して母親の菩提を弔ったそうである。

私は五年前にもこの道を通っており、西行法師が詠んだ歌を真似て作ってみた。

小夜の中山を過ぐ

昔せきしつ日京洛びやうらくに遊ぶ

いおり

吾が庵いおりは東海とうかいにあり

豈あに料はからんや、将まさに白髮はくはつならんとして

復またたこの山中やまなかを越こえんとは

むかし、京都を旅したとき

私の家は東海にあった

五十歳をすぎて白髪になろうとしている今

再び小夜の中山を越えようとは思ひもしなかった

掛川宿に入ると、掛川城が見える。掛川は葛の繊維を織り上げた「葛布（くずふ）」が名物である。秋葉山（あきばさん）を御神体山とする秋葉大権現は、ここから十里程の所があり、常夜燈が至る場所に立っている。

袋井宿を過ぎ、見附宿（みつけじゆく）へ。京都から江戸に下って、ようやく富士山の全貌を見ることができると、「見附」という名がついたそうである。

江戸と京都のちようど真ん中にある「天龍川」を舟で渡る。信州諏訪の湖から流れて来るこの川は、頻繁に大水が出るため、「あばれ天龍」の異名を持っている。

本日は浜松城下で宿を取る。浜松城は今川氏が擁した引間城のことであるが、家康公が攻め落し、大改築を行ってから名を改めている。本陣は六軒。東海道では最大の本陣数である。

閏九月十一日。浜松宿を出発。舞坂宿（まいさかじゅく）から荒井宿へ向かう。

約一里ほどある今切（いまぎれ）の渡しを舟で渡るのだが、かつて両宿は陸続きであった。

しかし、明応八年の大地震により、浜名湖が決壊し、海とつながってからは、舟で渡るようになった。また、宝永の頃には、海波を避けるための杭が打たれたことで、安全に渡れるようになったのだが、荒井宿の側には杭が打たれておらず、依然として波は荒い。

舟を下りると、すぐに荒井の関所があり、吉田城の役人が交代で勤務にあたっている。

白須賀宿（しらすがじゅく）、一川宿（ふたがわじゅく）を過ぎ、吉田宿に入る。

吉田城の側には豊川が流れており、吉田橋という大きな橋が架けられている。長さは百二十間（約二百十六m）ほどあり、東海道三大大橋のひとつでもある。この橋を渡った先、伊奈村の立場茶屋には「良香散」という腹薬を売る店がある。亭主の加藤彦介は詩歌に長けると聞いていたので、店に立ち寄り、私が詠んだ詩を贈った。

御油宿（ごゆじゅく）を過ぎ、本日は赤坂宿へ宿泊。両宿とも娼婦が多く、昔より遊興の宿場として有名な所である。

閏九月十二日。藤川宿から岡崎宿へ入る。西側には矢矧川（やはぎがわ）があり、長さ二百八間（約三百八十m）の矢矧橋が架けられている。日本一の大きな橋である。また、この国を三河と呼ぶのは、吉田・矢矧・大平の三つの大河があることに由来する。

本日は池鯉鮒宿（ちりゅうじゅく）に宿泊。この地名は、諏訪明神の池に鯉や鮒が多いこと

からきている。

閏九月十三日。池鯉鮒宿を発ち、鳴海宿（なるみじゆく）に入る。ここには、今川義元が討死した桶狭間があり、松山の中に墓がある。有間津（有松）という所では、色鮮やかな鳴海絞（なるみしぼり）を売る店が軒を連ねており、街も華やいで見える。

本日は宮宿に宿泊。近くには熱田大明神があり、日本武尊（やまとたけるのみこと）を祀っている。八剣の宮（やつるぎのみや）は草薙の剣（くさなぎのつるぎ）を御神体としているが、この剣に似せた七つの剣を造り、盗賊に備えたことから、八剣という名がついたそうである。

閏九月十四日。宮宿から桑名宿へ行くためには、木曾川・長良川・揖斐川を渡らなければならず、時間がかかってしまう。このため、海路を七里（約二十七・五km）、舟で渡る。

「宮の渡し」の渡舟場は、伊勢・熱田参りの旅人で賑わっている。海が荒れた時には、陸路で佐屋まで行き、木曾川を舟で下って、桑名宿へ出ることもできる。

桑名宿で船を下り、昼食をとる。天候次第では足留めを食うことから、桑名宿は宮宿に次いで旅籠の数も多く、街道筋はにぎやかである。また、桑名は「焼き蛤」でも有名である。その後、四日市宿に入る。ここから伊勢神宮の内宮までは、約十七里（六十六・八km）。遙か遠くにある伊勢神宮に向かって、頭を深く垂れた。

石薬師宿（いしやくしじゅく）。ここは起伏の激しい宿場である。坂を下った所に石薬師寺があり、ご本尊は菊面石（花崗岩）に彫られた薬師如来像である。

庄野宿（しょうのじゅく）を過ぎ、亀山宿へ入ると、亀山城の大手門が東海道のすぐ隣にある。武家屋敷と宿場が混在する珍しい街である。

次の関宿（せきじゅく）は、かつて鈴鹿関（すずかのせき）があつたことに由来する。

街を流れる鈴鹿川は、万葉集で八十瀬（やそせ）と詠まれ、古歌にも多く登場している。

この関宿から阪下宿（さかしたじゅく）を通り、土山宿（つちやまじゅく）へ向かうには、鈴鹿峠を越えなければならない。

阪下宿には、かつて狩野元信（かのう・もとのぶ）が、天候の変化の激しさに山を描くことができず、筆を捨てたことから名付けられた、筆捨山（ふですてやま）があり、奇岩が多く見られる。また、この峠の山頂は、伊勢と近江の国境でもある。

その後、峠を過ぎ、夜遅くに土山宿へと到着。ここで宿をとる。

閏九月十五日。水口（みなくち）城下に入る。左手を進めば甲賀である。

石部宿（いしべじゅく）に到着すると、江戸に戻る途中の長崎奉行、新見氏と出会う。

新見氏の家来が私のところに来て、馬を交換して欲しいと言うので、これに応じる。馬を歩かせてみたが、なるほど鈴鹿峠を越えるには難のある馬であつた。

私は長崎を目指していることを隠し、遭難した漂流民について、その家来に尋ねてみた。

すると、五郎左衛門という従者を連れてきて、詳細を語ってくれた。これにより、私たちは磯原の舟員が安南国（ベトナム）にまで漂流していたということを知り初めて知る。

梅木村には、道中薬として有名な『和中散』を売っている店が、四々五軒ある。家の造りは皆立派であり、東海道の中では最も繁盛している。

草津宿の手前に「はらみ村」という所がある。

昔、他国へ出かけることになった男が、親友に妻を預けた。そして、親友は彼の妻を守るため、毎晩、お腹の上に手を置いていたところ、手を出産したということから、この地名が付いたそうである。

私はこの伝説を聞いて、笑いが止まらなくなってしまった。本日は草津に宿泊。

閏九月十六日。矢橋（やばせ）の渡し口からは、近江八景にも劣らぬ美しさが続く。街道を進み、膳所（ぜぜ）城下の大津宿に入る。古歌では、この付近を陪膳（おももの）の浜と詠んでいる。天智天皇の頃、大津宮には都があり、天皇専用の厨房である「御厨（みくりや）」が置かれたことに由来している。

松本から大津までは、街道沿いに街並が続く。左手には義仲寺があり、源頼朝軍に討たれた木曾義仲を葬ったことから、この名が付いたとされる。また、境内には生前の遺言によって、松尾芭蕉の墓も建立されている。

松本の近辺は打出浜（うちでのほま）と呼ばれ、とても美しい風景が続く。水辺の茶屋に立ち寄り、名物の源五郎鮎を食べながら、酒を飲む。

その後、三井寺に参詣。正式には長等山園城寺（ながらさんおんじょうじ）といい、観音巡礼の札所でもある。高台に建つ観音堂からは、琵琶湖が一望できる。

寺の境内は広大であり、伽藍や僧の住む家が樹林の間に、ひっそりと佇んでいる。

この寺には、竜宮から奉納されたという古鐘があるのだが、水底にも鐘を鑄る職人が住んでいるとも言われる。笑止千万である。後世の人の目を引こうと、偽った情報を書物に書き残す者は、いつの時代にもおるものだ。普通の梵鐘と形状が異なっているために、このような伝説も生まれたのだろうが、恐らく外国から渡来したものと思われる。

新羅明神（しんらみょうじん）へ参詣後、大津に戻り、逢坂（おうさか）山を越え、追分で昼食を取る。伏見道へ入り、清閑寺（せいかんじ）を過ぎた辺りからは、平安城（平安京）を見下ろすことができる。手を前に伸ばしてみると、手のひらに東寺の五重塔が乗っているように見えるのが面白い。

馬引きの案内により、京都から深草藤森へ出る。わずか一里程度の回り道だと聞いていたのだが、複雑な道順であり、とても独りでは行けそうもない。

墨染（すみぞめ）を抜け、伏見に到着。京橋で夜舟を雇い、大阪を目指す。

皆疲れ果ててしまい、淀から八幡山（男山）、山崎山（天王山）などの美しい風景は、夢の中を通り過ぎてしまった。

閏九月十七日の早朝、天満橋（大坂）の八軒屋に到着。

呉服屋の岩城升屋で朝食をとっていると、長掘富田屋町にある海老屋大吉の手代、吉兵衛という者が来たので、豊前小倉までの船の手配をさせ、水戸藩の「水」の字の旗印などを染めさせる。

もっとくつろげるようにと、吉兵衛が気を遣い、私たちを長町にある奈良屋理兵衛の屋敷まで案内してくれた。その後、船の手配が済んだと聞き、港まで見に行く。

停泊している船は、小倉から戻ったばかりの蛭子丸（えびすまる）。帆を八つ連ね、長さ七間（約十三m）。船員は五名。これくらいの大きな船であれば、小倉へも、あつという間に着いてしまいそうであるが、悪天候が続いたため、三日ほど逗留することに。

私たちは大坂の街を散策すべく、先ず大坂城へと向う。

この城は天下の名城である。石垣は高く、堀も深く、天下に並ぶものがないほど優れている。玉造口から追手口、京橋口まで見て回ったが、猿面王（ひでよし）の性格が見て取れるように、とても感動した。

また、大坂の繁栄ぶりは江戸に劣らない。町数六百三十七、家数二十七万七千戸、人口九十万、寺数四百六十一、戯場（しばい）十六箇所、遊郭八箇所。毎日、千艘を超える舟が出入りし、諸国から集まった幾千もの廻舟が川内に逗留している。

その後、住吉神社、天王寺の伽藍、生玉明神、高津宮、神明、天満、座摩社、阿弥陀池な

どを巡礼する。

閏九月二十日。午前十時。湊橋の下で船に乗り、天候回復を待ちながら船に泊まる。

閏九月二十一日。朝、船を川下まで押し出し、番所の前を経て、安治川二丁目近辺の大仏島に船をつなぎ、汐が良くなるのを待った。しかし、雨が降り出し、風も悪いため、そのまま翌日まで逗留を続けることとなる。

ここから四里（約十六㎞）ほど離れた堺という町に妙國寺（みょうこくじ）がある。境内には有名な鉄蕉（てつしょう）ソテツの異名）があるというので、同行の者七、八人が船を出て行った。

夜になると安治川の遊女たちが、十人ずつ手を組みながら、船に来ては戯れ、辺りが騒がしくなる。蜷川（しじみがわ）の方からは、数え切れぬほどの売女舟がやって来る。

客船の左右に漕ぎ寄せては、客を招き入れ、去って行くものもあれば、戻って来るものもある。唐詩選の崔顥（さいこう）が詠んだ詩の『長干行（ちょうかんこう）』に出てくる風情も、きつとこのような淫らな様子であったのだろう。そう考えると、目の前の景色も何となく面白く見えてくる。

閏九月二十三日。快晴の朝を迎えたので、安治川から十町（約一㎞）ほど下り、和久の鼻

という所に船を留めて、順風を待つ。だが、船を出すことはできず、空しく一日を過ごすことになる。昨日、堺に行った人が、ソテツの絵を持ってきて、恵比須島の風景などを面白く語ったので、今日も堺に行く人がいた。私は十四、十五町（約一・六km）ほど川上にある、上福島の五百羅漢を参詣した。

閏九月二十四日。西風が強く吹くので、船のすき間を篷（とま。菅や茅で編んだ、むしろ）でふさぎ、持参した地図の検証作業を行いながら、一日を船の中で過ごす。

閏九月二十五日。快晴ではあるが、風が止まない。本日も船を滞留させることになったので、尼崎を経て、えびす信仰で有名な西宮へ参詣した。ここは祭神の蛭子命（ひるこのみこと）が三歳の時、天磐樟船（あまのいわくすふね。楠木で作られた神が乗る船）で、流れ着いたとされる所である。

帰りは尼崎から川船に乗り、和久の鼻へと戻る頃には、すっかり日も落ちていた。

閏九月二十六日。午前四時。船員たちが荒々しく船を漕ぎ出し、順風に帆を揚げた途端、船は海面を快調に走り出す。

朝日が昇り、四方が明るくなると、北は甲山、武庫、六甲、摩耶の山々が、天空を支えているように見える。兵庫の岬、須磨の浦、塩屋の方角からは、朝食（あさげ）の煙が風にな

びいている。東南には大和河内の山々、泉州佐野岸和田、紀州が見える。迫門（せと）は、とても近くに見え、その向こう側の淡路島も段々と近づいてくる。

前後左右、遠近には十艘ほどの大小の船が風をはらみ、ふくれた帆を風にまかせながら、不規則に進んでいる。この眺望を言葉では表現できない。それほど美しい。

須磨の浦に近づいた頃、突然、風が止んでしまったので、船を一の谷の渚に留め、再び風が吹くのを待つことになった。

一行の人々は、これ幸いと小舟に移り、陸へと上がる。

綱敷天神（つなしきてんじん）、光源氏、在原行平（ありわらのゆきひら）などの旧跡を訪ねた後、平重衡（たいらのしげひら）が生捕りにされたという須磨寺へ入る。

門の額には『上野山福祥寺（じょうやさん・ふくしょうじ）とあり、額板は軍（いくさ）の時に使用した、たらいであるという。

庭には源義経が平敦盛（たいらのあつもり）の首実検の際に座ったとされる「義経の腰掛松」、弁慶が陣鐘に使うため、安養寺から担ぎ運んできたとされる「弁慶の鐘」などがある。

私たちは僧に頼み込み、寺宝である敦盛の笛、鎧（よろい）、甲（かぶと）、熊谷次郎直実（くまが い・じろうなおざね）と弁慶の直筆の書を見せてもらった。

また、美少年であり、息子と同じ年頃であった敦盛の首を、須磨の合戦で直実が涙ながらに討ち取った話、その後、直実が出家した話などを聞き、誰もが感涙に咽（むせ）んだ。

合戦場である『一の谷』に行くと、そこは断崖絶壁。

義経が鶴越（ひよどりごえ）の逆落としを行ったのは、このような急斜面であつたのだろう。

谷の下まで行くと、西側の地面の色は赤、東側は白色となつている所があり、まるで源平の旗色のようにでもある。この地の躑躅（つつじ）まで、同じように色を分けて咲くので、『源平躑躅』とも呼ばれている。

安徳天皇の内裏が置かれた場所は、渚に近い山の上にある。

畑の中央に古い松が六く七本植えられており、帝座の面影をわずかに残すばかりである。三の谷の下。海岸に近い道端には、敦盛の石塔があつたのだが、五輪の塔は半分以上が砂に吹き埋められており、時代の流れと共に風化してゆく物悲しさを感じた。

ここから引き返し、私たちは船に戻る。

その後、しばらく風を待ったのだが、一向に吹く気配もないので、船員たちが手で漕ぎ、船を海岸沿いに進める。

徐々に遠くなつていく景色を眺めながら詩を詠み、明石城下の川口に船を留める頃には、満天の星が輝いていた。

一谷覽古

知る、是れ、源平の古戰場

須磨明石茫茫たるを望む

旌旗の赤白、今何にか在る

只、青山の夕陽に映ゆるあるのみ

敦盛墓

松風に玉笛の響き

旌幟 白雲垂る

昔日飛花の地

後人涙を墮すの碑

閏九月二十七日。午前二時。追風が吹きはじめたので、帆を張り、船を出す。日が高くなると、姫路城天守閣、書写山などが右側に見えてきた。

かつて、ここは源平の古戰場であつたが

須磨、明石の広々とした景色だけしか見えない

源平の赤白の旗はどこにあるのだろう

今はもう、夕陽に映える青山だけしかない

松風は、敦盛の笛のように響き

白雲は源氏の白旗のように垂れこめている

ここはかつて敦盛が若くして散つた場所であり

後世の人々が涙を流す石碑がある

室の泊（むろのとまり）に近づく、左に家島、前後には小さな島々がある。

東の方角を振り返って見れば、明石の浦に朝霧が立ちこめ、淡路島の山を隠している。

阿波の鳴門は、はるか東南の先、約二十里（約八十里）。目を凝らし、探してはみたものの、秋空一色に染まった海しか見えない。

赤穂の城が見えはじめると、左には小豆島。人家もわずかに確認できる。犬島の島名は、犬に似た石が山頂にあることからきている。南には八栗山、八島山が霧を帯びて幽（かす）かに見える。その距離、五、六里。右には京の上藤島（じょうろうじま）、左に縄島（直島）、その他、数多くの島があり、甚だ絶景である。

日暮れに、備前の日比（ひび）へ到着。明石より三十一里。この辺りは播磨灘といって、波が高い。今日は少し風が強く、船に酔った人もいた。

閏九月二十八日。風が強く滞留。久々に時間が取れたので、地名や海路の距離などを書き込み、地図の修正作業を行う。

風待ちで手持ち無沙汰な又市は、うんざりとした表情で話しかけてきた。

「オラ、今回のお役目が苦痛でたまらんに、先生は嬉しそうに景色を眺め、地図を書いている。先生の頭の中にはどうなってるのか、凡人のオラにはさっぱりわかんねえ」

「又市さんには、同じような風景に見えるかもしれないませんが、私にとつては、ずっと見てみたいと願っていた風景なのです。その願いが叶い、今、目の前にあるのですから、もう嬉

しくてたまらないのです」

藩費で諸国を巡ることができると、長崎では異国人を見ることもできる。どれほどお金があっても、このような機会は決して得られない。だから、どんな些細な風景でも、見逃すわけにはいかないのである。

その時、隣で二人の会話を聞いていた中行が、私に向ってささやいた。

「同じ船に乗り合わせ、同じ景色を見ているはずなのに、全く違ったとらえ方をしています。大きな目標を持つて生きる者にとって、この世は常に新しい発見で満ちあふれています、目標を持たぬ者にとっては、実に手持ち無沙汰な世界ですな」

まさに、中行の申す通りである。

閏九月二十九日。本日も滞留する。

陸へ上がると、家屋敷が二〜三十軒あり、小さな店先では備前焼の磁器が売られている。徳利は七十銭と安い。だが、遠路を持ち運ぶわけにもいかず、買う人は誰もいなかった。

この近辺は、すべて児島（こじま）と呼ばれている。児島という地名は、備前川口から藤戸川口まで海がめぐっていることに由来する。藤戸までは約五里。昔、藤戸合戦で佐々木盛綱（ささき・もりつな）が、平行盛（たいらのゆきもり）を破った所でもある。

南の方角に目をやれば、海上四〜五里ほどの距離に、讃州高松の天守閣がある。ちようど夕陽が反射し、林のこずえの間から、赤く輝いて見える。

午後四時頃。東北から吹く風に帆を開いて、船を漕ぎ出す。

南に金毘羅山と丸亀城を眺めながら、日暮れに下津井の辺りを過ぎる。

一晩中、順風で走り、二十三里を夢の中で過ごしたので、塩飽（しわく）七島、水島灘を目にすることができず、通り過ぎてしまった。

その後、伊予の伯方島と大三島の間にある鼻栗の瀬戸で、十月一日の午前八時頃まで船を留める。本日は五里ほど進み、安芸の御手洗島（大崎下島）に宿泊。

ここから山陽道の四日市（西条）、伊予の今治まで四里、松山城下へは十里ほどの距離。遊女などもおり、大変にぎやかな島である。

十月二日。逗留。

十月三日。午前十時頃、船を漕ぎ出す。斎島（いつきしま）を左に、蒲刈を右に見て進む。風がないので、五里ほど漕ぎ、笹島の辺りで停泊。

夜中に再び漕ぎ出し、倉橋の南を過ぎる。

十月四日。午前八時に鹿老渡（かろうと）島に到着。人家六〇七十軒。ここから西北、七里隔てた所に厳島があると聞き、はるか遠くを拝む。御手洗より十里。

その後、津和、小泊、柳津島等を経て、家室島（沖家室島）へと至る頃には、黄昏時となっていた。だが、船は岸に寄せず、港の中ほどで停泊させる。夜半になり、順風が吹いたの

で、帆を揚げ出発。五日の夜明け前には、周防の上の関（かみのせき）に到着。

十月五日。午前八時から船を漕ぎ出すと、沖では順風が吹いていた。

周防灘三十四里を過ぎ、夜中に豊前の田浦（たのうら。北九州市門司区田野浦）に着く。

十月六日。朝七時頃、船を出す。左は豊前、右は長門。互いの距離は僅かに五〜六町（約六百㍎）しか離れていない。左の海岸には早戸茂明神（はやともみょうじん）がある。毎年十二月三十日の夜中になると、神官が海の中に入り、和布（わかめ）を刈る「めかり神事」がある名である。

さらに一里ほど行けば、右は下関。前には岩龍島（巖流島）。宮本武蔵と佐々木岩竜（小次郎）が戦った所でもある。その左には「柳が浦の内裏」。平家がこの場所に行宮（あんぐう。行幸の際の仮宮）を置いた場所でもある。

その前には日久島（彦島）。海岸近くの岩礁の上に、与次兵衛という者の石碑がある。

昔、朝鮮出兵で名護屋城にいた豊臣秀吉が、母急病の知らせを聞き、大坂へと戻る際、関門海峡で船が座礁してしまった。秀吉は危うく難を逃れたが、その責任を取って、船頭の与次兵衛が切腹をしたため、この場所に石碑が建立されたそうである。

十月七日。小倉に到着し、船を下りる。豊前小倉城主は十五万石の大名、小笠原侯。

城は海岸にあり、城楼（やぐら）も高大で、殿守と呼べるほどの大きさである。

本日は塩飽又兵衛の家に宿泊。夜になると、商人たちが土産物の毛綿、帯、袴地などを持って押しかけて来たが、どれも品質は良くない。だが、亭主の又兵衛が見せてくれた明石縮（あかしちぢみ）の端切れは、上級品ばかりであった。布地は細密で唐サントメ（舶来の綿布）のようでもあり、紗綾（さや）、繻子（しゅす）よりも値段が高い。それでも、袴地で三十文目（もんめ）位の値段のものは品質が悪かった。

十月八日。未明に出発。一里半ほど進むと、豊前と筑紫の国境がある。

さらに黒崎、上之原、茶屋の春、杯（など）を過ぎ、木屋の瀬（こやのせ）で昼食を取る。この辺の畑には黄櫨（ハゼ）という木が多くあり、葉は漆に似ている。秋には紅葉し、実は木蠟（もくろう）となる。九州の蠟燭（ろうそく）は皆、黄櫨の実から作られている。

また、土中からは石炭も採取される。焼いて軽くした石炭一擔（ひとかつぎ）を、三〜四十文で売っていた。

その後、直方川（のうがたがわ）に出る。蘆屋（あしや）の浜までは四里離れているが、船が往来しやすいので、魚が多く水揚げされている。「さごし」という魚は、鯖に似ている。

故郷の常陸で「いなだ」と呼んでいる魚は、この辺りでは「ようず」と呼ばれていた。この日は、さらに先を急ぎ、飯塚宿で宿泊。

十月八日。雨。宿の主人に暦を確認したのだが、どこかで日付が狂ってしまったらしい。日記を記す時間がなく、まとめて書いたことが仇となってしまうようだ。

仕方なく、本日も十月八日と記す。

風は烈（はげ）しく、冷水（ひやみづ）の峠越えは、困難を極めたが、どうにか山家宿（やまえじゆく）に到着し、昼食を取る。

ここからそう遠くない所に、太宰府天満宮がある。私は是非とも参詣したいと思い、御目附役の鳥羽様に、別行動の許しを願い出た。

すると、鳥羽様はあっさりのご承諾下さり、田代宿で合流することとなった。

それを見ていた中行と又市が自慢げに語る姿。滑稽でもあり、嬉しくもあった。

「水戸藩のお役人様たちは、誰もが赤水先生に一目置いておりますね」

「そりゃそうだ。赤水先生は何でも知ってるから、お役人様だっけかなわねえよ」

中行と又市、同行したいと申す者二名を引き連れ、大宰府に向かった。

六本松の近道を小川に沿って進むと、右手には高くそびえたつ法満山。古歌に読まれている竈（かまど）山のことである。麓には竈門権現（かまどごんげん）があり、大変なご利益があるということから、たくさんの人々に尊信されている。

山家から二里ほど進むと、夕方には大宰府に到着。天満宮の境内は、古木が茂っており、古びた雰囲気神秘的である。私たちは石の鳥居、石の橋、二王門、別殿、東西の法華堂、

薬師堂、浮殿、中門、回廊、本社、神楽堂、鐘楼などを見て回る。

本社の左側には「飛梅」、右側には「一夜の松（追松）」がある。

『東風（こち）吹かば匂ひおこせよ梅の花 主なしとて春な忘れそ』

かつて、菅原道真が大宰府に配流される際、この歌を屋敷の梅に向けて詠んだところ、道真を慕い、大宰府の配所まで飛んで来てしまったことから、飛梅という名が付いたという。さらに、京の屋敷には桜もあったのだが、こちらは歌に詠まれなかったため、嘆き悲しみ、一夜のうちに枯れてしまった。

この話を聞き、残してきた松が心配になった道真は、次の歌を詠んだ。

『梅は飛び桜は枯るる世の中に 松ばかりこそつれなかりけれ』

すると、松も一夜にして追って来たことから、追松という名が付いたそうである。

道真は学者として儒教を広めた。また、和歌や漢詩に秀で、右大臣にまで昇進しながら、配流されてしまうなど、時代に翻弄された人生でもあった。しかし、今の世では神として崇められ、信仰を集めている。偶然にも私の目の前で、瑞雲が天満宮の上を覆いはじめたところを見ると、道真の心も既に静まり、今回の旅を見守ってくれているのだろう。

ふと我に返れば、すっかり日も暮れていた。どうやら、境内の中で時の感覚を失ってしまったらしい。慌てて馬を借り、二日市から春田に出たのだが、合流先の田代宿に着いたのは

真夜中であつた。

十月九日。神崎で昼食を取り、佐賀城下に入る。町から十町（約一km）ほど南には、佐賀城があり、かつては龍造寺城と呼ばれていた。

西南に多羅岳、南に温泉岳、東南には柳川の山、東には久留米の諸山、川上山、北に阿弥岳、筑前の千部山などが連なっており、この辺りから高い山々が四方を囲んでいる。

各山の峯々には、雪が薄つすらと積もり、肌寒い。この日は牛津宿に宿泊。

十月十日。塚崎で昼食を取る。この付近には温泉があり、山や畑には、シユロやサザンカが多く見られる。サザンカの花は皆白く、この地域では小椿と呼び、実からは油を取っている。本日は温泉のある嬉野宿に宿泊。

十月十一日。彼杵（そのぎ）宿で、六反帆の船と五人の水夫を雇い、時津まで海上を七里（約二十七km）行く。ここは海のようにも見えるが、湾であり、島原の早崎、阿波の鳴門と共に日本三名所の迫門（せと）でもある。湾内には小島が数多くあり、絶景が続く。

しばし船に揺られていると、海豚魚（いるか）が跳ね踊り、私たちを先導するかのようによく泳いでいるのが面白い。体長は一間（約一・八m）。色は黒く、鯨のように見える。

また、黒島というところには、イタチ程の大きさの野鼠がいるらしく、昔、猫を放したところ、反対に噛み殺されてしまったという。

午後六時。時津に到着。本日は酒屋に宿泊。

十月十二日。朝から雨。伸びた月代（さかやき）を剃り整える。

長崎に入る準備を整え、肅々と出発。一里ほど進んだ所で、正装の麻袴（あさがみしも）姿の五、六人が、息を切らしながら近づいてきた。

「水戸藩の…方々ですな…」

「左様」

「馬継ぎからの知らせがございましたので、長崎からお迎えに上がりました」

丁重な出迎えの後、役人たちの先導により、馬を進める。

しばらくすると、路傍には豚や山羊が放されており、それを見た御目付役の坂部様が、役人に尋ねた。

「この辺では、豚や山羊を飼っているのですか」

「長崎の異国人に売るため、飼っております。異国人たちは、よく肉を食べるのです」
その話を聞いた又市は、強張った顔つきで私に耳打ちをした。

「異国人は鬼のような姿をしているらしいから、きっと人肉も食らうのではないか」

又市の真剣な顔に思わず笑ってしまったが、異国人とはどのような風貌（ふうぼう）をしているのか、全く想像もできない。機会があれば、是非とも見てみたいものである。

午後四時。長崎に到着。既に宿泊場所は決まっております、小林・堅田様と私は桜町の伊勢屋理左衛門の屋敷。鳥羽・坂部様は桜町の名主、田中菊左衛門の屋敷へと案内される。

宴が始まると、入れ代わり立ち代り、奉行所の役人、通事人（通訳）などがやって来ては、遠路よりの労をねぎらってくれた。亭主は勿論のこと、給仕までが、皆袴姿である。

また、料理だけでなく、もてなし方に至るまで、あらゆるものが丁寧である。

とりわけ、通事目付役の高尾嘉左衛門（たかお・かざえもん）の祖先は、光圀公に招聘された朱舜水（しゅしゅんすい）の随行員であり、水戸藩恩顧の者ということもあり、接待をしなから、漂流のこと、異国のことなどを詳しく話してくれた。

本当は、私も高尾氏と話しをしたかったのだが、身分の低い私が、直接言葉をかけることは許されない。とても悔しい思いをしながら、宴を後にする。

十月十三日。昨日は清客（中国人）とも交流が深い高尾氏を目の前にしながら、一語も交わすことができなかった。それが悔やまれてならない。

私は今回の旅で清客と漢詩を交わし、自分の思いを伝えられるかどうか試してみたいと願っていた。しかし、滞在期間は限られている。無闇に声をかけるわけにもいかない。あれこれと模索し続けるほど、心は追い詰められ、焦りばかりが先に立つ。このまま何もせず、じっとしていることに耐え切れなくなった私は、清水の舞台から飛び降りるような気持ちで、

理左衛門を呼び、高尾氏に名刺と漢詩を渡してもらうことにした。

午後二時。漂流民の引渡しがあるという知らせを受け、全員が礼服に改め、案内人と一緒に奉行所へと向かう。

漂流した四人の取調べは、まだ続いているらしく、我々は奉行所の中で待つこととなった。しばらくして、辺りが騒がしくなったかと思うと、不意に襖が開く。

笑顔で立つ四人の漂流民。随分とやつれた姿ではあるが、顔色や肌艶は何ら遜色がない。その姿を見た又市は、目に大きな涙を浮かべながら四人に駆け寄り、再会を大いに喜びあう。

宿舎に戻ると、主人が漂流民たちを出迎え、慰労の宴を催してくれた。皆、珍しい料理に舌鼓を打ちながら、楽しそうにお酒を飲んでいく。

だが、私は手紙のことが気になり、心の底から楽しむことができない。その様子を察した主人は、酒を注ぎながら小声でささやく。

「高尾様からは、何もご返答がありませんね…」

「理左衛門さん。他の通訳の方を、ご紹介頂けないでしょうか」

「唐人館に熊代太郎左衛門という方がおります。熊代様なら漢詩にも造詣が深く、清客とも親交があるはずですよ」

「それは有り難い！ 是非、熊代様に手紙を届けてもらえないでしょうか」

「お安い御用です」

新たな途が拓けたことで、目の前が急に明るくなった私は、宴が終わると、すぐに部屋へと戻り、筆を執った。

赤水より熊代太郎左衛門様へ

謹んで名刺をお届けします。

長崎は西海の表玄関であり、万国は隣家のようなものです。学者や才人、珍奇な品物が常に集まってくるということを聞き、ずっと長崎に憧れておりました。

私は水戸藩の磯原の庄屋、長久保赤水と申します。常に田舎の雑事に追われ、一步も郷里から出たことがなく、全くの世間知らずですが、幸いにも漂流民の件で同行を許されました。そして、先生のご学才を長崎で初めてお聞きし、是非ともお引き立てを得たいと願っております。しかし、みだりに藩外の人と接することは許されておりません。また、門番は鬼のような形相で睨み付けるので、何度も門前でためらっております。

長崎から私の村までは、四千里もあり、今後お会いすることは叶わないでしょう。この千載一遇の機会を無駄にしたくはありません。そこで、やむを得ず、身分も省みず、無礼にも拙い詩を持参の上、お目通りを願ひ出る次第でございます。

先生とは全くご縁もございませんが、情熱だけは持つているつもりです。どうか、先生

のご温情が、私の突然の非礼をお許し下さり、お目通りを叶えて頂ければ、これに過ぎる幸せはございません。何卒、ご憐察賜りますよう、お願い申し上げます。

また、清客の王世吉（おうせいきつ）、游樸庵（ゆうぼくあん）という方は詩、書に優れているとお聞きしました。私の拙作をお贈りして、ご返事を受けたいと思っておりますが、先生からもご紹介を賜りたく存じます。まさに「蠟臂（とうひ）、車に当る」と申しますように、私は自分の身分もわきまえず、突進するカマキリと同じですので、ご笑読頂ければ幸いです。

奉呈

扶桑行き尽す 海西の津ふせう しん

呉越の商船、比隣のごとしごえつ

君自らは朝をめぐらして誰か似たるを得んみづか

幾たびか策を贈つて更に人を驚かすさく

長崎の港は日本の最西端の地

諸国の船が集まり、隣家のように親しい

熊代先生は國中稀に見る学者であられます

立派な先生に何度か手紙を差し上げ、驚かせて

て申し訳ございません

十月十四日。早朝。夜明け前に書き上げた熊代氏への詩文を、理左衛門に託す。昼頃、奉行所から役人がやつて来て、異国人の館舎へと招待される。

私たちは異国人を見ることができると聞き、喜び勇み、出かけて行った。オランダ屋敷は出島といって、内海に突き出した島の中にある。

四方は頑丈な石垣で囲まれ、島に出入りする石橋は一つ。

門の側には番所があるため、自由に立ち入ることもできない。

恐る恐る島の中に足を踏み入れると、すぐに一人の紅毛人（オランダ人）を見つけたのだが、人相はとても怪しい。二階の窓から、こちらを覗く目も妖しく光り、眉毛は赤さびている。案内人は手慣れた様子で一軒の家に入って行ったので、私たちも台所の横の階段を登っていくと、突然、目の前にオランダ人が姿を現した。一瞬、心臓が止まりそうになったのだが、優しい笑顔を見ているうちに、どうにか落ち着きを取り戻す。

間近に見るオランダ人の顔色はとても白く、頭髮を剃って、黒髪のかつらを被っている。衣服は日本の曲芸師の衣装に似ているが、上着の袖はなく、股引（ももひき）のような布で手足をくるみ、ボタンで締めている。

「又市さん、角や牙がないところを見ると、どうやら鬼ではなさそうですね」
又市は黙ったまま、大きくうなづく。

家の中を見回すと、壁に掛けてある二本の硝子の筒を見つけた。板には蕃字（オランダ語）で何やら書いてあるのだが、読むこともできず、案内人に尋ねてみる。

「これは何ですか？」

「温度計といって、寒暖を示す時計のようなものです」

日本では気温を感覚でしか表現できないが、オランダでは数字で示すことができるのだ。もし、村の家々に温度計があれば、農作業にも役立ち、大変重宝するであろう。

四方の壁には故郷の絵が掛けてあり、荘厳な装飾の額縁がとても美しい。

額には硝子が張られ、絵も透き通って見える。風景画、人物画、いずれも筆が細密であり、一目見ただけでは、本物の風景や人物と見紛うほどである。

また、硝子製の大鏡の前に立つと、もう一人の自分が目の前に立っているかのような錯覚を覚える。日本の鏡よりもきれいに映るのが、実に神秘的である。

家の表座敷は二階にあり、天井は麗しく輝いている。足下には畳を敷き、中央には机が置かれ、その上には酒器であるフラスコの注子（すず）を並べてある。皆、名酒であるという。

通訳の西善三郎が、オランダ語で何やら話しかけると、オランダ人は机を出してきて、オランダ語を紙に書き出した。文字の形は雲を画いているようでもあり、左から書きはじめて、右の方へ横書きに書いていく。日本とは正反対の書き方であり、何を書いているのか、全く検討もつかない。筆は鳥の羽根の根に切れ目を入れ、先を尖らせることで墨汁を含む作りとなっている。

しばらくすると、オランダ人たちが様々な乾菓子（ひがし）や、お茶を運んできた。

さらに、葡萄酒、甘辛い味のアネン酒、色は薄白く泡盛に似たフソウ口酒、カチンの実、生姜の蜜漬けなどを並べ、コップという硝子の杯で酒を侷（すす）めてくれた。

恐々と口に含んでみたが、思いのほか味は良い。

酒を飲み終えると、別棟の二階に案内された。

座敷の中央には机のようなものがあり、大きな板の四隅からは長い脚が生えている。幅六尺（約一・八m）、長さは一丈（約三m）程。板全体を羅紗で包み、四方の隅には穴も開いている。

何に使うものなのか想像もつかないので、私は通訳に尋ねてみた。

「この文机には、なぜ穴が開いているのですか」

「これは文机ではありません。この上で玉を突き、賭勝負（かけごと）をするのです」
どのようにして勝ち負けを決めるのか、全くわからない。実に不思議な道具である。

次に台所へ行く。

窓から畜舎をのぞくと、四〜五匹の豚と十七〜十八頭の牛が飼われていた。

角は短く、大きさは日本の牛よりも、ひとまわり小さい。

竈の前には四〜五人の鬼奴（こくじん）がいた。顔色は薄黒く、髪は巻いてある。

その中には子供もいたので、年齢を聞いてみたが、言葉は通じない。

両手を大きく開いてみると、すぐにうなずいたので、どうやら年齢は十歳らしい。

「紅毛人も我々と同じですな。言葉は通じずとも、心は通じます」

異国人を怖がっていた又市も、彼らの笑顔を見ているうちに親近感を覚えたらしく、満面の笑みを浮べている。

屋敷を出て振り返れば、優しく手を振るオランダ人たち。

その瞳は、透き通ったビードロのようでもあった。

出島を後にし、東へ七町（約七百呎）ほど坂道を登り、十禅寺に到着。

ここには、中国人の住む「唐人館」があり、昔は御薬園（おやくえん。幕府や藩が薬草などを栽培した所）のあった場所でもある。

入口には大門と番所があり、屋敷は練塀で囲まれている。外側には水堀や空堀、その外周を竹垣で囲んでいる。

大門に入ろうとすると、突然、にわか雨が降ってきたので、目の前の建物に駆け込み、雨がやむのを待った。

この建物には、乙名部屋（おとなべや。役人の詰所）、大小通事部屋（通訳の詰所）などが置かれており、案内人が声をかけると、通事目付役の高尾嘉左衛門と息子の兵右衛門が姿を現す。

昨日、高尾氏に名刺を届けたはずなのに、何も返答はない。

目の前にいる本人に直接、尋ねてみたいが、それも許されない…。

仕方なく、私は高尾氏の件を諦め、熊代氏の伝手に賭けることにした。

憂鬱な気分のまま、しばらく雨空を眺めていると、一人の中国人が高尾氏に近づいてきた。「どちらから おいで ですか」

「水戸からいらつしやった、お客様です」

「ずいぶん とおくから おいでに なりましたね」

驚いたことに、その中国人は日本語を話した。唐音（中国語の発音）なまりの日本語ではあるが、賤しい人物ではなさそうである。しばし談笑をする。

中国人の顔つきは日本人と変わらないが、髪型は特徴的である。頭髪を剃り、つむじを直径二寸（約六〇）ほど円く剃り残してある。その残った髪の毛を三組に編み、羽織の紐に似たものを後へ垂れ下げている。帽（かぶりもの）は火事装束の兜頭巾（かぶとずきん）に似ており、火の粉をよけるための垂れがないだけである。服装は中国人も朝鮮人も蒙古風であり、公家、官職、神主に至るまで、衣冠（いかん）を用いない文化であるらしい。

しばらくして雨がやんだので、中門を通り、土神堂（どじんどう）を参詣。

通りには、十五棟の家屋敷が並んでいる。前に行く高尾氏は一軒の屋敷へと入り、台所の脇にある梯子を登って行ったので、私たちも後を付いてゆく。

すると、二階には三人の中国人がおり、深々とお辞儀をしながら出迎えてくれた。

座敷には、美しい絵柄のじゅうたんが敷きつめてあり、私たちが椅子に座ると、中国人の給仕がお茶を注ぎ、饅頭、カステラ、ライチ、竜眼肉（りゅうがんにく）などの菓子を三十膳

ほど並べ始める。

早速、食してみたが、オランダの菓子よりも口に合う。お茶はとても淡薄である。珍しい菓子に舌鼓を打っていると、間もなく一人の中国人が姿を現した。

「こちらが福州の商船主、游樸庵です」

私は一瞬、耳を疑った。

なぜなら、彼こそが熊代氏に紹介をお願いした、游氏本人だったからである。

だが、鳥羽様のように、游氏と親しく言葉を交わすことも、筆談を交えることも許されず、別れ際に目礼をするのが精一杯。

人生最大の好機を目の前で逃してしまった私は、悔やんでも悔やみ切れないまま、唐人屋敷を後にする。

その後、海岸に出て唐船を見る。福州の一番船の長さは二十五間（約四十五m）、横五間（約九m）、帆柱三十五間（約六十三m）。舳先には獅子の頭を画き、船尾には「宝徳」という金色の文字が見える。船体は黒く、上の方には鳥・人・雲が描かれ、帆は竹を編んだ笹帆である。南京、福州の船は、年間十五艘まで入港を許されており、日本の二〜三百石積みの船、十五艘分の荷物を、わずか一艘に積んで来るといふ。実に堅牢な造りである。

船を見物しているうちに雨が強くなってきたので、急ぎ買物を終え、宿へと戻る。

「ただいま、戻りました」

私の声を聞いた理左衛門は、慌てた様子で駆け寄ってきた。

「赤水先生、手紙が届いております！」

急いで手紙を開いてみると、それは熊代氏からのものであった。

熊代太郎左衛門より赤水先生へ

謹んで赤水先生に、ご返事を差し上げます。

先日は芳書を頂き、また過分なるお褒めにあずかり、感激致しております。

私は才能乏しく、学問も浅く、諸事・職責を全うできるかどうかもわからない者です。

どうして先生のご推賞に値しましょうか。ひたすら恥じ入るばかりで、「評判倒れ」といったところでございます。

先生の名は水戸に鳴り響き、春風駘蕩（しゅんぷうたいとう）たるご風格、学才、光風霽月（こうふうせいげつ）を愛する雅趣、そして節操堅固、経験豊かな大先生です。

私の方こそ、程伊川（ていいせん）の門人が雪中に立ち続けたような気持ちで、頂戴した詩の趣きを拝察してました。

あいにく、この十日ばかり病床に伏し、門を閉ざしております。また、先生のご出発が目前に迫っているようですが、親しくお目にかかり、お申出を承ることもできず、深く遺憾に

存じております。ここに手紙をしたため、微意を申し上げて、ご厚情に御答えさせて頂きませぬ。末永きご交誼をお願いし、引き続き、ご教導を頂ければ、これに過ぎる榮幸はございません。なお、清国よりの客人、王氏は中国に帰国され、今は游樸庵が唐館におります。もし、游氏に先生の詩文をお届けしたいということであれば、たやすいこととございます。

* 原韻に和し奉る

積水長く通ず瓊海の津

朝恩善政 自ら隣有り

官遊千里 詞藻多く

彩筆翩翩たり上国の人

* 「原韻に和す」送られた詩と同じ韻の詩を返詩すること

長崎と貴国は遠いけれども、海水によって相通じており、
情け深き善政の貴国は、隣国のような感覚です
君は公務で千里の遠路を旅しながら、数多くの詩を作られ、
美しくきらめいております。やはり格の高い国の人が
作る詩は、趣が深いです

何度も詩を読み返し、目頭が熱くなった。

しかも、手紙には游樸庵を紹介し、詩文を届けてくれるとある。

つい先程まで、本人を目の前にしながら、言葉を交わすことさえできず、絶望の淵に立たされていたはずなのに、急転直下、願いが叶ってしまったのだ。

私は理左衛門に礼を述べると、游氏に贈る詩を急ぎ作り始めた。

赤水より游樸庵様へ

謹んで清国の客、游樸庵先生の旅窓に申し上げます。

華麗なる船が大海を渡り、清国の方々が長崎港においでになったのは、秦の始皇帝の命によつて、徐福が靈藥を求めに來られたことに似ております。また、航海中は風も波も荒れることなく、無事にお着きになられたとのこと。本当に遠いお国の方が、隣人のように感じられ、欣快に堪えません。

小生は長久保赤水と申す者で、日本の東部常州（つねしゅう）水戸藩磯原の村民です。

私は文学を好み、ずっと清国に憧れておりましたが、幸いにも長崎に來て、游先生のご風格をお聞きしました。しかしながら、国の決まりにより、みだりに外国人と交わることを禁じられており、游先生にお声をかけることもできず、残念でなりません。

貴国と長崎とは三千里も離れ、長崎と私の村とは四千里も離れております。それが時を同じくして、先生と私が出会えたことは、まるで目の見えない亀が大海で浮木に出会つたようなものであり、奇跡としか言いようがありません。感激のあまり、通事の熊代様に紹介して頂き、密かに拙作を差し上げ、甥の中行の詩も併せて、お目にかける次第でございます。

何れも低俗な腰折れで、皆様のお笑いぐさになってしまいそうで、恥ずかしく存じます。

もし、私の微意をご憐察の上、ご返詩を頂ければ、青雲を開いて白雉（はくち。未来を知るという白色のキジ）を仰ぐような喜びでございます。心よりお待ち申しております。

謹んで二首を奉呈いたします

中華通信久しく彩鷁さいげき 蜻州せいしゅうに入る

男子四方の志、雄才ゆうさい万里に遊ぶ

孤燈ことう旅館の夢、落月らくげつ故園こえんの愁

各自東西に去らば、蒼茫そうぼうたり瀛海えいかいの流

中国と我が国は久しく交流し、今回は貴国の豪華船が日本を訪れました。貴方は世界を相手に大志を抱き、万里を駆け巡る才能をお持ちです。一方の私は、旅館の暗い灯りの下、落月を眺め旅愁にふけております。このままお互いに東西に去ってしまったら、二人は青々とした大海に隔てられてしまうでしょう。

海外、伝へ聞く赤州せきしゅう県、

風を御して万里東遊なを作す

囊中のうちゆうまさに「支機せいきの石」ありて、

人道にんどうより星槎せいさ女牛を犯すなるべし

海外には赤州（中国）があると聞いています。貴方はそこから風に乗り、遙か遠い東の国まで来られました。そのような貴方のことから、懐には織姫からもらった石があり、人間界から天の川に行く船に乗って、また遠くに行ってしまおうでしょう。

奉呈

長久保中行

乾坤けんこん風氣穩やかにして万国途窮みちきわまりなし

鶴首げきしゆ滄海そうかいに浮び客星碧空へききうを度る

華倭語異なりと雖いへども山水の曲相まがまがひ通ず

羨うらやむのみ昇平の日、なほ博望はくぼうの功を為さんとは

天地の気象は穩やかで、万国と自由に交流できる良き時代。豪華船が広い海を進むのは、流星が青空を飛ぶようです。中国と日本の言葉は違つても、山水の詩は互いに理解できます。太平の世の今、貴方は漢の武帝に仕えた博望侯のように、外交で功績を上げられているのが、とても羨ましい限りです。

私と甥の中行は、夜中までかかつて詩文を書き上げると、十月十五日の早朝、理左衛門に託した。

「滞在期間も残り少なくなりましたが、先生の表情が日に日に明るくなっていらつしやるので、私も嬉しくなります」

「ありがとうございます。これも理左衛門さんのお陰です」

「いえいえ。私など何もしておりません。先生のご人徳ですよ」

朝食を済ませると、土産を買いに、桜町組頭の弥兵衛の店へと出かける。

対応に出た家父の兵太夫は、水戸からの客だと知ると、何やら書物を持ち出してきた。

「漂流民がどうやって長崎に来たのか、口で言っても理解できないだろうから、中国の地図を使って、わかりやすく教えてやろう」

「お願いします」

兵太夫は、地図のあちらこちらを指しながら、漂流民のことを自慢げに語り出す。

しかし、この地図は模写本であり、所々、文字の書き誤り、川の流れや水源に間違いがあることに気づいた。そこで、私が一つ一つ正してやると、兵太夫の態度は一変した。

「是非、お見せしたいものがございますので、どうぞこちらへ」

丁寧な口調となった兵太夫。私たちを店の後にある、別邸へと招き入れた。

そして、二階に上がると、掛軸や小屏風などを持ち出してきたので、書かれてある文字をひとつ残らず読み上げてやった。

すると今度は、去年輸入した「丹桂籍（たんけいせき）」という新しい書物を机の中から持ち出してきたので、これも読み聞かせる。

「これは道家（老荘思想）について書かれた物ですね」

「私も書癖はありますが、数頁読んだだけで内容がわかってしまうとは……。恐れ入りました。噂通り、水戸藩では学問が盛んなのですね」

兵太夫が感心しきっている、今度は弥兵衛がやって来て、唐茶を入れてくれた。

さらに、彼の妻は西洋の菓子と酒まで用意してくれたのだが、役人から急な呼び出しがあ

つたため、ゆつくりと話すこともできず、別邸を後にした。

その後、宿に戻ると、弥兵衛父子から餞別として、唐の禅僧の書、オランダの菓子が届けられていた。

役人の用件が終わると、中行を伴い、桜町の唐本（中国の書物）の店を尋ねる。

店頭には数多くの唐本が並べてあり、いずれも立派な表装で高価なものばかりである。

少しばかり悪戯心が頭をもたげてきた私は、僕（しもべ）となつて末座にいた中行を呼び出し、墨本（ぼくほん。碑文などの拓本）を読ませてみた。

すると、客は驚き、すらすらと読み続ける中行を取り囲みはじめる。

「おい、召し使いが本を読んでいるぞ！」

私は笑いながら言った。

「水戸藩では、農民から召し使いに至るまで、学問が盛んなのですよ」

日も暮れる頃、鳥羽・坂部様の宿泊されている菊左衛門邸を訪ねる。

座敷には中国風の食卓が並べられ、六人ずつが一つの食卓を囲む。

給仕が運ぶ豪華な料理に見とれていると、通訳の高尾氏が姿を現し、さばけた様子で鳥羽様と酒を酌み交わす。

「私の祖父は、光圀公から格別の恩顧を蒙（こうむ）りました。遙かに時が過ぎた今もなお、

毎年のように水戸様から塩鮭を拝領しております。本当にありがたく、大変名譽なことだと思っております」

「貴殿の祖父は、水戸藩に貢献されたお方。そのご恩を決して忘れることはございません」

しばらくして、鳥羽様が上機嫌で席を立つたのを見計らい、私は高尾氏に声をかけてみた。「漂流民はどうやって長崎まで帰ってこれたのですか」

「漂流民を連れてきた者の調書がございます。ご覧になりますか？」

調書に軽く目を通すと、そこには漂流民たちが長崎に戻るまでの仔細が記されていた。

その後も、何度か高尾氏と言葉を交わすことができたため、私は高尾氏に送った手紙について、問い尋ねるようなことはしなかった。

十月十六日。長崎湾の絶景を堪能。本蓮寺、福濟寺、清水寺、長崎聖堂、諏訪明神大社を参詣し、太鼓橋、目鏡橋（めがねばし）などを巡る。

寺々の石垣や石橋など、長崎は総じて石造りの風景が多く、石の城郭で取り囲まれた都のようでもある。

宿に帰ると、出迎えた理左衛門が小さな包みを差し出すので、開いてみると、高尾氏からの手紙、和詩（返詩）、餞別の詩、唐の禅僧の書が入っていた。

赤水長老先生に別れを奉る

水藩の駅路、路千盤せんばん

詩酒聊なほか逢ふ十日の歓

乍たちまち唱す陽関三疊の曲

相ひ思ひて別後、天に倚よりて看みん

水戸藩までの旅路は、遠き路を曲がり曲がって行かねばなりません。わずか十日でも、詩や酒で歓談できるようになりましたものを、早くも陽関三疊（王維の詩）の送別の詩を詠う時を迎えてしまいました。しかし、互いの心は通じ合うことができたのですから、これからは互いに空を仰ぎ、偲びあうことにしましょう。

「明日の出発はお早いようですが、御支度はお済ですか」

「買い忘れた土産もありまして、ほとんど手つかずの状態です」

「それはいけませんなあ。まずは食事をおとりになつて下さい。その間に土産を用意しておきましょう。早う御支度を」

気をもむ理左衛門を横目に、食事を済ませ、やつと荷物に手を付けはじめたのだが、頭の中を高尾氏の詩が駆け巡る。

居たたまれなくなつた私は、荷物の整理を中断し、筆を執ることにした。

謹んで樊（高尾嘉左衛門）先生の餞別の詩に和して、お別れの詩を賦し、ご返事と致します

憐爾たる文章、玉、盤を走る

豈に料らんや、十日交歓を馨さんとは

故園ここより三千里。

瓊浦の風光は馬を駐めて看る

心のこもった詩文は、玉が盤上を走るような美しさで輝いております。十日ばかりでも歓談できたことは、大変思いがけないことでした。私の故郷は、ここから三千里。馬を止め、長崎の絶景を目に焼き付け、別れを惜しみつつ、私は故郷に帰ります。

急ぎ離別の詩と感謝の手紙を書き上げ、理左衛門に託す。

「先生、お手紙も大切でしょうが、御支度をお済ませ下さい」

理左衛門に促され、再び荷物に手を付け始める。

だが、土産物があふれかえり、上手く行李に詰め込むことができない。

しばらく悪戦苦闘していると、再び理左衛門がやって来た。

「高尾様のご子息、兵右衛門さんから手紙が参りました」

「先ほど手紙を出したばかりなのに、もう返事が？」

「高尾様がお留守だったので、代わりに兵右衛門さんが、お書きになったそうです。出発前

だというのに、随分と忙しくなつてしまいましたなあ」

「最高のお土産を頂いた気分ですよ」

早速、封を開けてみる。

謹んで家父に寄せられた、いとまごいの詩を拝見し、急ぎ玉作に和して赤水先生に送り奉る
鮫珠、映徹す水晶の盤

持して佳人の旧歡を話ぐるに贈る

一晤匆匆し、手を分ちて去る

期す、君更に日南に向かつて看んことを

鮫人（人魚）の涙の珠が、盤上に映えるような詩を
拝見しました。心通わせた十日間を詠った素晴らしい
詩に敬意を表して贈ります。せつかくお会いできたの
に、すぐに別れるとは、実に辛いことです。先生、故
郷に戻つて日南の空を仰ぐことがあれば、どうか長崎
のことを思い出して下さい。

唐人屋敷で見た兵右衛門は、二十四歳位の青年であつたのだが、実に機転の利いた素早い
対応と見事な才覚。赤水が大いに感心していると、今度は奉公人がやつて来た。

「旦那様。熊代様から書状が届きました」

それは游樸庵からの手紙と和詩（他人の詩と同じ韻を用い、和して作った詩）。

赤水は興奮気味に手紙を読み始める。

謹んで長久保赤水先生の執筆に御返事を申し上げます

小生は中国生まれで、長く長崎に滞在しておりますが、名士を訪ね、文人に交わることを楽しみにしております。東海地方の名士や先生と、直接膝を交えて面談することもできず、わずかに俗文で心情を通じ合うのがやっとであり、我が意を得るような人物にめぐり会うことも叶いませんでした。

今、先生は名藩である水戸に住んでおられますが、ここから四千里も離れており、先生のような名士風流のお名前すら存じませんでした。もし、先生が長崎に来ることがなければ、私は先生のことを知らないまま人生を終え、何のために日本に滞在をしていたのかと、危うく笑い者になるところでした。

赤水先生は、ご多忙な日々をお過ごしでいらつしやるのに、私のような者をお見捨てにならず、お手紙と佳詩を下さった上に、甥の中行様の才気あふれる詩まで、お届け下さいました。これは風流な心のある者同志が、互いに互いを呼び合い、自然と集まるべくして集まった結果であり、私が日頃から願っていたことでもあります。その嬉しさから、我が身の不才浅学も省みず、貴詩の韻に和して返詩を差し上げます。

それはさておき、天下の文人との出会いが遅すぎたことは、悔やんでも悔やみきれません。さらに厳しい決まりにより、一室に顔をそろえながら、膝を交えて一語でさえ、交わすこともできず、その上、先生は公用が済み次第、ご帰郷なされてしまいます。

もはや、再会の期を望めそうにもありません。この無念さは、先生もご同感のこととは存

じますが、今の私は、先生の素晴らしいお人柄を、ただお慕い仰ぐばかりでございます。

赤水先生寄せられし原詩に唱和してご批評を仰ぎます

東海、蓬萊の地、靈氣九州に甲たり

高人石隠を楽しみ、名士劍書に遊ぶ

勝を尋ねては登臨の興人を懐ひては眺望の愁

山川今 尽く歴て、文思、江流に湧く

我はもと旧福州に家居す

君水戸よりたまたま来り遊ぶ

相ひ逢ひて、万里同じく客と為る

まさに文星の斗牛を貫くなるべし

日本は仙人の靈氣に満ち、世界でも屈指の国です。高尚な人は自然の趣を楽しみ、名士は文武に励んでいます。名所旧跡を訪ね、昔の人を思いながら眺望を愁う心があります。今頃、先生は国中の山川を踏破し、大河のように詩が湧いていらつしやるのでしよね。

私は元々、旧福州に住んでおります。君は、たまたま水戸から来られ、交遊を得ることができました。万里ほども離れたところに住む二人が席を同じくできたことは、学問の星が北斗星と牽牛星（けんぎゅうせい）との間を貫いたようなものです。

旅支度の喧騒に包まれる中、寄せては返す波のような陶醉感に浸っていると、二たび、理左衛門が現れ、手紙を差し出した。

「熊代様からです。どうやら今日も、ゆつくりお休みになれそうもありませんなあ」
封を開けてみると、張蘊文（ちょうおんぶん）、龔廷賢（きょうていけん）の文字。

それは二人の清客からの和韻の詩であった。

「私は、このお二人に詩文を贈っておりませぬのに……」

「熊代様と游樸庵さんの、お心遣いでしよう」

長崎滞在中の多忙ぶり、明日からの長旅を心配していた理左衛門も、詩によって心がつながつていく様を見ているうちに、とうとう旅支度の催促をやめてしまった。

赤水先生の原詩に唱和して贈り奉る 古呉（江蘇省）の張蘊文

風流の水戸、瀛州^{えいしゅう}を貫き、

到る処の陽春、伴遊^{ばんゆう}と作る

日を指さして風に乗ずれば万里^{ばんり}に搏^はく

知る、君が才氣、直ちに冲牛^{ちゅうぎゅう}なるを

風流の地、水戸から遙々と神州日本を縦走して来られ、御清遊された所は、暖かい春に包まれたようになつたことでしょう。

太陽を指して風に乗れば、万里をはばたき、直ちに牽牛星まで飛び上がるような、赤水先生の才氣を感じます。

萍水相ひ逢ふの日、才華九州に邁く

性真なるはこれ古道、氣誼しくして同遊に快し

翠山に飛びて幕を移し、流れ紅にして客愁を帯ぶ

知音長く記取せよ、崎水村を繞りて流れむ

浮き草のように旅先で偶然に出会ったのは、才知華やかな君が、九州に来られた日でした。お目にかかれれば、古来の道義・学問をわきまえた真摯なご気性、親しみやすいお人柄、とても心地よく過ごすことができました。

私は翠山に飛んでは、移り行く自然を愛で、紅葉の頃になれば、あなたのことを思い出し、哀愁にひたるでしょう。どうかいつまでも私のことを忘れないで下さい。この長崎の海水は流れ流れて、お互いの村をめぐるでしょうから。

長久保赤水先生の原詩に和してご返詩申し上げます 温陵（河南省）の龔廷賢

物色風塵の外、磯原百州に勝る

名人遠志多く、才士同遊を喜ぶ

会合卜し難きを知り、分帳各々愁ふ

依依たり東去の路、落葉江流に満つ

君の故郷、磯原の清らかさは日本一です。そこに住む名士は、大きな志と風雅の心を持っていきます。一度と会えないと思うと、近づく別れに互いの心は痛みます。離れ離れになり、東へと去る路には紅葉が満ちているでしょう。

二阮^{げん}の風流、九州を貫き

竹林の酬唱^{しゅうしょう}に同遊^{どうゆう}を紀す

君のごときは千古経綸^{せんこけいりん}の手^{しゅ}

おのずか

自ら文功斗牛を射る有らん

游樸庵の優雅な詩を見ているだけで、美しい韻律が全身を熱くする。

このような素晴らしい詩を贈られながら、礼も述べず、長崎を去ることに、どうしても堪え切れなくなつた私は、荷物の整理を中行に任せ、礼状を書きはじめた。

そして、筆が滑り始めると、疲れも、眠気も、どこかへ消え失せてしまったのである。

再び熊代先生へ

早々のご書面を頂き、開封してみれば、三人の清客からの詩文でした。

謹んで拝見しますと、その文章の優雅さ、詩律の風格の高さ、墨痕の円熟さ。我が東方では、決して見ることでできない立派なものです。一読三嘆（いちどくさんたん）し、嬉しさが体中にあふれ、いつまでも見とれておりました。皆様の詩文は櫃（ひつ）に収め、大切に持ち帰りたいと思います。もし先生のご紹介がなければ、このような喜びを得ることもなく、

阮咸（げんかん）の叔父・甥に似た風流なお二人が、本土を踏破して来られ、七賢のように詩を交換して遊んだ喜びを記します。赤水先生は稀に見る政治的手腕もお持ちです。その文章は斗星（ひきつぼし）、牛星（いなみぼし）までも射ぬくほどの力を放っています。

帰郷するところでした。

本当に感謝をしても、し尽くせないほどです。

最後にただひとつ、不安に思うことがございます。それは、私が水戸藩内の一農民にすぎないということです。本藩では先君 義公（ぎこう、徳川光圀）が文学を好み、大日本史を撰し、史館を置いて俊才を招かれました。田夫、牧童でも、少しは読書を解し、私ほどの浅学者は数えきれないほどおります。それなのに、游樸庵様の書中では、私に対して「先生執事」と称し、「名士風流有り」などとお書きになつておりますが、全く当てはまらないことです。私の言葉の端々を取り上げ、甚だしくお褒め下さり、汗顔の至りに存じております。

また、聞く所によりますと、私の村の漂流船が安南にあつた時、游樸庵様のありがたいご配慮が数多くあつたようですが、私が差し上げた手紙では、一語もこのことに触れておりませんでした。これは大変な手落ちでした。手紙をしたためて、お詫びを申し上げようと思つたのですが、出発の馬が門の前で待つているような次第で、それも叶いません。何卒、先生から代わつて、お礼を申し上げて頂きますよう、伏してお願ひ申し上げます。

西海と東海とでは、風牛馬に乗つても、たやすくお目にかかれるところではなく、再会などおぼつかないことです。この手紙を書いていても欽慕に堪えません。お体がご不調の由、くれぐれも十分ご静養の程、お祈りいたします。

不備

十月十七日。

礼状を書き終えると、外では一番鶏が鳴いていた。

急ぎ、理左衛門に手紙を渡す。

「とうとう宵越しですか」

「ええ。これから少し寝ようと思います」

「皆様、ご出発のご支度を終えられ、間もなく朝食をおとりになるところですよ」

「もう、そんな時間ですか……」

私は寝るのを諦め、寢床で朝食をとった。

朝四時。理左衛門たちに見送られながら宿を出ると、間もなく鳥羽様の行列と合流。

最後尾には麻袴姿の高尾親子、桜町の役人などが付き従っている。

三里ほど進み、矢立駅に到着。いよいよ別れの酒盃を交わす時が来た。

「赤水先生、お別れにございますな」

「高尾様、本当にお世話になりました。これが今生の別れになるやもしれませんが、このご

恩は一生忘れません」

かける言葉も見つからないまま、時だけが過ぎてゆく。

だが、互いの潤んだ瞳を見れば、言葉を超越するほどの絆で、心が結ばれていることは明らかであった。

高尾氏たちに別れを告げ、この日は大村に宿泊。
再び故郷の赤浜を目指す長い旅路が、ここから始まるのであった。

十月二十三日 小倉。三日間逗留。

十月二十六日 下関。八日間逗留し、安南国漂流記を作る。

十一月 四日 上関。

十一月 七日 宮島。

十一月 十一日 室津。七日間逗留。

十一月 二十日 長町の奈良屋に宿泊。

十一月二十一日 伏見で船を二艘借りる。風雪強く、寒さから一晚中眠れず。

十一月二十二日 草津。

十一月二十四日 桑名。

十一月二十六日 御油。良香散を売る加藤彦助から、詩の札を贈られる。

十一月二十七日 浜松。

十二月 一日 三島。

十二月 四日 小石川の水戸藩邸に到着。漂流民たちは江戸城内に預けられ、取り調べを受ける。

十二月 十五日 江戸を出発し、翌日水戸に到着。

十二月 二十日 赤浜に到着。

三 帰郷

明和五年（一七六八）。

年が明けても、赤水の屋敷には、漂流民のことや長崎の話を聞こうとする者が、ひっきりなしに訪れていた。

見世物小屋のような日々を乗り越え、ようやく地図作成に没頭できる環境が整うと、旅で得た貴重な情報を基に、地図の修正作業を始めた。

正しい地名を書き入れた真新しい和紙を上から貼れば、日焼けした和紙も、次々と純白に染まってゆく。

それは、地道に伝聞を重ね、何度も修正を繰り返した、十六年という歳月が一瞬にして覆される瞬間。だが、誤った地図が正しい姿へと変わる、喜びの一瞬でもあるのだ。

もし地図作りを諦めていたら、きっと奥州や長崎を目にすることもなく、赤浜村という小さな世界の中で人生を終えていたのかもしれない。

改めて地図との出会いに感謝をしながら、つぎはぎだらけの地図を眺めていると、諸国の情勢や珍しい風習が思い出される。

さらには、旅人たちと交わした言葉、彼らが歩んできた人生など、決して書物からは得ることのできない、数多くの叡智が頭の中を駆け巡ってくるのであった。

七月。長崎で高尾に依頼されながら、なかなか見つけることのできなかつた朱舜水の書。方々の手を尽くし、やっと一幅の書を手に入れた。

高尾への手紙を書きながら、ふと王世吉のことを思い出す赤水。

彼こそが漂流民を救出してくれた大恩人であり、正式にお礼をしたいと思いつつも、長崎では会うことができなかった。もしかすると、今なら長崎に来ているかもしれない。そんな淡い期待を抱きながら、王世吉への礼状をしたためた。

謹んで、大清南京上海の船主大商 王世吉先生の案下に申し上げます

私は昨年、漂流民を長崎まで迎えに行きましたが、そこで彼らから聞かされたのは、安南で酷くやせ衰え、ほとんどが死ぬ寸前の状態であったということです。そして、幸いにも王先生たちに出会い、十分な食料とお世話を頂きました上に、遥々長崎まで送り届け下さり、再び父母妻子と会うことができました。

この大恩は手紙に書き尽くすことなどできません。謝礼のことは国の法があり、子供同然の私たちには何もできませんが、どうしても御礼を申し上げなければなりません。しかしながら、漂流民たちは読み書きもできず、唯一、王先生のお名前だけを知るばかりです。

思うに、昔の賢人は持てる財宝を民衆に施し、自分の名前を変えて表わさず、それを喜び

としておりました。まさに先生はこの賢者のようであり、欽慕の念に堪えません。

私が長崎を訪れた際、既に先生はご帰国なされ、お会いできなかったことが残念でなりません。漂流民たちは故郷に戻り、つつがなく暮らしておりますが、食事の度に先生のご恩を思い出しております。私たちは先生に贈るような珍しい品も持ち合わせておりませんが、私の拙い詩を御礼の気持ちとして、お贈りし、彼らに代わって感謝の念を伝えることができば幸いです。願わくは、天の恵みにより、この手紙が流されることなく、無事に届き、私の微意が通じますよう、伏してご憐察をお願い申し上げます。

赤水

秋も深まり、冬支度が始まる頃。十六年もの歳月をかけ、日本地図の草稿となる『改製日本扶桑分里図（かいせいにほんふそうぶんりず）』を作り上げた赤水。真つ先に玄淳の屋敷へと向かった。

「先生、ようやく日本の姿が明らかになりました！」

赤水が大きな声を上げると、玄淳は小走りで現れる。

「ついに完成したか！」

玄淳の目の前で、ゆっくりと広げられる地図。つぎはぎだらけだった地図が、美しい姿へ

と生まれ変わっている。玄淳は労作を褒め讃えながら、感慨深く眺める。

「よくぞ、ここまで調べ上げたものだ」

「一昨年、立原翠軒殿が、江戸から戻られてからというもの、ずいぶんと作業がはかどりまして……」

立原翠軒は彰考館に所蔵されていた『正保日本図』『元禄日本図』などの官製地図や諸国絵図を密かに持ち出し、赤水の地図作りに協力していたのである。

「ところで、この数字は何を示しているのだ？」

「はい。天の度数にございます」

「なぜ、天の度数を記すのだ？」

「安全に旅をするには、お天道様のあるうちに宿に着かねばなりません。宿を出るにも、日の入りの時刻を正確に知る必要があります。ところが、常陸から遠く離れた場所におりますと、同じ日本の国でありながら、日の出、日の入りの時刻が異なります。これを時差と申します。この時差を知るため、天の度数を書き込むことにしたのです」

長崎で時刻のズレを体感した赤水は、時差の存在を地図に示す必要性を痛感していた。

そこで、『改製日本扶桑分里図』には、渋川春海が測定した津軽・日光・七尾・岡崎など、十数カ所の天の度数（緯度）を記していたのである。

「なぜ、天の度数がわかると、時刻のずれがわかるのだ？」

「自分の位置を正しく知るには北極星を用いますが、この北極星は場所によって、高く見えるところもあれば、低く見えるところもあります。天の度数とは北極星の見える角度を示したのですが、約三十二里の距離は、天の一度に相当します。北極星の高低からは南北の度数を知ることができまので、東西もこれに準じて知ることができます。また、日輪は一時（いつとき）の間に三十度を過ぎますから（太陽は二時間に三十度を進む）、距離が分かれば、時差を知ることできます。東海より西海までは天道（経度）に十度の違いがございまして、常陸の午の初刻（午前十一時）は、長崎の下刻（午前十時二十分頃）にあたります」

「なるほど。天の度数とは、実に便利なものじゃな」

身に付けた新しい知識を活かし、決して妥協することなく、改良を続けてきた赤水の地図。それは、玄淳が初めて赤水を見た時に感じた天賦の才を、地図という形で具現化してくれた瞬間でもあった。

十二月二十五日。

これまでの学問の功績により、赤水は郷士格（武士の身分）へと取り立てられた。

長崎まで同行した役人たちは、その長い旅路の中で、赤水の底知れぬ博学さを知っただけでなく、言葉の通じぬ中国人と詩を贈りあう様を目の当たりにしたことで、皆心酔しながら

帰ってきたのである。

しかし、どれだけ学問に優れていたとしても、極めて身分制度の厳しいこの時代、百姓が郷士になどなれるはずもなかった。だが、前代未聞の離れ業をやつてのけた者がいた。

郡奉行の皆川教純（みながわ・のりずみ）と立原翠軒の二人である。

皆川は幼少の頃から学問が大好きで、常に書物を携えるなど、赤水と相通ずるところもあり、以前から目にかけていたのだ。

さりとて、百姓が城に上がるという、先例のないことを実現させるには、赤水が広く諸学に通じ、豊富な知識をもっているということだけでは物足りない。

いくつもの大きな壁が立ちはだかる中、皆川を強く突き動かしたもの。

それは、平蔵と一緒にあって、村の弱者に手を差し伸べ、親身になって世話をする赤水の姿であった。

ゆくゆくは、藩主になつたばかりの治保公の片腕にまでしたいと考えていた皆川は、何よりも人間性を重視していたからである。

また、皆川は非常に頭が切れるだけでなく、自らを厳しく律し、百姓たちには寛容な政（まつりごと）を行う一方で、上司や同僚に対しては厳格さを求めるなど、誰からも厚い信頼を得ており、政治的な手腕も高く評価されていた。そういう皆川の粉骨碎身の努力があつたからこそ、赤水も豊かな才能を伸ばす、またとない機会を手にできたのである。

明和六年（一七六九）秋。

高尾から手紙が届く。その中には王からの手紙も同封されていた。

高尾によると、八月に王世吉が長崎に来たので、赤水の手紙を渡したところ、王がぼろぼろと涙を流しながら読み始めたのである。

高尾は不思議に思い、その訳を尋ねてみると、漂流民を助けた時の、あの悲壮感あふれる顔が浮んできたと言う。

さらに漂流民に代わって、赤水が丁寧なお札を述べていることにも深く感銘を受け、涙が止まらなくなったと記されていた。

長久保赤水玄珠先生の台下に御返事申し上げます 貢士 王世吉より

我が国、清朝が興隆して以来、貴国との友好通商を続け、百余年。

「外国は隣家、四海は一家」という言葉通りの関係にあります。

私は才能に乏しく、年老いて役にも立たない一介の貿易商人にすぎず、貴下のご評価に値するような人間でもございません。

再び、長崎を訪れ、高尾氏から貴書と玉詩一連を拝受し、過分なるお誉めのお言葉に汗顔し、身の置所もない恥ずかしさです。私は聖人でも、仁者でもなく、ただの凡人であり、盛

名を賜るほどの者ではございません。漂流民たちが救われたのも、互いに助け合い、痛み倒れた仲間を大切にす徳の心が備わっていたからです。

今、改めて思い出してみますと、安南で難民七人（磯原村の漂流民四人と、後から漂流した小名浜村の三人）を見た時、私は腸がちぎれるほどの衝撃を受け、涙が止まりませんでした。

うろたえる姿。ぞつとするほど痩せ細った姿。それは目を覆いたくなるほどの惨憺たる有様でした。しかも、彼らは日本に帰る術もありません。

ここで彼らを救う方策を悠長に考えていては、機宜を失ってしまいます。

また、安南国に救済を求めても、交渉に失敗すれば、せつかく助かった命も危うくなってしまうため、私の船に乗せて長崎まで送ることにしたのです。ただ残念なのは、亡くなってしまう漂流民もおり、わずか七人しか助け出すことができなかったことです。

もし、直接お目にかかるご縁があり、貴下のご高説を承り、山水風流のお話を拝聴することができますれば、人生の一大快楽と存じます。

謹んでここに拙文を以って、ご返事申し上げます。貴郷の難民七人にも、貴下より宜しくお伝え下さいますよう、お願い申し上げます。

大清乾隆三十四年（一七六九年）八月十日 長崎唐館より

一 第四章 立命
農村の窮状

安永二年（一七七三）十月。

真新しい和紙の上を、勢いよく滑る筆。

故郷の窮状や農政に対する赤水のほとばしる思いが、次々に文字へと変わってゆく。またそれは、お上に訴えることの許されぬ、百姓たちの心の叫びでもあった。

郷士格に取り立てられてから、はや五年。

相も変わらず、役人たちによる悪政がまかり通り、百姓たちの生活は疲弊する一方。

しかも、農村の実情が藩主の耳にまで届くことはなく、私腹を肥やす役人たちの姿に、赤水は義憤を抱いていた。

最も百姓の苦勞を知り、この悲境から救い出せるのは自分だけである。郷士格という境遇を活かし、農政について進言できる機会がやってきた時には、いつでも上訴できるようにしておく。その強い使命感と用意周到な性格が、赤水の筆を動かしていたのだ。

こうして赤水は、賤しい民の代名詞でもあった「芻蕘（すうじょう）」という言葉を用い、『芻蕘談』と題する上申書をまとめ上げたのである。

芻蕘談

人の生活が貧しければ、上に立つ者も平穩無事に暮らすことはできません。

貧しさは義理・人情を失う原因となりますので、役人から下僕まで、働くことを第一に考えるのが道理にございます。また、分を守り、家業を怠ることなく儉約を行つていれば、たとえ大災害が来ようとも、滅亡するようなことはありません。

優れた君主の財政は、年間の収穫を計算し、四分の一を貯蓄に回し、残り四分の三を経費とします。もし、この四分の三でも足りない時は、無意識のうちに贅沢をしている証拠ですし、反対に貯蓄を増やそうと、使うお金を減らしすぎてても良くありません。過不足のないように調整することが大切です。これは国家・個人に関わらず、生計を立てる上での原則であり、儉約を成功させる秘訣でもあります。これに従えば、無事平穩に過ごすことができますし、反すれば窮することになるでしょう。

一 民が困窮するのは、収入を省みず、分をわきまえず、お金を使うからです。彼らは社会秩序を保つための制度が持つ意味も知らず、何が貴くて、何が卑しいのかもわかっていません。このため、お金を持っている者は百姓であろうが、上級武士であろうが、飲食、衣服、器財、家の造りに至るまで、同じように振る舞っています。百姓が帯刀しても、お咎めすらありません。特に遊女や雑芸能者の類には、派手な衣装を着て、目立ちたがる者が多く、その悪習は田舎にまで広がり、庶民までが贅沢を覚えてしまします。

贅沢をする者が増えたのは、世の中が平和で、豊かになつた証拠だと思ふ人もいるかも知れませんが、それは間違つています。

給料の少ない家臣でも、娘の嫁入り支度には、世間並みに飾ろうとするため、女・子供までが美しい衣服を欲しがります。家が貧しくても娘可愛さに、田畑や家屋敷までをも質に入れ、金を借り、さらに貧しくなつて、敗業（廃業）に及ぶ者も多くおります。しかし、誰も好んでしていることではありません。この悪習がいけないのです。百姓たちもこの悪習をやめようと、村で掟を定めてはみましたが、縁組や義理関係に支障をきたしてしまつたため、結局、守られませんでした。悪習が無くなつて欲しいと世間も望んでいます。御触書（おふれがき）を貼り出しても、ただ一枚の紙きれにすぎません。容疑者を捕まえ、取り調べをしなければ、悪習を無くすことはできませんので、どうか法律で厳しく取り締まつて頂きたいのです。

一 百姓には愚かな者も多く、日々、善い教えを諭してもこれを疑い、道理を感じ悟ることができません。どれだけ教えても、一向に聞く耳を持たないのは、昔から変らないようですので、贅沢をやめさせるには、その道をふさいでしまうことが重要です。

商家の利を抑えることは、昔から国政の定法ですので、ご城下から近在に至るまで、呉服店での絹服の売買、他国の絹商人の出入りを禁止して頂きたいのです。

一 贅沢を取り締まるためには、祭り、年始の祝賀の礼、婚礼、花嫁衣裳に至るまで、木綿

を着るようにすべきです。年末年始には役人を故郷へ出張させ、たとえ下着であつても絹類の衣服を着用する者は、捕まえて罰金を取つて頂きたいと思ひます。ただし、寺での謹慎や牢屋に入れるようなことはしないで下さい。お役所の事務も忙しくなりますし、大切な労働力である民を拘束してしまふと、ますます村が疲弊してしまいます。また、絹服を着られるくらいに金持ちにとつて、罰金刑などは痛くも痒くもありませんから、絹服を着続けさせることで藩の財政も潤います。

一 民の弊害になるものを一つ一つ取り除くことが、善政というものでございます。

その弊害の中で、最も人が好むものは博打であり、取り締まりが緩いと必ず盛んになり、良民を苦しめます。何年か前の安良川（あらかわ）の市では、博打が盛んに行なわれ、わずか二三日の間に財産を失つた者が多く出ました。最近では取り締まりも厳しいために、財産を失くす者はなくなり、村も落ち着いておりますので、博打は厳重に禁止すべきです。

また、博打は密告によつて取り締まるのが、最善の策です。密告した場合には、たとえ胴元の仲間であつたとしても罪を許し、負けた者には、お金を取り戻してやれば、自然と止むでしょう。博徒の生計は愚民を騙し、負かさなければ成り立ちません。しかし、博打が見つかり、儲けた金も没収されてしまうことになれば、無益であることを知り、博打をやめ、農業に精を出すようになります。

一 農民が多いというのは、国が豊かであり、善政が行なわれている証拠です。

聖人は遊民を憎み、商いの利益を抑えて、農民が繁栄することを望んでいます。農業は苦勞するわりに利益が少ないため、商工業者になる者、博徒や遊民になる者が多く、年々、農家は減んでいきます。しかも贅沢な風潮が盛んになるに従い、商工業者・遊民が儲かるようになっておりますが、国の礎を強くするには、贅沢と博打を嚴重に戒め、農民を豊かにすることです。

一 近年、労働力が不足しております。田畑でも労働力不足のために生産量は落ち、藩に忠義を尽くすこともできません。この労働力不足は、世間が豊かになつたからではありません。また、貧しくなつたからでもありません。これは農政に問題があり、百姓の人口が自然と減少しているからです。先ずは百姓が増えるような政治を行うことが急務です。

一 常陸の国の風習に、生まれればかりの赤ん坊を産所で押し殺す「間引き」と呼ばれるものがございます。昔は生活苦で、どうにも仕様のない者だけが行なつていましたが、最近では慣習となつており、悪いこととも、人の道に背くものとも思っておりません。

また、子供の多い家を「身の程知らず」と馬鹿にするため、これを恥じて、間引きを行う者もおります。とにかく、子を多く育てると家計も苦しくなるため、二〜三人も生めば、後に生まれた子を間引くことが、当たり前になつていきます。さらに村役人をはじめ、財産のある者までが間引きを行つており、窮民よりも数多く間引いている有様です。

親子・兄弟の情愛は鳥や獣にさえあるのですから、人間にも、その心がないはずがあり

ません。藩の取り締まりが行き届かないために、悪い習慣を止められないだけなのです。その証拠に、間引こうとする親から、隣家の者が赤子を取り上げます。そして、一ヶ月も過ぎた頃、赤子が病気で寝込んだと聞こうものなら、父母が一晚中、寝ずに看病をします。これが人間の本当の姿であり、天の道理です。この件に關しましては、厳重に取り締まり、罰金を課したとしても、民が怨むようなことはございません。

一 人目の付かない所で赤子を間引くため、取り締まりは困難を極めます。そこで、罪の軽い罰金刑ではなく、切支丹のように死罪にすれば、抑止力が高まるとは考えないで下さい。なぜなら、元々、金銭が惜しくて間引いているのですから、罰金だけでも、十分な抑止力はあるのです。

一 切支丹の密告者のように、間引きを密告した者にも、褒美を与えるべきです。また、庄屋は毎月、妊婦を帳簿にて調査することも必要でしょう。さらに、違反者だけでなく、隣家や村役人についても罰金を課すようにすれば、なお効果があると思われれます。

一 この世に女性が多く生まれるのは、子を産み育てることは女性にしかできないからです。また、女性が不足すれば、男は心が定まらず、遠方を駆け回るため、農業をしなくなり、田植えをする女性を雇うこともできず、農作業に遅れが出ています。ですから、女性を多く育てる者には、思いやりのある政治を施して頂きたいものです。

一 百姓の身分を上・中・下、田畑を持つていない貧しい小作人の四つに分け、小作人には「何貫文」、中と下の者は「何両」、上の者は「何十両」というように、罰金の額は身分に応じて決めるべきです。

一 子を多く養育する者に対しては、養育費として米を三年間支給すれば、悪い習慣もなくなるかと申す者がおります。確かに良い制度ではありますが、間引くのは窮民ばかりではありません。財産に余裕のある者が、子供の世話をするのを面倒がったり、養育にお金がかかり、家の経済状態を悪化させることを心配するために、間引く者が大半ですから、米を支給したとしても、中以上の百姓には効果がありません。何よりも間引きは、取り締まりを優先し、中以上の百姓を厳しく罰するべきでしょう。

一 昔から「捨て子」というものもあり、子を育てる術のない者が行うことですが、殺すよりは良いことです。禁じすべきではありません。長者の家の近くに子を捨てると、その家で育ててもらえることが多く、その子が育てば、立派な労働力となり、やがては国の宝となるでしょう。

一 とにかく間引きの禁止は急がねばなりません。今年から禁止をしたとしても、その効果が出るまでには時間がかかるからです。たとえすぐに効果が出なくても、日々、確実に人の命をお救いになられることです。その崇高な願いは、民にも通じるはずですよ。

一 仏法は人の心を和らげ、異国の朝廷でも盛んに行われておりますが、近世に至っては道徳心のある僧も現れません。特に優れた布教も行わず、様々な商取引に手を出しては、金銭を貪っています。このため民にとっては害となつていきます。先君の光圀公は、藩内の神社仏寺の多くを破却し、愚僧の弊害を取り除かれましたが、今なお、完全には消えておりません。僧は一種の遊民でありますから、数が多すぎると、民にとっては害となります。本来、僧侶は木の下や石の上を棲みかとし、托鉢をして乞食（こつじき）などの修行を行い、余暇があれば、学問・座禅に専念すべきです。ところが、現在の僧は人を善に導くこともせず、ただ飲み食いをし、囲碁将棋を楽しみ、衣服を飾り、地位や権力を好んでおります。また、立派な寺を建てることばかりを考え、金銭を要求して参ります。

さらに悪僧は、自分の持つ知識や仏教の教えを悪用し、愚民を集めては頼母子講（たのもしこう。金融業）や富札（とみふだ。宝くじ）を催し、金を貸し付け、利息を取り、儲けています。悪僧の狙い通り、民衆は儲け話に乗りやすく、お金を借りてまで参加をするため、ますます悪僧の懐を肥やす結果となり、民衆に悪影響を及ぼしております。

一 田畑を多く持つ庄屋役は、農業以外にも醸造業や質屋などの商いを行っており、利潤を多く得ています。一方、窮民は借金をしないと生活ができないため、借金を重ね、生活は苦しくなる一方です。この結果、貧する者はますます貧し、富める者はさらに富み、その格差は広がっています。しかし、借金それ自体が悪いわけではありません。昔から必要と

される事であり、急にお金が必要となり、利息の高い金を借りることになったとしても、すぐに返済をすれば、返せなくなることはありません。しかしながら、愚民は借りたお金であるにも関わらず、貰ったお金であると勘違いするようになり、お金は借り続けたいと考えるようになってしまいました。よしんば無利息の借金であっても、今年不足した生活費は来年も不足するはずです。今年の資金不足を借金で解決したとしても、根本的な問題を解決していなければ、借金は増える一方です。ところが、お金を借りることができてしまうと、将来のことまで考えず、飲み食いや衣服・器物を買い求め、家業を疎かにするため、さらに借金は返せなくなりそうです。たとえ藩が救済したとしても、その場限りの解決策に過ぎませんので、庶民の貸し借りが流行らぬよう、適度に監視をすることが肝要です。

一 民を救うということは、善政を行うことです。善政とは、贅沢を禁じ、怠け者を戒め、農業に勤しませ、仕事もせず生活している民がいないようにし、人として守るべき道に外れた者を懲らしめて悪を処罰し、世の中に役立つている者を褒め称え、少しの過ちがあっても赦免し、罪の軽い者には二度と繰り返さぬよう説得することです。

そして、民衆を使役する場合には、農繁期を避け、民衆に害を及ぼすものを取り除き、天災・日照り・洪水・災難が起これば、その状況を把握し、ゆとりを持って不足のないようにすることです。もし、重税や悪政が行われていないにも関わらず、民衆が貧しいのであれば、それは政治に手落ちがある証拠です。

一 世の中には、いわゆる八卦を用いる『占い』がございますが、これは周の時代の「周易」から出たもので、聖人が始められたものです。そして、その本意とするところは、宇宙万物の盛衰・変化の理を悟り、成功と失敗には天命があるということを知ろうとするものです。これは凡庸な小人物が簡単に会得できるものではなく、また、物事の判断を下す時に役立つというものでもありません。良木を育てるには、周りの立ち木は早く伐採し、良木が孤立しそうな時には、良木を補植することです。小さなことかもしれませんが、こうした人材登用が藩の利益につながるのです。

一 今の世は、幕府と同じように、諸大名から家老に至るまで困窮しておりますが、善政をしている国もあります。越後の新発田藩では、七十歳以上の者に毎年、米を支給しています。このため、農民たちは親の長寿を願い、親孝行に努めております。この政策は毎年、大変な出費となるでしょうが、予め予算を組んでおけば、出来ない事ではありません。

また、仙台の伊達様の家臣、金山（かなやま）城主の中嶋与市（なかじま・よいち）は、低い石高であるにも関わらず、台風で城下が全焼した時には、罹災者に対し、握り飯を施し、三日間の生活費を与えました。さらに家屋再建のため、材料費として希望する金額を支給しただけでなく、建築中の生活費まで与え、無利息の融資も行いました。この結果、城の蔵は空となり、藩の所有する山の木材をことごとく伐採して、救済に充てましたが、罹災者は皆、城主の仁恵に涙を流して感謝するのを、私は実際に城下で見聞しました。

一 前漢の武帝は自ら節儉に努め、国の倉庫が米で満たされた時には、年貢を取りませんでした。近い時代では、先君光圉公が年貢の課税を役人ではなく、庄屋に任せる小検見（こけみ）を命じ、各村が自由に納税額を決められるようにしました。農民たちは、あまりの有り難さに、藩の年貢不足を憐れみ、三年目には農民自ら、大量の年貢米を納めました。これは武帝の仁政にも勝るものです。時代の古今を問わず、納税のあり方を考え、きちんとした納税制度を定め、節儉を旨とされれば、藩の財政が悪化することはありません。

こうした政治の要諦をご理解されていても、親藩である水戸藩は格式を重んじるため、思い通りにいかないことがあります。特に朝聘（ちようへい。天皇に拝謁すること）、冠婚葬祭、慶弔の礼は昔からの決まり事であり、変えることは難しいでしょう。しかし、情勢に応じて、多少の変更は行うべきです。

格式というのは正礼ではありません。時の権力者が、その時代のお考えで始められたものが、いつしか格式となったのでありますから、社会が豊かなのか、財政が苦しく儉約すべき時なのか、これらの状況によって変えるべきです。昔からの礼法であるから、これを頑（かたく）なに守る。その結果、行き詰まり、仕方なく儉約する。これは正しい儉約ではありません。ましてや、借金をしてまで礼法を守っているようでは、身のほど知らずということになってしまいます。つまり、真の節約とは民の利益を増やすために行うものであり、藩の面目を保つために行うことではないのです。

たとえ前々から決まっていることであつたとしても、収支が合わない場合には、それを變更して、簡略化すべきでしょう。根本的なことには目もくれず、枝葉のことばかりを考え、急に金銭が足りなくなつて慌てふためくのは、愚かな商家と同じであり、本末転倒と言わざるを得ません。

あるいは利殖によつて財源を確保し、礼法を守るといふ手段もございしますが、これも正道ではありません。たとえ一時、利益を得られたとしても、最後には損をしてしまうものです。往古の聖王のように、節儉を第一に考えることが、財政状態を改善させる早道であり、節儉を続ければ、数年のうちに良くなるでしょう。

格式上の礼を簡略化するには、上層部のお役人様との評議が必要となりますが、古くからの悪いしきたりを拭い去り、先代からのやり方を改められ、新たな掟を定められるかどうかは、上様御一人の御勇断にかかつております。

富貴・貧賤は天命によるものであり、貧賤は士と一般の人民に限られ、富貴は將軍や大名などに限られることです。本来、大名が困窮することなど、あつてはならぬのであり、大変恥ずべきことです。ところが、太平の世になると物事が全て華美になり、種々の格式が生じ、制度や法を無視して、お金を使うために、大名といえども困窮してしまふのです。主君とは風であり、民衆は風によつて、どうにでもあおられる草なのですから、民衆の贅沢・困窮の原因は為政者にあると言えます。

詩経にもございますように、既に成就した太平の事業を守り、衰退させないようにする

ことは、創業よりも難しいとのことですよ。

安永二年 初冬の日。謹んでこれを書す。 長久保赤水

二 京坂遊学

安永三年（一七七四）二月。五十七歳となった赤水は、長久保中行、原南陽（はら・なんよ）う。後の水戸藩医）を伴い、京坂へと旅立った。

今回の旅の目的は、京都と大坂の識者を訪ね、草稿である『改製日本扶桑分里図』の最終校正を行うことにあった。

赤水たちは、天満橋で船を降りると、勝手知ったる長町へと向かい、常宿となる奈良屋理兵衛の屋敷へと到着した。

「六年前は、大変お世話になりました。この度も、ご厄介になります」

「あれからもう六年ですか…。時が経つのは早いものですなあ」

再会を懐かしむように、赤水は長崎までの顛末を語り聞かせた。

「今回は地図の手直しをされるため、上京されたとお聞きしましたが、どのような方々と会いになられるのですか」

「実はその件で、ご紹介頂きたい方がおりまして…」

「どなたでしょうか」

「木村兼葭堂（きむら・けんかどう）さんです」

「ああ、坪井屋の吉右衛門さんですか。あの方なら、いつでもご紹介できますよ」

木村兼葭堂は造り酒屋を営みながら、書画・本草学（薬草学）・オランダ語などに精通する、博学多才の人物であった。また、珍しい書物、書画、地図、器物、鉱物などを数多く収集しており、さながら資料館のような自宅には、全国から識者たちが訪れていた。

そして、この兼葭堂の噂は、遠く離れた赤水の耳にまで届いており、相まみえる機会があれば、一枚でも多くの地図と見比べ、さらに精度を高めたいと願っていたのである。

翌日。赤水たちは兼葭堂に会うため、北堀江にある坪井屋へと向かった。

昨日のうちに理兵衛が使いを出し、面会の手はずを整えておいてくれたらしく、邸宅に着すると、すぐに客間へと案内された。

間もなく姿を現した兼葭堂。面長で鼻は高く、温和な表情。

「この度は、突然の訪問にも関わらず、快くお迎え下さり、心より感謝申し上げます」

「遠路遙々、あばら屋までお越し下さり、有難う存じます」

物腰は柔らかく、悟入の域に達してしまったかのような深い眼差し。

三十八歳とは思えぬ雰囲気を醸し出す兼葭堂に、しばし舌を巻く赤水。

「私が集めている地図をご覧になりたいのですが、我楽多（がらくた）をお見せする前に、是非とも先生の地図を拝見させて下さい」

面はゆげに、持参した地図を広げる赤水。

「ほほう。線が引かれてあるという点では、森幸安先生の地図に似ていますなあ。でも、赤水先生の方が緻密です」

「えっ。線を引いてある地図があるのですか」

「はい。ございますよ。今からお見せしましょう」

兼葭堂が無造作に広げた一枚の地図。そこには緯線と垂直に交わる南北線が記されていた。（私と同じことを考えている人がいたとは……）

「でも、こうして並べてみると、やはり赤水先生の方が優れていますなあ」

幸安図にも緯線・緯度は記されていたのだが、縮尺を用いている点、日本の形の正確さ、地名の細かさなどは、赤水図の方が勝っていた。

さらに兼葭堂は、総桐の長持のような箱の蓋を開けると、馬淵自藁庵（まぶち・じこうあん）の『大日本総図』をはじめ、諸国の地図、地理書などを広げはじめた。

そして、驚く赤水を尻目に、新たな箱を一つ持ち出してきた。

「恐らく先生も、ご覧になったことのない地図をお見せ致しましょう」

「これは……」

赤水は思わず目を見張った。

「唐山蛮方地図（とうざんぼんぼうちず。中国地図）と輿地図（よちず）です。お疑いになるかも知れませんが、世界とはこのような形をしているのです」

輿地図は、マテオ・リッチが中国語で記した『坤輿万国全図（こんよばんこくぜんず）』を参考にして、原目貞清（はらめ・さだきよ）が作った世界地図である。

初めて中国と世界の姿を目にした赤水。全身を激しい衝撃が走り抜ける。

（世界から見れば、日本は何と小さき国か。もつと世界のことを知るためには、是が非でも、目の前にある資料を手に入れねば……）

視点が日本から世界へと一足飛びに広がったことで、身を乗り出さずにはいられなくなる赤水。

「これほどの第一級の資料が揃っているとは……。もはや奇跡としか言いようがありません。是非とも、兼葭堂さんの地図を書き写させて下さい！」

「どうぞ、どうぞ。空いている部屋もございませうので、ご自由にお使い下さい」
「ありがとうございます！」

これ以降、兼葭堂と理兵衛の屋敷を往復する日が続く。

そして、日々親交を深める度に、時代の先端を行く、数多くの識者を兼葭堂が紹介してくれたお陰で、赤水の知識と見識は、ますます深まっていったのである。(左記参照)

古川古松軒(ふるかわ・こしょうけん。地理学者) 皆川淇園(みながわ・きえん。儒学者)

高芙蓉(こう・ふよう。儒学者、篆刻家、画家) 中井竹山(なかい・ちくざん。儒学者)

頼春水(らい・しゅんすい。儒学者、詩人) 円山応挙(まるやま・おうきよ。絵師) 他多数

兼葭堂と会ってから数日後。一日たりとも時間を無駄にできない赤水は、南溪からの紹介状を携え、儒学者の柴野栗山(しばの・りつざん。後に寛政の三博士の一人と称される)の屋敷を目指していた。栗山を訪ねる理由はただひとつ。地図の序文を書いてもらうことにあつた。もし、栗山の序文があれば、当代きつての儒学者から御墨付きを得たこととなり、地図にも大きな箔が付く。

「南溪先生の手紙を拝見しますと、赤水先生は地図をお作りになつてゐるそうですね」
目尻が大きく下がつた栗山。とても柔らかな笑顔。だが、それとは対照的に、額に残るかすかな傷痕。赤水にとっては、それがやけに印象的であつた。

「はい。地図を持参致しましたので、ご高覧頂ければ幸いです」

折り畳んだ地図を広げれば、瞬く間に部屋を埋め尽くすほどの大きさとなつてゆく。

無言のまま見入る、栗山。

「なるほど…。城下、陣屋、名所、古城古戦場、関所、寺社、湊（港）…。とても細かに記

されている。私が目にした日本地図は流宣図（りゅうせんず）くらいしかありませんが、それに比べても、かなり実用的です。今からすぐにも旅に出られそうですな」

「私は装飾的な地図ではなく、安全に旅をするための実用的な地図が作りたかったのです。

正確な距離がわかるように一寸十里の縮尺を用いましたし、方角の正確さを期すため、

方位線も取り入れてみました」

「全国を隈無く歩かれたわけでもないのに、どうやってこれだけの情報を？」

「旅人、修行僧、商人などが家の前を通れば、必ずこれ呼び止め、飲食物を提供しながら地図の前に座り、郷里からたどってきた山、川、城、村の名前、距離、道の険しさな

どを聞き出しました。さらに地図の類を持つている人がいれば、懇願して見せてもらい、

不足する情報を追加・検証していったのです」

「伝聞だけで、ここまで仕上げてしまうとは。実に神秘的ですなあ。せっかく実用性を重

んじ、国中の街道や宿駅まで網羅しているのですから、いっそのこと『輿地路程全図』と名付けてはいかがですか。『改製日本扶桑分里図』では、少し古めかしい気がします」

栗山の言葉を聞き、真つ先に浮かんだのは、兼葭堂に見せてもらった輿地図。

輿地。それは日本の大地を示し、世界地図にも通じる力を秘めた言葉。その力強さに、気分が少しずつ高揚しはじめた赤水は、一呼吸おいてから本題を切り出す。

「ご無礼を承知のうえで申し上げます。是非とも、先生の序文を頂けないでしょうか」
「……」

「私はこの地図を広め、誰もが安心して、旅ができるようにしたいのです」
押し黙る栗山。

国防上の理由から、正確すぎる地図は発刊が禁じられており、赤水の地図も日の目を見ることなく、御蔵入りとなってしまいう可能性が高かった。

「発行の許可を得ることが難しい地図だからこそ、幕府を認めさせるだけの権威が必要となります。そのためには、栗山先生という大きな後ろ盾が不可欠なのです！」
「……」。赤水先生の思いはよくわかりました。しばらく考えさせて下さい」

四月。兼葭堂から、儒学者の江村北海（えむら・ほっかい）を紹介される。

兼葭堂が、赤水に北海を紹介した理由。それは、北海が『職方外記（しよくほうがいき）』を隠し持っていたからだ。

『職方外記』は、中国語で書かれた世界地理に関する書物であるが、キリスト教徒が書いた書物ということで、禁書となっていた。もし、所持しているところを見つかれば、処罰の対象となる、大変危険な書物でもあった。

しかし、赤水はこの書物を借り受けると、命を落とす覚悟で必死に書き写した。西洋の国々が世界を航海している時代に門戸を閉ざし、外国のことを何も知らない日本人。その目を少しでも海外に向けさせたいという情熱が、赤水の地理学を日本から世界へと広げていたのである。

六月。赤水は栗山の懇請により、京都にある堀川塾で講義を行い、数日間、栗山の家に滞在することとなった。そして、儒学について議論を交わしているうちに、お互いを敬するようになっていたのである。

さらには、体が弱く、家も裕福でなかったこと。書物を買う金もなく、学問を教えながら学び続けたことなど、身の上話を交わす中で、共通点が多いことにも気づく二人。

ようやく、気を許し合える雰囲気に。

すると赤水は、ずっと気になっていたことを尋ねてみることにした。

「栗山先生の額には、小さな傷痕がありますか？」

「ああ、この傷ですか……。私にとっては、とても大切な傷です」

首をかしげる赤水。

栗山は目じりを大きく下げながら、その意味を語り始める。

「私は後藤芝山（ごとう・しげん。高松藩の儒学者）先生の下で学んでおりましたが、ある時、宿題を忘れたことがあります。すると芝山先生は、煙管（きせる）で私の額を叩き、次

のように申されました。『お前が憎くて叩いたのではない。お前の心に芽生えた慢心を戒めたのだ。些細なことだからといって手を抜き、修鍊を怠れば、学問だけでなく、心まで荒んでゆく。お前は一日も休むことなく、片道二里もの距離を歩き続け、この塾に通ってきた。だが一度でも休んでいれば、今のお前はなかったはずだ。大志を抱くお前だからこそ、あえて厳しく申し付けるのだ』私は額の痛みよりも、先生のご忠告が嬉しくて、有り難くて、涙が止まりませんでした：」

目を潤ませる栗山の姿に、赤水の胸も熱くなる。

「芝山先生の申される通り、学問、米作り、地図作り、いずれも、毎日の小さな積み重ねが大切であり、日々の努力を怠れば、実を結ばないということですよ」

即座に肝胆相照らす仲となった二人。東の空が白むまで、徳川政権の問題点、将来の日本のあるべき姿について、白熱した議論を交わし続けるのであった。

十一月。赤水は天文学の入門書である『天象管闕鈔（てんしょうかんきしょう）』を、理兵衛の屋敷で書き上げる。

この書物は、京都 相国寺（しょうこくじ）の高僧、大典禅師（だいてんぜんし）から序文を賜っていただけでなく、星座の早見盤が付いた、画期的な書物でもあった。

円盤上には、二十八宿と呼ばれる中国式の星座が描かれており、中心には北極星がある。さらに、円盤は回転する仕組みとなっており、円方形の穴の開いた頁で覆えば、夜空に見

える星座が、ひと目でわかるようになっていた。

周期的に動く星座を覚えていれば、農作業の適期を正確に判断することができ、百姓たちの生活にも役立つと考えていた赤水にとって、毎日のように夜空を仰ぎながら、誰も星の名前を覚えようとしないことが、とても残念に思えてならなかったのだ。

そこで、百姓たちにもわかりやすい入門書を作ることにしたのである。

安永四年（一七七五）二月。栗山宅で高山彦九郎（たかやま・ひこくろう）と会う。

垢にまみれ、綿がはみ出した服。髪は乱れ、酒に酔えば、金属音のような高い声で天下国家を論じ、人々を圧倒する。

とても風変わりな男ではあったが、全国を遊歴し、地理にも大変詳しく、赤水図の正確さを的確に理解できる傑人でもあった。

当初、彦九郎のことは、貴重な情報提供者という程度の認識でしかなかったのだが、日本の将来を心の底から憂う、二十八歳の情熱に触れているうちに、すっかり赤水も魅了されてしまったのである。

意気投合した二人は、その後も親交を深め、まるで兄と弟のような関係が続く。

彦九郎が四十六歳で自刃するまでは。

三月。修正を終えた地図を抱え、赤水は栗山宅を訪れていた。

「本日は地図の完成を、ご報告に参りました」

「ついに劳作が完成しましたか」

「早いもので、地図作りを志してから、二十三年もの時が流れてしまいました」

「二十余年もの歳月が、この地図に凝縮されているかと思うと、感慨もひとしおですな」

地図をゆつくりと広げ、しみじみと見入る栗山。

「地図の名は『日本輿地路程全図』ですか……。実に良い名前です」

「先生の仰る通り、地図の名を改めました。……ところで。例の件ですが……」

肝心なことを切り出せず、言いよどむ赤水。

「その件なら、喜んでお引き受けしましょう。このような立派な地図の序文を書けるのは、私にとつても、大変光栄なことです」

赤水の高い能力、優れた人間性に魅せられた栗山。四月には序文を書き上げた。

そして、五月になると、完成した地図、たくさんの貴重な資料と共に帰国の途についたのだが、栗山の序文は赤水の地図だけでなく、赤水の格を引き上げることにも、大きく役立つこととなるのである。

赤浜へと戻った赤水。『日本輿地路程全図』を持ち、真つ先に平蔵の屋敷を訪れると、息子の太重が迎えてくれた。

「京阪の長旅、ご苦労様でした…」

だが、表情は硬く、冴えない顔色。その異様な雰囲気胸騒ぎを覚える赤水。

「どうした。浮かぬ顔をしているようだが」

「実は…。先生が赤浜を發たれてから間もなく、父が中風（脳卒中）で倒れまして…」
赤水は一瞬、自分の耳を疑った。

「幸いにも一命は取り留めたのですが、寝たきりの状態で…」

病状を確かめるべく、家の中へと駆け上がり、広く大きな廊下の先にある襖を開けた。布団の中で寝息を立てながら、静かに眠る平蔵。

今にも起き出しそうなくらい、顔色も良く、中風で倒れたとは思えぬ穏やかさ。赤水は手を握り、優しく話しかける。

「平蔵兄、必ず良くなりますよ。また一緒に旅に参りましょう」

京都を巡った夢のような日々が、つい昨日のように思い出され、平蔵の屈託のない笑顔が脳裏を過ぎる。

だが、目の前の平蔵は、言葉を發することもなく、何の反応もない。

赤水は決して側を離れようとせず、朝日が昇るまで平蔵の寝顔を見守り続けた。

その後も暇を見つけては、二里程の道を往復し、平蔵を見舞ったのだが、右の手足は全く動かず、舌がもつれ、ろれつの回らない状態になってしまったのである。

安永五年（一七七六）四月。

中風を再発したという知らせを聞き、赤水は平蔵の元へ、急ぎ駆けつけた。まるで酒にでも酔っているかのような大いびきをかき、眠っている。

だが、平蔵の顔や腕の肉は落ち、かつての面影はどこにもない。

赤水は手を握り、耳元で何度も声をかける。

「平蔵兄、赤水ですよ。わかりますか。平蔵兄」

赤水の問いかけにも反応はなく、ただ眠り続ける平蔵。

「平蔵兄、もうすぐ地図も完成しますからね。それまで元気でいて下さいよ」
部屋の中には、赤水の声と親戚たちのすすり泣く声だけが響き渡る。

しばらくすると、不意に平蔵のいびきが止まった。

玄淳は急いで平蔵の脈を取ってみる。だが反応はない。

首を横に振る玄淳。

赤水の目から大粒の涙がこぼれる。

たくさんの知識を得られたのも、地図を作ることができるのも、平蔵の教えと惜しみない

援助のお陰だった。彼との出会いがなければ、今の赤水は存在し得なかった。

そのことを思うと、感謝の念が胸をきつく締め付ける。

「父は倒れる前、完成した赤水先生の地図を持って、長崎に行きたいと申し立ておりました。先生と京都を旅したことが、よほど楽しかったのでしょう。いつも紀行文や道中図を眺めておりましたから……。先生もどうか、お体だけは大切にしておいて、一日も早く、父の墓前に地図を手向けてやって下さい。地図の完成を楽しみにしていた父にとって、この上ない供養になると思います……」

赤水は涙を流しながら、うなずいた。

(平蔵兄のご恩に報いるためにも、必ず地図を完成させます)

柴田平蔵 享年六十一歳。

豪農に生まれながら、慎み深く、弱き者を助けても、決してその徳行をひけらかすこともなく、常に自然体。誰からも愛され、清らかな心で村人たちの橋渡しとなってきた平蔵。

その優しい人柄を偲ぶように、どこからともなく爽やかな風が流れてくる。

家の中を吹き抜け、遠くの稲穂を穏やかに揺らす音。

それはまるで平蔵の笑い声のようでもあった。

三 侍講(じこう)

徳川治保(とくがわ・はるもり)は、明和三年(二七六六)に十五歳で家督を継ぎ、水戸藩六代藩主となっていた。

酒色をたしなまず、とても生真面目で礼儀正しい治保は、無類の学問好きでもあった。

また、兵法、弓馬、銃、拳法などの武芸にも長けていたことから、光圀以来の名君とも、称されていたのである。

しかし、亡父(五代藩主、徳川宗翰)の改革が失敗し、藩の財政は悪化。さらに百姓一揆まで起こるなど、若い藩主にとつては、あまりにも多くの課題が山積していた。

その一方で、学問にのめり込み、学者ばかりを側近に用い、改革の基本方針さえ打ち出せない治保の政治手腕に、不満を持つ家臣も多かった。

そこで、治保は光圀に倣い、身分を問わず、優秀な侍講(主君に直接講義を行う家庭教師のよいうな職)を広く求めることにしたのである。

郡奉行の皆川教純も君意に従い、管轄地域の松岡郷に埋もれている有能な人物を探していたのだが、既に皆川の心は決まっていた。

それは、治保の亡父から賞された七賢人の一人、赤水である。

皆川自身、彼の才能には一目も、二目も置いていたし、長崎まで同行した役人たちからは、

数百年に一度の逸材であるとも聞かされていた。

また、その博識さと人間性に魅了されていた立原翠軒も、赤水を治保の侍講として、強く推挙していたのである。

江戸史館辞令書

赤浜村郷士格 長久保源五兵衛

長年、学問に精励し、高い才能を有していると聞き及んでいることから、

この度、彰考館勤務を命ずる。七人扶持を支給するので、江戸に引越し、骨身を惜しまず働きなさい。なお、格式（礼儀作法）は、今までの通りにしなさい。

安永六年（一七七七）十月二十四日。治保二十六歳。赤水は間もなく六十歳を迎えようとしていた頃、侍講就任が正式に決まり、ついに江戸へと出発することとなった。

百姓上がりの侍講を採用すれば、御三家の名を汚すとして、猛反対する家臣や水戸の彰考館で様子を見てから、江戸に呼び寄せるべきと進言する家臣もいたのだが、治保は頑として聞き入れなかった。なぜなら、赤水登用には、水戸藩に巢食う閉塞感を打破したいという、強い願いが込められていたからである。

晴れの門出ということもあり、息子たちは本心を口にすることはなかった。しかし、その表情は不安に満ちていた。

百姓の赤水が武家社会の中に身を置けば、要らぬ精神的負担を抱えることも多くなり、心身ともに疲れ果て、江戸で朽ちてしまうのではないかと心配で仕方がなかったのだ。

一方、七十五歳となっていた玄淳は、赤水が江戸に行ってしまうことを深く嘆いていた。「大出世したことで、とうとう赤水の価値も決まってしまったわ……」

玄淳の思いは、妬みなどという低次元のものではない。宮仕えすることによって自由が奪われ、貪欲な赤水の知識欲、好奇心、探究心が失われてしまうことを危惧していたのだ。

「私は地図作りを通して、情報の大切さを痛感致しました。田舎では情報が届くまでに数年かかってしましますが、江戸には国中の情報が時を移さず集まってきました」

「地図はもう完成しておるし、水戸へ参れば、立原殿からも情報が得られるではないか」

「今、私は時を得たと確信しております。百姓の私が侍講になれたということは、水戸藩も変革を切望している証拠ですし、長年、百姓たちが望んできた政治を実現できる好機だと思っております。決して立身出世に目がくらみ、江戸に行くのではありません。どうかこのことだけはご理解下さい」

黙ったまま、うなづく玄淳。

心ならずも、笑顔で赤水を見送るのであった。

十一月一日。江戸、小石川の水戸藩邸へと到着した赤水。

邸内にある儒学者たちの長屋の二階に、二十畳敷の部屋を与えられ、荷物の整理に追われる日々を送る。

それから数日後、神文血判（しんもんけつばん。指を切った血で押判した誓約書）の提出が済むと、ようやく治保に謁見する日が決まった。

十一月二十一日。

赤水は藩邸の大きな屋敷へ案内され、控えの間で脇差を預けると、仏頂面の役人たちが服装や所持品などを丹念に調べはじめ。

手荒い検査が終わり、ようやく腰を下ろすことができたかと思えば、今度は治保の到着を待たされることに。

静寂な空間とは対照的に、心臓は激しく鼓動し、玉のような汗が流れ落ちる。

緊張感がひどく長く続いたせいかわ、やがて軽い眠気にまで襲われる。

どれくらい時間が経ったのだろう。突如、一人の家臣が姿を現した。

「上様がおいでになられる。後に付いて参られよ」

長い廊下を進み、謁見の間へと通され、改めて治保の到着を待つ。

間もなく、遠くから近づく小さな足音。

赤水は急いで平伏する。

「面を上げ。そちが赤水だな」

「ご尊顔を拝し、恐悦至極に存じまする」

「赤水は天文学にも明るいと聞くが」

「はっ。小池友賢先生の下で学んでおりました」

侍講に相応しい儒学者は、藩内にも数多くいた。しかし、天文学に興味を持っていた治保にとつて、決め手に欠く候補者ばかりであり、満足のいくような侍講は見つからずいた。

ところが、赤水は儒学だけでなく、漢詩や天文学にも明るい。

治保は、すぐに意を決した。

「余は財政を立て直し、良き政を行いたい。そのために力を貸して欲しい。もし政道に誤りあれば、遠慮のう戒めてくれ」

「はっ」（思った通りの御殿様だ…）

治保の謙虚な姿勢に、深い感銘を受ける赤水。

再び、下問は続く。

「赤水は老いてなお、学び続けているが。なぜじゃ」

「恐れながら申し上げます。人は生涯学び続けねばなりません。人は学ぶことを止めたり、少しでも慢心しますと、私利私欲の心が大きくなり、獣のような振舞いをするようになってしまいます。これを防ぐ、唯一の手段が学問にござります。人は弱い存在であるがゆえ、

常に学び、自らを律することが大切なのです」

赤水の明確な答えを聞いた治保の表情は、みるみる明るくなった。

「赤水、今の気持ちを詩に詠んでみよ」

「はっ」

あまりにも突然の事態に、頭の中が真っ白になってしまったのだが、赤水は努めて冷静さを装い、目の前に差し出された筆と紙を手取る。

草野仁風そうやじんふうに遍あまねく

お殿様の人徳は、常陸の国の隅々まで知れ渡っております

白頭心未だ灰はいならず

私は白髪の老人になりましたが、学問に対する熱意は衰えておりません

黄金駿しげんを求むるの日

お殿様は立派な人材をお求めになっておりますのに

鷺馬燕台とじばえんたいに入る

私のような劣った者をお迎え下さったことは、身に余る名誉でございます

右みぎ謹んで命に応ず

謹んでお殿様の命に答え、この詩を献上致します

治保は詩を一目ただけで、赤水の内に秘められた深い情熱を感じ取った。「見事である」

「身に余るお言葉、ありがたき幸せに存じまする」

「明日からは、その才覚を水戸藩のために活かしてくれ」

「老体ではございますが、命の限り忠節を尽くします」

汚れない童のような治保の瞳。三十四歳の年の差、身分の差、あらゆるものを超越し、一人の人間として向かい合う真摯な姿。

それは、玄淳の塾を初めて訪れた日と同じ光景であり、学ぶことの素晴らしさを再認識させてくれた一瞬でもあった。

また、この年は、師の名越南溪が五月に亡くなっていた。

そして、常世（とこよ）の国では、南溪が盃を片手に、赤水を誇らしげに見つめていた。

「まさか、ここまで大成するとは…夢にも思わなかったのう…」

「今まで学んできたことを実践し、世のため、人のために学問を活かす時が来たのだ。しっかりと励めよ、赤水！」

決して届くはずのない声ではあったのだが、赤水の心の奥深くでは、南溪と同じ思いがふつふつと湧き上がっていた。まるで二人の思いが時空を超え、共鳴したかのように。

十一月二十二日。

謁見の興奮も冷めやらぬまま、赤水の激務が始まった。

治保への講義と口釈（講釈） 毎月三、八日

家老・若老・御用人・御目附・番頭衆への講義 毎月二、十二、二十三日

浪間左膳（なみのま・さぜん。治保の弟）への講義と口釈 毎月四、九日

徳川治紀（とくがわ・はるとし。治保の息子）の読書 一日おき

松平頼救（まつだいら・よりすけ。治保の弟。水戸家の御連枝、宍戸藩主）への講義

月に三〜四回

この過密な日程を、同僚の大場大次郎と共に勤めるのだが、赤水は頼救と浪間左膳の専任となっただけでなく、治保の要望により「唐詩選」の解釈まで勤めることになってしまったのだ。

また、治保・頼救兄弟は大変勉強熱心であり、赤水の博学さと人間性を慕っていた。このため、昼夜を問わず呼び出しがあり、熱が入ると、朝方まで講義を続けることもあった。

さらに治保の命によって、学問好きな小姓、菊地造酒蔵（きくち・みきぞう）、西村元倫（にしむら・もとみち）なども弟子となっていたのだが、より一層勉強熱心になり、詩や文章が上達したのは、赤水の教え方が上手いからだという評判まで立つようになっていた。

しかも、医者や武家の御曹司が赤水の弟子になりたいと渴望しても、全て断り、入門を許

可しなかつたので、赤水の名声は増々高まるばかりであつた。

このため、故郷からの便りに返事を書く時間さえ、なくなつていたのである。

毎日続く激務。

それでも赤水の俸給は、わずか七人扶持（一人扶持は一日米五合に相当）しかなかつた。米を換金しても、生活費の一切をまかなうには足りない。

しかし、米の一粒一粒には、百姓たちの血と汗と涙が込められている。

その苦勞を思えば、不平などという低俗な感情が生まれる余地すらなかつた。

むしろ、老境の身でありながら、大好きな学問を講じることができる。

その上、米まで頂戴できる。その有り難さ、百姓たちに対する申し訳なさ、感謝の気持ち。あらゆる思いが、複雑に絡み合い、錯綜していたのである。

四 『農民疾苦』

安永七年（一七七八）七月。侍講として多忙な日々を過ごし、時間に追われる毎日。

赤水はいつものように、口積を行う部屋へと向かう。

だが、その形相は硬く、時折、武者震いが全身を襲う。

懐に忍ばせた書状を強く握り締め、ゆつくりと障子戸を開ければ、警護の者たちが気さくに声をかけてくる。

脇差を預け、形式的な検分も済むと、赤水は静かに腰を下ろし、目を閉じながら治保の到着を待つ。

普段と変わらぬ一日が、今日も始まるうとしていた。

赤水は『芻蕘談』を書き上げてからというものの、いつしか百姓たちの窮状を藩主に伝えなければならぬと考えていた。

そして、侍講という千載一遇の好機を手にした赤水は、忙しい仕事の合い間を縫って、上申書『農民疾苦（のうみんしゅく）』を書き上げていたのである。

治保と間近に接し、貪欲に学問を学ぼうとする姿。

それは、まるで若い頃の自分を見ているようでもあり、民を思う仁愛の心が備わっている

と見込んだ赤水は、治保に献上する時機を見計らっていたのである。

もし、この直訴が失敗に終われば、死罪は免れない。

それでも、自分の小さな首を差し出すことで、故郷の百姓たちを救えるのなら、どのような罰でも受け入れる覚悟は出来ていた。

唯一、赤水の決意をためらわせていたのは、一族郎党を巻き込むことだけであつた。

脳裏に浮ぶ、お順や可愛い孫たちの笑顔…。

救民という大義を前に、赤水の心は揺れる。

（私がこの歳まで生き、侍講になることができたのも、人々を救うため。大事は義をもつて判断し、私情を挟んではならぬ。だが、そのせいで家族の幸せな日々を奪ってしまうかもしれない。どうか私の身勝手な行動を許しておくれ…）

間もなく、治保が部屋へと入ってきた。

（今日は二人の重臣を伴っている。狙い通りだ）

赤水は、あえて重臣が顔を揃える時を狙っていた。なぜなら、彼らを前に、治保が直訴を受け入れれば、後から覆すことはできなくなるからだ。

万が一、重臣に詰問されたとしても、それに反論できるだけの理論武装もできていたし、何よりも柴野栗山と議論を重ねたことが、大きな自信にもつながっていた。

赤水は腹を据えると、ゆっくり治保の前に進み出た。しかし、懐にかけようとした手が小刻みに震え、止まらない。冷水のような汗が体中からほとぼしる。

その様子を見た家臣の内藤右膳（ないとう・うぜん）。

鋭い眼光を放ち、低音で威嚇する。

「待て： その手を下ろせ」

「上様！ 何卒これを！」

赤水が必死の声を上げると、とつさに内藤の手が刀へと掛かる。

「貴様、どのようなことをしておるのか、わかっておろうのう！」

慌てふためきながら、治保の前を固める家来たち。

今にも刀を振り抜かんばかりの勢いで、赤水を取り囲む。

異様に白く輝く刃紋。首を刎ねられることを覚悟した赤水。

恐ろしさのあまり、目を開けることすら出来ず、手にした上申書が大きく揺れる。

「待て」

「上様、これは大罪にござります。お許しになつてはなりません」

「下がれ！ 赤水に無礼を働けば、余が許さん」

急いで下がる重臣たち。

「赤水、家臣共の無礼の段、許してやってくれ」

治保は赤水の前に立ち、農民疾苦を受け取ると、即座に読みはじめた。

農民疾苦（のうみんしゅく）

四民（士農工商）の中で、最も苦しんでいるのは農民であると、司馬温公（しばおんこう。中国北宋代の儒学者）も申しております。

彼らは寒い時も、暑い時も、田畑を耕し、草取りに追われています。体を濡らし、足を泥まみれにし、熱い太陽に照らされながら作物を作り、星が天を覆う時間まで働き続けなければ、身体を休めることさえできません。また、どれだけまじめに働いても、洪水、日照り、霜、ひょう、イナゴ、害虫などの災害が容赦なく襲ってきます。

幸いにして、無事、作物が実ったとしても、年貢と借金取りが、互いに先を争って奪い合い、まだ作物を収穫していかないにも関わらず、既に自分のものではなくなっているのです。手元には粃糠（もみぬか）や屑米さえ残っていないような状態でも、農民は田畑から逃れることが出来ず、農業で生計を立てていかなければなりません。ところが、出世欲に駆られた家臣たちは、年貢以外にも様々な手段を用い、農民から搾取をしています。年貢は足利時代の頃から、夏は麦、秋は稲で納める決まりとなっています。

太閤秀吉の時代になると、稲は粃、麦は金銭で納めることで、四割が年貢、六割が自分の所得となるように定められました。一見すると、税負担が重いように感じますが、諸役や軍役を全て免除されるのですから、重税ではありません。しかし、現在では、年貢以外にも貨幣鋳造などの公事に使役させたり、運送税や臨時の税を課して、利益を得ようとしているのは、司馬温公が言うところの『巧取百端（こうしゅひゃくたん）』の一つに該当します。

そして、現下の水戸家の藩政には、正すべきものが二つございます。先代のお役人が私利私欲を優先させたことに始まったものと思われれますが、この悪政が弊風（悪習）として残ってしまったために、人々は善いものとも、悪いものとも気づいておりません。

人徳があり、名君であられる治保公の時代に、この悪政を正さなければ、領民はいつまでたつても悪政に気づくことができず、苦しみ続けることになるでしょう。この水戸藩の悪政。それはお察しの通り、年貢の徴収方法が村々によって異なることです。

一 松岡郡の磯原・高戸・川尻では、年貢米を港から船で運び、水戸の河岸にある倉庫前で、再改め（再検査）を致します。そして、粃の質が少しでも劣っていたり、役人の意にかなわない場合には受け取ってもらえず、再び粃を持ち帰ったり、不足分を新たに徴収されることとなります。

この再改めでは業者を雇い、唐箕（とうみ）で検査をします。業者は米俵から粃を取り出すと、唐箕を勢いよく回し、わざと粃を吹き飛ばします。このため米俵の粃は量が減り、時には一俵位の不足が出て、価値も半分位になってしまいます。そして、吹き飛んだ粃は業者が持ち去り、役人には賄賂が渡されます。

こうした再改めによって、新たな年貢が生じておりますが、粃の検査は、既に地元の役人が行っております。さらに、豊作・凶作の作柄、土地の良し悪しは、正確に調査され、生産者の姓名まで把握されております。ですから、年貢米の検査には、少しの手落ちもあ

りません。一方、御家来衆の中山様、山野辺様が管轄されている地域では、役人が郷村に出向いて検査をし、そのまま水戸の倉庫に送られています。再改めなど行わなくとも、年貢が不足するようなことはありません。

しかも、再改めは庄屋に大変な手間がかかります。再改めで不合格となった米は、不足分が届くまで河岸に積まれ、翌年の春まで風雨の中に放置されます。これでは良い米も濡れて腐ってしまい、百姓が被害を受けるのは勿論のこと、結局は水戸藩も損をしていることとなります。無駄な経費がかかり、農民に莫大な苦痛が伴う再改めに、有益性はございません。

また、水戸藩で再改めが行われているのは、松岡郡の磯原・高戸・川尻だけであり、年貢米を船で運送することにも大きな苦難が伴います。年貢米を積み出す浜から、中ノ湊（那珂湊）までの海路は遠く、風も頻繁に変わるため、船を港へ入れることもできず、岸へ寄せられる場所もあります。沖に停泊することもできず、他藩の平潟湊に船を泊めて風が穏やかになるのを待っている状態です。暴風に遭えば、米俵を海中に投げ捨て、時には帆柱が吹き飛ばされ、遭難したり、遠い国まで漂流することもあります。これは他の村にはないことです。

このように、再改めは一部の村だけに苦勞を強いるものであり、利益を得ているのは再改めを行う役人と、そこに寄生する業者ばかりです。どうか再改めを廃止され、直接、藩の倉庫へ年貢米を納めるようにして頂きたいとございます。必ず御仁政となりますでしょう。

一 水戸藩には年貢米以外にも、三雑穀（荳・稗・大豆）という年貢がございます。荳（えごま）は納める量が少なく、稗（ひえ）は納付後、郷村の蔵に蓄えられ、飢饉の時には大切な食料となるため、百姓にとつても有益な年貢です。しかし、大豆だけは金銭で納めなければなりません。しかも、相場が安い秋頃には納付を受け付けず、相場が上がる時期に納めさせることで利益が出るよう、巧みに計算され、農民から搾取をしています。

さらに、土地がやせ、税を免除されている土地にまで課税をしているため、実質的には年貢を倍近く収めるようになってしまいます。ただし、百姓にとつても、水戸藩にとつても、全く利益のない再改めに比べれば、まだましな税金ですので、先ずは再改めを廃止することが大切です。

一 年貢高を決める方法には、定免法（じょうめんほう）と検見法（けみほう）があります。定免法は豊作・凶作に関係なく、毎年一定の年貢を納め、検見法は役人が作柄を調査して年貢高を決めます。定免法は年貢高が一定なので、豊作の時には税負担が少なく、凶作の時に税負担が極めて重くなります。これに対し、検見法は豊作の時に税負担が重く、凶作の時には税負担が軽くなる仕組みです。

定免法は、中国の夏の時代に用いられた課税方法ですが、当時の年貢はとても軽く、収穫高の一割程度でしたので、凶作の年にも餓死者が出ることはありませんでした。

そして、現在の我が藩でも、定免法を採用する村が多くなっておりませんが、真に農民の

ためを思うのなら、検見法を採用し、凶作の時でも生き延びられるようにしておくべきなのです。ところが、検見法は役人が年貢高を決めるために、どうしても賄賂が横行しやすいという弊害もあります。

荻生徂徠や太宰春台は、恣意性を排除し、不正ができないような仕組みにすることが、賄賂根絶につながると考え、定免法を強く推奨しております。確かに、彼らは博学で多才な人物であり、正論のように聞こえます。しかし、彼らは優秀すぎるが故に、庶民の人情、特に百姓の心情については理解することができず、結局は、机上の空論となっております。私は検見法を強く推奨しておりますが、その理由は左記の通りでございます。

一 現在の百姓の風俗・心情を見聞しますと、皆、目の前の欲得ばかりを追い、将来の危機に対して備えるということを致しません。善人は他人が楽しんでる時に苦勞をし、他人が苦勞をしている時に樂ができるよう、考えて行動をしておりますが、そのような人物は皆無に等しい状況です。

大半の人間は、今日の楽しみを追いかけ、明日の苦勞からは目を背け、辛い現実から逃れることばかりを考えております。これを『朝四暮二の猿智恵』と申します。

このような愚人に定免法を認めてしまうと、豊作の年には自分の取り分が増えますので、飲み食い、衣服や器物の購入など、目下の享樂にふけり、将来に備えて貯金もしません。このため、凶作の年は一気に生活が苦しくなり、税金も払えないので、借金をして目の

前の苦しみを乗り越えようとしします。

しかし、借金を返せるほどの収入が元々ないので、返済は先送りしなければなりません。この間にも借金の利息と元本は増え続け、五兩の借金も、四〇五年の間には十兩にもなつてしまいます。そのため、田畑や妻子まで売り払い、借金返済に充てております。これを困窮百姓と申しますが、皆、『朝四暮三』の愚行を繰り返し、『朝三暮四』の儉約をしないからです。

今の水戸藩に必要なのは、百姓の心理を理解した政治であり、愚民に定免法を許さず、お金も貸さぬことです。もし、これらを許すということは、『毒』以外の何物でもありません。そして、定免法には高い危険性が潜んでいるにも関わらず、近年では定免法の申請が相次ぎ、定免法が採用される村々が増えております。また、幸か不幸か、定免法が多く採用されてからは、凶作の年がありませんので、皆、得をしていると勘違いをしております。

しかし、最近の作柄は、中作（豊作でも凶作でもない状態）が続いており、実際には定免法でも検見法でも、大した差はありません。

この定免法は、中民（中級程度の農民）、庄屋、組頭などが最も支持をしておりますが、極貧は元来、収入がきわめて少なく、豊作であつたとしても、自分の取り分が増えることはありません。ですから、極貧が生き延びるためにも、凶作になつた時に年貢が少なくなる検見法の方が、有り難いのです。小民に至っては、損得勘定も出来ませんし、庄屋や組

頭の意見に背ける者もおりませんので、定免法を支持しますが、凶作が続けば、必ずや後悔することになるでしょう。

さらに飢饉になれば、百姓たちには藩からお救い米が支給されます。この財源は藩の蔵から抛出されるものであり、豊作の時に蓄えたものです。しかし、定免法を採用すると、豊作の時に藩の取り分が少なくなり、お救い米が確保できません。最終的には百姓たちが苦勞することになります。そのようなことを理解できるはずありません。

かつて光圀公の時代には、農民が作柄を調べ、年貢高を決める小検見法が行われており、他国の農民たちは、この仁政を大変、うらやんでおりました。

太宰春台などは水戸の小検見法も、定免法の問題点も知りません。ただ、役人の賄賂という面だけに着目し、定免法を主張しております。

当然、小検見法も状況によつては、定免法に劣ることが稀にありますが、何事にも弊害はございます。ましてや、年貢の決め方を改めれば、解決するということでもありません。

近年、子供の数が少なくなつたことで、労働人口が減り、田畑はあつても手入れができず、定免法、検見法のいずれを採用しても、年貢高が減る傾向にあることが、根本的な問題なのです。人は水と同じであり、米を作るにはこの二つが欠かせません。

平磯村のように子供が多いところは、働き手も多く、定免法・検見法のいずれでも上手くいっております。元来、百姓とは貧乏になつてしまう存在ですが、子供が多ければ奉公に出す家が増え、労働力も潤沢に供給されるため、水戸藩の生産力は高まります。

しかしながら、水戸藩では人口が少ないため、小民は財産を増やせず、大民は労働者を雇うことが出来ずに生産量を落とすし、大変苦勞をしていると聞きます。

以上のように、定免法から検見法に変えるべきであるという、私の主張は、全て米の損得に起因するものであります。

一 百姓の貧困の多くは、借金から始まります。

新しい絹糸は、五月に出来るものですが、お金を早く借りたいがため、まだ出来上がっていない絹糸を売る約束をし、二月にはお金を借りてしまいます。この地方では、これを『前金を取る』と言います。

他にも、五月になると、まだ収穫していない雑穀や八月に収穫できる新米を苗のうちから売り渡す約束をして、お金を借りてしまいます。

宋の王安石（おうあんせき）は、これを『青苗金（せいびょうきん）』といい、水戸藩では『勅金借り（もみきんがり）』と言います。

お金を借りるのは、わずか六ヶ月に過ぎませんが、借りた時の米の相場は高く、反対に米を売る時の相場は低くなるため、かなりの損をすることになります。その上、利息が加算されますから、やがて借金は二倍程度にまで膨れ上がります。

本来、借金とは、種を買うなど、お金を増やすために使うものでありますが、貧農たちは飲み食いや生活費などに消費してしまうため、お金を増やすことができず、借金が返せ

なくなってしまうのです。

また、貧農にとつて『目の前の傷を薬で治す』ような借金は悪いものですが、飲まず食わずで、餓死するわけにもいきませんので、お金を借りてしまいます。しかし、借金によつて目の前の危機を乗り越えることは出来ても、それは目に見える傷を治したに過ぎず、根本的な治療をしていなければ、傷は深くなり、やがては命にかかわるような大病へと、つながってしまいます。つまり、急場をしのぐための借金は大きく損をし、身体の肉を切り取られるように痛むものですが、貧農はこのようなことも理解できません。

お金を借り、生活の苦しきから一時的に逃れることが出来たとしても、結局は元本返済で苦勞することになります。あるいは利息を返済できても、元本がまだ残っているような場合に不幸が重なり、返済が困難となれば、家財や妻子まで売り払うことになってしまいます。それでも借金を完済することが出来なければ、年を重ねるごとに借金は増えてしまいます。一時しのぎのために借金を増やし、利息を滞納していると、さらに元本が返済できなくなるため、新たな利息が加わり、三〇四年の内には借金も倍に増え、完全に返済することが出来なくなり、そして、家の財産を一度失えば、再生は不可能となり、子孫を増やすこともできなくなってしまうのです。

故事によると、宋の太宗（たいそう）は「戒石銘（かいせきめい）」という碑を役所の前に建て、『家臣や役人の俸給は、農民の汗と身体が結晶となったものである。農民は虐

げやすいからといって、搾取をしていると、必ず天罰がある』と刻んだそうです。

今の水戸藩の再改めは、まさに農民を虐げるものであり、不躰ながら、藩の行く末を心配致しております。

農民は弱い存在であり、虐待しやすいものでしょうが、天は上に立つ者の行いを見ており、ごまかしきれるものではないと思います。

願わくは、無益な虐待を受ける不幸な農民に、上様の明德の光を照らし、お救い下さい。私は身分の低い家臣にすぎませんが、この首をかけて言上仕ります。

そして、上様が国家の安泰を願うのなら、どうかこの虐政を取り除いて下さい。

もし、私の述べたことに、少しでも私利私欲がございましたら、どのような罰でも、お受け致します。太陽や月のように、公平に民衆を照らす。それが名君にございます。誠に恐れ多く、死罪覚悟の上申書に臨み、私は感涙に咽んでおります。

長久保玄珠

拝上

さらに赤水は、懐から一枚の紙を取り出し、治保へと差し出した。

農を憫むあわれ

春に種まく 一粒あわの粟ま

春に粟の種を一粒種けば

秋おきに収とむ 萬ばん顆かの子み

秋にはたくさんの実が採れる

四海しかい 閑田かんてん無なけれど

耕していない田など、どこにも無いけれど

農夫なう 猶なお餓う死しす

それでも餓死する農民がいる

禾かを鋤すきて 日ひは午ごに当あたり

稲を鋤いていると、熱い日差しが照りつけ

汗あせは滴したる 禾か下かの土つち

したたる汗は、稲の下の土に落ちていく

誰たれか知しらん 盤ばん中ちゆうの餐せん

誰が知っているのだろうか 茶碗の米の

粒りゆうりゆう 皆みな辛しん苦くなるを

一粒一粒が、農民の苦役の結晶だということを

「これは李紳（りしん。中唐の詩人）の詩にござりますが、『戒石銘』同様、中国でも百姓たちは虐げられております。この上申書に書かれてあることは、私が領内で目にしてきた百姓たちの真の姿にござります。どうか彼らの艱苦をお察し下さい」

赤水は平伏しながら、治保に必死の訴えを続ける。

「恐れながら：曾子（そうし）の『我、日に我が身を三省す』という言葉にもございますように、上様の欲望の化身が、民にござります」

「民が余の欲望？」

「欲望を放置すれば理性を失ってしまうように、民も放置をしていると、好き勝手なことをするようになります。これを防ぐ手立てが御法度でございますが、法とは民を縛り付けるものではなく、上様の良心から生み出されるべきものです。民を心から愛し、民の幸せを願う心から、真の御法度が生まれるのです。そのためには、先ず上様が、自らを省みることが肝要にござります」

「赤水の忠告、確かに承知した」

農民疾苦を読み終えた治保は、いつになく真剣な表情となっていた。その様子を見た赤水。やっと胸を撫で下ろすことができたのである。

今、頬を伝う涙。それは農民疾苦を書き上げた時の涙とは、違っていた。

あの時の涙は百姓たちの苦渋の涙であり、家族を死に巻き込むことへの自責の涙であった。だが今は、明るい未来に対する希望の涙に変わっていたのである。

この後、「再改め」の制度は廃止され、「三雑穀切り返し之法」は赤水没後、天保の時代になつて廃止されることとなつた。

五 日本から世界へ

赤水は『日本輿地路程全図』を完成させながらも、まだ満足することができなかった。なぜなら、地図があまりにも大きすぎて、持ち運びに不便であったからだ。そして、わずかな暇をみつければ、縮図化の作業を続けていたのである。

安永七年（一七七八）十二月。

ついに、『改正日本輿地路程全図』を完成させると、早速、保治へと献上した。

治保と弟の頼救は、赤水の地図を何度か目にしており、実用的で精度の高い地図の完成を心待ちにしていたのだ。

「赤水は、膨大な情報を集め、検証し、そこから正確な地図を作った。大日本史編纂で安易な執筆を戒めていた光圀公を彷彿とさせる」

「義公様とは恐れ多いことです。ただ義公様も、私も、後世の人々に役立つものを残したいと、強く願っている点においては、全く同じにござります」

赤水の言葉を聞いた治保は、すぐさま家臣を呼びつけた。

「これほどの地図を埋もらせたとあっては、水戸家としての沽券にかかわる。余は地図発行を認めることとする」

この時代、国防上の理由から、精度の高い地図の発行は禁じられており、庶民が手にしていた地図も精度の低いものばかりであった。しかし、この治保の英断によって、正確な地図が世に行き渡る、きっかけを作ったのであり、極めて画期的なことでもあったのだ。

こうして、徳川御三家である水戸家のお墨付きをもらった『改正日本輿地路程全図』は、安永八年三月、大坂の版元、浅野弥兵衛（あさの・やへい）の浪華書林（なにわしよりん）へと送られ、版木に彫られはじめた。

安永九年（一七八〇）二月。

赤水の元に、刷り上がったばかりの『改正日本輿地路程全図』が届く。

地図作成を志してから二十八年。これまでの苦勞が報われると同時に、地図作りを支えてくれた木村兼葭堂、古川古松軒など、数多くの人々の顔が浮んでは消え、感謝の念で目頭が熱くなる。

そして、店頭に並ぶ地図をこの目で確かめたいと思った赤水は、日本橋通りにある書店街を訪ねることにした。

山崎金兵衛の店先には、長さ五尺（一・五m）、幅四寸八分（十四・五cm）の看板が掲げられており、真ん中には、「改正日本輿地路程全図」の大きな文字。右側には『水戸の儒学者 赤水先生著』、左側には細い文字で『この地図は尺度を地の距離に合わせ、六十余州の山嶽、

江河、城、郷村、神社仏閣、名所旧跡、街道・宿場、港などが記載されており、とても便利である。また、津々浦々の島々が漏れなく書かれ、図面には碁盤のような線もあり、地形方位が精密に記されている』とあった。

すぐさま店先をのぞくと、一番目立つ所に、赤水の地図が並んでいる。値段は、折り畳み式の地図が二十五両（約二百五十万円）、中彩色の地図で二十一両五分。その金額の高さに、赤水自身、驚いてしまったのだが、版元の労力を考えれば、初刷りはどうしても高い値段をつけざるを得ない。それでも、この地図がたくさん売れば、値段も下がり、やがては庶民にも手が届くようになるのだ。

天明二年（一七八二）『改正日本輿地路程全図』は、その精度の高さから、識者の間でも注目の的となっていた。だが、南部藩・津軽藩近辺の情報が足りず、完璧さを追求する赤水にとっては、大きな心残りとなっており、機会があれば、松前藩（現在の北海道松前郡松前町）にまで渡って、地図を修正し、末代の宝にしたいと考えていた。

しかし、侍講や治保公の下問に追われ、過密な日程をこなす身にとって、この願いは到底叶えられそうになかった。

そのような中、今日も朝早くから机に向かう赤水。

中行が小首をかしげながら、声をかけてきた。

『先生にお会いしたいと申す者が来ておりますが、素性も知れませんが、身なりも粗末です

ので、お断りしましょうか?』

『いや。外見で人を判断してはならぬ。座敷にお通しせよ』

しばらくして、赤水が現れると、その男はひょうひょうとした雰囲気で口を開いた。

『南部藩出身の川村寿庵（かわむら・じゅあん）と申します。今は江戸で町医者をしておりませんが、諸国を旅し、山に登るのを何よりの楽しみといたしております』

『ほう。諸国を。それなら地理にも明るいのでは?』

『ええ。本日お邪魔したのも、実は赤水先生の地図に関することで…』

『私の地図?』

『はい。津軽藩や南部藩の地理について、修正すべき個所をお伝えしようと思ひまして…』

川村はおもむろに地図を取り出すと、南津軽の地理について詳細に語りはじめた。

すぐさま身を乗り出し、地図を食い入るようにつめる赤水。

長年、探し求めても手にできなかつた情報が、あっけなく目の前で解決されてゆく。

まるで夢を見ているかのような状況に、幾度も我が目を疑った。

『早速、地図を修正したいので、これらをお借りできないでしょうか!』

『もちろんです。そのために持参いたしましたので』

『ありがとうございます!』

赤水は小躍りしたい気持ちでぐつとこらえながら、何度も礼を述べると、即座に川村の地図を描き写し、十里を一寸に縮尺した図案を完成させ、これまで修正した他の地域と共に、

大坂の版元へと送った。

しばらくして、改刻し、摺り直された箇所が届くと、赤水は『改正日本輿地路程全図』へと貼り付けた。そして、正確な地図へと置き換わった津軽・南部、大和南部、春日大社、五畿内（山城・大和・河内・和泉・摂津）の辺りを何度も指でなぞり、時折、うっすらと頬を緩ませては、いつまでもいつまでも地図を見つめ続けるのであった。

まるで時が過ぎるのを忘れてしまったかのように

その後も、様々な知識人から有用な情報もたらされたことで、精度もいつそう高まり、ついには海賊版が出回るほどの人気を博した赤水図は、庶民たちが手にできる、唯一の精巧な地図となり、伊能図が明治四年に解禁されるまでの約百年間、人々に愛され続けるのである。

天明三年（一七八三）七月。浅間山の大噴火により、死者数は二万人にもものぼり、利根川の氾濫や火山灰によって、農作物も大きな被害を受けた。また、この年は天変地異や冷害により、各地で飢饉が発生。数多くの餓死者が出るなど、社会不安が高まっていたのだが、今の赤水にできることは、たとえ苦しい状況下にあっても、向学心を失わないことだけであった。

そして、次なる目標は、世界地図の製作へと移っていた。

長崎と大坂で世界の地理に関する知識を得た赤水。この貴重な経験を活かし、正しい世界観を世の人々に広めなくてはならぬという、強い使命感に燃えていた。

しかし、それ以上に赤水を突き動かしていたのは、未知の分野に挑戦する度に、母から文字を教わった時のような、えも言われぬ充足感であった。まるで母との思い出の隙間を埋めるかのような不思議な感覚。赤水はそれを追い続けていたのである。

たとえ厳罰に処され、地位や財産、あるいは命までが奪われようとも、学問の発展に人生を捧げた赤水の強固な意志。それを阻むことは、もはや誰にもできなかったのだ。

やがて、赤水の世界地図は、思いを同じくする有識者の間に広がり、幕末の志士たちによって、大きな影響を与えることになるのであった。

【赤水の手掛けた世界地図】

天明五年「大清廣輿図（だいしんこうよず。中国地図）」を水戸藩に献上

天明五年「改正地球万国全図（世界地図）」刊行

天明八年「地球万国山海輿地全図説（世界地図）」刊行

寛政元年「唐土州郡沿革図（中国の歴史地図帳の原型）」

六 玄淳の死

天明三年（一七八三）三月。久方ぶりに、赤水からの手紙が玄淳の元へと届く。八十歳をすぎ、病床に伏せることが多くなった玄淳。

妻に背中を支えられながら、手紙を読みはじめると、そこには決して知ることのできない水戸藩の内情が記されてあった。

鈴木 玄淳 様

新年の御祝詞、有り難く拝見致しました。先ずはご長寿が叶い、御幸運にも恵まれ、めでたにお歳を召されますこと、お祝い申し上げます。

こちら江戸では、治保公のご機嫌も大変良く、不才の私は、ただ犬や馬のように、一つ一つ歳を重ねております。

従者が昨年十二月に風邪をひき、私も出勤を控えておりましたが、春には治りました。しかし、釣藤散（ちようとうさん。漢方薬）が不足しており、現在も通風のような痛みが、

朝から夜中まで続きます。

正月中は釣藤散を服用し、汗をかけば痛みも止むだろうと思つたのですが、夜はひどい寝汗、昼は通風のような痛みがあつたので、昼夜を問わず、書物を見て過ごし、気分を紛らわせておりました。その後、医者の方図にまかせ、故意に出勤を二月一日まで引き延し、月代

も整えず、のんきに過ごしておりました。

近々、治保公の御下国もあると思いますので、その時は、お供として帰国し、お目にかかることが出来るでしょう。それまでには侍講の職を辞し、隠居する願いも了承されるはずですから、頻繁にお会いすることも叶うでしょう。昔のように、心通わせる日を待ちかねていらつしやることは存じますが、何卒、私の愚かな立ち回りをお察し下さい。

私は遠遊（えんゆう。遊学や遠くへ旅すること）が好きです。元氣な内に、松前蝦夷の辺りまで見究めてみたいと思いましたが、もはや老衰の身であり、この望みは叶わないでしょう。私も歳をとったので、田舎に戻って暮らすことを考えてはみましたが、色々な事が目に入るようになれば、口やかましくもなってしまうでしょう。そうなれば、子供たちにとつても不幸ですし、嫁姑もさかんに反目しあうでしょう。

そのような雑事に悩まされたくないのです、体ひとつで遠遊に出て、最後は鳥獸や魚の餌にでもなればと思っておりますが、その願いは天命によって叶えられそうもないので、東方朔（とうぼうしやく。武帝時代の政治家）のように、俗世にありながら、俗世を超越した生き方をしたいものです。

幸いにも治保公は学問を好み、恐れながら友のように接して下さり、昼夜忙しく、学問を楽しんでおられますので、これもひとつの遠遊として楽しんでおります。

もし、郷里に居住していれば、俗客を相手にしたり、婆さん・孫・子供たちの病気を心配することになります。それ以外にも、不快な話を聴いたり、あるいは米の値段が安いとか、

稲が不作であるなど、喜ばしいことや思いつきり笑えるような日は、一日もないでしょうから、郷里に住んでいるよりは、江戸に居る方が良いと思います。

しかしながら、江戸に居たとしても、安泰ではありません。もし、彰考館総裁にでも就任しようものなら、俗務に勤務時間の大半が奪われてしまいます。家臣への対応、仕事の配分や指示などの業務も多いため、私には一日も勤まらないでしょう。

幸いにも、私は頂戴している扶持や地位が低いため、治保公・弟君・若殿様の学問のお相手ばかりです。彰考館の俗務には一切関わることもないので、何の苦勞もなく、楽しく勤めております。ただ、月に三度の表講（おもてこう）では口釈を勤めておりますが、家老から番頭までが出席されるので、こればかりは面倒でした。でも、今では慣れてきたせいか、あまり迷惑とも感じなくなりました。

近頃、私が嬉しく思うことは、治保公と頼救公のお二方が、学問に励んでおられることです。私が侍講になって以来、一日たりとも怠ることなく、日々ご上達なされ、昨年の冬には唐本をすらすらすらと暗誦してしまい、彰考館の総裁などを困らせております。

また、ご同席される場合には、本文を私に読ませ、解釈はご自分でなされますが、私よりも大変優れた内容となっております。

その他、槍、馬、剣術みな勝れ、毎日、御稽古を復習されるため、治保公にはお暇がありません。夜には書道の御稽古もなされますので、昼夜のお忙しさは、恐らく私と同じくらいだと思います。その上、情が深く、度量も大きいため、側近の従者を咎めることもございま

せん。

酒宴、三味線、小唄等の遊芸等は、甚だお嫌いにございますが、鷹狩と猿楽（さるがく・能と狂言）だけはお遊びになられます。猿楽は時々、私も拝見させて頂きますが、謡い（うたい）も、舞いも、極めて上手にございます。昨年冬の忘年会では、治保公・頼救公・左膳様の御三方が、それぞれ舞を披露されましたが、それは実に見事なものでした。

義公様同様、治保公も多趣味な、お殿様にございます。

ただ、義公様の時代は財政が豊かで、蓄えも多く、学問のためにお金を費やすことも自由にできました。その上、お忍びで遊び興じることでもできたと、お聞きしております。

ところが治保公の代になると、御先代からの大借金、火災、洪水が重なり、お金や穀物がとても不足しております。義公様のご時世とは異なり、財政が逼迫しているために、せっかく立派なお殿様であっても、義公様ほどの名声を得ることができませんし、お遊びになることもできません。

何万両もの借金を抱えてしまったのは、水戸、江戸で火災が相次ぎ、その修理にお金をかけすぎた報いであると言われておりますが、借金は治保公が御幼少の時にできたものです。財政が悪化してしまったのは、お殿様の才覚のせいではなく、家老たちに任せつきりにしていることにあります。

また、三代続けて京都から御正室をお迎えになり、多額のご婚礼費用がかかってしまいました。したが、これも治保公がお生まれになった時、御先代がお決めになったことであり、治保公

のご才覚とは全く関係がありません。

今となつては、立派な家臣でも現れぬ限り、財政や治安の再建策も、ままならないでしょう。

治保公がお嘆きになられても、どうしようもないことですが、これを天命として受け止められてお姿は、おいたわしい限りでございます。

表面上は、家老殿の凡俗な意見に従い、成り行きにまかせて月日を送っておられますが、治保公の心の内をお聞かせ下さった時には、幾度となく感涙を催してしまいました。

百人一首の『人もをし 人もうらめし あぢきなき 世を思ふゆえに 物思ふ身は』の歌のように、ある時は、人をいとおしく思い、またある時には、人を恨めしく思う。この世は思い通りにならないものだから、あれこれと思ひ悩む。まさに治保公も、後鳥羽院と同じ心境にございますことをお察し下さい。

治保公は人間性にも優れ、いにしえの名君のような、ご性質がお有りになりながら、正当な評価を受けていないのは、大変残念なことです。ただただ悪い時代に、お生まれになつてしまった御境遇に涙を流し、私もあれこれと心を悩ませております。

いつになつても私が故郷に戻らずにいるのは、立身出世のためであり、主君に気に入られようと賄賂を贈っている。そのように、私のことを見下しているのではないかと心配になり、くどくどと、私の本心をお知らせ申し上げました。

二月二十七日

長久保赤水

赤浜を離れ、間もなく六年が過ぎようとしていたのだが、今もなお、赤水の心の中には、別れ際に見せた、玄淳の物寂しげな眼差しが引っかかっていた。

しかし、この手紙によって、治保の苦悩を垣間見ただけでなく、赤水が治保の心の大きな支えとなつていることに気づいた玄淳。

長い間、胸の奥につかえていたものが、ようやく消え失せた瞬間でもあった。
(赤水を江戸に行かせたのも、間違いではなかったようじゃなあ……)

天明四年（一七八四）四月。郷里から急な知らせが届く。

そこには、玄淳が三月二十六日に亡くなった。とだけ記されてあった。

享年八十二歳。赤水の才能を見抜き、育んでくれた玄淳。

その優しい笑顔が脳裏に浮かぶ度、ため息にも似た声が漏れ、泣き伏す赤水。

大切な肉親を失ってしまったかのような凄まじい悲嘆と、一人残される淋しさ。

うつろな心の中には、ぼっかりと穴が空き、空虚感だけが漂い続けるのであった。

玄淳はその生涯の中で、二冊の書物『百姓日用訓』『唐詩平仄考（とうしひょうそくこう）』の尽力により天明七年に出版』を著していた。『百姓日用訓』は、平易な文章で法律、農作物の育て方、農事暦、蓄財方法、農民がどのようにに生きるべきかといった心得までをも説いた実用書であり、他藩の寺子屋でも教科書として用いられた。『唐詩平仄考』は、漢詩で重視

される発音上の決まりをまとめたものであり、唐詩を学ぶための専門書でもあった。決して出世を望まず、生涯を片田舎で過ごし、農民に生きる意味と誇りを諭し、人材育成に捧げ続けた人生。

赤水は玄淳の人柄を偲びながら、追悼の詩を詠み、静かに冥福を祈るのであった。

松江盧翁を追悼す

こじんすで

故人己に白雲の郷に去り

林下の交友夢一場

頻りに聴く天辺啼血の鳥

當に知るべし地下の脩文郎

朱絃空しく絶え山河邈なり

玉樹長に埋れ日夜傷む

千里何ぞ堪ん思旧の涙

珠頭試みに炷す遠魂の香

師友のあなたは仙郷（あの世）へと去ってしまい、

木陰で心を通わせたあの頃も、はかない夢となりました

（亡くなった人の声を伝える鳥といわれる）ホトトギスの鳴き声が、

遠い空から、しきりに聞こえる

あなたは今頃、あの世で脩文郎（官職）になっておられるのでしょうか

美しい琴の音が絶えただけでなく（親しく自分を理解してくれた友を失っただけでなく）、故郷の山河までもが、遙か遠くにあります

尊敬するあなたは、あの世に行き、私は日夜悲しんでおります

昔を偲ぶたびに、涙が出るのを抑えられませぬ

遠くに去ってしまった魂を呼び戻せないだろうかと思ひながら、霊前に香をともしております

七 最後の大業

天明六年（一七八六）十一月。この年も大雨が続き、赤浜村でも凶作が続く。赤水は六十九歳（数え七十歳）となり、隠居格の身分となった。

通常、隠居格ともなると、扶持米は支給されないのだが、治保からは七人扶持、頼救から三人扶持を賜るなど、重臣なみの厚遇を得ることとなったのである。

さらに治保は、大日本史の地理志編纂（ちりしへんさん）の任を赤水に命じた。

大日本史とは、日本の歴史をまとめたものであり、徳川光圀によって開始され、光圀の死後も水戸藩の事業として継続された大歴史書である。

赤水が担当することとなった地理志は、日本六十余カ国の変遷を風土記などの資料から、まとめ上げるものであり、膨大な数の資料を必要とする大仕事でもあった。

このため、約一ヶ月間、準備に追われることとなる。

そして、編纂方針は固まった。

だが、ざっと見積もってみても、赤水の余命では足りない。

自分の天命を悟った赤水は、子孫のため、そして何よりも、自分を奮い立たせるため、「家訓」を書き上げることにした。

家訓

親を大切にすることは徳の源である。我が子孫なら、これをよく守り、実行しなさい。天がもたらす好機、地の利を得るためには身を慎み、出費を抑え、親孝行に全力を尽くしなさい。主君に仕えては、身を粉にして働き、親友には嘘をつかず、分け隔てなく民衆を愛しなさい。

仁徳のある人に近づき、師として学び、それでも余力があるならば、書物から学びなさい。朝は早く起き、夜は早く寝て、田畑を耕す時にも書物を持ち歩き、寸暇を惜しみなさい。これが、子としての道を尽くすことである。

親不孝は五つ。

- 一 働かないこと
- 二 博打や酒に溺れること
- 三 金や私欲を優先し、妻子を溺愛すること
- 四 世論や大衆の風潮に流され、欲望に従って行動すること
- 五 勇ましさを好み、人と争い、道に外れた行いをする事

これらの悪行を戒め、誠心誠意を心がけ、自分のためにならない者を友とせず、誤りがあれば、躊躇することなく、速やかに改めなさい。

金持ちになつても奢らず、貧乏になつても、へつらうことはない。民としての義務を果たし、天地万物の神靈を敬いつつも、これらに頼つてはならない。礼を重んじ、争いは避け、節操を堅く守り、人の過ちを許しなさい。もし、この家訓を守らず、私利私欲に走り、色に溺れる者であれば、我が子孫ではない。よくよく慎みなさい。

それから数ヶ月後。

門弟などの助手を用いず、自ら地理志の執筆を行う赤水。その編集作業は困難を極めた。侍講を勤め、治保や頼救の下問が続く中での、昼夜を問わない作業。睡魔に襲われれば、机よりかかつて四時間ほど眠り、目が覚めれば、再び作業に取り掛かる。

地理志に関係のないことは一切何もせず、手紙も交友も絶つ。そうすることで、作業時間を捻出していたのである。

驚異的な精神力を見せる一方で、翠軒には「日暮れて道遠し」と書いた手紙を送るなど、余命いくばくもない赤水にとつて、地理志は果てしなく続く道のようにでもあった。

実際、奥州に関する草稿では、白河から津軽までを記しているが、その原稿量は二百頁にも及び、幾度も校正が加えられた草稿は、朱色に染まっていた。

まるで血塗られたかのような、威圧感さえ感じる草稿。そこには、赤水の苦悶と光圀以来の大事業に携わる者としての心魂が、投影されていたのである。

奥州に関する草稿（抜粋）

白河の関は、孝徳天皇が即位して二年後に設けられたものであり、諸国の関のはじまりでもある。かつて、関所は旗宿（はたじゆく）の集落から古道を過ぎた辺りにあった。

左右は険しい山に囲まれ、道が狭いことから、東道の急所となっており、辺境の地の要害でもあった。

白河といえども大河はなく、水流の少ない溪谷のような川が流れている。

また、秋風と紅葉の風景がとても美しく、多くの和歌にも詠まれているのだが、平兼盛（たいらの・かねもり。三十六歌仙の一人）が関を越える時に詠んだのが、歌枕（和歌に多く詠まれる名所旧跡）のはじまりとなっている。

古今著聞集には、能因（のういん。中古三十六歌仙の一人）の

「都をば霞とともに立ちしかど 秋風ぞ吹く白河の関」が秀逸とある。

源頼政（みなものよりまさ。平安時代末期の武将・歌人）は、

「都にはまだ青葉にて見しかども 紅葉散りしく白河の関」と詠み、

梶原景季（かじわら・かげすえ。平安時代末期の武将）は、

「秋風に草木の露を払はせて 君が越ゆれば関守もな」と詠んでいる。

こうした有名な歌によって、秋風や紅葉を詠むときに、「白河の関」が使われるようになったのである。……………

地理志の編集作業は、数多くの資料を探し出すところからはじまる。

そこから歴史をひも解き、検証を重ねてゆかねばならず、非常に根気の要る仕事でもあった。

しかし、風土や文化を探究することは、この国の成り立ちや日本人の起源を知ることに通ずるのであり、正しい未来を作るためにも必要不可欠な仕事なのだ。

また、高齢となり、大好きな旅に出ることのできない赤水にとつて、編集作業そのものが旅となっており、地理志は決して強いられた仕事ではなかった。

目をつむれば、赤水の背中には羽が生え、未知の場所でさえも、今、その場に立っているかのように、様々な風景が瞬時に浮かぶ。

まさに地理志は、旺盛な好奇心を満たしてくれる、もうひとつの天職となっていたのである。

赤水にとつて、唯一の心残り。

それは、完成した地理志を決して目にする事ができないということだけであった。

八 春雨の宴

寛政二年（一七九〇）十一月十五日。

治保が藩主に就任して以来、初めて国許へ戻る日。その中には赤水の姿もあつた。

水戸藩には参勤交代がなく、江戸住まいとなつてゐる藩主が領内へ戻る際には、千を超える人馬の大行列となる。また、御三家としての威厳を保つため、随行する人数を増やし、服装も華美なものへと様変わりしていた。

しかし、治保は前例を破り、質素な行列へと変えてしまつたのだが、それがかえつて行列の荘厳さを際立たせていたのである。

寛政三年（一七九一）三月二十五日。

治保は歴代藩主の眠る瑞竜山から、松岡郷にある赤水の屋敷を目指していた。

一方、故郷の赤浜村では、百姓の家に藩主がお成りになるといふ未曾有の大事件に、人々は色めき立ちながらも、約十四年ぶりとなる赤水の帰郷を、今や遅しと待ちわびていたのである。

程なくして、行列の先頭が見えはじめると、駕籠に乗つた赤水が姿を現す。それから少し遅れて、治保を乗せた駕籠が到着。

赤水は、ゆつくりとした足取りで、治保を松月亭へと先導する。

松月亭は、赤水隠居のために建てられた庵であるが、治保を迎えることが決まってから、急遽、設計を変更し、昨年うちに完成させたものであった。

初めて見る庵。母屋の隣には茶室もあり、思いの外、立派な出来栄え。当初抱いていた赤水の不安も消え去った。

真新しい木の香り漂う茶室に治保が着座すると、赤水は母屋へ下がり、下座で平伏していた家族が酒や肴を運ぶ。並べられた料理は、わらびなどの野草や粗末なものばかり。だが、この時期に用意できる、これが精一杯のもてなしでもあったのだ。

「辺びな田舎ゆえ、江戸のようなご馳走も用意できず、誠に申し訳ございません」
「案ずることはない。かえって野宴の趣が深まるというものだ」

そう言つて、治保は質素な酒肴（しゅこう）を大いに喜んだ。

やがて酒の進んだ治保が、赤水の家族十五人を近くに呼び寄せ、気さくに話しかければ、松月亭は和やかな雰囲気包まれる。

庭に降る雨を眺めながら、杯を口にする治保。

静かに詩を詠み、赤水へと与える。

春雨昼蕭寂たりしゅんうひるしやうせき

昼の春雨はもの寂しい

閑行草堂を過るかんこうそうどう

閑行して赤水の草堂を訪ねて来た

慇懃なり、主人の意いんぎん

もてなす主人は礼儀正しく、真心がこもっている

談笑更に觴を傾くさかずき

打ち解けて、楽しく語り合い、さらに杯をかたむけた

赤水も和して詩を詠む。

赤水蒼海に臨むそうかいのぞ

この大海に臨んだ赤浜の地

蕭条薜荔堂しょうじょうへいりのどう

もの寂しい草堂にお迎えして、申し訳ございません

松風は琴瑟を奏できんしつかな

しかし、松風は琴を奏でるように吹いております

春雨壺觴を獻ずこしやうけん

春雨の中、お杯を差し上げることは、私にとって無上の喜びでございます

さらに治保は、弟の頼救が帰国に際し、詠んだ詩を赤水へと手渡す。

旧邦千里徳風新たなりきむらうほうら とくふうあら

車馬春に遊ぶ赤水の浜しやば

恰も是、草廬三顧の遇あたか これ そうろさんこ ぐ

主人も又、伏竜の臣なるを識るべしふくりよう

私にとつて常陸は遠い国ですが、兄（治保）が藩主となつてからは、風が吹くように、徳が人を感化しております。きつと春になれば、籠に乗つて赤水の庵に立ち寄り、美しい風物を楽しんでいるのでしよう。これはまさに劉備が諸葛亮を軍師として招くために、草庵を三度訪れたことに似ております。世間に知られていない赤水が、とても優れた人物であること、兄もまた劉備と同じように見抜いておられたのですね。

家臣たちは、治保と赤水が詩を交わす様子を眺めながら、仁君のために身命を賭すことのできる幸せを感じていた。

また治保も、赤水のような忠臣を持つてゐることを心から嬉しく思うのであった。

こうして、治保の温情味ある取り計らいによつて、赤水は故郷に錦を飾ることができたのであり、松月亭での宴を満喫した治保も領内の視察を終え、五月十五日には赤水と共に江戸へと戻つたのである。

九 息子達への手紙

多忙を極める赤水ではあったが、わずかな時間を見つけては、子や孫たちに手紙を送り、学問だけでなく、人として正しく生きることの大切さを切々と訴え続けた。

藤八郎へ

（前略）

孫の作之丞の仕事ぶりはどうでしょうか。余力があるのなら、学問を怠らないよう、言い聞かせなさい。

藤八郎は学びはじめるのが遅かったとはいえ、書物を捨て、学ぶことをやめてはいけない。蘆伯玉（きよはくぎょく）は五十歳になり、これまでの四十九年間の過去を省みて、自らを律した人物である。六十歳になっても同じように反省と変化を続けたからこそ、六十歳に相応しい人間に成長できたのだ。

また、六十歳になっても読書を怠らずにいれば、いつか読もうと去年まで仕舞いこんであった本を今年になって読むこともあるだろう。本を読めば、読書をさぼってしまったことを悔い改められるだけでなく、自分の誤った知識にも気づくことができる。

晩年になっても学問を続けていれば、自分が死んだ後も、学んだことは子孫たちにも引き継がれ、永遠に廃れることはない。余生の短い老人でさえそのような気概を持っているのだ

から、なおさら若者は、わずかな時間であつても大切にしなければならぬ。人生は長いと思つて悠長に構えていると、あつという間に年を取つてしまうものなのだ。

学問をしない者は百歳まで生きることができたとしても、生きてゐるに値しない。

学問とはそれほど大切なものであることを、しっかりと子供たちに教育しなさい。

三日も顔を合わせないでいると、想像もできないほどの知恵を身に付けてしまうのが、本を読む人である。本を読まない人は、百歳まで生きることができたとしても、人間的な成長がないから、せつかく生まれ持った能力を開花させることができない。

本を読む人は、二三日の間にも善い事を学び、成長を続けているため、凡人には想像もできないほどの智恵を身に付けてしまう。それ故、立派な人は、一生、本を手離すようなこととはしないのである。だからこそ、天も助けてくれるのである。

私自身、若い頃に同じような経験があつたからこそ、わざわざ手紙にも書いたのだ。

赤水

藤八郎へ

学問のために必要な金銭は惜しみなく出してやろうと、平蔵兄が約束してくれた時から、私は平蔵兄のこの一言を忘れず、少しでも期待に応えようと、昼夜を分かつた本を読み、外

に出る時も本を離さず、牛馬を使つて田畑を耕す時も本を読んだ。

しかし、決して農作業の手を抜くようなことはせず、仕事と勉学に励むことを毎日毎日、五十年間続けたからこそ、お殿様の侍講という重職を勤められる身分となれたのだ。

だが、どれだけ努力したとしても、結局は平蔵兄のご恩情とご指導がなければ実現できなかったのであり、このご恩は片時も忘れたことはない。

（中略）

学問を志したことのない者は、「百姓にとつて学問は無駄である」と考えている。

また、学問をしなくても生活には困らないのだから、学問など無意味であると感じてしまふかもしれない。しかし、学問は人として行ふべき正しい道を窮め、迷いから解き放ち、虚栄心を薄くし、心を定める薬である。

学問をしない人の意志は弱く、歳をとるにつれ、自制心が緩み、悪い事にも手を染めるようになるため、大金持ちの家であつたとしても、いつの間にか衰退してしまう。

悪習を矯正し、家を再興することは、学問をした人でなければできないのだが、道義になつた行動を守り、酒と色事と博打を忌み嫌う人でなければ、学問は成就できない。

この事は学問好きの門弟たちへも時々読み聞かせている。

赤水

藤八郎へ

（前略）

無理して漢詩や漢文を作る必要はない。それよりも、広く書物を読みなさい。

歴史に関する書物にもひと通り目を通し、古今の栄枯盛衰について、本を見なくても話せるくらいに勉強し、時代背景や人の心理をよく理解しなさい。

これは名声を得るためではなく、広く学問を行い、礼にかなった正しい行動をするためであり、一生をかけて極めるべきものである。

私は若い頃、五月の田植えの時期に、牛馬の鼻取りをしながら、片手に本を持ち、それを読みながら田んぼを歩いた。

勉強とは、このように行なうべきものであり、決して家業を疎かにしてはならない。

仕事の合間に、わずかな時間を見つけ、コツコツと勉強を続けていれば、三十歳から四十歳までには、日本と中国の歴史について、ひととおりの目を通せるようになるであろう。

まずはこれを当座の目標とし、学ぶことを楽しみなさい。そうすれば、学問好きが遠くから訪ねて来るようになる。そして、最大の楽しみは、有徳者を慕って、さらに優秀な人が集まるようになり、学問も人間性も進歩することである。好学の友を持つことは、千両の大金を持つことよりも価値のあることであり、目の付け所、心の置き所が大切なのだ。

効率良く本を読むためには、難しい所や疑問点を不審帳（わからない用語をまとめた帳面）に書き出し、どんどん先に読み進めなさい。なぜなら、たくさんの本を読むようになると、

以前の疑問点も自然と理解できるようになるからである。

これを「大成の日」と言い、日々読書を怠らず、それを長い間、継続して初めて成し遂げられるものであり、何物にも代えがたい財産である。

追伸

（中略）

大金を貯え持っていることは、悪事を働く原因ともなるから、お金が貯まった際には、時々、困った人々に施すのが良いだろう。

お前たちが金を貯えていることを盗賊たちに知られることが、とても心配でならない。

財産は持ち過ぎず、ほんの少し余裕がある程度にとどめておくべきである。その方が親としても安心できるし、寝覚めも良くなる。親に心配をかけないのが、最高の親孝行なのだ。

木皿の柴田家では、大金を埋めて置くそうであるが、これは天の道理にかなわないことなので、不吉なことが起こるかもしれない。

お金は少しずつ遣い、穀物の値段が安い時は、無理に売って損をするよりも、何年も売らずに保管しておく。こうした小さな積み重ねを大切にし、年貢を納められる位の貯金を持つようにしなさい。礼記の王制にも『三十年の通を以て、国用を制し、入るを量りて、以て出ざるを為す』とあるが、これを「分限」と言い、お金を蓄える奥義でもある。

赤水

藤八郎へ

寒さが厳しくなったが、特に変わったこともなく、めでたいことである。こちらは皆、元気で暮らしているから、少しも心配することはない。

（中略）

一 孫の作之丞は江戸に留め置く。作之丞は、何とまあ、立派な本好きになったようで、とりわけ漢文は良く理解できている。『大日本史』の中で面白そうな所を読ませてみたが、すらすらと上手に読んでしまった。

私が集めた本を託せる者ができたことは、この上なく喜ばしいことだ。どこまで上達するかわからないが、学問を怠らなければ、将来が楽しみである。

このように我々子孫が幸福に恵まれ、長久保家が大いに栄えるのは「積善の余慶」によるものであり、これまで先祖が善行を積み重ねたお陰でもある。

中でも、先祖の「宗順（そうじゅん・赤水の祖父 太左衛門）」は、他人にお金を貸して、かなり損をしたそうである。とても迷惑な事のように感じるが、そもそも人を思いやる心がなければ、お金を貸すことなどできないし、このように子孫が続いていることを考えれば、先祖の損によって、子孫が幸せでいられるのだ。

一 本年などは小作人たちが無理な願いをしているようだが、凶作が続くことはないのだから、かなり損をしたとしても、どうにか堪えて欲しい。天道に沿った行いであるならば、その時は損をしたように見えても、自然と天の恩恵に浴することができると、本家が傾

くようなことはないであろう。

凶作の年は色々迷いも多くなるだろうが、隠居料など、生活費で浮いた分があれば、凶作の時には損を覚悟の上で、全て小作人たちに施してあげなさい。

たとえ小作人たちに施しすぎたとしても、その年の儲け（貯徳）と思うようにしなさい。これはすなわち「仁を買う」ということである。

村役人に申し出て、訴訟にかかわりあうなど、とんでもないことであるから、絶対に避けなければならぬ。また、藩の力を借りて、貧者から金を取ることは、金を捨てる事よりも、大いに劣る行為であると心得なさい。

総じて、自分が損をし、他人を利する事をしていけば、目には見えなくとも、必ず天からの恩恵がある。すぐに成果は現れないかもしれないが、やがてはそれが余慶となり、決して損することにはならないと理解すべきである。

私も若い頃は、よこしまな考えを抱いたこともあったが、七十歳になって、ようやく夢から覚めた。天恵を得るために、善行を行なうのではなく、善行を重ねていけば、天恵はふさわしい頃合いに、自ずともたらされるものなのだ。

全ての子孫に対し、村役人などになりたい、金を儲けたいという思いを持たぬよう、普段から教育しておく必要がある。農業に専念し、質素儉約に努め、空いた時間があれば、学問を楽しむという心構えを持つようにしなさい。

特に金持ちを指そうとする心には、害があるので注意が必要だ。金を儲けようとすれ

ば、どうしても利己的になり、子孫のために余慶を残そうと励まなくなるからである。

一 盗賊への用心、常に忘れてはならない。以前から何度も話している秘策（盗賊対策）についても、言われた通りにやるだけでなく、自分なりに工夫してみなさい。

「治に居て乱を忘れず（平和な世の中であっても、万が一に備えておくことを忘れない）」という故事があるように、学問と武芸の道を両立することを忘れず、たまには武芸を習い、武道的素養を培っておくこと。今後、世の中が乱れ、ロシアなどの外国が攻めてくる恐れもある。どのように身を護るのか考えておくことも大事である。

赤水

藤八郎・四郎次・作之丞へ

（前略）

本を読むことは、その道の識者たちの話を聞き、指導を受けるのと同じことである。時間があるから後で読もうなどと、油断してはならない。

また、本を買う金を惜しんでもいけない。なぜなら、将来、お金に困るようなことがあっても、本屋に売り、購入時の半額で買い取ってもらえば、多少の損はしても、お金に換えることもできるからである。本には様々な利得があるのだから、大切にしなさい。

赤水翁

藤八郎・四郎次・大塚文右衛門へ

（前略）

私も若い頃は本を借り、田畑へ仕事に出かける時も懐に入れ、寸暇を惜しんで勉強をした。それはさておき、学者であつても、一般人であつても、人を知ることが非常に大切である。

善人であることを知った上で、師や友として交際を続けければ、一生有益となるが、悪人を近づければ、毎日、損をすることになる。

家庭の秩序を保つにも、上手に世間を渡るにも、下人（召使）を使うにも、その人が善人なのか悪人なのかを見抜くことができなければ、後々害悪をもたらすであらう。

私心なく、世のために尽くす人を君子と言う。私心がないとは、私利私欲によらず、人として守るべき道に従つて行動する事である。世のために尽くすとは、正直かつ誠実な心で人を愛（いつく）しみ、他人であつても礼儀正しく丁寧に接する事である。

嘘をつく者、不正な道を歩み、親不孝で人として守るべき道を外した怠け者、酒、色事、博打を好む者であれば、たとえ我が子、兄弟、親類であつたとしても遠ざけ、親しく付き合つてはならない。

「天道は善に福（さいわい）す」と書経にもあるように、天は必ず善人に対して幸福を与え、怠惰で淫らな人間には禍を与えるものである。

よくよく人を見極め、善人であるとわかつたのなら、お金を貸しても良い。善人であれば、返済が滞るようなことはないし、はじめから返す気もないのに、お金を借りるような嘘つき

の悪人とは根本的に違うからである。

その人が心の奥で何を考えているのか、善人なのか悪人なのかを見極める能力を身に付けたのなら、今の世の有様を見て、その能力をさらに磨きなさい。

人々の心が荒(すさ)んだとはいえ、借りたお金をちゃんと返す人もいるし、村役人は信用できないと言いつつも、全ての役人が信用できないというわけでもない。つまり、役人も、お金を借りる人も、人間性によって変わってくるものであり、心の底から律義で、誠実であるならば、大抵は清廉潔白な人物であると見てよい。お金を騙し取ろうとする輩ではないはずだ。そのような人間であれば、たとえ将来的に凋落してしまっても、害を及ぼすようなことはない。

先ずはとにかく、人間性を見極められるよう、学問に励みなさい。

私は若い時から、栗野の弥五左衛門、矢指の利衛門、赤浜の長次衛門などにお金を貸してきたが、多少の損はあったにせよ、利益の方が多く、田畑も増えた。今は田畑も取られぬご時勢なのだから、ただただ正直な人かどうかを見極め、正直者だけに貸すようにしなさい。たとえ元金を失ったとしても、受け取った利息が元金を少しでも上回っているのなら、お金を貸さずに人間関係を悪化させるよりも、最終的には損を覚悟の上でお金を貸した方がよい。

また、お金を貸すことを頑(かたく)なに禁じてしまうのも、堅苦しく、融通の利かない人間となってしまう恐れもある。このあたりのことは藤八郎が理解しているから、できるだ

け見習つて、会得しなさい。

古文の西銘に「天を父とし、地を母とし、世の人々を皆我が兄弟とする」とある。つまり、これは天道に随（したが）うということである。実に理にかなった言葉であるが、全ての人に對し、子や兄弟のように接するという意味ではない。正直律義で、両親を敬い、真心をこめて主君に仕えるような人ならば、子や兄弟のように接しなさいという意味である。

親不孝で、人として守るべき道を外し、酒・色事・博打の三悪を好み、家業に励まず怠惰な者は悪人である。また、悪人は天に對して罪を犯している人間なのだから、いち早く悪人を見定め、できる限り付き合わず、遠ざけるようにしなさい。他人は勿論のこと、たとえ自分の親族であつたとしても油断してはならない。ただし、極端に悪人を憎めば、恨みに思つて仕返しをする者もいるから、過ちを強く責めてはいけない。

悪人を憐れんで、お金を貸すこともいけない。どうしても貸さなければならぬ時は、過ちをいさめるようなことも、一通りは言うべきであるが、強制してはならない。それどころか、恩を仇で返してくるような者もいるから、注意が必要だ。

悪人を見たら、それを反面教師として自らを戒め、己の行いを正しくし、酒・色事・博打に手を出さず、家業に専念し、少しでも余力がある時は本を読み、古（いにしえ）の人を友とする事。この世にこれほどの楽しみはない。これを天命を楽しむと言う。

赤水翁

藤八郎・四郎次・作之丞へ

（前略）

近年は木綿を作るようになったので、種も持つているとは思いますが、今年はどれくらい木綿を作ったのか。お前の所には木綿を作る畑もあるのだから、木綿はたくさん作るようにしなさい。

栗野の畑などでは、人に盗み拾われることもあるだろうが、木綿をたくさん作っておき、人に盗まれたとしても、喜捨と思ひ、盗まれたことに腹を立てず、木綿作りに励みなさい。稲を盗まれたり、綿を盗まれたりすることなどは、施しの一つであるから、決して悔しいなどとは思わず、人に盗まれてもいように、たくさん作っておきなさい。

常に人の道に叶った良心を持ち、家業を第一として懸命に働き、貪欲さを持たぬよう、心掛けることは、重要な学問の一つでもある。

大根なども、人に盗み引き抜かれるものであるから、その分、余計に作り、人に盗まれてもいようにしなさい。

もし我慢できないときには、用心しながら毎夜、夜回りをして、農作物を守るのもいいだろう。ただし、遠くから弓矢や鉄砲で盗人を傷つけることがないよう、心掛けなさい。

ちようどよい機会なので言っておく。日照りが続き、田に水を引き入れる時は、とにかく根気強く、怠けることなく田んぼに出かけ、稲を枯らさぬよう守らなければならぬ。

しかし、自分の田に引き入れた水は、他人にも譲り、決して人と争ってはならない。

これが最も大事な心構えであり、君子の志というものである。

私の申した通りにしていけば、書物を読まなくても、学問のある人と同じ行いをしていることになる。

この心の持ち方を、金場の惣介、宿の武兵衛などにも教え諭すようにしなさい。

総じて自分だけに都合の良いことばかり願わず、人事を尽くして天命にまかせなさい。

正直に家業に勤しみ、人のためになるよう、人の邪魔にならぬようにと心掛け、吾が一族はもちろんのこと、親しい人も教化するようにしなさい。

十一月十六日 己上（いじょう）。

赤水翁

十 赤水の名声

寛政三年（二七九二）八月一日。赤水は正式に侍講を致仕（ちし。退官）し、十四年にも及ぶ重職を無事、勤め上げた。そして、赤水は致仕に際し、人はどのように生きるべきかを系統図にまとめ、「五常図説（ごじょうずせつ）」として治保に献上した。

五常図説

仁は愛する也なり

仁とは愛することである

孝悌忠恕

慈惠恩親

博施遍救

両親を敬い、兄弟仲良く、真心をこめて主君に仕え親から与えられたように、慈しみの心を他人にも恵み知恵を使つて、広く人々を助ける

人の常に当に宅るべきの要道也まさにお

それが他人と接するときに必要な道である

義は宜也よし

義は人として当り前のことである

忠節無私

臨危致命

勸善懲惡

剛勇正直

清掃廉恥

私欲を持たずに忠義を尽くし、危機に臨んでは命をささげ善い事を勧め、悪い事は懲らしめる
正直で強く勇ましく、恥を知り、心を掃き清める
それが人の行うべき大切な道である

人の常に当に行うべきの要道也

礼は敬也つつしむ

謙讓恭謹けんじょうきょうきん

威儀和樂いぎわらく

人の常に當に立つべきの要道也

礼とは謹むことである

万事に控えめで、礼儀正しく、つつしみ深く

礼式にかなった所作を心がけながら、和やかに楽しむ

それが人の上に立つ者にとって大切な道である

智は覚也おぼしむ

格物致知かくぶつちち

窮理尽性きゅうりじんせい

温故知新おんこちしん

人の常に當に權るべきの要道也

知恵とは物事の真の意味を知ることである

理想的な政治を行うには、知識をきわめて物事の道理に通じ

正確な知識を獲得すること、もって生まれた才能を活かし

昔の事をよく調べて、そこから新しい知識や見解を得る

それが政治に関わる者にとって大切な教えである

信は実也まこと

慎独踐言しんどくせんげん

不飾外面ふしよくがめん

名実不達めいじつふたつ

言行是同げんこうこれおなじ

人の常に當に守るべきの要道也

信用とは誠実さである

他人の目がなくても道を外さず、口にしたことは実行し

うわべは飾らず、評判と実態がかけ離れないように心がけ

口で言うことと、実際の行動が一致する

それが人の守るべき大切な道である

この五者は天地の氣、即ち、是れ人の道なり

この五常は自然の摂理である
つまり、人として行うべき正しい道であり、儒教の
理念でもある

侍講を致仕したことで、ようやく地理志に専念できる環境が整ったと、赤水は内心、喜んでいたので、治保・頼救からの下問は相変わらず続いていた。

しかも、編集作業の困難さを知らぬ者たちの中には、赤水の編集方針を独善的であるとして、批判する者も少なくなかった。

なぜなら、地理志に関する古文書がほとんど存在せず、地理志をどのように体系付けるのが、学者たちの間でも大きな問題となっていたからである。

赤水は「常陸国志（ひたちこくし）」、「五畿内志（ごきないし）」、中国の「大明一統志（だいみんいつとうし）」などの地理志を参考に編集を進めており、決して独善的なものではなかったのだが、赤水を快く思わない輩は相変わらず存在し、水戸藩における赤水の地位が高まるほど妬みを蓄積させ、常に粗探しをしていたのである。

後の彰考館総裁の豊田天功（とよだ・てんこう）は、『地理志の編集は難儀であるにも関わらず、赤水の編纂した地理志は優れている』と評している。

また、国学者の栗田寛（くりた・ひろし）は、赤水の地理志を再校正し、「国郡志」として完成させたことから、後世の学者たちによって、赤水の地理志の正確さは証明されたのである。

地図や書籍の多くが京阪で出版されたこともあり、致仕後も赤水の名声は、江戸のみならず、関西にまで広まっていた。そして、その様子は古松軒からの手紙にも記されていた。

赤水老先生へ

（前略）

何となく、お世辞のように聞こえてしまうかもしれませんが、関東では赤水先生のお名前も広く一般の人々に知られ、高い評価を得ていらつしやると存じます。

関西では、博雅（はくが）の大学者（深い学問を身に付け、道理をわきまえた立派な学者）、現代の老君子として、赤水先生の書いた文字や手紙などを欲しがる者も多く、自ずと先生の御徳を称嘆しております。また、漢土十五省の御撰図を見せてやると、今頃中国では赤水先生の優れた評判が広がっているだろうと申します。

不思議なご縁にて、先生から特別に目をかけて頂きましたが、私にとってこれ以上、幸せなことはございません。お礼を申し上げたいと思っても、この気持ちを表現する適切な言葉が見つからず、とても文章に書き表すことなどできません。

現在、赤水先生は、お住まいの儒者長屋を学校と称し、「時習社」という額を掲げ、高橋様、八代様をはじめ、門弟の方々の本を読む声はとても熱心で、昼も夜も止むことはない

伺いました。また、治保公から内密の御下問があつた際には、赤水先生のお考えを述べられたともお聞きしました。主君は主君の道を尽くし、臣下は臣下の道を尽くされていらつしやることは、この上ないご名譽であり、まさに陶弘景（とうこうけい）が「山中の宰相」と称されたことに匹敵する、立派な功績をお立てになられました。

近頃では、治保公と赤水先生のことを、めつたに見ることのできない名君と賢臣であると、誉め称える声があちらこちらから聞こえて参りますが、私は公職にもかかわらず、悠々自適の生活を送っています。何と罪多きことでしよう。それに対し、赤水先生は、西山拙齋（にしやませつさい）・菅茶山（かんさざん）・頼春水（らいしゅんすい）先生などと親しく友となり、徳を深めていらつしやいます。

束縛を受けず心のおもむくまま過ごしているとはいへ、私も赤水先生を見習い、慎み深く、日々、自身を省みておりますので、行状（日頃の行ない）につきましては、ご安心下さい。私の旅好きは、もはや癖となつてしまいましたが、残りわずかな人生も、旅を唯一の楽しみとしながら寿命が尽きるのを待つております。軒先の弱った古い松が、きこりに切り倒され、雑木と一緒に燃やされ、一片の煙となる。それも天命だと思つております。ただ、こればかりはどうにもならないことであり、最後には地中の腐った骨となり、姿形も名前も消え果ててしまう。これも人生のはかなさとお思い下さい。

五常図説の他、赤水家訓という作品の出版を検討されているとお聞きしましたが、できま

すれば、一枚お譲り頂けないでしょうか。息子の魏丹（ぎたん）の所までお送り頂いても、林氏にお送り頂いても構いません。是非とも頂戴したく、何卒、お願い申し上げます。

郡分之図（こおりわけのず・藩や州単位の地図）も、近々出版を仰せ付けられるようですが、さぞかし詳細な地図に仕上がっているものと、ご推察申し上げます。その上、壮年の頃に奥羽をご遊歴された際の紀行文（東奥紀行）を漢文でお作りになりましたが、漢文で紀行文を書いたのは初めてのこととお聞き致しましたので、私も紀行文を書く際のお手本にさせて頂きます。また、近々上京しようと考えておりますので、その際には浅野弥兵衛の浪華書林にて拝見させて頂きたいと思えます。

漢文の紀行文につきましては、私のような者でも少しは分かりますが、世間一般の人々には理解できないと思えます。以前、赤水先生に「奥羽雑記」の原稿をご覧頂きましたが、ひらがなで出版してみてもはどうだろうかと弥兵衛をはじめ、春長斎（しゅんちやうさい）・兼葭堂などとも相談しました。ひらがながいいということであれば、中井竹山（なかいちくざん）先生に序文を頼んでみようかとも思っております。ただ、ひらがなにするにも、仮名遣い文にするにも、我々の手には負えそうもないので、京都の親友の中から、誰かに頼み、書き改めようと考えております。この件につきましては、近いうちに、お考えを賜りたいと存じますので、忌憚（きたん）のないご意見をお聞かせ頂ければ幸いです。

またこの度は、お手を煩（わづら）わせてしまい、大変恐縮ではございますが、お送り致

しました私の肖像画に赤水先生直筆の賛を賜りたく、何卒、宜しくお願い申し上げます。

ご存知の通り、私には懇意にしている先生方も数多くおりますが、赤水先生にはひとかたならぬお引き立てを賜り、天下の老君子と敬慕しております。さらに、ご長寿でもいらつしやいますので、私が死ぬまで懇意にして下さった証にも、形見にもなりますし、なおかつ、子孫には貴重な宝物として伝え申しますので、安心してお託し下さい。ご面倒をお掛け致しますが、何卒、宜しくお願い申し上げます。

〔中略〕

老いの身の 寢覚かちなる夜な夜なは

うつつにうかむ 人のおもかけ

老ひ老ぬ 老ては老のしたはれて

老をいたはる 老となりけり

老いると、夜は目が覚めやすく

夢見心地に友人たちの面影が浮かんでくる

年を取ってしまっただろうか、元気でいるのだろうか

齢を重ねるごとに、昔を懐かしく思う

友も私も随分と年を取ってしまったものだ

「てにをは」も直さず、思うがまま無風流に詠みましたので、御笑覧頂ければ幸いです。

〔後略〕

古川古松軒

天明七年（一七八七）七月。

立原翠軒のもとに赤水からの手紙が届く。

立原翠軒様

（前略）

先日、松平定信公が、老中上座に任ぜられたそうですが、まさに治保公のお考え通りになりました。

結局のところ、立原先生が遠回しにお諫めされた一言が、天下の要になったと、愚見申し上げます。実にこれほど喜ばしいことはありません

（中略）

立原先生のご推挙が、幕府の重要な人事に影響を与えたことは、まさに天が与えた運命と思われまます。

（後略）

立原先生をご尊敬申し上げます。

六月二十四日。

頓首

松平定信の前任であった田沼意次は、幕府の財政赤字を食い止めるため、様々な経済政策を打ち出していたのだが、その一方で賄賂政治が横行するようになっていた。

また、浅間山の噴火、天明の飢饉が重なり、困窮する農民が増えたことで、一揆や打ち壊しが頻発するなど、田沼政治に対する批判は日に日に高まっていた。

天明六年（一七八六）八月二十五日、第十代将軍徳川家治（とくがわ・いえはる）の死去に伴い、田沼が失脚すると、翌天明七年六月十九日、松平定信が老中首座に就任し、寛政の改革へと乗り出すこととなるのだが、定信の老中就任を推し進めたのは、御三卿（ごさんきょう）のひとつ、一橋家の徳川治済（とくがわ・はるさだ）と治保（三十六歳）であった。

五十九歳の紀州・徳川治貞（とくがわ・はるさだ）は病に伏せることが多く、五十四歳の尾張・徳川宗睦（とくがわ・むねちか）は人柄が良くても、慎み深すぎるところがあり、将軍家を崇拜しすぎて、御三家としての格式を失っていた。一方、治保はこの二人とは対照的に、最も脂が乗り切った齢であり、文武にも優れていたことから、御三家の副将軍的な存在として意見を求められることも多く、必然的に老中人事の中枢に身を置くようになっていた。

さらに、赤水の手紙では、立原翠軒が定信を推挙したように書かれてあるものの、治保の腹心の侍講である赤水の薦めによるところが大きかった。なぜなら、赤水は、質素儉約、学問奨励、農民への間引禁止、天明の飢饉における迅速な対応など、白河藩主時代の定信の実績や人間性を高く評価しており、治保にも幾度となく、進言していたからである。

こうして、治保からの厚い信任を得たことで、一介の百姓にすぎなかった赤水も、ついに江戸幕府という政治の中枢にまで影響を及ぼすようになっていたのである。

十一 神童の封事

寛政六年（一七九四）二月。藤田与助（幽谷・ゆうこく）から赤水のもとに届いた手紙。それは義憤と憂国の念にかられた「封事」（ふうじ・密封して直接君主に差し出す意見書）であり、文字の一つ一つには幽谷の熱情があふれていた。

治保公は財政的に困っていると申しております。その一方で、御手本金（おてもとぎん・君主が手もとに所持するお金）は沢山お持ちになられているようですが、どのようなことにお金を使っているのでしょうか。

近い内に、ある村へ御遊獵（ゆうりょう・狩りをして遊ぶこと）にお出かけとのことですが、孟子にもございますように、水戸藩の民も『お殿様は狩りを楽しんでおられるが、そのせいで我々はひどい生活を強いられ、親子は一緒に暮らせず、兄弟や妻子とも離れ離れになってしまった』と嘆いております。

領民が苦勞して築いた財産を重税によって取り上げておきながら、つまらないことに使っているのは、非常にもつたいないことにございます。

しかしながら、赤水先生のご返答では、非道の悪政が行われていないのだから、「敵国外患無き者は国恒（つね）に亡ぶ（敵国や外国から攻められる心配のない国は緊張を欠き、油断を生じ

させ、ついには国が滅亡する」の言葉通り、危機感が足りないことの方が、心配だと仰せ下さいました。

これは愚かな小人の私でもわかりますが、ここ数年来、領民が安心して生活できるような政治は行われておらず、重税を課して民から搾取し、仕事を怠けて月日を無駄に過ごしているような役人ばかりが出世をしています。

赤水先生の尊敬される治保公が、水戸藩の現状や将来を心配なされているのなら、ご意見を申し上げるべきですし、ご承諾頂けないのであれば、何度もお諫めすべきです。

赤水先生は退官された身分なのですから、もし、先生のご意見が受け入れられないのであれば、早々に故郷の赤浜へとお帰りになり、静かにお暮しになった方がいいのではないのでしょうか。それでも、赤浜にお帰りにならないというのであれば、学者は功績がなくても高い位に就き、高い報酬を食うだけの役立たずな存在であると、武士から庶民にまで悪口を言われてしまうでしょう。これは私にとつて、非常に残念で悔しいことにございます。先生はどのようにご回答下されますか。

世間が赤水先生のことを、無能な学者たちと同じように見てしまうのではないかと、このところ困惑しております。

一 もしもの時は、不才な小物役人たちに任せてみて、失敗するのをお待ちになってはいかがでしょうか。立派なお殿様であれば、彼らに任せたことを後悔し、政治を正そうとする

でしようから、この機に乗じ、失敗が成功へと転じるような状況になるまでお待ちになられてはいかがでしょうか。

政治を正そうというお気持ちになられないのであれば、忠恕（ちゅうじよ・自分の良心に忠実であり、他人に対する思いやりが深いこと）の赤水先生のお言葉とは思えません。

私など一介の書生にすぎず、人からも軽く見られている者でございますので、小物役人をうまく利用し、時に応じた策略を用いるべきなどと、申し上げるつもりもございません。

しかしながら、近視眼的な役人には、遠い将来のことまで考えた計画など立てることができません。また、旧習を改めようともせず、その場しのぎの対応や問題を先送りすることとで様々な弊害が生じており、とても耐えられる状況にはありません。水戸藩の将来を考えるたび、私は長い溜息をついております。

一 以前、ロシアの国王が通商を求めてきました。江戸で將軍に謁見し、前の時代から長崎で貿易をしているオランダ人を羨んだロシアは、世界中の人々と兄弟のように仲良くなりたいと望んできました。また、ロシア人は思いやりの心を備えた民族であり、必要最低限の軍事力しか持っていないと言っておりますが、これはあり得ないことであり、小人の私などには、その真意を測ることはできません。

元来、オランダ人は諸国と貿易をはじめると、嘘と真を使い分け、ひそかに様子をうかがい、ついには自分の勢力下に取り込んできました。この謀略によって奪い取られた国は

いくらでもございます。

オランダ人が日本でおとなしくしているうちに、偉大な祖先が残してくれた歴史に学び、対策を考えるべきですが、何もしておりません。

かつて、ルソン・ジャワのように弱体化した国は、ロシア人や欧米人に奪われてしまいました。ロシア国王が秘かに抱く悪事のたくらみ（植民地化政策）は、賢者でなければ察することはできません。それゆえ、幕府の賢明な家臣たちは、ロシア人使者の要求を謝絶し、縁海諸国に対する警戒を厳しくするよう命じられたのは、何とも頼もしいことにございます。

以前、江戸滞在中、赤水先生の長屋にて『職方外記』という禁書を見た時、モスクワというところは、兵力を日々高めながら、最強の軍隊を形成し、他国を侵略して領地を広げていったと思われれます。『職方外記』の記述が正しいならば、春秋戦国時代に赤狄（せきてき）が滅ぼされてしまった「赤狄の禍」も、ある日突然起こったものではないと思います。

赤水先生が仰せ下された趣旨は、きつと戯言であり、ご本心ではないと思えますが、とても重要な事ですので、お殿様にも私の考えを申し上げて下さい。私のこの気持ちをご理解頂けましたら、大変嬉しく、感謝の念に堪えません。

一 『周礼（周官）』の九伐の法には、田畑を荒らし、人民の離散を招いた場合には、領地を削るといふ項目があります。

今の水戸藩の有様では、関東・東北方面の備えとして、天皇や幕府をお守りするだけの力があるとは思えず、御三家という地位にありながら、田畑を荒廃させ、重税を課して民から搾取しています。もし幕府より、領地を削るといふ命令があつたならば、何とお答えになられるのでしょうか。不安で不安で仕方がありません。

私のような者が申すべきことではございませんが、水戸藩よりご恩を賜り、庶民から士族にお取立て下さり、亡き父がまだ存命の時に、士族として任命される喜びも味あわせることができました。これは父母が亡くなってしまつてから、高い俸給を頂くことよりも、有難く仕合せ（幸せ）なことにございます。

私の愚見の趣旨を文書にしてみました、これを差し出すべきかどうか深く考え、悩んでおります。わざわざ、御目付衆のご自宅にお伺いして、愚見を申し上げれば、他の御目付衆とご相談の上、封事のお取り次ぎも却下されてしまうでしょう。

評定所の目安箱へ投げ入れてみようかとも考えましたが、近ごろの御目付衆には品行方正で威厳のある方が少ないせい、大老や老中の忌み嫌うことに触れてはいけなさと心配し、御老中が封事をご覧になられることも、治保公にまで伝わることもないと聞き及んでおります。

このような事態になつてしまつた以上は、どうしようもありません。たとえ死罪を仰せ付けられようとも、あるいは気が狂つて、正気を失つてしまつたと噂されようとも、赤水先生の御返事を待つてから江戸へ参り、治保公の御前に伏して、ご進言申し上げることが

私の心からの願いにございます。この願いが叶えられなければ、平凡で役にも立たず、呑気に俗世に流され、榮枯盛衰に一喜一憂することになってしまおうでしょう。しかし、私は出世や大禄を食むために仕官したものではありません。志を持たず、凡俗に堕ちてしまうことは、私の性格からして、とても堪えられないことなのです。

お目付所は上申書でさえ、取り次がないと申すでしょうから、国家の大事を申し上げたく相願つても、中々取り上げては頂けないでしょう。それならば、赤水先生の長屋で、私の素直な気持ちを申し上げたいと思っております。

孟子によれば、遠方から仕官しに来る人物を見るには、頼つて身を寄せる人物を見ればわかると申しますが、私にとつて身を寄せたいと思うのは、赤水先生以外に考えられませんが、賈誼（かぎ）は「治安策」を上申しても、家臣の反対により、文帝（ぶんてい・前漢の第五代皇帝）に取り上げてもらえず、涙を流しながら嘆き悲しんだそうです。賈誼ではございませんが、私も激しく泣いて涙を流しております。この思いは、中々文章に書き表すことができません。急ぎ、したためましたが、この手紙は治保公のご高覧に供されることは難しいでしょうが、手紙の趣旨をお取り上げ下されば、武士から庶民にまで語り継がれる人々の遺志にも叶うことにごございます。私の述べたいことは、この通りでございます。

以上

正月廿九日 藤田与助

一正 花押

赤水老先生

領民は御遊猟を嘆き恨んでおります。治保公のことですから、御遊猟に熱中されると思われませんが、天下を一つにまとめるため、厳しく律しなければならぬ時機です。

その上、水戸藩は財政難から、役人の給料を減らしている状態です。

治保公は賢明で、人に対しても慎み深く、控え目に振る舞われ、国中の人々から信頼できると殿様として慕い仰がれ、心を寄せて付き従っておりますが、この度の御遊猟のことを伝え聞けば、江戸中の有志たちの人心を失ってしまうでしょう。

江戸の人心を失うことは、国民の人心を失うことであり、何とも非常に残念なことにございます。

幽谷は安永三年（一七七四）二月、水戸城下の「藤田屋」という古着屋の次男として誕生した。九歳の頃から青木侃斎（あおき・かんさい）の下で学びはじめると、四書五経を数ヶ月で読み終えてしまうほどの天資を発揮。その後、立原翠軒に学び、十歳で詩を賦し、十二歳の時には「長久保赤水七十歳を寿ぐ（ことほぐ）序」という古希の賀詞を作ったのだが、言葉の運び方、文章の構成、いづれをとつても、十二歳の若者が作ったものとは思えない素晴らしいものであり、これを見て驚喜した赤水は、幽谷のことを「藤田神童」と呼び、交友のある知識人、長崎の清国の客人、治保などにその才能を吹聴した。

その後、治保は十四歳の幽谷を彰考館の生員（史館小僧）に抜擢すると、寛政三年（一七九二）十月、その名声を耳にした松平定信の命により、論文を提出することとなった（幽谷十七歳）。

定信としては、幽谷を家臣として抱えたいという心積りがあり、幽谷にとつても大栄達を果たす、またとない好機でもあった。しかし、幽谷は立身出世よりも、日本の行く末を心から案じており、幕府を批判する危険分子として罰せられることも覚悟しながら、知人の書齋を借り、『正名論』という論文を一気に書き上げた。

この当時、農村は疲弊し、諸藩の財政も悪化。さらには外国船が日本各地に出没するなど、幕府は様々な問題に直面しており、この国難を乗り切るには、幕府が天皇を尊ばなければならぬ。さすれば、大名は幕府を尊ぶ。大名が幕府を尊べば、藩士は大名を尊び、幕藩体制が強化される。だからこそ、まずは尊王思想によって国家をひとつにまとめなければ、どんなに素晴らしい改革であっても、うまくいかないということを訴えた。

結局、『正名論』は立原翠軒の判断により、定信の目に触れることはなかったのだが、その後も国を憂う思いはますます強くなり、その三年後、幽谷二十歳の時に、この封事を書き上げたのであった。

だが、赤水からの返事は次のようなものであった。

追啓

赤水愚問

与助殿の御書面では、近頃の水戸藩政には満足できるようなものが一つもないと憤慨なされている文章となっておりますが、与助殿に問いたい。近頃、どのような悪政が行われているのでしょうか。一つ一つ拝聴したい。

赤水などは、藩政は先代の時よりも、近頃の方が良くなっていると思っ

ています。先代の悪政、紙金（かみきん・藩札の発行）、野駒牧（のごままき・大能村で放牧した馬が脱走し、農作物に被害を及ぼした件）、商家からの借金、太田の悪銭（太田村での鑄造事業により、銭の供給量が増え、物価上昇をもたらした件）、諸人の衣服の贅沢、博打等の悪い風俗や習慣を止めさせたことは、先代に勝る御善政である。しかしながら、貴殿は善政を一言も称賛せず、ことごとく悪政ばかりに注目して批判されている。これは如何なることか、一つ一つ文書にて、お見せ下さい。

一 昔は権力のある者の威が強く、賄賂も行われ、不正な手段によって利を得ていたが、近年はそのようなことも少なくなつたと伝え聞いている。

一 百姓が困窮しているかのように申されているが、水戸藩で困窮している百姓は少なく、

飢えと寒さに苦しむ者もいないと聞いている。

困窮を訴えるものは皆、日頃の行いが悪く、好色・好酒・博打・殺生・怠け者で身分不相応な生活をしている。暮らし向きが悪くなると、すぐに借金に手を出して自暴自棄となり、取り締まりがゆるいため、頼母子にまで手を出し、困窮してしまふ者ばかりである。不幸なことが起こり、自然と困窮してしまつた者などは更にいない。

ただ、子を間引く悪い習慣が残っているため、生まれる子が少なく、自然と人口が減少して、田畑は荒廃するばかりである。

また、責めに帰すべき失策はないのだが、役人の儉約が正しく行われず、反対に借金を増やすという悪政が行われ、昔よりひどくなつてゐるのは問題である。

その他のご政務は、いずれもご先代の時、松並勘十郎という代官が行なつた改革、藩札の発行、金持ちの百姓に対する御用金（財政不足を補うため、臨時に課した負担金）の無理強い、郷代官の六人検見などが原因である。また、駒籠御守殿の建築に多額の費用をかけたリ、奥方やその取り巻きが歌舞伎・狂言に毎日、百金を浪費し、お金を失つていたことに比べれば、治保公のお世継ぎであられる治紀（はるとし）様のご質素さは、前代未聞のご善政である。

しかしながら、やがて国が滅亡するのではないかという御文言は、愚案とも言えない。良公（第五代水戸藩主 宗翰（むねもと））様の時には、酒宴、長夜宴、五百羅漢の建立をお許しになつたことで支出が増え、お金を借りることが非常に多くなり、ついには莫大な借

金となつてしまつたが、これは皆、御先代の悪政が原因であり、治保公の責任ではない。与助殿が世の為を思つて熟考され、上申書をまとめられたことは、実に正しいことであり、その願ひも叶うであろう。また、広く開かれた言葉を参照し、すべての当事者や巷の賢者から意見を聞くようにすれば、抵抗勢力にも屈することなく、大事に至らなくて済むはずです。

愚老の赤水と与助殿は同じ志を持っているのですから、身命を惜しまず、友情を深めていきましよう。

なお、この手紙のことは他言無用に願ひます。以上。

追啓、彰考館の同僚や親友たちにも一切伝えてはいただけません。

大炊頭（おおいのかみ・五代宍戸藩主 松平頼救（まつだいら・よりすけ））様からも堅く仰せ付けられています。以上。

赤水

幽谷の封事は、赤水と松平頼救の協議により、治保の上覧に供されることはなかった。

しかし、その後も幽谷は封事を書き続け、生涯で二十五通の封事を著わすこととなるのだが、刻々と変化してゆく情勢を反映し、国防的なことにまで言及した幽谷の理念は、やがて

「尊王攘夷思想」へと発展。さらには門弟であつた次男の藤田東湖（ふじた・とうこ）、豊田天功（とよだ・てんこう）、会沢正志斎（あいざわ・せいしさい）らに引き継がれ、ついには幕末の水戸学へと昇華してゆく。

そして、この水戸学が明治維新の大きな原動力へとつながつてゆくのであり、祖国を憂う幽谷たちの進（ほとばし）る思いこそが、近代日本の礎となつていたのである。

十二 赤水の願い

寛政七年（一七九五）。七十七歳を過ぎた赤水の身体を案じ、息子たちは帰郷を促す手紙を送り続けていたのだが、何の音沙汰もないまま、数年の時が経とうとしていた。

そんなある日のこと。長年待ちわびていた赤水からの返簡が不意に届く。されど、その文面は短く、激情的なものであった。

藤八郎へ

お前たちは私の体を心配し、帰郷しろと言っているが、明日にでも、私の目が見えなくなるとでも思っているのか。それとも、心身が衰え、地理志の編集もできないだろうから、完成したものだけでも献上し、治保公へ暇乞いを願い出て、赤浜に戻って来いともいうのか。もし、そのようなことをすれば、前例のない不祥事となってしまうのだぞ。

赤水

自分たちの手には負えぬと考えた長男の藤八郎。立原翠軒の家を訪れていた。

「父も随分、高齢となり、私たちも心配でなりません。帰郷してくれるよう、翠軒先生のお力で、父を説得しては頂けないでしょうか」

「赤水先生は案外、頑固なところがあるからな……。だが悠長なことも言ってはおられぬ。何

とか説得してみよう」

翠軒は赤水に手紙を送り、仮病を理由に帰郷を願い出るよう勧めた。

さらに息子たちは、赤浜に戻つても地理志の編集作業は続けられるだろうから、早く帰つて来て欲しいという手紙を送った。

しかし、赤水から送られてきたのは「要書遺言書（大切な遺言書）」と題する返書であった。

要書遺言書

宋の宗炳（そうへい。山水画家）のように、牛に乗つて名山を巡り、旅の途中で行き倒れ、死に場所すらわからない。私もそのような余生を望んでいた。

地理志の仕事というものは、昔から名声が高く、人望の厚い者にしか命じられない、大変名誉な仕事であるから、もはや遠く旅に出ることも出来ない。さりとして、郷里に戻つてしまつては、妻や子、孫たちの病氣や災いなどに煩わされ、何事も出来ないだろう。

だから郷里に帰ることなど、一切考えていない。

赤水

要書遺言書を見た翠軒は、赤浜まで引き戻すことをあきらめ、一旦、水戸まで戻るよう、改めて説得をはじめることにした。そして、水戸に移り住めば、治保・頼救からの下問、後見役の任務もなくなり、地理志に専念できる。その旨の手紙を送ったのである。

だが、赤水からの返答は、次のようなものであった。

立原翠軒様

まずは水戸へ下れという御教訓。大変、御親切に有り難く存じます。

元より私も、水戸へ下ることは、良い事だと考えておりますが、治保公は私を側に置いておきたいという、お考えであることを内藤右膳殿から承っておりますので、たとえ明日、小石川の地で土に還ったとしても、職を辞して隠居することはできません。

先日も、病気の妻を江戸から郷里に帰したところです。

まず当年は江戸に滞在し、立原先生が江戸に上られることを、お待ちしております。

立原先生のような優秀な儒学者が江戸へ赴任されれば、私が職を辞したとしても、治保公も、ご納得して頂けるはずです。しかし、現状のままでは、帰郷も難しい状況です。

もっとも、私は既に隠居の身ですので、無理に帰郷を引き留めるようなこともないとは思いますが、右膳殿からは、内々に治保公のお考えをお聞きしておりますので、江戸で命を果てる覚悟はできております。

また、隠居を仰せ付けられた時の申渡書（もうしわたししよ）では、私が永年勤め上げたということで、息子の藤八郎が御物成（おもものなり。職名）を賜り、家督相続を仰せ付けられました。さらに、地理志編纂の仕事を命じられた上に、御下問への御回答、若殿様の前での講義なども命じられているので、隠居の身でありながら、七人扶持の俸禄も頂いております。このような状況ですから、私が江戸に滞在していなくては、御下問への御回答もできません。

んし、様々なご相談にのったり、詩文の添削などもできません。

弟子の高橋又一郎（後の彰考館総裁）、長久保中行なども侍講を勤めておりますが、治保公と頼救公も彼らだけでは不安に思うらしく、毎回、私のところに相談へ行くよう、お申し付けられます。当然のことながら、お二人は、私のことを又一郎と中行の後見人として見ており、手離したくないと、お考えになつていらっしゃるようです。

現在の治保公は、私が江戸にいないと、ご不満のご様子ですし、又一郎と中行も独り立ちはしておりますが、まだまだ心もとなく思つていらつしやるのでしよう。

とにかく、立原先生が常勤なされないうちは、私が職を辞してはいけない。それが右膳殿のご内意でもありますので、郷里に戻ることは保留しております。

立原先生の申されるとおり、目や耳などが悪い、あるいは寝起きが出来ぬようになってしまったと申し上げることでも可能でしょう。しかしながら、病気を理由に帰郷を願い出ることが嘘偽りであり、天地を欺くことになります。私には、とてもそのような嘘を申し上げることは出来ません。

さて、今の私は江戸に居ては忙しく、他藩の学者たちから問い尋ねられたり、三都（京都・江戸・大坂）、長崎等の対応を命じられたり、大坂の版元とのやり取りなどをしております。

治保公の御疑問に対する、御回答は勿論のこと、家臣たちの詩の添削なども毎日のようにあり、ほんのわずかな時間もあります。以前は短時間で処理できたものが、今では数日を費やすようになり、本業の地理志もはかどらず、残念でなりません。

ただし、地理に関する珍しい書物を探し出し、それを借りてくることもできますので、江戸に居た方が何かと便利です。しばらく江戸に滞在する方が、仕事もはかどるでしょう。

とにかく治保公に差し上げた一身であり、今さら老体には保養の必要ありません。たとえ明日になって命が終わろうとも、悔いはありません。白骨になって郷里へ戻り、先祖の眠る墓に入れば、天命をまつとうできたという満足感から、悔いも残らないでしょう。

赤水より

寛政八年（一七九六）五月二十三日。

これまで赤水の助手として、長崎や京坂に同行。その後、水戸で医者となり、頼救の侍講も勤めていた長久保中行が、四十九歳で亡くなった。

寛政九年（一七九七）四月。

翠軒のひたむきな説得の甲斐もあり、水戸へ戻ることを真剣に考えるようになった赤水。その心境の変化は、翠軒の元に届いた手紙の文面にも表れはじめていた。

立原 翠軒 様

先だって（寛政三年）治保公が、あばら屋にお立ち寄り下さり、郷里に錦を飾ることが出来たことは、大変名誉なことだと思っております。間もなく、私も冥土に行くことにな

るでしようから、閻魔大王の役所では、脩文郎の官職に就けるよう、今は地理志の編纂に勤めております。実に夢の中の夢を楽しんでいるような心地です。

今となつては何処に住みたいなどと、選り好みをする気持ちもございません。

ただし、幸いにも、天が数年の猶予を与えてくれるのなら、何より地理志を成就させたいと思っております。

また、幸いにも治保公のご配慮により、水戸へ下ることができましたら、立原先生のお屋敷に仮住まいさせて頂き、地理志の編集作業に専念したいと思ひます。このような考えに至つたのは、立原先生の賢明なお考えがあつたからです。とにかく、立原先生が水戸を出られて江戸に参られれば、治保公からの御下問もなくならずし、地理志編纂がはかどるように水戸へ下れとの御命令があれば、これまた最高の幸せにございます。

私の勝手な願ひではございますが、立原先生から右膳殿へ、よくよくご相談され、事態がよい方向へと向かうようにならないでしょうか。

人間には煩惱が多く、郷里の妻・子供・孫たちの近くにいては、気も緩み、病を患つてしまふでしょう。また、日夜家族と過ごし、村人たちと世間話に興じれば、極楽にでもいるような楽しみを感じることもできるでしょう。

昔から、志のある者は家を出て、人知れず気ままな旅をしておりますが、私はあまりにも歳をとりすぎて、西行法師や能因のように遊び歩くことも出来ません。

幸いにも地理志の仕事をしていると、紀行文や地図、風景画を眺めることが多く、それだ

けでも旅をしているような気分になります。ですから、私は街中（まちなか）に住んでいても、俗世間から離れることができ、俗事に心を乱されません。これも愚かな老人の自然な幸せと思っております。

よって、今の私の心境は、江戸を去るのも楽しみ、江戸に居るのも楽しみ、可もなく不可もなく、天風の吹くまま、身を任せております。

南風の薫を感じれば、自然と水戸へも参るでしょう。何卒、御一笑下さい。

以上。四月九日 赤水より

それから間もなく。赤水は水戸へと帰郷することとなった。

学問だけでなく、多くの政策を献じてくれた赤水の帰郷は、治保と頼救にとつて、我が身を裂かれるような思いであったのだが、赤水の年齢を考えると、もはや引き留めるわけにもいかなかった。

赤水が去った後、治保は空ろな心を埋めるかのように、後楽苑の窯で、自ら赤水像を焼き上げた。

さらに、火事で焼けてしまった際にも、赤水の肖像画を元に、再び色を付け直させるなど、かけがえのない宝として部屋の傍らに飾っていた。そして一日の終わりに、先師の像に向かい、自省することを生涯忘れることはなかったのである。

五月。江戸から水戸へと移り住んだ赤水。

地理志に集中できる環境も整い、精力的に編集作業を進めていると、次男の四郎次から手紙が届いた。

しかし、赤水は一読するや否や、そのまま送り返してしまった。

一方の四郎次。赤水から届いた手紙の封を開けてみると、中から出てきたのは、自分が書いたはずの手紙。返事を書く時間さえ惜しい赤水は、四郎次の手紙に朱色で短い返答を書き込み、再び送ってよこしたのである。（括弧書きは赤水の朱書の返答部分）

父上

尊敬する父上様のお考えに反しては、かえって親不幸の罪となりましようが、私の愚かな考えで、お諫め申し上げなければなりません。後悔の念も残りますが、父のためと思い、恐れながら申し上げます。どうか今年中には郷里の松月亭へお戻り、ご隠居下さい。

また、自ら職を辞すれば、世間の聞こえも良いでしょうから、何卒、お聞き届け下さい。郷里の盛衰の噂を聞くのが、お嫌であれば、地理志を携え、水戸城下へ行くことも、お城に登城されることも、ご自由になさって下さい。

長い間、隠居格とお扶持米を頂戴しているのですから、万が一、不慮の死を遂げるようなことがあつては、**（天命に任せるだけだ）**別居している母上も、世間からあざけり笑われて

しまいます。(上様への忠義を尽くしているのだから、世間の噂に構うことはない)

百姓から武士になり、また元の百姓に戻つての帰郷だということを、世間に申し聞かせれば、松月亭の威厳も増し、有終の美を飾ることができるとしよう。

どうかご帰郷をお考え下さいませよう、お願い申し上げます。

恐惶謹言(上様への不忠であり、最も悪いことだ)

長久保四郎次拝(重ねて直接会って話すことはない)寛政九年巳五月

四郎次の手紙を読み、自分の真意が伝わっていないことを察した赤水は、改めて三人の息子たちに宛て、書状を送った。

長久保藤八郎、四郎次、大塚文右衛門へ 赤水より

手紙にて、お前たちに申し聞かせる。私が命を惜しいと思うのは、少しでも生き長らえたいと思うからではない。地理志を完成させたいという一念からである。

今は毎日のように彰考館に行つて、書物を取り替え、借りてくるのが仕事となっている。本来ならば、江戸に住んでいた方が、何かと便利なのであるが、お前たちの達での願いとすることもあり、水戸にまで下つてきてしまった。

しかし、地理志を完成させるまで、郷里の赤浜に帰ることは、一切あり得ない。

地理志は、私が命をかけて取り組んでいるものであり、治保公直々のご命令を守り、五十石のご恩に酬いるためにも、地理志に専念することが、私の勤めである。

それなのに郷里へ戻ってしまったては、地理志一巻もできない。

たとえ夕方に死ぬことになっても、その日の朝まで地理志の筆を握っていられるのなら、それは本望である。

お前たちは、治保公に対する私の深い忠義の心も知らず、郷里に戻つてさえくれれば、地理志はどうなつても構わないと思つているのなら、非常にけしからぬことであり、自分勝手だ、わがままな主張である。

この調子で行けば、地理志も半分くらいまでは出来そうである。あと四、五年も過ぎれば、下書きも出来るであろう。八十八歳頃までは水戸に住み、地理志の編纂を勤めながら死ぬことが、私の本望である。

地理志を完成させるといふ願ひは、九十歳まで生きなければ叶わないだろうから、とにかく、あとは天命にまかせざる他はない。

私は命の続く限り、お前たちの願ひ通りに郷里へ帰ることはないし、君命に背くようなことをするつもりも全くない。いや、絶対にあり得ないことである。

中行の一周忌の墓参りには、お前たちの家にも、ちよつとは寄りたいが、わずかな暇も惜しい。地理志の仕事が大切なので、一夜帰りの訪問であつたとしても、その暇が惜しいので

ある。私の思いを、よくよく汲み取って欲しい。

四郎次の願いは、治保公への忠義と親孝行を踏みにじる大不孝であり、独善的な考えである。一生、お前たちに会うことができないとしても、私が郷里へ帰ることは決してない。

以上

赤水

赤水は玄淳の塾に通い出した頃から、自分にはどのような能力や素質があるのか、探求し続けていた。人は優れた能力を必ずひとつは持っているものであり、その能力を日々の鍛錬によって磨き続けることが、命を知ることに通ずると考えていたからである。

とりわけ、たくさんの人々の援助によって学問を続けることができた赤水にとって、後世の人々のために地理志を仕上げることは、自分の最後の天命であると確信していた。

しかし、世の中を見渡せば、自分の命を知らないために、不毛な人生を送っている人間がいかに多いことか。それに比べれば、天命に気づくことの出来た自分は、どれだけ幸せか。地理志編纂という天命に出会えた今、筆を握りながら絶命することは本志なのだ。

それなのに、おめおめと故郷に帰ってしまったのでは、命を無駄に打ち捨てるようなものであり、極めて屈辱的なことでもある。それを息子たちに伝えたい。その一心で、筆を走らせていた赤水にとって、無駄にできる時間は、もはや一刻たりとも残されていなかったのである。

寛政九年（一七九七）十二月。

赤水は赤浜に帰郷し、いよいよ自分の最後が近いことを悟ると、葬儀のやり方について記した遺言書と人生訓をまとめあげた。

さらに、寛政十一年（一七九九）には墓誌を準備するなど、地理志の編集作業同様、人生の終わりを迎える準備にも抜かりはなかったのである。

遺言

葬礼は形式にとらわれず、死者を悼み、悲しむようにすべきであると、論語にもある。

私は卑しい身分であり、せつかく藩主が贅沢を禁止されているのであるから、質素儉約をし、出費を抑えて簡素に行うこと。衣服は普段着の木綿布の経帷子（きょうかたびら）。死者に着せる着物）にし、普通のものでも、粗末なものでもいいから、早く埋葬しなさい。

棺は寝棺（ねかん）にしなさい。材料はその辺にある、有り合わせのものでよい。担ぐ人のことを考えて、棺は可能な限り、薄く、軽く作ること。

髪結いと衣装は生前の様にしなさい。しきみの葉とつるばらの葉をむしり取り、棺の中に敷きつめること。死人に着せる袴は、紙布又は紙製のものでもかまわない。大小の刀は、抜けない木刀でよいから、菖蒲刀の格好にして白紙で包み、無益な費用はかけぬこと。

棺の脇に立てる銘旗（めいき）。死者の氏名を記した旗）は、赤い紙でもよい。書き手は孫の作之丞（さくのじょう）に申し付けること。

居士・大姉の戒名は藩政に背くことになるから、一切無用である。儒法の通り、〇〇君または号を使用すること。あるいは〇〇先生でもよい。

寢棺には銘旗を立て、魂帛（こんはく。人の形を作り、生年月日及び死亡年月日を記したもの）を持ち、神主の引替の礼、焼香献上物の供え方は、『葬祭略儀』の通り行いなさい。

菩提寺の和尚を招待し、引導を受けて葬ること。とにかく質素儉約を心がけ、出費を少なくするよう努めなさい。

人生訓

一日の計は鶏鳴あに在り。

鶏鳴に起きざれば暮くに及びて悔くゆ。

一月の計は朔旦さくたんに在り。

朔旦に礼せざれば敬義くやうぎに悔くゆ。

一歳の計は陽春ようしゅんに在り。

陽春に耕かうさざれば秋後に悔くゆ。

一生の計は幼年に在り。

幼年に学ばざれば老に至りて悔くゆ。

一日の計画は早朝にあり。明け方に起きて仕事をしなければ、夕方になつて後悔する（朝寝をしてはいけけない）。

ひと月の計画はついたちの朝にあり。初日から心身を引き締めて行動しなければ、月末になつて後悔する。

一年の計画は正月にあり。草も生えない寒い時期から田畑を耕し、手入れをしておかないと、収穫の秋になつて後悔する。

一生の計画は幼年にあり。幼年に学ばなければ、歳をとつてから後悔する（大器晩成という言葉もあるが、幼い頃から学んでいなければ大成することは難しい）。

この人生訓にもあるように、赤水は学問の大切さを説き、息子たちには「百歳まで生きても、学問をせぬ者は生るに値しない」と口癖のように言っていた。

若い頃から学問をしていれば、老後を迎えても、生き甲斐がないとか、孤独であるとか、愚痴をこぼす暇はないからだ。

しかし、それ以上に学問を大切に思うのは、二人の母の大きな存在にあった。

文字を教えてくれたのは、お繁。

朝早くから、夜遅くまで働く母を独り占めし、やさしい手に包まれながら、文字を一つ一つ覚えた日々は、この上ない至福の時であった。

才能を見出し、開花させてくれたのは、おみな。

どんなに苦しい時でも、太陽のように無償の愛をそそいでくれた。

たとえ血はつながっていなくても、それを超越するほどの愛情。

一生の間に、二人の立派な母親を持ち、苦労を重ねたからこそ、学問の尊さ、学ぶことの出来る有難みを知ることができたのであり、他の学者たちには決して真似のできない、超人的な能力の本源は、二人の母にあったのである。

享和元年（一八〇二）七月二十三日。

既に八十三歳となつていた赤水は、地理志編纂の仕事からも離れ、息子たちが望んだ通りの隠居生活を松梅堂（四郎次の屋敷）で送つていた。

村人の世間話に付き合ひ、穏やかな日々を過ごしていると、寝る間を惜しみ、仕事に打ち込んだことが、夢のように思い出される。

赤水は布団の中から庭を眺め、ゆつたりと流れる時の中で、これまでの人生を振り返る。真つ先に浮ぶのは、艱難辛苦に対する感謝の気持ち。

もし、身分が高く、お金にも困らず、何の苦勞もない境遇であつたならば……
学問を究めることができただろうか。

人の優しさを知ることができたであろうか。

否、決して、何も得ることはできなかったはずである。

困難や逆境とは、人間が成長するための肥やしなのであり、良い環境に恵まれているからといつて、幸せになれるとは限らない。

改めて自分の境遇が順境であつたことを確信した赤水。感謝の念が、えも言われぬ、ぬくもりとなつて体中を駆け巡る。

やがて寢床を心地良い風が流れ、何度も赤水を、うつらうつらと夢の中へ誘う。

気が付けば、赤水は真新しい服に着替え、手には日本地図と世界地図を携え、今まさに、壮大な世界へ旅立とうとしていた。

まだ見ぬ景色に心ときめかせながら、意気揚々と家の門をくぐれば、鉛のように重くなっていた身体も、若い頃のような軽快さを取り戻す。

目の前には、遠く、長く、続く道。

その傍らには、ずいぶん前に別れたはずの人々。笑顔で迎えてくれる。

勇次、父、二人の母、平蔵、中行、玄淳……

そっと足を踏み出し、皆に近づこうとした瞬間、身体がふわりと浜風に変わる。

どこへでも飛んで行ける、自由な身体を手に入れた赤水。

しばらく辺りを飛び回り、故郷の風景を心に焼き付ける。

そして、ぎらぎらとした日差しに照らされる百姓たちを見つけると、彼らを涼ませるように、爽やかな風を振りまきながら、あぜ道を駆け抜け、十萬億土に続く空へと、旅立って行ったのである。

それは、いつも百姓たちに心を砕いてきた、赤水らしい最後の別れであった。

あとがき

伊能図の四十年以上も前に出版され、明治時代まで広く愛用され続けた赤水図。

一八五二年には、東北遊学中の吉田松陰が、赤水の墓参に訪れていることからわかるように、庶民の手に地図を行き渡らせ、地図を通して、日本人の視野を国内から世界へと広げた功績は、計り知れない。

また、水戸学に大きな影響を受けた勤皇の志士たちが、赤水図を片手に倒幕を果たしたことを考えれば、徳川御三家の水戸藩は明治維新の発祥の地とも呼べるのであり、同時に歴史の皮肉さを感じる。

私が赤水という偉大な先人を初めて知ったのは、小学校五年の時。

自由研究のテーマで取り組んだのが、きっかけであった。

それ以降も、赤水に対する認識は、地図を作った地理学者という程度のものであり、歴史年表から赤水の生涯を追ってみても、無機質な時の流れしか感じられなかったのである。

ところが、平成十六年の暮。

横山功著「長久保赤水書簡集」を手にした時、私の考えは一変する。

手紙のひとつひとつを丁寧に見れば、そこには赤水の人間臭さが溢れ、とても身近な存在として、現代に生々しく甦ってきたのだ。中には「赤水老兵法」「盗難対策」といったものま

であり、現代人から見ても、示唆に富んだ内容の手紙が数多く収められていた。

これにより、情報流通の乏しい時代において、手紙がいかに重要なものであったのかを知ることとなったのは勿論のこと、文才のない私にとつて、これほど想像力を書き立てるものはなく、手紙に勝る小説はないと感じた。まさに赤水書簡集は日本の宝とも言えよう。

また、「農民疾苦」「息子たちへの手紙」を読んだ際には、赤水の深い情念に寒気を覚えたのと同時に、二百年以上前であつても人間の本質が変わっていないことに、大変驚かされた。

とりわけ「農民疾苦」の中で、目の前の欲得ばかりを追いかけ、明日の苦労から目を背けた農民たちを「朝四暮三の猿知恵」と喩え、定免法の申請が相次ぐ世相を憂慮しているが、将来を考えず、利己的であるという点においては、今の私たちと全く同じであるう。

さらに、評論家と化してしまった現代日本人は、『政治家が悪い』と責任を転嫁しているが、「朝四暮三の猿知恵」に毒された国民の総意が、目の前の政治家を生み出している以上、結局は、我々自身が変わらなければ、政治も変わるはずがないのだ。

たとえ多少の苦しみや不便な生活を強いられようとも、日本の将来のためには、赤水が言うところの「朝三暮四」の精神が必要なのであり、百年後、二百年後の子孫の笑顔を絶やさぬよう、自らを省みることが、今の日本人には求められていると思う。

そして、書簡集を通じて私が学んだ、もう一つのこと。

それは、その時代に生きた人々の「心の内」を理解することである。

人間は物質世界と精神世界の狭間に生かされ、心理に運命を委ねている。

だからこそ、人生の様々な場面で、先人たちが抱いた心理的葛藤を学び、時代を超えて先人と同化する。それが歴史学の真髄であり、そうすることで、歴史も立体的に捉えることができるのではないだろうか。

いずれにしても、赤水は有形・無形のたくさんのお礼物を遺していつてくれたのである。

しかし、様々な知識をいとも簡単に入手できるようになった今、学ぶことに対して感謝の念を抱く日本人は、どれだけいるのだろうか。

かくいう私も、赤水の研究を始めるまで、学ぶことのできる有り難みなど、考えたこともなかった。

だが、ほんの数世代前までは、学びたくても学ぶことの出来ない人々が、圧倒的多数を占めていたのであり、学問は一部の階級にしか許されない特権でもあったのだ。

こうした先人たちの労苦を思えば、我々は学ぶことに対して、もっと真摯な気持ちを持つ必要があるし、生涯、学び続けなければならぬ。

なぜなら、祖先たちが育んできた叡智を磨き上げ、次の世代に引き継いでゆくことは、我々に課された大きな使命だからである。

昨今、クローズアップされている高齢化社会、格差社会、シャッター通り商店街：等々、様々な問題についても、これを解決できるヒントが、赤水の教えや生き様には隠されているのであり、今こそ、赤水の偉業に目を向けるべき時機にきているのではないだろうか。

近頃の日本は悲観論に支配され、先の見えぬ不安な時代と言われているが、いつの時代にあつても、その時代を生きる人々にとつて、住みにくい世の中であることには変わりがない。

ましてや、資源の乏しいこの国が、これからも繁栄を続けてゆくには、幾多の困難が待ち受けている。

だが、私たちには先人たちが培つてきた技術や叡智があり、何人たりとも奪うことのできぬ無尽蔵の財産があるのだ。

もし、日本が豊富な資源に恵まれた国であつたなら、世界に誇る技術や文化、優れた叡智を生み出すことができただろうか。

きっと、赤水が今の世を見れば、笑いながら言うであろう。

不安など感じる暇がないほど、学びなさい

学びが足りぬから、心が乱れるのだ

学びの先には、必ず明るい未来がある

この国には、実に多くの希望が満ち溢れているのではないか

最後に、本書の骨格となる名著「地政学者 長久保赤水伝」「東奥紀行 長久保赤水の旅日記」「長崎行役日記」の著者であられる長久保片雲先生、高萩郷土史研究会会長の神永久米男先生、長久保赤水顕彰会会長の若松健一先生、歴史研究家であり、私にとっては雲上人でもあられる

江尻光昭先生。そして、赤水先生を知るきっかけを作り、本書の上梓に至る約五年間、数多くの助言を与えてくれた、父であり隠れた赤水研究家でもある横山功に對しまして、心より感謝申し上げます。と共、皆様の暖かいご指導と、これまでの長きにわたる数多くの研究成果に敬意を表します。

二〇一〇年一月吉日

横山 洸淙

■参考文献

- 「長久保赤水」杉田雨人 「水戸学の復興・幽谷・東湖そして烈公」宮田正彦
「長久保赤水書簡集」 「續長久保赤水書簡集」 「續長久保赤水書簡集」 横山 功
「地政学者長久保赤水伝」 「長崎行役日記」 「東奥紀行 長久保赤水の旅日記 上下」 長久保片雲
「長久保赤水―日本地理学の先駆者」 住井すゑ 「おらんだ正月」 森 銑三
「松江盧淳 鈴木玄淳と松岡七賢人たち」 高萩郷土史研究会 「世界大百科事典」 (株平凡社
「唐代の詩人」 小川環樹 「日本の名著(十六) 荻生 徂徠」 尾藤正英
「知名と立命」 安岡正篤 「藤田幽谷のものがたり」 梶山孝夫
「天保懷宝道中図で迎る 広重の東海道五拾三次旅景色」 堀 晃明
「高松市立牟礼小学校 パーチャル偉人館 2001 郷土の偉人 柴野栗山」
(本書は二〇一〇年三月二〇日発行『清學の士 長久保赤水』を増補したものです)

*年齢は「満年齢」を採用
*文中では名前を「赤水」で統一しているが、名は「玄珠 (はるたか)」、字を「子玉 (しぎょく)」、通称「源五兵衛」であった。また、治保は赤水を源五兵衛と呼んでいたが、身分の違いから、赤水が藩主である治保の名を口にすることはなかった。

■著者略歴■

横山洗滌（よこやまこうそう）

本名、横山悟一（よこやまごいち）。財務リスク研究所代表。

1969年茨城県生まれ。茨城県立太田第一高等学校、法政大学卒業。会計事務所、コンサルティング会社等の勤務を経て、2002年アーネストコンサルティングを開業。

2008年6月名称を『財務リスク研究所』に変更。約10年にわたる研究を重ね、指標を使わない世界初の分析手法「ビジュアル分析」を開発し、決算書に潜むリスクを読み解く独自のノウハウを確立。分析した決算書は6,000社を超えている。

また、「決算書が読める感動を全ての人に」という経営理念のもと、全国各地での講演も行なっている。

URL <http://nagakubosekisui.web.fc2.com/>

主な著書

『3分間で決算書が読める！』（H&I）

『売上をあげる手段としての決算書の使い方』（総合法令出版）

『CREDIT GIRL ～決算書が語る危ない取引先。そして、粉飾～』

（V2ソリューション）

『小さな会社のCFO』（日経BP社）

『新リーダーへ！「これが会社の数字の読み方です」』（実務教育出版）

『バランスシート・グラフ化診断法「ビジュアル分析」』（財務リスク研究所）

『横山式シンプルキャッシュフロー計算書』（V2ソリューション）

清學の士 長久保赤水 増補二版

2019年6月15日 増補二版第一刷発行

著者 横山洗滌

発行者 谷村勇輔

発行所 ブイツーソリューション

〒466-0848 名古屋市昭和区長戸町4-40

電話 052-799-7391 F A X 052-799-7984

印刷所 藤原印刷

万一、落丁乱丁のある場合は送料当社負担でお取替えいたします。

小社宛にお送りください。

定価はカバーに表示してあります。

©Kousou Yokoyama 2019 Printed in Japan ISBN 978-4-86476-706-4